
時空の風 - 竜の章 -

穂積

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空の風 - 竜の章 -

【Nコード】

N6102T

【作者名】

穂積

【あらすじ】

竜と人が共存する国、ヒリュウ。ヒリュウ国の宰相補佐として生きるリュウキには、人とは違う過去があった。

時空の歪みに落ちた少女が、9年という長い年月を経て苦難を乗り越え、手に入れた仲間と居場所を守るために戦い続ける物語。

登場人物（前書き）

若干ネタバレがあるので注意。
見なくても大丈夫です。

登場人物

〓 異界のもの 〓

蓮 れん 竜姫 りゅうぎ (26)

黒髪金目。現在、宰相補佐兼“影”総隊長。男勝りで言葉も性格も荒い。

17の時に時の歪みに巻き込まれて見知らぬ世界に落ちた。流浪の傭兵に拾われ剣と生きる術を得、その後、大戦を経てシンとシキの兄弟に気に入られ王都で働くことになる。傭兵時代に全てを割り切り、今は戦うことに抵抗はない。

精神的にも肉体的にも強い女性。一緒に時の歪みに落ちた従兄弟を探している。身長168cm

シロ (3桁はいつてる)

6年前竜姫に捕まった白い騰蛇。竜姫のパシリ。雄。

主に火を司る。姿も消せるし人型をとることもできる。もともと天の獣らしいが、本人が言うにはあまりの退屈に耐え切れず地上に降りてきたらしい。

全長56cm、実は頑張れば竜なみにでっかくなれる。

高間 たかま 修也 しゅうや (21)

茶髪黒目、竜姫の元彼兼従兄弟。頭と見た目はいいが、性格難あり。山より高いプライドで周りを見下す癖がある。元医大生。竜姫と同

時に時の歪みに落ちたにも関わらず、落ちる時間がずれたのか竜姫が落ちて8年後の同じ世界に落ちた。なので今は竜姫が年上。身長178cm

＝ヒリュウ国＝

シン・ヒリュウ

王。歳の割に威厳溢れる29歳。

竜騎士。相方はゴウと言う名の金目の黄金竜。金の髪に翡翠の瞳。公、私、私、俺。竜姫と弟妹とコウリの前では色々崩れる。身長182cm

シキ・ヒリュウ

王弟。大將軍。26歳単純筋肉馬鹿。

竜騎士。相方はエンと言う名の金目の黒竜。琥珀色の短髪に灰色の瞳。兄と妹に虐められて強くなった。身長199cmあと1cmが悔しいところ。

シャルシュ・ヒリュウ

王妹。性格長兄寄りの16歳。明るめの金髪巻き毛に翡翠の瞳。

10歳以上離れた長兄は最早父。竜姫とジュジュと兄がいれば問題無し。身長164cm

コウリ・ミンロン

宰相。シンとは乳兄弟。黒い29歳。飴色の長髪にモスグリーンの瞳。表面は白い。
王とは常に腹の探り合い。王を仕事机に繋ぎ止める方法を常に思索中。

竜姫の上司。結構型破り。身長172cm。

ライ・リー

翼將軍。赤褐色の短髪に緑の瞳。竜騎士。相方はシヨウという名の赤竜。

最近シキの頭と胃が心配な18歳。シキ似の単純馬鹿。身長178cm

ロウ・シヨウ

魔將軍。シキ信者。知能派の18歳。銀の長髪に紫暗の瞳。
国一の魔術師。キレると宰相並に怖いという噂。身長170cm

ギイ・デア

リュウキ付き文官という名の世話係。苦勞性な18歳。茶髪のおか

つばに緑の瞳。

ライは飲み友。ロウは愚痴友。身長165cmちょっとしか変わらないのに、竜姫にチビと言われることが未だに納得できない。

アーリア

侍女長。天然すぎる娘が心配な34歳。赤毛に深緑の瞳。国の肝っ玉母ちゃん。国王すら叱る。

ジュジュ

王妹付侍女。アーリアの娘。天然ぼわぼわ21歳。赤毛に新緑の瞳。たまに素で黒い突っ込みを入れる。

レイリーン

王妹付侍女。性格キツめな19歳。濃い茶髪に青緑の瞳。ジュジュをライバル視するも毎度惨敗。

序章

草木も眠る丑三つ時。

果たしてこの世界にこのような表現があるのかは不明だが、言葉が指すとおりに辺りはしんと静まり返り、時折聞こえる木々の擦れる音が大地の寝息のようだ。リュウキは思った。

闇に包まれた森の入り口で、微動だにせず前方の町を見据える。しばらくすると、町の上空からぼんやりと白い光が彼女に向かって降りてきた。

「…遅いぞシロ。」

空に浮かぶ銀色の月とは違いほんわりと光るそれは、リュウキの目の前に止まるとくるんと一回転してみせる。途端に光は消え、現れたのは人間の顔の大きさ程の白い蛇だ。否、その背には小さな蝙蝠のような翼が生えているので正確には“蛇のような生き物”だろう。

「てめえ、リュウキ！その名で呼ぶなって言っただろっ！！」

シロと呼ばれた蛇もどきは少年のような声で抗議すると、真珠のような胴体を激しくうねらせる。が、リュウキは構わず言葉を続けた。

「別にいいじゃないか。お前に一番似合う名前だし。」

「っ！！犬みたいな名前似合ってたまるかっ！！俺様は由緒正し…」
「そんなことより、さっさと報告。」

にべもなく切り捨てられた言葉にパクパクと口を動かしつつも、シロは諦めたように溜息をついてリュウキの額に近づいた。のろのろ

とした動きはどことなく哀愁が漂っている。

「…はいよ。さっさと受け取りやがれ。」

吐き捨てるように言いながら目を閉じて小さな頭部を彼女の額につけると、同じようにリュウキもそつと目を閉じた。途端に彼女の脳裏にいくつもの情報が映像で浮かぶ。まるで早送りのような映像だが、どの情報も取りこぼすことなくリュウキは脳内に刻み付けている。内容は、先ほどから彼女が見つめていた町の中央にある、白と金を基調にした貴族の屋敷の内部のようだ。まだ明るいうちの情報らしく、室内には侍女や護衛の男達が行きかっていた。これは全て昼間のうちにシロが見てきたものだ。

「…やけに女が多いな。ああ…この豚が件の領主か。」

屋敷の東側、無駄に広い廊下を進み高い塀に囲まれた中庭を過ぎると池に面した部屋に突き当たる。白い石造りの床と柱で池との間には壁はなく、部屋の中央には派手な絨毯と大きなクッション。数人が寛げる大きさのクッションの上には壮年の男が女たちを侍らせながら酒を飲んでいた。その醜悪な姿に、リュウキは眉をひそめる。

「一日の大半はそこで過ごしているんだと。父親が死んで領主の地位を得てからは毎日が宴らしいぜ。」

「なるほど…その結果が過剰な収税と賄賂、佞臣どもの台頭か。」

吐き捨てるように呟くと、彼女は顔を上げて目を開いた。その瞳は夜の闇でも煌く黄金色だ。対して闇に溶け込む長いストレートの黒髪は、時折緩やかな風にふわりと舞う。シロはそれを無意識に目で追いながら言葉を続けた。

「一昨日山に収容された奴らは、殆どが領主とその佞臣に談判したヤツ等らしい。」

「山か…あそこは確かにいい鉱山だったが、少し前に事故があったから閉鎖したと聞いたぞ？」

「…ばねえようにやってんだろ。ガスが出たとはいえ、あそここの鉱山でとれる石は貴重なもんばつかだからな。」

「確か王命も出ていたな。…豚どもめ。それほど金が欲しいか。」

「ほしいんじゃないか？何せ集めた傍から現領主が湯水のごとく使うからな。」

「…それに加えて佞臣どもの懐分も…か。」

呆れたように目を細め小さく息を吐くと、もう充分だとばかりに視線を外し再び目の町に目を向けた。シロもそれに倣うように視線を向ける。

「どうすんだ？」

「コウリ殿は全て私に任せると言った。シンの許しも得ている。」

無表情だった白い面にニヤリと笑みを浮かべると、さも面白そうにリュウキは呟いた。その笑みを横目でちらりと見つめ、シロが小さく溜息をつく。

「…気の毒に。」

誰に向けたか判らない呟きは、夜の闇に溶けて消えた。

ヒリュウ国 1

カツカツと小気味よい音を響かせながら、乳白色の廊下を歩く。

「リュウキ様!!」

人気がない空間に後方から少し調子の外れた叫び声。

男性にしては高音のどこか神経質そうな声は明らかに自分と呼んでいるものの、

毎度のこと鬱陶しさを感じたリュウキは聞こえなかったことにした。

「リュウキ様っ!!お待ちください!!…っ…リュウキ様っ!!リュウキさまっ!!」

しかし相手も相当しつこいらしく、かなりの速度で歩いているリュウキに小走りで追いつくと

はあはあと息を切らしながらも物凄い勢いで彼女の前に回りこんだ。額に汗を浮かべて己を睨み付ける男に、流石のリュウキも溜息をついて足を止める。

「…ギイ、煩い。」

「あっ…あなたがっ…止まってくれないからでしょう!？」

人より聴力の優れたリュウキにとって、至近距離で叫ばれると頭に響いてしかたないのだが、ギイと呼ばれた青年はかまわず叫び続けた。

ここで彼女を逃がすと、次はいつ捕まえられるか判らないからだ。

「リュウキ様っ！！今日という今日は言わせていただきますっ！！」
「…どうせいつも言っていることだろうが。」
「常日頃からあれだけ単独で行かれるのはお止めくださいとお願いしているのに、またお一人で向かわれましたね!？」
「ほらな…シロが一緒だから正確には単独じゃないぞ。」
「しかもまだ前回と前々回分の報告書も未提出のままです!?!」
「…そのための専属文官じゃないか。」
「あなたの署名が必要だと何度言ったら解るんですか!？」
「…そのくらい何とかな」
「なるわけないでしょうっ!?!」

ああ言えばこう言うリュウキにギイは顔を真っ赤にして捲し立てた。あまりの剣幕にリュウキは若干背をそらす。

「大体あなたはご自分のお立場を解ってらっしゃらない!?!仮にも精鋭を纏める一隊長職に就いてらっしゃるんですよ!?!あなたに何かあればあなたの部下の方々はどうなるんです!?!というか単独行動を引き止めなかった責は僕にも来るんですからねっ!?!」

「ま…まあまあ、落ち着け、ちよつと怒られるくらい…」
「宰相様の詰責がちよつとで済むとお思いですかっ!?!」

思わず黙り込んだ上官を見てそれ見たことかと息をつく、最後に一言とばかりにぐつと顔を寄せた。

「いいですか?せめて次は発たれる前に、僕に一言ください。」
「…今回は宰相と王の許可は得ていたぞ。」
「僕に、一言、ください!」
「…わ…わかった…」
「あと、前回と前々回の分の書類にもサインを。」
「い、今から報告に行くんだが…」

「その後でいいのでサインを！」

「…わかった。」

「それと、都合が悪くなるたび僕を避けるのやめてください。」

「…ワカリマシタ。」

自分よりもずっと年下のこの文官に、毎回頭の上がらないリュウキである。

今回も彼女の負けのようだ。力を失ったリュウキの声にギイは満足気に頷くと、来たときは対照的に颯爽と踵を返して去っていった。初めから終わりまで存在が霞んでいたシロは、呆けたように目を瞬かせると、いつにも増して威厳を失ったリュウキを見上げて、綺麗な曲線を描く真珠色の尾でパタパタと彼女の肩を叩いた。

「リーンの国王から書状が届いております。」

流れるような動作で、書類が山積みになっている書斎机の上に新たに紙を乗せる白く長い手は、しかし一度剣を取れば下手な兵卒よりも腕が立つことをシンは知っていた。

「…これが終わったら目を通す。」

「終わりません。今すぐお願いします。」

どうやら剣をとらずとも、その辛辣な舌は武器になるらしい。
生まれたときから己の傍らにいるこの綺麗な男を見上げ、ヒリュウ
国王シン・ヒリュウは溜息をついた。

「コウリは俺を殺す気か。」

「滅相もございません。どの国に国王を殺めようとする宰相がおり
ますか。」

「確か120年程前にレキの宰相が反乱を起こしたな。」

「公にするほど、私は愚かではありません。一時は英雄と呼ばれた
レキのロウシャン王も、結局は王族を手にかけて罪で前王弟の子に
討たれました。」

「…全く。」

1を言えば10どころかそれ以上で返すコウリに、シンは苦虫を噛
み潰したような顔で呻いた。

飴色に輝く腰までの髪をゆったりと一つに纏め、淡いモスグリーンの
瞳を持つ切れ長の目をしたコウリ・ミンロンという男は、その柔
らかな色合いと綺麗な外見に似合わずなかなか冷徹で陰湿な性格を
している。

以前彼を王の威を借る女狐と揶揄してきた貴族は、笑顔で辛辣な言
葉を受け更に何かしらの報復があったのか、それ以降宮殿内でその
貴族を見たことはない。噂によると、職場に顔を出すたびに痩せこ
け、ついには青白い顔をしてふらふらと荷を纏めて帰宅する姿を見
たとか見なかったとか。

まあ、色々と尾ひれは付いているものの、己の乳兄弟であるこの男
に対して外見と年齢に関する揶揄はご法度だろう。この城で健康に
働きたければ、敵に回してはいけない人間第一位だ。因みにこれは、
城内で働く者たちの中で周知の事実である。

「何を惚けてるんです、早く目を通してください。」

これが王に対する態度かと痛む頭を軽く振りながら、シンは書状に目を落とす。

不敬罪で手打ちにしたところできっと誰もが納得するだろうが、目の前の男が己の刃を避けないだろうことは解っていた。コウリという男はそういう男だ。

「…リーンは西の港を開き、我が国の行軍を希望するそうだ。その折に和睦も結びたいと言っている。」

「和睦も何も…今まで国交すら無かった国のはずですが。」

「仕方あるまい。あちらとて背に腹はかえられんのだろう。」

「確かに…まあリーン内まで旅軍で行けるとなると随分楽になりますね。」

「初めは翼竜隊の急行軍のみで進軍する予定だったからな。」

ヒリュウ国のある大陸には、他に3つの国がある。

ヒリュウは大陸の東にあたり、国境となる山脈を渡れば騎士の国、リーンがある。大陸を、手を組むように分断するリーン国を渡れば北の大地に広がるのは魔術の国、レキだ。反対にヒリュウ国に面する南の大地はハウという国があり、彼の国とヒリュウとは古くからの盟約で深い国交が保たれている。

今回同盟を結ぼうとしているリーンは、敵対関係ではないものものこれまで殆ど国交が無かった国だ。というのも、ヒリュウとリーンの東西に渡る山脈は端から端まで険しく標高の高い山脈で、人が渡るには余りに過酷過ぎた。特にヒリュウ自体が国力に満ち同盟国であるハウ国も豊かな資源に溢れた国だったため、わざわざ山脈を渡ってリーンに侵攻する必要が無かったと言うのも大きな理由の一つだ。海を渡れば山脈を越える必要はないのだが、どちらの国も諸外国から国を守るために高い防波堤を備えた要塞ともいえる港を構えていた。

「リーンと同盟を結びレキを従えることが出来れば、大陸の統一も夢ではありません。」

「まあな。だが、問題はレキだ。やはり情報が少なすぎる。」

「国力は然程でもないようですが…魔術師の国ですからね。」

「我が国とて魔術の開発には力を入れているし、船が出せれば騎士団も出せる。何よりヒリュウには翼竜隊がある。」

翼竜隊は竜騎士達が属する部隊だ。竜騎士とは文字通り、竜に騎乗して戦う戦士たちである。

騎乗するための竜が生息するのは大陸ではヒリュウのみで、知能の高い彼らは人間と意思の疎通ができた。竜騎士になるためには竜と心を交わし、共に戦うパートナーとして認められなければならない。人より強い彼らが何故人間に力を貸すのか不明だが、この国では古くから竜騎士が存在していたのは確かだ。

だからこそ人々は竜を敬い、竜騎士となった戦士も命の続く限りパートナーの竜に礼を尽くす。

「しかし、こうも不気味な国だと何があるか判らん。」

「歴史や兵力くらいでしたら把握できましようが…。」

「魔術については底が見えんか。」

レキの歴史は荒れに荒れていた。ここ数十年で入れ替わった王朝の数を見れば、ただ前国王が寿命を全うしたことによる戴冠とは思えない。辛い。

どちらともなく溜息をついたとき、ボタンと荒々しく扉を開く音がした。

ヒリュウ国 2

「二人して溜息か？辛気臭いにも程がある。」

後ろ手で扉を閉めながら大股で近づく女に、コウリは再び溜息をついた。

「部屋に入るときはノックをなさいとあれ程言ったのに、貴女の頭は飾りですか。」

「宰相殿は今日も口煩いな。どうでもいいが、ギイが益々貴方に似てきた。」

「それはよかった。有能な人材が増えるのは良いことです。」

「…あんた謙遜って言葉知ってるか？」

コウリを胡散な目で見つめ、今度はリュウキが溜息をつく。

「無駄だ、リュウキ。こいつに口で勝てると思うな。」

「…いつか絶対ぐうの音も出ない程言い負かしてやる。」

「それは楽しみだ。ならばまず溜まりに溜まった貴女の書類を完璧に提出することですね。ギイから全て報告がきてますよ。」

どつやら道のりは長いらしい。

「全く…あなた方きたたら、揃いも揃って書類を放置するんですから。一度期限切れの書類の後始末をする文官達の苦勞を味わってみればいいんです。」

その言葉にリュウキは頬を引きつらせ、コウリから目を逸らしたが、シンはと言えば少し納得がいかないようだ。

「おい、リュウキと一緒にするな。こいつは唯の怠慢だが、俺は書類の数が俺の能力の限界値を越えているだけだ。」

「…シン、この野郎。」

「昨日の昼間、宮殿を抜け出して城下の市に遊びに出かけたのはどこの誰です?」

「……俺とて息抜きをせねば脳が腐って死ぬ。」

「腐るわけないでしょう。寧ろ腐るまで使えれば本望です。」

「お前なあ……」

がつくりと肩を落としたシンに、リュウキは苦笑して目を細めた。毎度繰り返されるこの一連のやり取りを、実は二人とも楽しんでいることをリュウキは知っている。

リュウキ自身、コウリやギイのお説教が鬱陶しいと思う反面嬉しくもあるのだ。

それほど彼らが自分を気にかけてくれるということだから。

「…取り敢えず報告していいか?」

とはいうものの、このままでは埒が明かないのでここらが引き際とばかりに声をかけた。

「サイの領主は片付いた。」

笑みを消したリュウキが、王と宰相を真っ直ぐに見据えながら言っ

た。

「始末したということですか？」

「いや、元領主と佞臣たちは家名を取り上げた上で平民として働いてもらうことにした。」

サイというのはヒリュウ国の北の端にある国境の山脈に面した町である。

鉱山が多いことから、辺境の町とはいえそれなりに栄えていたのだが、最近不穏な噂が王都に流れてきたのである。

曰く、領主が不当に民を殺しているらしい、と。

結果的に噂は真実で、過剰な税の取立てに不満を寄せる民を、領主は封鎖された鉱山に送り込んでいた。足を踏み入れれば確実に命を落とす、ガスの充満した鉱山に。リュウキは噂の確認と、もし何か問題があるならばそれを処理するためにサイに行ったのだ。

「お前にしては甘くないか？」

少し訝しげに首を傾げながら言ったのはシンだ。

「それでもない。領主や佞臣の顔は町に知れ渡ってるからな。彼らの財産は全て没収したし、貴族のボンボンどもが楽に生きていけるとは思えない。それに……」

なるほど、と頷きながら二人が先を促す。

「それに、彼らには現状動いている鉱山で働いてもらうことにした。」

「

「それは確かに、いい罰になりそうだ。」

「初日に殺されそうな気がしますが。」

「鉾山のヤツらと話はついてるからそれはない。ヤツら死ぬまで扱
き使うと言っていた。」

「平民というより奴隷だな。」

元領主に殺されたのは、殆どが鉾山で働く男達だった。

血気盛んな彼らは、町で働く人々よりも行動派なのだろう。一人、
また一人と消えていく仲間に、それでも抗議を止めなかった。

家族とも言える仲間を次々と奪われた彼らの怒りは、領主らの命を
奪うくらいでは納まらない。

彼らにとって領主らの命など石ころよりも価値の無いものだろうか
ら。

負の連鎖のように思えるが、彼らの心を思えばリュウキはそれでい
いと思った。

「豚は家畜だ。奴隷にも劣る。」

彼女は権力を振りかざす貴族が本当に、それこそ王の許可がおりれ
ば直ちに処分に向かいたいくらい嫌いだった。

「領主のこと以外これといって目立った問題は無い。これからサイ
は新しい領主を迎え、税率も国で定めたものに戻る。領主が溜め込
んでた財は民に戻した。意外に残っていたから衰えた町もすぐに元
に戻るだろう。」

「わかった。ご苦労だったなリュウキ。」

「シロもお疲れ様です。」

王の言葉にリュウキは礼をとり、今まで静かに伏せてリュウキの両
肩に身を落ち着けていたシロもコウリの言葉に目を開く。が、ちら

りと視線を寄越しただけですぐにまた目を閉じた。

コウリはそれを気にすることなく小さく微笑みリュウキに視線を戻す。リュウキは二人を探るように見つめると、再び口を開いた。

「今回私を一人で行かせたのは、リーンへの行軍があるからだろうか？」

彼女の言葉を予想していたのか、王も宰相も驚かない。

「その通りです。先ほど王のもとへ、リーン国王からの書状が届きました。港を開くそうです。」

「リュウキ、お前は翼竜隊と共に山脈を越え宰相補佐としてリーンへ渡れ。王城へは大将軍と共に行き、その後は港からの後発隊が来るまでにレキの情報を探れ。」

リュウキは現在二つの顔を持っている。

表の顔はコウリの補佐、裏の顔は宰相直属の観察部隊、通称“影”の総隊長だ。

影の存在は王と宰相、それから軍関係の全てを取り仕切る大将軍しか知らない。王と宰相によって選ばれるので、その人数は代が変わるごとに違うのだが、今現在は32名が所属している。その半数が、諸外国の情勢を知るために国内外を動き回っているのだが。

兎に角、この遠征でリュウキは宰相補佐としての仕事と、影としての仕事を請け負うことになったのだ。

「承知致しました。」

戦の要ともいえる任務に、彼女は怯むことなくしっかりと頷いた。

…っ

誰かの叫び声が聞こえる。

…ゆ…ち…

声に応えなければ、そう思うのに。

…っ…っ…っ…

目を開けて、自分に伸ばしているだろう手を掴まなければと。

……竜姫っ！！

黒い空間が全てを飲み込んだ。

「……しゅっ！……！」
「うわあっ！？」

ガバツと上掛けを撥ね飛ばし、右手を宙に伸ばしながらリュウキは飛び起きた。

枕元で眠っていたシロはいきなりの振動に跳ね上がり、寝台を包む

ように下りた天蓋に身を寄せた。キヨロキヨロと周りを見回したあと、寝台の上に起き上がったまま右手を抱きこむように蹲るリュウキにするすると近づく。

「…修也の夢、見たのか？」

声こそ上げなかったものの、彼女は少し震えながら頷いた。

金の瞳は険しく光り、悔しさを表すように唇を噛み締めている。

「必ず、見つけ出す。」

低く掠れた咳きは、固い決意を秘めていた。

幾分疲れた表情のリュウキに、ギイは少しだけ目を見開いた。

「お疲れのようですね。」

「あまりよく眠れなかった。」

「珍しいですね、いつでもどこでも眠れるのが特技でしたでしょう？」

軽口をたたくものの、ギイの表情は本当にリュウキを心配しているようで、幾分戸惑うような感じさえ受ける。いつも横柄に言葉を返してくる上官の不調に、彼もどうしたらいいのか判らないのだろう。そこはまだまだ18歳。やっと少年から抜け出したばかりの青年には難しいのかもしれない。

リュウキは小さく笑うと、ギイの少しだけ低い位置にある頭にポン

と掌を乗せた。

「何だ？心配でもしてくれてるのか？」

目の前の綺麗な笑顔にギイの顔が真っ赤に染まる。

黙っていればコウリに勝るとも劣らない美貌を持つリュウキは、実はかなり整った容姿をしているのだ。ただ残念なことに、その性格と口調が色々邪魔しているので、大抵の人間は彼女が口を開いた瞬間夢から覚めるのだが。

「…っ…僕が心配なのは貴女の書類です！！昨日あれからずっと待ってたんですけど！！」

「あー…ごめんごめん、昨日報告が結構長引いちゃって。」

「で、書類はどうしたんです？」

「いや、勿論ちゃんと持ってきたさ！ほら！」

胡散気に目を細めたギイに、慌てて書類を差し出した。

まだ少しだけ顔の赤いギイは、ひったくるようにそれを受け取ると、誤魔化すように彼女に背を向け一枚ずつ確認し始めた。その背後から伺うように首を伸ばす彼女に、今日もリュウキの肩で伏せているシロは溜息をつく。どうやら彼女の肩はシロの定位置らしい。

「…確かに。これで全てです。記入漏れもないみたいですね。」

「ほらな！よし！私は今から練兵場に行ってくる。」

「何か御用でも？」

「ああ、ちよつと大將軍閣下にお話が、ね。」

「そうですね、ではついでにこれをお持ちください。」

そう言って渡されたのは、半透明な紙に包まれた小さな飴玉。

掌の上に乗ったそれ不思議そうに見つめるリュウキに、どこ

か決まりが悪そうにギイは続ける。

「……何だかお疲れのようでしたので…疲れたときは糖分をとるといいらしいですよ…」

最後の方は殆ど聞き取れないくらい小さな声だったが、リュウキにはしっかりと聞こえた。

僅かに目を見開き、次いで堪えきれないように口の端を歪める彼女にギイはついに背を向けた。

「とつ…兎に角、お大事につ!!!」

どこかの外れな言葉に、リュウキはついに笑い出した。

ヒリュウの練兵場は王城の西側に位置し、部隊の練兵が行われているとき以外は個人の修練のために解放されている。今日は午後から翼竜隊の練兵が行われているので、リュウキの目的の人物は練兵場にいるだろう。

まあ、彼の人は予定が無い時も、基本的に練兵場で剣を振るっているはずなので、予定を確認する必要もなかったのだけれども。

頭を使うよりも身体を動かすことを好む性格は、どこか己と似通ったところがあり、気が合うという点では城内一かもしれない。

練兵場へ向かいながら、そんなことをつらつらと考えていると、リュウキはいきなり背に衝撃を受けた。

「リュウキ！帰ってきてたのねっ！！」

どうやら背後から人に抱きつかれたようだ。

「これは姫君、ご機嫌麗しゅう。」

「ええ、とつてもいいわ！」

未だ己の背に張り付いたままの自分より小柄な女性に、リュウキは笑みを浮かべながら首だけ振り返った。少し低い位置に少女の輝くような笑顔が見える。その背後には侍女が一人控えていた。

薄桃色のふんわりと広がったドレスを揺らすこの少女は、名をシャルシュ・ヒリュウといい、名が指すとおり王家の姫君である。国王の實の妹で、ふんわりと緩く巻いた明るい金髪に宝石のような翡翠色の瞳をキラキラと輝かせながらリュウキを見上げていた。因みに彼女の兄である国王は、妹より少し濃い色の金髪だ。瞳は同じ翡翠色である。

「これからどちらに行かれるの？」

「練兵場まで参ります。」

「あら、シキお兄様にご用かしら？」

「ええ、少し打ち合わせをと思ひまして。」

シキというのは、ヒリュウの軍関係を全て纏める大將軍でヒリュウ王家の第二王子である。つまりシン王の弟でシャルシュ姫の兄だ。ただし、彼は側室腹の王子なので異母兄弟ということになる。

「私も一緒にいいかしら？」

漸く気が済んだのか、シャルシュは少し身を離れた。それと同時に

リュウキも彼女に向き直る。

「ドレスが埃まみれになってしまいましたよ？」

「かまわないわ。お話の邪魔もしないようにします。」

「…何か気になることでも？」

彼女は末の姫君にも関わらず、聡明で気が回る。

普段ならば、仕事の邪魔になるからと気を利かせる彼女の意外な言葉に、リュウキは少し小首を傾げた。

ヒリュウ国 4

「リーンのこと、聞きました。」

「……」

「世間知らずな私ですが、馬鹿ではありません。リーンと同盟を結ぶということは、私の未来が決まる可能性があるということでしょう？」

その言葉にリュウキは目を見開く。ああ、やはりこの姫は賢いと思っただ。

確かに、王も宰相もその件に関しては何も言わなかったものの、他国と同盟を結ぶとなれば婚姻による同盟も考えられるだろう。

今回、リュウキたちがリーンに渡り、彼の国を統べる王家の者たちを見て条件が揃えば、シャルシュの言う可能性もかなり高くなるのだ。

そう、彼女がリーンの王族の元に嫁ぐという可能性が。

「政略結婚に関して、不満があるわけではありません。王家に生まれ、人よりもずっと良い暮らしをしている分、自分の負う責任はきちんと理解しています。」

笑みを消した美しい面を上げて、煌く翡翠が強くリュウキを見つめる。

「ですが、何も知らぬまま流されるのは嫌です。私は無価値な姫にはなりたくない。」

「姫は無価値などではありません。」

「いいえ、まだ足りぬのです。」

強い姫だと、リュウキは思った。まだ16の少女がこれだけのことを考えている。

「王は何も？」

「…お兄様もコウリも過保護すぎます。私が傷つかぬよう、その時まで言わぬつもりです。」

桃色の紅がひかれた小さな唇を噛み締め、シャルシユは顔を俯ける。

「……愛されているのは解っています。ありがたいとも思います。ですが……」

「貴女は兄君達が思うより、ずっとお強い。」

繋ぐようにつけられた言葉にはっと顔を上げると、リュウキの温かな笑みが向けられていた。

その笑みと確信をこめた言葉に、少女がぐっと何かを堪えるように眉を寄せる。

どれだけ強く意思を持つとも彼女はまだ恋も知らない末の王女で、独り異国に嫁ぐことが心細いのだろう。だからこそ、己は強いのだと思わなければならなかったし、誰かに背中を押してもらおう必要があった。

リュウキは、小さく震える白い頬にそっと手を添えると、眩しいものを見るように目を細めた。

「大丈夫。何かあれば、このリュウキにお申しつけください。必ずや貴女の力になりますよう。」

揺らめく翡翠につつすらと涙を浮かべ、少女は花のように微笑んだ。

練兵場に着いたとき、既に午後の練兵は始まっていた。
先の行軍に合わせてか、竜騎士としての訓練のようで、練兵場には
竜たちも集ってる。

今は行軍用の鎧と積荷の重さを想定して飛行訓練を行っているらしい。

仮のものだが、様々な荷を背に乗せた5頭の竜たちが騎士と共に空を舞っていた。悠々と風を切るように飛ぶ竜たちは、積荷の重さを全く感じさせない。

そしてそれを見定めるように、練兵場の広場の中央には一際大きな黒い竜を連れた長身の男が、腕を組んだまま空を見上げていた。が、リュウキとシャルシュが練兵場の入り口を越えた瞬間、男はそちらに目を向ける。普段は灰色の瞳が太陽の光を受けて銀色に煌き、その視線が二人を捉えた途端、厳しく細められていた目めを和らげると、男はどこか少年のような満面の笑みを浮かべた。

「シャルに…リュウキじゃないか！お前帰ってきてたのか！」

リュウキは応えるように笑みを返すと、軽く頭を下げて男に近づいた。

シャルシュと侍女もそれに続く。

「小兄様、ごきげんよう。お仕事申す失礼しますわ。」

「…おい、その“小兄様”は止めるって言ってるだろうシャルシュ。」

「あら？どこがおかしくて？」

この男はシキ・ヒリュウ。言わずもがなヒリュウ王家の第二王子でありヒリュウ国の現大將軍である。

長男ではなく次男なので、シャルシュの言う“小兄様”は間違いではない。間違いではないのだが、身長約2メートルの筋肉質な大男に、その呼び名は不釣り合い過ぎた。しかし、真っ直ぐな次兄の反応が面白くて大好きな妹にとっては、寧ろ格好のネタである。

くすくすと笑うシャルシュに溜息をつく、シキはリュウキに目を向けた。

「…練兵中に申し訳ない、大將軍閣下。」

「…お前も笑ってんじゃねーか。」

どうにも納得がいかないらしく、低い声で唸るように言いながら頭をガシガシと掻く姿に、リュウキは笑いながらも小さくすまんと謝った。

「…たく…で、行軍のことだろ？」

「ああ、本当なら夜にでもと思ったんだが…何せもう時間が無い。翼竜隊も大変なんじゃないか？」

「そうなんだよ、山脈を越えるならこいつらの調整にもっと時間かけたいんだがなあ…」

まいったまいったと軽く溜息をつきながら、シキは空を見上げ、次いで自分の背後にどっしりと座り長い首を自分の傍まで下ろしている黒竜に目を向けた。全てを見通すような金色の瞳を見つめ、黒曜石のような鱗に包まれた首筋を申し訳なさそうに撫でる。

「大分無理をしてもらっているようだな。」

「まあな、エンには特に助けてもらってるよ。」

エンというのは黒竜の名前だ。エンはシキのパートナーで水を司る竜である。

「そうか。帰ってきたら孝行せねばな。」

「…止めてくれ。もう要求はしっかりされてるんだ。」

なかなか強かな竜のようだ。

「で？シャルは何の用なんだ？」

リュウキと話し始める前に、シャルシユの用を済ませて彼女を戻そうと思っっているのだろう。シキは徐にたずねた。

だがその意図を理解したシャルシユは小さく笑みを浮かべて兄を見上げる。が、その目は明らかに笑っていない。

「小兄様つたら…イヤですわ、私のことなんてお気になさらずお話を続けてくださいませ。」

怒気を感じさせる眼に、妹に弱いところのある次兄は内心怯みながらも、形の良い眉を寄せて眼を細めた。

「馬鹿を言うな。お前が聞くような話じゃない。」

「あら、どうして？私だって王族。国のことは把握しておく義務があります。」

「お前には関係ないだろう？」

「関係あります。私の生涯を捧げるものになり得るかもしれない国のことを、何故私自身が知ろうとしてはならないのです？」

尤もな言い分であることはシキも解っていた。が、やはり最愛の妹に心労をかけたくないという気持ちと、山脈で隔たれた彼の地へ送りたくはないという思いが優先してしまう。

王族としては考えなければならぬ可能性だが、兄として、この年若い妹とはそのことを話したくなかった。

しかし、シャルシュにとっては過保護以外の何物でもない。確かに不安はあるが、自身が嫁ぐことで国、ひいては兄達や己の大切な人々の役に立てるならば本望である。

互いを想うゆえに牽制し合う二人に、これはもう平行線だと溜息をつきながら、ぶつかる視線を遮るようにリュウキが一步前に出た。

「お二方とも、もうそのくらいで。このままだと日が暮れる。」

色の違う二対の視線がリュウキに注ぐ。

「兎に角、今後の話だシキ。時間が無い。」

「だがリュウキ！」

「シャルシュ殿はもう、一人の女性だ。己で考え、その足で己が道を創ることができる。姫にも話すべきだと私は思う。」

強く断言された言葉に、シキはぐつと言葉を呑んだ。

二人の兄と末の妹姫とは10以上の歳の差がある。彼らがシャルシュを子ども扱いするのは仕方が無いのかもしれないが、このままでは彼らが掌中の珠のように大事にしているシャルシュが傷つくことになるのだ。

「何もかもを遠ざけることと護るということは、等しくないんだ。」

はっとシキが息を呑む。

「お前は大事な妹に、消えることの無い後悔を背負わせる気か。」
静かに放たれた言葉は刃となって、シキの頑なに閉ざしていた視界を切り裂く。
胸の中心を、爽やかな風が通り過ぎていった気がした。

あの後、彼らは場所を変えないまま、その場でお互いの持つ情報を交換し合い大体の流れを話し合った。

もちろん、シャルシュも離れることなくリュウキの傍で全ての話を聞いていた。

リン国の情報は、過保護な二人の兄とこれまた過保護な宰相がかなり本気で遮断していたらしく、シャルシュが初めて耳にする話ばかりだったが、約束どおり彼女がリュウキとシキの話の邪魔をすることは最後までなかった。

そんなシャルシュに、後でしっかり質問に答えるために部屋を訪ねるかと予定を思い返ししながら、リュウキは己の肩に伏せたままの白い蛇もどきに視線を向けた。

すると、話を終えて練兵に戻ろうとするシキも同じく目を向ける。

「そっいや、そいつはまだエンが苦手なのか？」

現在進行形で気配を消そうとしているシロに、シキが少しおかしげに首を傾げる。

実は人見知りなのかリュウキ以外にあまり関わろうとしないシロは、今回も無視を決め込むようで知らぬふりを通すつもりなのかぴったりと目を閉じていた。

「このこは竜が苦手ですか？」

それに興味を引かれたのかシャルシュもシロに目を向けた。

いや、向けたというより思いつきりリュウキの肩を覗き込んでいる。

「竜というか…こいつは基本的に火を司るから、水の性を持つシキ

の竜が苦手なんです。」

まあ、別の理由もあるのだが。

それは言わずにリュウキが苦笑を浮かべていると、今度はシキもシャルシユに倣って覗き込んできた。

これには流石のシロも少し居心地が悪いようで小さく身じろぎするが、やはりその小さな目は閉じられたままだ。

「愛想のねえ蛇だなあ……」

「あら、小兄様ったら。彼は蛇ではないのよ、ねえリュウキ。」

得意げに笑うシャルシユは同意を求めるようにリュウキを見上げた。

「ええ、似てはいますが正確には違います。こいつは騰蛇という異界の獣です。」

「へえ、トウダかあ……大層な名前じゃないか。こーんなちっこいになあ。」

魔術の進んだこの世界では、異界のものが存在することはありえないことではない。

魔術師の中には召喚術を得意とするものもいるので、彼らの術によって異界のものが落ちてくるのが稀にあるのだ。

かく言うリュウキも実は異界の存在なのだが、それを知るのはヒリユウ王家の三人と宰相のみである。

「いつになったら俺達に馴れるんだ。」

「もう、かれこれ3年くらいかしら？」

リュウキがこの国に来たときには、既にシロは彼女の傍にあった。それからずっと、この騰蛇が彼女から離れたところを二人は見た記

憶が無いし、リュウキ以外の人間に懐いているところを見たことが無い。

リュウキによれば、意思の疎通もできるらしいのだが。

「何せ究極の内弁慶だからな。これで結構短気なんだ。」

ははは、と声を上げながら笑うと、シロの片目がぴくりと薄く開いた。じとーっと見つめる金目はどこか非難の色を浮かべている。勿論リュウキは気づいていたが、シロが何も言えないことを解った上でニヤリと笑い知らぬふりをした。

「お前に短気と言われちゃお仕舞いだな。」

騰蛇は諦めたのが再び目を閉ざす。

その様子を見ていたシキが、気の毒そうに呟いた。

竜姫の髪は綺麗だね。

柔らかな、少し高めの子供の声が聞こえる。

自分の髪を優しく撫でる小さな手に、少女は照れたように微笑んだ。明るさの無い真っ黒な自分の髪は、どちらかというと重くて好きにはなれないのだが。

真っ黒だから綺麗なんだよ。

あたたかく、包み込むような少年の笑顔が、少女は大好きだった。ずっとずっと傍にいたいと、彼女は強く思う。

彼が自分を守ってくれたように

彼がくれた温もりを自分も返せるように

彼にとっての自分が、自分が想う彼のような存在に、いつの日かなるのだと。

幼い少女は疑うことなく信じていた。

竜姫には、高間修也という4つ上の従兄がいる。

彼女の母親の兄の息子で、近所に住んでいた彼は生まれたときから竜姫の傍にいた。

彼はとても器用で、幼いころから何でもよくできた。勉強にしても運動にしてもそつなくこなし、それに気を良くした彼の母親は事あるごとに周りに自慢していたようだ。

そんな修也の母親が、彼に多大な期待をするのは仕方がなかったのかも知れない。が、修也にとっては不幸としか言いようがなかった。幼稚園卒業と同時にそこからはすべて私立の学校に進ませた彼の母親は、中学卒業と同時に修也の将来を自分で決めてしまった。彼女の頭には息子を医者にするという安直な未来が既に描かれ、鈍感な父親は妻の言うがままを息子の希望と誤解していた。根が優しい少年は、彼女の期待に背くことが出来ず、自分の中の疑問という名の歪みに目を背けたまま母親の希望に沿うように歩き続けた。

その結果、修也が高校を卒業するころ、竜姫の好きだった彼の笑顔は跡形もなく消えてしまっていたのである。

小学校から高校まで、公立学校に通っていた竜姫が彼と共に過ごす時間は少なく、殆ど道端で挨拶を交わす程度になつていたが、少しずつ変わっていく修也を竜姫はいつも不安げに見ていた。

医大生となった修也が、16歳になつたばかりの竜姫に声をかけたときも、彼の目はひんやりと冷めていたことを彼女は覚えている。

「修也は優しすぎたんだ。」

深い闇に包まれた寝室に、リュウキの小さな眩きが消えた。

練兵に戻ったシキを見届け、シャルシュと共に練兵場を出た後、彼女の部屋でお茶を飲みながら練兵場での質問に答えた。

やはり知らされていないことが多かったためか、少し慚然としつつ話を聞いていたシャルシュは、それでも以前よりはずっと清々しい表情をしていた。

輪郭しか見えていなかったリーンという国を知ることによって、彼女の意思も随分固まってきたようだ。

去り際に、次は王が宰相を屈服させると意気込んでいたが、きっと自分も巻き込まれるのだろう。

王はともかく、あの宰相に勝てるだろうかと疑問に思いつつ、やはり手助けを請うシャルシュにしっかりと頷くと、彼女は嬉しそうに笑みを浮かべた。

そのあたたかな笑顔が、自分が失くしてしまった彼の笑顔と重なった。

どこを見るともなく宙に視線を投げたままのリュウキに、シロがすすると身を寄せた。

口の悪さからは想像もつかない、まるで慰めるような動きにリュウキが小さく笑う。

「あの時は、修也を守れなかった。」

シロはこんなとき、何も言わない。ただずっとそこにいてくれる。

「今度は私が、修也を守る。」

17歳のあの日、あの瞬間、確かに彼も一緒だった。
あの真つ暗な闇の中に落ちて、激しい光が己の意識を奪うその瞬間
まで、確かに彼はいたのだ。

この世界のどこかに、彼は必ずいる。

確証はないが、リュウキの中には確かにそう思える何かがあった。
地球どこるか時空まで越え、異世界の地に降り立ってからもつすぐ
十年。

リュウキは今でもずっと、彼の人を探し続けている。

ヒリュウ国 6

翼竜隊の出立を翌日に控えた今日。

王城の中心に位置する会議場には王を始め国政に関わる文官や武官が集まっていた。

宰相補佐であるリュウキは勿論、普段議場にはあまり来ることがないシャルシュの姿まで見える。

会議場は大食堂ほどの広さがあり、部屋の中央には幅のある大きな机が5つ連なつて置かれていた。

入り口から最も遠い中央の王座にはシンが、その両隣には宰相のコウリと大將軍のシキが席に就いている。コウリの隣にはリュウキが補佐として、本来身分としてはシキの隣に位置するシャルシュは彼女の希望でリュウキの隣にいた。

「では、皆揃いましたね。」

コウリが静かに周りを見回し王に視線を送ると、シンは頷き口を開いた。

「まずは此度の急な遠征、皆には苦勞をかける。」

王の言葉にそれぞれが目礼を返す。それを確認して彼は言葉を続けた。

「明日の朝、翼竜隊がリンへ経つ。術師隊長ロウ・シヨウは術師5名を連れて翼竜隊と共にリンへ渡れ。」

「御意にございます。」

黒衣に流れる銀の長髪に、妖しく輝く紫暗の瞳を持つロウと呼ばれた青年は、通称魔將軍と呼ばれる術師隊の隊長である。彼は王の言葉に恭しく礼を取ると、静かに応えた。

リュウキは大將軍と共に、ロウは翼竜隊の隊長と共に山脈を越えることになっっている。これは既に決まっていたことであり、今日は最終確認のための召集のようだ。

出立から到着、そしてリーン王城に到着してからレキに侵攻するまでの流れを確認し、シンは一度言葉を切ると、大將軍である弟に視線を向ける。

「先発隊の竜はシキの黒竜とライの赤竜、それから翼竜隊員から10頭だったな。彼らの様子はどうだ？」

シキは静かに頷くと、自分の斜め向かいに座る男に目を向けた。

「ライ！」

「はっ！！！」

ライと呼ばれた青年が、大きな声で応えた。赤褐色の髪に少し釣り目気味の緑の瞳を持つ彼ライ・リーは、通称翼將軍と呼ばれ、こちらら翼竜隊を纏める隊長だ。

「予定していた10頭すべての竜が、飛行可能です。体調も万全に整えています。」

大將軍であるシキ自身も竜騎士なのだが、彼は全軍を纏めることが役割なので実際翼竜隊を管理するのは隊長であるライの役目だ。

今回翼竜隊が出るとはいつても、すべての竜騎士がリーンへ向かうわけではない。その人数は全体の半分に満たない数である。が、選

ばれた10組は翼竜隊でも腕の立つ精鋭たちだった。数としては少なく聞こえるが、その力は1頭で歩兵の中隊程度に値するのだからかなりの武力だろう。

「明日の夜明けには練兵場の広場に待機しています。」

最初に出立する彼ら翼竜隊が運ぶ荷物は殆どない。

取り敢えずの目的地がリーン王城なので、夜営の準備もないし、レキへの行軍に必要なものは後発軍が運ぶことになっている。なので積荷といえば、個人の武器を含む隊員それぞれの荷物とリーン王への手土産くらいだ。

因みに、実際リーンの王城へ入るのは大將軍とリュウキ、各隊長であるライとロウ両名だけである。他は王城の広場に急遽設置された臨時兵舎に待機する予定だ。

今回の行軍で、シンが国を離れることはない。コウリも勿論ヒリュウに残るので、リーンに渡る人員の最高司令官は大將軍の位につきシキである。その次が宰相補佐のリユウキと各隊長が並ぶが、リュウキは大將軍の参謀としての意味合いが強いため、実質2番目の地位に認識されている。現在の各隊長は入れ替わったばかりで、実は未だ20に満たない少年から抜け出したばかりの青年たちだ。実力はあるが、何分経験の不足は否めないところではある。

何度も重ねた確認を終えると、王は議場を見渡した。

「レキは小国とはいえ、術師の国。我らが劣るとは思わぬが、万が一を常に考え、皆心してかかれ。」

しっかりと自分達を見据えかけられた王の言葉に、重臣達は一様に深く頷いた。

「リュウキ」

確認と報告で始終した会議は昼前には終わり、それぞれが持ち場に
戻るために席を立つ。

リュウキもシャルシュと共に引き上げようと席を立ちかけたが、呼
び止める声に動きを止めた。

「何か？」

呼び止めたのは宰相だが、王も用があるらしい。その場で共にここ
らを見ている。

「解っているでしょうに。少しそこに座りなさい、シャルシュ殿下
もです。」

コウリは議場を見回し、自分達以外が出たことを確認すると、小さ
く溜息をついて再び視線を向けた。

リュウキもシャルシュも彼らが言いたいことは何となく予想がつい
ている。何せ今日の会議には本来シャルシュは出ない予定だったの
だから。

シキの説得は簡単だった。しかし宰相と王は別格である。

シキの何倍も弁が立つ二人を相手にするには、リュウキもシャルシ
ュも少々荷が勝ちすぎだ。せめて一人ずつ相手にしたかったなどと
思っていると、シンが重い口を開いた。

「シャルシュ。」

「はい陛下。」

「すまなかつた。」

「……………はっ？」

反応がかなり遅れた。それに加えて、王女としてその返事は如何なものか。

シャルシュの幼いころ教育係を勤めていた侍女長が見れば、すぐさま眉を顰めて注意を促すだろう。

「…失礼しました…どういうことでしょうか？」

慌てて口元を押さえながら、シャルシュが切り返す。

隣で聞いていたリュウキ自身、予想外の言葉に目を丸くしているようだ。こちらは行儀も何も初めから持っていないようなもので、口を半開きにしても放置である。

「今朝、大將軍殿から進言があつたのですよ。」

コウリが言葉を継ぐように続けた。

どうやら、今朝会議が始まる前に、先日の練兵場でのやり取りをシキが二人に話したようだ。

どちらかというと話下手なシキに、二人の説得は無謀のような気がしたが、二人はといえば彼の話を聞いて何か思うところがあつたようである。

もともと彼らは暗愚ではない。寧ろ人の意見に耳を傾け、客観的に物事を考えることができる人間なのだ。そうでなければ、一国の王と宰相が務まるはずがない。

ただ、そうほんの少し、妹に対して過保護すぎただけだ。

「私も王も、貴女が一人の女性であること、国を担う王家の姫であることを愚かにも忘れていました。本当に申し訳ありませんでした。」

今度は王に続き、宰相が頭を下げる。

滅多にお目にかかれない光景に、リュウキもシャルシュもお互い顔を見合わせた。

しばらく続いた沈黙は、いち早く我に返ったリュウキの小さな笑みで崩れる。

未だにぱちぱちと目を瞬かせているシャルシュにゆったりと頷くと、彼女の小さな肩に手を添えた。

途端にシャルシュの頬に朱が差し翡翠の瞳が僅かに揺れる。

認められたのだ。彼女が、一人の王族として。

シャルシュはリュウキに笑みを返し、そっと二人に向き直った。

「陛下、コウリ様…お顔を上げてください。」

彼らと視線が合わさったのを確認して、シャルシュは僅かに震える声で続けた。

「お二方とも、私の我俣を聞いてくださって…本当に、本当にありがとうございます。」

「お前は我俣などではない。寧ろもう少し言ってもいいくらいだ。」

長兄に似て弁の立つ末の妹が、気の強さの割りに己の本当の望みを言わないことを、彼らもリュウキも知っている。彼女はこれまで、王族という身分に甘えることなく、寧ろそれ故に自身を律して生き

てきた。

私財を蓄えることに躍起になっている一部の貴族が、皆彼女のようならばと何度思っただろう。

「私は、大丈夫ですお兄様。己の立場を弁えてはいますが、心を殺しているわけではありません。」

リン王家には今、数人の王子がいる。

その中で王太子は既に決まり、彼の人には未だ正妻となる女性はいないという。

状況から言えば、シャルシュの婚姻は決まったも同然だった。

「ご安心なさつて。私、必ず幸せになりますわ。」

輝くばかりの笑顔を浮かべるシャルシュを、シンとコウリは眩しそうに見つめた。

「というわけで、リュウキ。」

くるりと振り向いたシャルシュの顔には一切の曇りも見受けられない。

つられて笑みを浮かべたリュウキは、首を傾げて先を促した。

「リンの王子様がどのような方たちなのか、私の幸せのために、しっかり見定めてきてね。」

「勿論ですとも。このリュウキが貴女にぴったりの殿方を見定めて参りましょう。」

悪戯を考える子供のように笑う二人に、王と宰相は苦笑した。

「おいおい、シャルの婿候補は王太子だろう？」

「何を言うシン。王太子がろくでもない男だったらどうするんだ？」

「む…だからといって他の王子にはならないだろう。」

「大丈夫だ、裏工作なら任せておけ。どんな手を使っても廃嫡させて姫に似合う王子を立太子として押し上げるさ。」

リュウキのことだ、本気でやりそうで怖い。

若干頬を引きつらせるシンに反して、腹黒い宰相はというと満足気に頷いている。

「そうですね、やはりシャルシユ様には幸せになっていたただかないと。」

露見するような手抜かりは許しませんよ、と一応宰相として念を押しすコウリもなかなか本気だ。

これはもう収集がつかないと、シンが頭を抱えたところで当の本人であるシャルシユがくすくすと笑い出した。

柔らかな彼女の笑い声は、まるで空気さえも明るく染めてしまうようだった。

末の妹を心配する心と同じくらい、この笑顔が自分の傍から消え去る寂しさも、彼女の婚姻から目を背けた原因だったのかもしれない。おそらく自分だけでなく弟も、目の前の宰相すらも。

「冗談はこのくらいにして、そろそろ明日の準備にかかるぞ！」

心の内の寂しさを振り切るように、若い王は席を立った。

出立

「なあ、本当にあの黒いのに乗るのか？」

顔の周りをゆらゆらと左右に動く物体に、リュウキは煩わしげに眉を顰めた。

「なー…リュウキ…俺に乗ればいいじゃねえか。なー。」

リュウキは今、明日の行軍に向けて自分の分の荷の整理をしている。とはいっても宮仕えに上がる前に傭兵として国を巡っていた彼女は、旅に慣れているので荷も少なければ準備も早い。

後は己の腰にある武器の手入れを残すのみなのだが、先ほどから内弁慶の本領を發揮しまくっている、目前をうるうるとちらつく白いものが邪魔で仕方なかった。

延々と無視し続けていたリュウキの堪忍袋は今にもはち切れそうである。

「リュウキ…なー、リュウキ…リュウげっ！！！」

変な音が出た。声ではなく音だ。

先ほどまでのんびりと漂っていた騰蛇が、打ち上げられた魚のようにびちびちと宙をのた打ち回っている。その真珠のような胴体は、女の白い手に若干強すぎる力で握り締められていた。言わずもがなリュウキの手である。

「うつ…ぐつき…ぐる…くるし…っ！！」

ぎちぎちと音がしそうな勢いで握る反面、一言も声を出さないリュウ

ウキが恐ろしい。

寧ろ罵声でも何でもいいから何か言ってくれた方が幾分マシである。シロの顔が真珠色から紅を通り越し紫に染まり始めたころ、漸く気が済んだのかリュウキがぱつと手を離れた。

途端、一気に器官に入り込む酸素に、シロは涙目でむせる。

言いたいことは色々あるようだが、彼は今それどころではない。

リュウキといえば、何事もなかったかのように溜息をついて、広げかけていた数種の武器の中から愛用のサーベルを手にとると、寝椅子に腰掛け用意していた布を持って武器の手入れを始めた。

次第に咳を治めて息を整えるシロに、ちらりと視線を向ける。

「まったく…エン殿が苦手なのは解るが、お前が無駄に力を消費するよりいいだろう？」

目の前の騰蛇が本気をだせば、シキの竜に負けないくらいの力を出せることをリュウキは知っている。

その力を解放すれば、竜たちをも凌ぐ大きさになることもできるのだ。しかし、もともと異界の獣であるシロがこの地で力を使うことは、多大な負担がかかることも彼女は知っていた。

「お前の見せ場はレキに入ってから。それまではできるだけ力を使いな。」

「…俺様を甘くみんなよ！巨大化して空を飛ぶくらいどつてこと…」

頑として聞き入れないシロに、リュウキは溜息をついてサーベルを置き再び手を伸ばす。

先ほどの無体を思い出し、顔を引きつらせて身を引いた騰蛇に苦笑をこぼすと、今度はやんわりと胴体に手をそえ顔の前まで引き寄せた。

「一応頼りにしてるんだ。私のためにも言うことを聞いてくれ。」

己と同じ金色の目がすうつと細まり、赤い唇が弧を描く。何者も魅了する彼女の笑みは、異界の獣にも有効らしい。さっきまで真っ白だった騰蛇の顔が今は真っ赤になっていた。

「それだ…その顔に騙されたんだ俺は。」

しばし茫然と目の前の笑顔を見つめたあと、6年前の己の迂闊さを思い出し、シロは諦めたように溜息を吐いた。

普段の王城ならば、まだ人影のない時分。

今日はいつもと違い、朝焼けの中たくさんの人の気配が行きかっていた。

特に練兵場の広場には、大きな竜の影がいくつも見える。

大樹の幹のような皮膚をもつ竜たちの中に、一際目立つ燃えるよう

な赤い竜と、対して闇に溶け込むような黒い竜の姿が見えた。その傍には翼竜隊と術師隊の正装をした隊員がそれぞれの竜に荷を積んでいる。

リュウキは小さな荷物を片手に、大きな黒竜に近づいた。

「遅くなった。」

黒竜の傍で積荷と輿の確認をしていたシキが、リュウキの手に手を止めて振り返った。

当たり前だが、今日はシキもリュウキもきっちり正装である。シキは彼の竜と同じ真っ黒な甲冑を、リュウキはシロと同じ真珠色の軍服を着ていた。

それぞれの胸には金色の竜の紋章が輝いている。

「おう！こつちはもう準備できてるぜ。」

遠征に似つかわしくない軽い受け答えにリュウキは小さく苦笑をもらしつつ、目の前の黒竜に目を向けた。

「エン殿、此度は無理を聞いて頂いて感謝します。道中よろしくお願ひいたします。」

王にすら滅多にとらない最上級の礼である。

本来、竜は自分のパートナーである騎士以外を背に乗せることはないのだが、今回山脈を越えるためにどうしても彼らの協力が必要だった。中には不満の声を上げる竜もいたようだが、エンが説得してくれたのだ。

他の竜に騎乗する術師隊の隊員たちも、リュウキと同じようにそれぞれの竜に謝意を述べていた。

リュウキが顔を上げると、エンが金色の眼を細め、すうつとリュウ

キに首を寄せる。
騎乗の許しを得た証だ。

リュウキは再度頭を下げ、黒竜の側面に回ると背に取り付けられた輿に自分の荷を乗せた。

「出立！！」

朝日に照らされた王城に大將軍の号令が響くと、整列していた竜達が一斉に翼を広げて空へ昇った。

彼らの羽ばたきで、風がごうごうと唸り、まるで嵐のように王城を吹き抜ける。

バルコニーでは、シンとシャルシュ、コウリやギイがシキの率いる翼竜隊と術師隊を見送るように空を見上げていた。バルコニーの下の広場にも他の文官や武官達が整列しているようだ。

リュウキは黒竜の背から王城を見下ろし、バルコニーで一際輝く金色を見つめる。

2対の瞳としっかり視線を合わせると、いつもどおりの勝気な笑みを見せて力強く頷いた。

山脈越え

「そういえば、お前傭兵だったんだよな？」

流れるように過ぎていく街並みを見るともなしに眺めていると、腕組みをして背後の竜たちを見据えていたはずのシキが声をかけてきた。

質問に肯定の意を込めて頷けば、彼は右手で顎をいじりながら考えるように視線を落とす。

「リーンにも行ったことがあるのか？」

なるほどと、質問の意図が解ってきたリュウキは記憶の糸をたどり始める。

「ああ、そんなに長くはなかったけどな。レキにも入ったことならあるぞ。」

レキという言葉に僅かに目を見張り、次いで納得するようにシキは頷いた。

「つーことは…あの事前情報はお前の功績か！」

本来ならば、レキについては殆どが謎のままの行軍の予定だった。当初考えられていた予定としては、兎に角情報収集最優先ということで、術師隊に加えリュウキの率いる“影”の部隊も共に渡り、リーンを拠点としてレキに斥候を送る予定だったのだ。

しかしリュウキ持っていた情報により、事が大分スムーズに進んでいた。

とはいえ、彼女の情報も新しく3年以上前のものであるので、ラインに着き次第、レキへ“影”として潜り込むのだが。功績といえるほどのものでもないので、シキの賞賛には苦笑しか返せないリュウキである。

「あの頃は一所に落ち着くことはなかったからな。」

「年中旅をしていたのか？」

「ああ、流石にすべての町とは言わないが、この大陸の国だったらすべて回った。」

「いいなあ、俺も1年くらいかけて旅してえなあ……」

「一国の大將軍が何を言ってるんだか。」

半分本気で零すシキに声を上げて笑うと、リュウキは民家が疎らになり所々に森や山が見え始めた景色に目を向けた。

「でもやっぱりあの時も、この国が一番長かったなあ。」

呟きは風に流れたが、シキの耳には届いたようだ。

「“黒翼”の通り名もヒリュウでついたしな。」

「…大層な名をもらったもんだ。」

「黒は聖なる色だからな。」

ヒリュウ国では金と黒は神聖な意味を持つ。

金は全てを生み出す創造の色。

黒は全てを還す浄化の色。

相対するこの二色は命あるものに現れることは少ない。

この国で聖色を身に宿しているのは、王家の血筋であるシンとシャルシュだけである。

シキの髪は光の加減で金に見えなくもないが、琥珀色のそれは聖色

とは認められなかった。

母の身分が低いということもあって、幼い頃は心無い大人に色々つけちをつけられたようだが、今となっては全く気にしていない。

寧ろ問題はリュウキの方だ。

本来、王家の血筋のみに出ていた聖色を、彼女は二つとも持っていた。

黒い髪と金の目。誰がどう見ても、どちらとも見事な聖色である。今でも生き神のように崇める者はいるが、昔はもっと酷かった。

異世界に落ち、右も左も判らず、身を守る力も身分も持ち合わせていなかった彼女は、欲に眩んだ人間達にとって格好の餌食だったのである。

昔の嫌な思い出を引っ張り出してしまい少し気分が落ちたものの、今己の周りにいてくれる人々や手に入れた力を思い出し一気に持ち直した。

もうあのような弱い自分ではない。

まだ未熟者ではあるが、あるときよりずっと強くなったと自負している。

身体的な力だけでなく、仲間と居場所を得たことで心の強さも増した。

たとえどんな困難がきても、怯えず立ち向かうくらいはできる自分になれたことを、リュウキは心から嬉しいと思っている。

彼女には、一緒に落ちた従兄を見つけ出すという目的がある。

しかしそれと同じくらい、ヒリュウで自分に居場所をくれた人々を守りたいと強く思うのだ。

「私はもっと、強くなる。」

大事なものが増える度、リュウキは力を求める。

ヒリュウの大地を見据えてキラキラと輝く金目を見つめると、シキはやわらかく笑みを浮かべた。

「…嫁の貰い手なくなるぞ。」

「余計なお世話だ！」

眼下に広がる林が森になり、更に鬱蒼とした木々の様子に姿を変えた。

視線を上げ前方を見ると、霞んだ空に山脈の峰がうつすらと見える。もう少し飛ばせば山麓に辿り着くだろう。

リュウキが先日訪れたサイの町は既に過ぎ、一行が通過中の地域は普段滅多に人が入ることはない場所だ。

昼間でも地面に光が射すことのないこの森は“闇の腕”やみ かいなと呼ばれ、魔法が使える獣 魔獣が潜む森だった。

光を嫌う魔獣にとって、ここは楽園のような森である。

「皆、警戒を怠るな！」

シキの厳しい檄が飛ぶ。リュウキも回りに気を張った。

闇の腕に入ってから、上空の空気が明らかに変わったのだ。どこか重く淀んだ空気に緊張が走る。

闇の腕は山脈の全ての麓に広がっているわけではない。が、森の切れた部分を通ると今度は山脈の峰が高すぎて人がもたない。山脈を越えるには、闇の腕を越えることが不可欠なのである。翼竜隊に術師隊を加えた理由には、闇の腕を無事超えるためというものが大半を占めていた。ぴりぴりと、空気が緊張するように震える。

「ロウ！」

「はっ！…防護壁を！」

シキは森から目を離すことなく、すぐ後ろに続くライの赤竜に騎乗するロウに声をかけた。

術師隊隊長である彼は即座に意を汲み取り、そのまた後ろに続く術師二人に指示を出す。二人は直ぐに呪文を唱え始めた。詠唱が終わると同時に、十二頭それぞれの竜を巨大な魔方陣が包んだ。

「…何か来る。」

ざわりと空気が魔力で揺らぐ。

「黒翼は傭兵と名乗っていたが、その実魔法も得手だったな？」

確認するようなシキの言葉に、リュウキはニヤリと笑みを浮かべた。

「知っていることを態々聞くな。術師としての戦力にも入れてるくせに。」

「ははっ！使えるもんは使わねえとな！！」

「まったく、とことん人使いの荒い兄弟だ！」

軽口を叩きながらもお互い探るようにせわしなく視線を動かす。

「シキ、下にいる!」

深い森が全てを隠し何かの姿は見えない。

が、揺らめく魔力がぴったりと一行の真下にくっついてきていた。

「散開!!」

シキの掛け声で竜たちが一斉に散る。

その瞬間、一行が飛んでいたちょうど中心を巨大な獣の尾が貫いていた。森の中から伸びる長い尾は毒々しい赤紫で先端は鋭い針が無数に集まり棘玉のようになっていた。

「マンティコラだ!!」

リュウキは周囲に知らしめるように叫び、小さく舌打ちした。

まだ本体は出てきていないが、かの獣は人食いだ。しかも好んで人を食し、食事量も限りがない。質が悪い危険な魔獣として有名である。

「毒針に注意しろ!近づくと飛ぶぞ!翼竜隊は攻撃を回避しつつ術師隊の援護に回れ!」

シキが黒竜を上昇させながら、支持を回す。

王城を出る前に、ロウが全員に通信用の魔具を渡しているため、多少離れてもそれぞれの声は届くようになっていた。

シキが全体を見渡せる位置且魔獣の尾の真上に上がったのを確認すると、ライとロウの騎乗する赤竜は尾に最も近い正面に移動した。

「防御二人は物理強化、他は水系魔法で合図と同時に攻撃します。」
銀の髪を靡かせながら、彼自身も突き出した両手に魔力を溜める。
その横では、竜を操るライが彼の愛用の武器、コルセスカを構えて
いた。緑の瞳が鋭く光る。

「氷弾用意…放て!!」

四方から真つ白な光が放たれ、中央の魔獣の尾に向かって氷の礫が
降り注ぐ。

瞬時に逃げようとするも、放たれた内三方の氷が命中し、あつとい
う間にマンティコラの尾は分厚い氷に包まれた。

そのまま森に引こうと逃げるが、尾の先から伝わるように一気に凍
っていく。

瞬く間に鈍くなる動きを追うように、四頭の竜が距離を縮めた。が、
最後の足掻きとばかりに凍った尾が勢いよく無差別に振り回される。

「うわあっ!!!」

急に加速した動きに反応し切れなかった一頭に、氷の塊が振り下ろ
されようとした、その瞬間。

バシユウツ

風を切るような音を立てて、光の矢が凍った魔獣の尾を貫いた。
砕かれた尾はそのまま森の闇に消えていく。

一端その場から離れ、上昇する竜の背から術師達が見上げると、黒
竜の背で矢を射た後の動作から立ち上がるリュウキの姿があった。

登場人物 2 (前書き)

軽く前置きを…
リン王家の一族です。

登場人物 2

＝リーン国＝

カルドウス・リーン

リーン王。最近老いを感じる67歳。穏やかな性格の子煩悩パパ。国もしつかり統治。栗毛の天パに瑠璃色の瞳。

ジャン・リーン

血気盛んな王太子。馬鹿ではないが色んな意味でまだ若い17歳。母譲りの白金の髪に瑠璃色の瞳。文より武に秀でた健康優良児。身長173cm

レイベルト・リーン

歳の割りに兄より落ち着いている17歳。母親違いの兄とは実際4ヶ月くらいしか歳が離れていない。野心はあるがそこまで黒くなりきれない好青年。栗毛の長髪に瑠璃色の瞳。身長176cm

リシャルル・リーン

双子兄。ちよつとひ弱な14歳。本が大好きで年中城の書庫にこもっている。

基本弟を盾にしつつ行動。人見知りが激しく、無口だが天子の容貌

で大抵許される。
肩までの銀髪に瑠璃色の瞳。天パ。身長158cm。

リジエール・リーン

双子弟。やんちゃ盛りな14歳。兄とは正反対。
勉強が嫌いで遊ぶのが大好き。誰彼構わず悪戯をしかけるも、兄と同じく天使の容顔で大抵許される。
こっちは確信犯。容姿は兄と瓜二つ。身長も同じ。

ライラ・リーン

長女。父の性格をモロに受け継ぐおっとりさんな20歳。
いつも笑顔で家族の幸せを見守りつつ、たまにすっかり釘を刺す。
実はやり手。天パの赤毛に瑠璃色の瞳。身長154cm

レイラ・リーン

次女。母譲りの天真爛漫16歳。まさに王女様な性格で、かなりの
我侷。

姉と次兄の言うことだけ聞く。栗毛に瑠璃色の瞳。身長150cm

因みにリーン王家は、双子以外みんな異母兄弟です。
王様頑張った…。

リンへ

マンティコラの攻撃を回避した一行は、そのまま速度を上げて山脈の麓まで来ていた。

遠くからうつすらと見えていた山脈の峰は今、分厚い雲に包まれ頂上までは見えない。

しかし、ここが東西に続く山脈で一番低く越えることができる位置なのだ。

「皆、これより山脈を越える。術師隊は全員の防寒と呼吸の確保、翼竜隊は集中を切らさぬよう心して飛べ！」

竜を操るのに手綱は使わない。

竜と竜騎士は契約するときに互いの心を繋げ、どんなに離れていても意思の疎通ができるようにする。所謂、精神感応というやつだ。

竜たちは竜騎士たちのイメージにそって飛ぶ。

種族の違う二方にとって、これが結構難しかったりするので、まだ慣れない騎士たちはかなりの集中が必要だった。

とはいっても、今回の行軍に参加しているのは翼竜隊の中でも精鋭たちなので、騎乗して戦うことも朝飯前なのだが。

再びロウの掛け声で術師隊が動いた。

内三人からは温かな山吹色の光が、残る二人とロウからは殆ど色はないが空気の層が魔力で揺れるのが確認できる。

シンはそれらが全体に行き渡るのを確認し、一応保険として皆に厚手のマントを身に着けるよう指示を出すと、自身もしっかりと着込みながら隣に目を向けた。

「目え回すなよりユウキ。」

「誰に言っただんだ！」

挑戦的に笑いながら応えたリュウキに、シンは豪快に笑って目前に広がる山を見上げた。

ゴウゴウと風の音がする。

音はするが、殆どの風が何か見えない壁に遮られ、竜の背に乗る人間達に届くのは、ほんのそよ風程度の風力である。呼吸も出来るし、気温も少し冷えるくらいだ。

目の前の山肌には既に植物の影はなく、時折覗く黒い岩肌以外はすべて真っ白な雪と氷の世界だった。

一行は既に人の足で登るには不可能な地点まで来ていた。

「すごいな。」

キラキラと日の光を反射して宝石のように輝く景色に、リュウキは小さく声を漏らす。

下を覗けば、これまた真っ白な雲が絨毯のように広がっていた。

「俺もこんなの初めて見た。」

隣で竜を操るシキも同じように景色に目を奪われている。

勿論周囲への警戒は怠っていない。

「俺今なら何でもできそうな気がするぞ。」

「じゃあそこから飛び降りて雪合戦でもやってこい。」

「お前…ホントいい性格してるよな。」

せつかくの気分を台無しにされたシキががっくりと肩を落とす。

「何を言う、お前の兄弟や宰相殿よりずっと優しいじゃないか。」

「あー…」

これには本気で納得するしかない。

「お前さあ、一応俺ってお前が守るべき王族様なんだから助けるよ。」

「阿呆が。軍を纏める大將軍が、宰相補佐に守られてどうする。」

「守るの意味が違えよ！俺は戦うの専門なんだ、あいつらに口で勝てる訳ねえだろ!?!」

「ああ…馬鹿だからな。」

遠慮のないリユウキの言葉にシキが言葉を失くした。

「てめえ…一応俺の部下だろうがよ…」

「本来はコウリの部下だけだな。」

「ああ…解った、コウリだな。あいつに近づくとみんな性格悪くなつちまうんだな。」

「帰還したら真っ先にお伝えするよ。」

「絶対止める!?!」

マンティコラが現れたとき以上の剣幕である。

「シキ…お前そうやってむきになるからシャルシュ殿にからかわれ

るんだぞ?」
「う…」

思い当たる節がありすぎたようだ。

「だってよお…あいつら寄って集って俺を責めるんだぜ。」

「面白いのだから仕方がない。」

「俺は面白くない。」

「嘘をつけ、実は構ってもらって嬉しいくせに。」

「貶されて嬉しいヤツがあるか!」

「妹に、お兄様目障りですので近づかないでくださいまし!とか言われるよりいいだろう?」

また絶句。

「…た、確かに。」

「お前ももう若くないからな、そろそろ姫のような若い女性に嫌われる要素が点々と出てくるんじゃないか?臭いとか。」

「おまつ…俺はまだそんな歳じゃないぞ!」

「そおかあ?」

「ていうか、お前同い年だろう!」

「私は大丈夫だ。どっかの誰かと違って酒も煙管もやっていないかな。気をつけるよ、歳取ると臭いに出るらしいぞ。」

大將軍という大層な地位に就いている割に、弁においてはヒリユウ王城で最下層のようである。

「お…俺臭う?」

「さあな、エン殿にでも聞いてみる。」

「…」

黙り込んだ。

傷ついたのでかと思いきや、精神感応を使って本気で聞き始めたらしいシキに、リユウキはケラケラと笑い出した。

気がつけば、一行は山脈の頂を越えるところまで来ていた。

リンという国は、山脈に面しているからかヒリュウに似た文化の国である。

両国は鉱石の採掘と加工に優れ、その町並みも白い石造りの風貌を見せていた。

王宮内の建物も同じく白っぽい石できている。重厚な分厚い壁は、それだけで他を圧倒していた。

そんなリン王城では、城で働く多くの者達が少し緊張した面持ちで行きかっていた。

それもそのはず、今日の日没には隣国ヒリュウから翼竜隊の精鋭たちが到着することになっているのだ。その中には、かの国の王弟である大將軍と、聖なる色を持つ神の子と噂の宰相補佐の姿もあるという。

竜と騎士を受け入れる兵舎の準備や、高官を招いての宴と、それぞれの持ち場のものは手落ちが無いよう皆必死に準備していた。

日没までもうあと僅か。

竜はヒリュウのみに生息する生き物なので、殆どの人間が想像上でしか思うことのできない中、リーン王城は期待と不安に包まれていた。

再会 1

「ヒリュウ国より、大將軍閣下並びに宰相補佐殿と翼竜隊、術師隊の方々がお着きになりました！」

つい先ほど、南の空に竜と思わしき一団が近づいているとの報告が入ってから、王城の中央に待機していたリーン王、カルドウス・リーンの元へ近衛兵が彼らの入城を伝えた。

しつかりと頷くと、王はすぐに傍に控えていた王太子含む王子たちに外に出るよう促す。

まだ幼い王子たちはそわそわと落ち着かない様子で、少し早足に王城の広場へと向かった。

ちようど日暮れの時間に当たる今、リーンの白い王城は沈む日の紅の色に染まっていた。まだ目視で回りが見渡せるくらいは明るい。今日は来訪者を迎えるため、王城の広場にはいつもよりも多くの説明が用意されていたので、このまま日が沈んでも視界が闇に染まることはないだろう。

カルドウス王が広場に出たとき、既に竜たちは奥の広場に腰を下ろし、その背から降りたヒリュウの精鋭たちがこちらへ向かって歩いてくるところだった。

一際背の高い真っ黒な甲冑を着込んだ男と、対照的にこの薄暗い中でもすぐに目に付くような真珠色の軍服を纏う黒髪の女が颯爽と風を切りながら歩いてくる。

独特の雰囲気を持つその二人を見て、王はすぐさま彼らの身分を理解した。

彼らは王の目の前まで来ると、流れるように膝を折った。

「お初にお目にかかります。リーン王陛下並びに王子殿下様方のお

出迎え、まことに恐悦至極にございます。」

男はすっかりとした低い声で口上を述べ、頭を垂れた。二人の背後では彼らの部下たちが同じように膝をつき頭を垂れている。

「私は此度の総司令を務めます、シキ・ヒリュウと申します。右の者は私の参謀……」

シキが言葉を止め、ちらりとリュウキに目を向けた。

「リュウキと申します。」

高くはないが、澄んだ声音がはつきりと響く。

名乗りながらリュウキも顔を上げると、王の背後に控えた王子たちが一様に息を呑む音が聞こえた。

黒髪に金目はリンでも珍しいようだ。まあ、理由はそれだけでもなさそうだが、彼女は全く気づいていない。

「ヒリュウ王には感謝してもしきれない。そなた等の名声もリンに届いているぞ。」

「光栄にございます。」

リュウキは再び口を噤み顔を伏せた。

「まずは王城に入られよ。部屋に案内する故夜の宴までしばし休まれるがいい。」

王の言葉に感謝の意を伝えるように二人は深く頭を下げた。

それを見てゆつたりと笑みを浮かべた王は、傍に控えていた近衛を呼び竜とヒリュウの兵士たちを兵舎へ案内するよう支持を出すと、

シキとリュウキに立ち上がるよう促し、侍女たちに部屋を案内するよう言付けた。

「で、どれが王太子だったんだ？」

案内された部屋に荷物を置いて、そのままリュウキはシキの部屋に来ていた。

まだ宴までには時間がある。

「白金色の髪に濃紺の衣装を纏っていたヤツだ。」

リュウキは以前、一度リーン王族の式典に紛れ込んだことがある。そのときに、まだ幼い王子たちの姿を見ていた。彼らはリュウキたちが到着したときもその場にいたが、正式に王から紹介があるのは今夜の宴の席でのようだ。

「名はジャン・リーン。なかなか武に秀でた王子らしいぞ。」

リュウキの言葉にふーん、とあまり面白くなさそうに応えたシキは、窓から外を伺うように身を寄せた。

「小姑のような顔をしているな。」

面白そうにくすくすと笑いながらリュウキが長椅子に腰掛けた。

格好は未だ白い軍服である。シキは甲冑だけ外し、中に着ていた長袖と細身のズボンになっていた。むっと眉を寄せたシキにリュウキは構わず続ける。

「その隣にいた栗毛の王子が第二王子のレイベルト。彼は異母弟だから王太子と歳が同じだったはずだ。確か二人ともシャルシュ殿の一つ上だったかな。」

無言のまま外を見てはいるが聞いてはいるらしい。

「で、お人形のような双子がいただろう？あれが第三王子と第四王子のリシャルとリジェルだ。」

あとは王女が二人いるが、彼女たちは出てきていなかった。おそらく宴の席にくるのだろう。

「しつかり検分しないとな。」

「お前こそ小姑じゃねえか。」

笑いながらもリュウキの目はかなり真剣である。

シキは深く溜息をつく、外から視線を彼女に戻した。

「こりゃあ王太子殿下は大変だなあ。何人から恨まれるんだ？」

王の名前、宰相の名前、彼が知る限りシャルシュを愛する者たちの名を指折り数えながら、シキもくつくつと笑い出す。

「まあそれだけ価値のある姫君なんだ。そこは全部受け止めるくらい器がないとな。」

「違う。」

お互い顔を見合わせて、悪戯を考える子供のように笑いあった。

しばらく今後のことを話したりリュウキは、シキの部屋を出て一端自分の部屋に戻ることにした。

もうしばらくすれば宴の時間になるので、自分に付けられた侍女が部屋に呼びにくるだろう。それまでに服装から何から準備しておかなければならない。

基本的に動きにくい服が大嫌いなリュウキは、もういつその事軍服のまま出てしまいたかったが、一応国の代表として来ているため無作法なことはできない。

というよりも、そんな彼女の性格をしつかりと理解していたらしい宰相に、上官命令まで使われて煌びやかなドレスを一着持たされてしまっている。

抜け目のない上官の黒い笑顔を思い出し、背筋に何か寒いものが通ったような気がして二の腕を軽く擦っていると前方から声が聞こえた。

ちょうど進路が角になっていたため、誰かが話しているようだが姿は見えない。

どこかで聞いたような声に、はたと一人首を傾げながら、自分の部屋もそちらを通るのでそのまま気にせず足を進めた。

果たして、その人物は角を曲がって直ぐ見えた。

少し遠いが、ちょうど直線上の廊下で話していたらしく、目視することは容易い。

こちらに背を向けていたので、リュウキに見えるのは後姿なのだが、何となく見るともなしに見ながら歩きだそうとすると、話を終えたいらしい彼がこちらに踵を返す。

相手はさっさと逆側に去っていったが、リュウキの目にはこちらを

向いている彼の姿しか映っていないかった。

彼の顔を認識した瞬間、彼女の金の瞳が大きく見開かれる。心臓が大きく、まるで何かを殴るような音をたてて鼓動を打っていた。

まさか、そんな。

真っ白な頭にそんな言葉だけが繰り返し浮かぶ。

「……………しゅっや？」

呟いた声は弱弱しく震えていた。

再会 2

高間修也は私の従兄で幼馴染。

その関係は高校に入ってから変化した。

従兄で幼馴染という関係から、恋人という関係に。

優しかった修也。

でも、学校の帰り道、私を呼びとめ「付き合って」と言ったその声は
とっても冷めていたことを覚えている。

寂しかったの？

辛かったの？

いま、幸せ？

たずねたかった言葉は私の口から出ることはなく、
私の隣で笑う貴方の笑顔が、もう昔とは違うことを
私は知っていた。

それでもいつか、貴方を救えると思っていたあの頃の私は
なんて愚かだったんだろうと

今になって思い知ったんだ。

世界から投げ出されて、失ったものは多かつたけれど
貴方の笑顔をもう一度取り戻すことができたなら。

私は…

居候同然の身分にも関わらず今夜の宴に誘われた男は、困り果てて
知人の近衛兵に宴での作法を教わりにきていた。
一通り教わった後、己よりも王女付きの侍女あたりに聞いたほうが
正確だということを言われ、お礼を言って聞きやすそうな人を脳内
でピックアップしながら踵を返す。

と、前方で誰かが自分を見つめていることに気づいた。

眩しいくらいの白い軍服に身を包んだその人は、黒い髪を一つに束ね、姿勢よく立ち尽くしている。

どう見ても身分のある人間のようだったので、あまり見るのも失礼だろうと顔の部分から視線をずらし、早くすり抜けようと足早に歩き続けた。

が、漸く顔が確認できる位置まで近づいたときに、彼の耳に女性の声で呟きが届く。

「……………しゅうや?」

しゅうや。

確かにそう聞こえた。

この城で自分の名をしつかりと言えるものはいない。

響きが言いにくいのか、皆一様に“シユウ”と略すのだ。

修也は思わず驚いて、勢いよく女性に視線を向けた。

そこにあっただのは、よく見知った従妹の顔で。

「……………りゅう……き? 竜姫!？」

だが目の前の彼女は、彼が知る従妹の顔よりもずっと大人っぽくなっている。

少女というより、どこからどう見ても一人の女性だ。

昔から綺麗な少女だと思っていたが、ここまで美しくなるとは思わなかった。

「修也! やっぱり修也だ!」

彼女は叫ぶように名前を呼ぶと、修也の顔をガシッと掴んだ。そのままぐつと確認するよつに顔を近づける。

「ずっと…ずっと探してた。見つけれなくてごめんね修也。」

目の前の竜姫の瞳が涙で揺らめく。零れることはなかったが、目元が赤く染まっていた。

が、修也は彼女の顔が近づいたことで異変に気づく。

「竜姫…お、お前…目…」

そう、彼が知る竜姫は真っ黒な髪に真っ黒な瞳の少女だ。目の前の彼女は太陽のような黄金の瞳をしていた。

「あ…あ…これ。ちょっと訳があってこっちに来てから変わったんだ。」

「俺と契約したからだ。」

そのとき、竜姫の軍服の袖からするすると何かが出てきた。

「え？…うわあっ！！！」

彼女の腕を伝って出てきたそれは、そのまま彼女の手を離れて宙に飛び上がる。

言わずもがな、騰蛇のシロである。

「シロ…勝手に出てくるな。」

驚く修也を気遣うように横目で見ながら、シロを自分の方に引き寄せた。

「修也、こいつは大丈夫、何もしない。私の相棒だ。」
「こいつが、リュウキが探してた男か？」

白い騰蛇がちろりと赤い舌を覗かせる。修也を見定めるように竜姫と同じ黄金の目が光った。

「そう、高間修也。この世界での私の唯一の血縁だ。」
「…ふーん。」

じろじろと見つめる翼の生えた白い蛇に、修也は少し背を逸らせながら目を瞬かせた。
が、すぐに竜姫に視線を戻す。

「竜姫、無事だったんだな。」
「うん、色んな奴らに助けられた。」
「今までどこにいたんだ？」
「ずっと点々としてたけど…3年くらい前からヒリュウにいるよ。」

竜姫の言葉に修也が固まる。

「…3…年前？」
「そう、今はヒリュウの王城に…」
「3年前ってどういうことだ!？」
「…え？」

いきなり肩を掴まれ、問い詰めるような修也の口調に竜姫は訳が解らず目を白黒させた。
言いたいことが全く理解できない。

「3年前は3年前だが…何か問題あるのか？」

せつかく意識して女性らしくしていた口調もいつも通りである。

「俺がこの城に落ちたのは1年前だ。いや、まだ1年も経ってない！」

その言葉に今度は竜姫が息を呑む。

「お前は一体、いつこの世界に来たんだ!？」

あまりのことに上手く回らない頭を必死に回して、投げかけられた問いのみに答えようと竜姫は口を開いた。

「……9…ねん、と半年前…」
「9年…」

二人はお互いに言葉が見つからず、茫然と相手の顔を見ていた。修也が最初に竜姫を見て感じたあの違和感は、この所為だったのだ。彼と離れ離れになったとき17歳だった竜姫は、修也の歳を優に超えて26歳になっていた。

「どつりでリユウキがあんだけ必死に探しても見つからないはずだ。」

言葉を失くす二人の間で、シロが納得したように呟く。
先に我に帰ったのは竜姫の方だった。

「…なるほどな…確かに、存在しないんじゃない見つかるはずがない。」

すっと目の前の修也から目を逸らし、俯けた竜姫の唇から、何かに耐えるような吐息が漏れた。

かなりのショックを受けただろう竜姫は、修也が思ったよりもすぐに持ち直した。

彼女が顔を歪めたのは、先ほど俯いたときの一瞬で。

すぐに顔を上げた竜姫は、にこりと花のような笑みを浮かべて修也を見上げる。

「兎に角、修也が無事でよかった。」

心の底からそう思ってくれていることが解るほど、彼女の声は晴れ晴れとしていた。

再会 3

「修也は何故王城に？」

竜姫が疑問に思つのも無理はない。

彼女は初めてこの世界に落ちたときの苦勞を今でも覚えてる。

世界の常識は勿論、言葉すら解らなかつたあの頃、身分もない自分を助けてくれる人なんて殆どいなかった。

彼とて同じ条件で落ちたはず。そんな彼がどうして王城に入れたのか、竜姫は不思議でならなかつた。

「俺が落ちたのがここの神殿みたいなたこでさ。最初は神の子がどーの奇跡がこーの言われて訳が解らなかつたんだけど…」

その話を聞いて竜姫はすぐに納得した。

この国でも黒は聖なる色として扱われる。修也の髪茶色だが瞳は黒だ。

この世界では珍しい。

「部屋もらつて、言葉も教えてもらつて…ホント、俺運がよかったよ。」

運が良かった。本当にその言葉に尽きるだろう。

竜姫はほっと胸をなでおろし、修也を助けてくれたリーンの人々に心の中で謝意を述べた。

「竜姫は何でここに？今ヒリュウに住んでるんだよね？」

「ああ、私はヒリュウから使者としてきたんだ。」

「使者？」

「王様のお使いみたいなものだ」

くすくすと笑いながらそう言いつた竜姫に、修也は少し考えるように首を傾げた。

「あれ？じゃあ今日の宴も出るのか？」

「ああ、一応“客”だからな。」

竜姫の言葉遣いはすっかり戻ってしまっているが、彼女自身が成長して外見から変わってしまったているからか、修也にとってあまり違和感はなかった。

寧ろ自信に溢れた竜姫の姿によく似合っているようにさえ思える。

「…何故か俺も呼ばれてるんだよな…」

「修也も出るのか！」

嬉しそうに応えた竜姫に対して修也は少し不安げだ。

「いや、他の国の偉い人が出るって聞いてたから、どうも不安だったんだけど…」

「ああ、それなら大丈夫。ヒリュウの総司令はなかなか気さくな男だぞ。」

「そうなの？なら大丈夫かなあ…」

記憶よりも幾分幼く見える従兄に、少しだけ苦笑を浮かべながら竜姫はしつかり頷いた。

しかし偉い人の中に己も入っていることに全く気づいていない。

「大丈夫、保証するよ。じゃあ、これから宴の準備もあるだろ？」

「ああ、そうだった。色々聞きに行かなきゃ。」

「私もこのままじゃ行けないから、一端部屋に戻って準備してくるよ。」

言いながら、自分の軍服を見下ろす。

「そうか？それすつごく綺麗で似合ってるのに。」

「ふふ…ありがとう修也。じゃあまた後で。」

「ああ、また夜にな。」

少しだけお互いの顔を見つめた後、竜姫は小さく笑ってそのまま歩き出した。

修也はその綺麗な後姿をしばらく見つめていた。

部屋に戻った竜姫は、無言のままベッドに突っ伏した。

その勢いに、袖の中に戻っていたシロが慌てて離れるも、動かない彼女を心配するように近づく。

しばらくして、竜姫がごろんと仰向けになった。

「…生きてた。」

小さく漏れた呟きは、少しだけ震えていた。

「……………生きてた。」

歪んだ視界を誤魔化すように、右腕を額に当てる。少し翳った天井を見つめながら、長く息を吐き出した。

「…リュウキ」

にゅつと視界に白い蛇の顔が覗く。

顔だけ見ていれば彼女の世界でよく縁起物にされていた白蛇にしか見えないな、などと考えながら竜姫はのろろと視線を向けた。

「いいのか？」

何のことだか、はっきり言わないシロに苦笑みを浮かべる。

「いい。生きてただけで…それで充分。それに」

「それに？」

「それに、修也笑ってた。」

竜姫が昔見た、あの笑顔で。

「笑えるようになったんだ。」

そうする何か、この城にあったのかもしれない。

何か…もしくは、誰かが。

「修也の笑顔を取り戻せるならそれでいい。」

それが竜姫の答えだった。

ヒリュウから持ってきた荷を広げ、その中の一つだけ明らかに他の荷物とは違うものを手に取った。

上等な布で包まれたそれを、リュウキは何とも言えない目で見つめる。

いつまでもそのままでは埒が明かないと、彼女は渋々布に手をかけた。

するりと解くと中から光沢のある真っ黒なドレスが現れる。

「ま、まあ…真っ赤とかピンクとかより…マシ…か？」

一応その辺は考慮してくれたようだ。

しかし、真っ黒な髪に金の瞳、更に真っ黒なドレスと、ここまで聖なる色を使うともう目立つなという方が無理である。

「早く準備しろよ、時間ないぞ？」

後ろで不貞腐れたように急かすシロは、今回部屋にお留守番だ。

彼自体、誰も見たことがない生き物なので、できれば人目に触れることを避けたかったし、力を使えば姿を隠せるが、そうまでして付いてくる必要も無い。

人に会うたび説明するのは御免被りたいので、ここは大人しくお留守番ということになった。

取り敢えず着替えることにしたリュウキは、ドレスを広げてベッドへ投げた。

再会 4

宴の会場となる広場は、石造りの床に綺麗に手入れされた中庭の見える、柱と天井のみの造りだった。

白い床には色とりどりの柔らかな絨毯と、それぞれの座る位置に手触りのよさそうな生地のカッションが並べてある。上座は王の席なのか一段高いところにあり、他より多めにカッションが敷き詰められていた。中央は余興のためだろうか、少し場が設けてありそれを囲むように席が設けられている。

シキとリュウキが広場に案内されたとき、既に王以外の人間が席についていた。ライとロウは先に案内されていたらしく、リュウキ達が入ってきたと同時に立ち上がった。

二人の向かいには、王太子はじめ王子や王女たちが継承権順に並んでいた。その直ぐ横、第一王女と第二王女らしき人物の間に修也の姿が見える。

場違いだとも思っているのだろうか、遠慮がちに周りをちらちらと見回していた。

シキが入ってきたことに気づいた第二王子が立ち上がり、他の人間達も二人に気づいたようだ。皆一様に慌てて立ち上がるが、シキの影に隠れていたリュウキの姿が見えた途端、広場の中がざわりと震えた。

所々から息を呑む声が聞こえる。

内心苦笑を零したシキはちらりとリュウキを横目で見やった。

リュウキは今、到着時に身につけていた真っ白な軍服とは対照的な黒いドレスを身につけている。

肩紐の無い少しタイトな光沢のある黒い生地のロングドレスに、片方の肩から腰にかけて、これまた黒の生地に金糸で見事な刺繍を入

れた布を巻きつけ、踝まで垂らしている。すつきりとした衣装だが、それが彼女の魅力を引き立てていた。さすがあの宰相殿の選んだドレスである。

「大將軍閣下並びに参謀殿。」

流石に他の者より動揺していない王太子が、一步前に出ながら二人に声をかけた。

「改めまして、リーン国第一王子ジャン・リーンです。」

それに応えるようにシキが笑みを浮かべて向き直る。

「ヒリュウ国総司令、シキ・ヒリュウと申します。」

「参謀を務めます、リュウキでございます。」

シキに続いて流れるように、少しドレスを持ち上げながら礼をとるリュウキに、誰もが見惚れ溜息を零した。ちょうどそのとき、王が王妃を伴いながら宴の席に入ってくる。皆の目が王に移り、シキとリュウキもそちらへ向き直り軽く頭を下げた。

「ヒリュウの使者の方々、お待たせして申し訳ない。さあ皆の者、宴を始めよう。」

声と共に酒と食事を持った侍女達が上座から順に配膳していく。王と王妃が席につくのを確認した二人が腰を下ろすと、他の者たちもバラバラと腰を下ろした。途端、広場の空気が華やかなもの変わる。

「今宵はリーンの酒と楽をたっぷり楽しまれよ。ヒリュウの方々の来訪、心より歓迎いたす。」

王の言葉にヒリュウから訪れた四人は一斉に酒の入った杯を掲げた。

「では改めまして…」

その言葉を皮切りにしばらく挨拶が続いた。

王太子は既に名乗っていたので、他の王子たちがシキとリュウキの前に来ては名乗りをあげ一言二言話して席につく。

今はちょうど第一王女と第二王女がこちらに向かってくるところだった。

「リーン国第一王女、ライラ・リーンでございます。」

「リーン国第二王女レイラ・リーンですわ。」

ライラと名乗った彼女はふんわりと包みこむような雰囲気だが、王と同じ瑠璃色の瞳は強い意思を秘めているようだった。第二王女は見事な栗毛を綺麗に巻いてどこか強気な印象を受ける。下の王女はシャルシュと同じ年らしいが、身内の欲目だろうかシンもリュウキも自分達の愛する姫よりも、目の前の末の王女はずっと幼く見えた。ふと彼女達の背後を見ると、修也も一緒に来ていた。第二王女、レイラに手を引かれ困ったように笑っているのところを見ると、どうやら無理矢理連れてこられたらしい。

リュウキは彼がどういふ人物か解っているが、敢えて何も言わない。

シキはそんな背景を全く知らないの、王族でもない見知らぬ男に首を傾げた。

彼は修也に目を向けると疑問のままに尋ねる。

「そちらは？」

「この者は我らがリーンの神子、シユウでございます。」

なるほど、確かに黒っぽい髪と目をしているが、リュウキの真っ黒な髪を見慣れているシキにはそれほど素晴らしいものには見えなかった。

まあ態々それを言っ角を立てるようなことはしないのだが。

「シユウ・タカマです。」

あまり聞きなれない家名にシキは内心首を傾げた。

「リュウキ殿はヒリュウで宰相補佐を務めていらっしやるのでしょ
う？」

一通りの挨拶が終わり再び飲み食いが始まると、向かいに座っていた第二王子レイベルトが二人に声をかけた。王と同じ栗毛を背に流し、瑠璃色の瞳に理知的な光を宿した王子である。

その声に驚いたように目を見開いているのは修也だ。

「ええ、まだまだ未熟者ですが。」

「これはご謙遜を、ヒリュウの有能な宰相補殿の噂はこのリーンまで届いていますよ。」

リーンにも勿論、宰相や宰相補佐といった役職があった。しかし修也の知る彼らはずっと高齢で、どちらの役も経験豊かな初老の男が務めていたはずである。

「うちの宰補殿は文武に長けているからな。これでも国で一二を争う魔法騎士ですよ。」

それには聞いていた皆が一様に驚いた。

いつにも増して饒舌なシキにリュウキは苦笑するしかない。

「そのお美しさで文武に長け、聖色も持たれているとは…リュウキ殿は本当に神に愛されていらっしやるんですね。」

「そんな大層なものではありませんよ。元はしがない傭兵です。」

それはそれで驚きの一同だ。

「寧ろ嫁の貰い手に困っているところだよな。」

「…シキ様、酒が過ぎるのでは？」

向けられた笑顔の割りに目が笑っていないことに気づいたものはいない。

「またまた、その美しさでは引く手数多でしょう。」

まあこっちはこっちで反応に困るのだが、相手は本気で言っているようなのでどうしようもない。

「私のことなど…殿下方こそ貴族の姫君方が放っておかないのではないのですか？」

「それは私よりも兄上と姉上の方が凄いですね。」

声を上げて笑いながら答えるレイベルトに、隣でジャンとライラが苦笑を浮かべる。

なるほど、確かに王太子ともなれば貴族の姫君方は放つてはおかないだろう。寧ろその親というべきか。ライラ王女も、温かな印象を与える細かいウェーブのかかった赤毛が縁取っている顔は整った作りをしているし、少し垂れた眦が愛らしい姫君だ。

「まあ、姉上はもう既にお相手が決まっているので、きつちりお断りできるのですが。」

「それは目出度い。どちらのご令息が射止められたのですか？」

その問いに反応したのは第三王女のレイラだ。

「お姉さまはシユウとご結婚されますの！」

まるで我が事のように頬を染めて声を上げた姫君に、照れたようにライラが嗜める。

すぐ横に座る修也に茫然と視線をずらすと、ばつが悪そうに顔を伏せる彼が見えた。

「…キ、リュウキ。」

自分と呼ぶ声にはっと目を瞬かせる。

少しぼうつとしていたようで、シキに呼ばれていることに気づかな

かった。

慌てて周りを見渡せば、彼女が呆けていたのは一瞬だったようで、すぐに気づいたシキが声をかけてくれたので、誰も気づかなかったようだ。

目の前の王族たちは、第一王女の結婚の話で持ちきりである。王も加わって話を進めていた。

リュウキも話を振られ、二三言返したような気がするが、何を話したかあまり覚えていない。

それ以降、修也と目が合うこともなかった。

月下の花

「お前、どうかしたのか？」

夜も更けた頃、宴もお開きになり周りに失礼の無い程度に挨拶をして広間を抜けてきたリュウキとシキは、シキの部屋の前にある中庭に出ていた。

他の人間は気づかなかったものの、もう長い付き合いになるシキはリュウキの異変に気づいたらしい。

「別に、どうも。」

心ここにあらずといった感じに答えたリュウキにシキは眉を顰めた。

「どうもってこたねえだろうよ。変だぞお前。」

「……………」

「何かあったならしっかり話せ。3年前に俺たちが言ったこと忘れたのか？」

3年前、いやそれよりも少し前か、シンとシキが彼女に会ったとき、彼女は孤独だった。

綺麗な面を氷のように固め、誰も信用しようとしていなかったリュウキの金の瞳は、今の太陽のような温かさを宿しておらず、まるで金属のように冷え切っていたことを覚えている。

「俺たちは、お前の家族になると言った。」

異界から迷い込んだという少女。

神に愛されていないながら、全てを否定して独りで戦い続けている彼女

を、自分たちはどうしても変えたかった。

「お前も、俺たちと家族になることを受け入れた。」

金の瞳が月明かりを受けて煌く。

「お前はもう、独りじゃない。そうだろうか？」

少し強引に聞かない限り、この目の前の女は自分の中に溜め込んでしまうことをシキは知っていた。

「ずっと探している人がいると言っただろう？」

中庭にある石造りのベンチに腰掛けて、リュウキは月を見上げた。シキはその隣で彼女の顔を見つめている。

その話は、確かに聞いたことがあった。

彼女が異界の人間であることを打ち明けたとき、同時に一人で落ちたわけではないことを聞いた。

一緒に落ちた男が彼女の血族であり恋人であることも。

そのことをしっかりと覚えていたシキは小さく頷き先を促がす。

「……………いたんだ。」

「この城にか？誰だ？」

「……………シュウ。」

小さく呟かれた言葉にシキが目を見開く。

シユウとは先ほど宴の席で出ていた神子とのことか。
彼は先ほど第一王女と結婚するのだと言っていなかったか？
目の前がカツと赤く染まった。

「…っ…んの野郎っ！！」
「待てっ！！」

その剣幕にリュウキが慌ててシキの腕を掴む。

「一発ぶん殴ってやるっ！！」
「シキっ！待ってくれ、いいんだ！！」
「よくねえ！お前っ…お前が何年あの男を探してた…」
「あいつは知らなかった！いや、落ちた時間が違っただんだ！！」

その言葉にシキがピタリと動きを止める。

「どっということだ？」

動きを止めたシキにほっと息を吐いたリュウキは、それでもシキの腕は掴んだままだ。

「同じ場所で同じ世界に落ちたけど、落ちた時間がずれたらしい。」
リュウキが過去に落ちたのか、修也が未来に落ちたのかそれは判らないが…

「修也がこの世界に来たのは1年前くらいだと言っていた。」
「何だと、それじゃ…」

「ああ、私が落ちたのは9年前。落ちる前は4つ年下だった私が、今は彼より年上だ。」

あまりの話にシキが息を呑む、弱弱しく微笑むリュウキに眉を顰めた。

しばらく俯いて考え込んでいたシキが、すつと顔を上げる。その目は険しく細められていた。

「それが何だ。寧ろ余計に許せねえ。」

「…シキ？」

「お前は9年、あの男を捜し続けた。そんなお前をあいつは1年で裏切った。」

ビクリと肩を揺らしたリュウキの手にぎゅっと力が入る。

「…違う。いいんだ。」

「何がいいんだ!!」

「私も修也も確かに恋人だった。…でも、二人とも恋じゃ、なかった。」

強い眼から目をそらし、震える声で零れ落ちた言葉は、リュウキの強がりではなく本心からの言葉だった。

しかし、シキは探るように彼女を見つめる。

「修也はただ、寂しかっただけ。私のは…ただの憧れだった。こっちに来て気づいたんだ。あの頃の私は、幼い日に見た“お兄ちゃん”の笑顔をもう一度見たくて、ただその可能性にしがみついていただけだ。」

ふと顔を上げた彼女の面には、柔らかな笑顔が浮かんでいる。

「修也笑ってた。私が見たかった顔で笑ってた。あれはきつとライ

ラ殿のおかげなんだろうと思う。修也はやっと、自分だけの人を見つけたんだ。」

私はそれが、とても嬉しい。

そう告げられた言葉は、シキの胸を強く締め付けた。

「俺は国がどうのと言う前に、兄上やシャルシュが大事だ。」

唐突なにシキが口を開く。

「もちろん、コウリもお前も家族だと思っている。」

真っ直ぐに見つめられた目は嘘偽りなど全くない。

「お前は、俺や兄上がシャルに対して過保護だと言うが、俺も兄上もシャルを想う気持ちと同じくらいお前のことが大事なんだ。」

なんて温かい言葉だろうか。

リュウキはまるで眩しいものを見るかのように目を細めた。言葉と同時に自分の頭に乗せられた大きな手に、くすぐったそうに身じろぎする。

「ありがとう、シキ。」

月光の下、花が綻ぶように微笑んだリュウキを見つめ、シキは己の鼓動が一瞬大きく跳ねるのを感じた。

「何だか父親みたいだな。」

放たれた言葉に一瞬で何かが崩れ去ったけれども。

あれからしばらく二人で月を見上げ他愛の無い話をしてリュウキは自室に戻っていった。

どうにも不完全燃焼なシキは国に残った兄と宰相を思い出す。先ほどリュウキには、コウリも含めた意味で自分たち兄弟が彼女を家族だと思っていると云った。その言葉に間違いはないし、これからもその気持ちは変わらないだろう。

しかし、だ。

それはシャルシュのように、妹に向ける感情とは違うことをシキは知っていた。そして運の悪いことに、王である兄と真つ黒な宰相も自分と同じ気持ちであることも。

リュウキがヒリュウの王城で暮らすようになって3年。

それとなく行動してみたものの、誰一人として気づいてもらえた者はいない。コウリなんてリュウキに近づく男という男を裏で何人排除してきたか知れないにも関わらず、だ。いつだったか、リュウキが探し続けている想い人など一生見つからねばいいのにとぼやいていたことを思い出す。本当に性格の悪い男である。

あれにとられるくらいなら、兄に譲ったほうがましだなとは思ったが、やはり一番は自分の下に来てくれることだ。

「…父親はねえよなあ…」

もういつそのこと、全部片付いて帰国したら全て話してリュウキに
選んでもらおうかと思いつつ、自分の考えに溜息を吐くシキだった。
帰国してからというあたり、某宰相にはない律儀さを持つ男だとつ
くづく思うが、本人は全く気づいていない。

哀れな男の深い溜息を残して、リーンの夜が明けようとしていた。

茶会

“強くありたい”

事あるごとに、そう零していたリュウキの気持ちを支えたい。

己は常々そう考えてきたし、今回リュウキがどうしたいかも理解しているのだが、やはり目の前の男を許すことはできない。

そんなことをつらつら考えながらどうにか表情に出さず頑張っているシキを、リュウキは何となく感じて溜息をついた。

今現在、シキとリュウキは第一王女と第二王女の茶会のお誘いを受け彼女達の暮らす宮の中庭に来ていた。

そして当然のように修也がライラの隣に座っている。

昨夜、シキに言ったことは本心からの言葉だったので、リュウキ自身は修也のことをもう既に終わったこととして考えている。

彼に対する気持ちは、この世界の唯一の血族、従兄であるという思っただけだ。だから、修也がどれだけライラと仲良くしようと、ばつが悪いのか目を逸らしまくろうと、もうそれはそれでリーンに滞在してるうちにきちんと話してお互いすっきりすればいいと思っただ。

が、シキの方はそうもいかないらしい。

辛うじて目の前の三人には気づかれていないが、先ほどから口元は笑っているのに目が笑っていない。もう済んだことを蒸し返したくないリュウキにとっては恐ろしい限りである。

言葉のわりに誠実な彼のことだ、きちんと話をする前にこのような事態になっていることに腹を立てているのだろう。

おそらく、今シキの頭の中では“男らしくない”“卑怯者”という言葉がぐるぐると回っているに違いない。

手に取るように解る己が哀しかった。

せつかくの、おそらく高級な茶も、果物をふんだんに使った菓子も台無しである。

ああ、もうどうにでもしてくれという気分になってきたリュウキは少し投げやりに口を開いた。

「いい香りのお茶ですね。」

本当にどうでもいい言葉しか出てこない。

しかし第二王女レイラは気にすることなく食いついてくれた。

「ええ、ライラお姉さまはお茶のこととっても詳しいの、この茶葉もお姉さまが用意してくださいましたのよ。」

まさに王族のお姫様といった雰囲気の中に苦笑しながら、やはりシャルシュが一番だと改めて思う。まあ、実際シャルシュのような姫が珍しいだけで、レイラは本当に一般的な王族の子だろう。特に嫌な感じも受けないし、彼女が嫌いというわけではないが。

「ライラ様は学もおありだとお聞きしました、素晴らしい姉姫様です。」

リュウキがにこりと笑い姉をほめると、レイラは嬉しそうに頬を染める。どうやらこの姫は姉が大好きらしい。それはそれで可愛らしいし、とても好ましく思う。

先ほどの心の中での発言を、そっと詫びながらリュウキは続けた。

「レイラ様ご自身も、お歌の才能がおりだとお聞きしました。」

これはリュウキが旅をしていた頃、本当に聞いた噂だ。それなりのところからの話なので、リュウキは確信を持って話に出した。

「そんな…ただ歌うのが好きなのですわ。」

レイラは嬉しそうにはにかむ。それを見たライラがそつと目を細めた。

「このこの歌は本当に素晴らしいのですよ。まるで小鳥のさえずりのようで…ねえシユウ。」

「…ああ、レイラの歌は本当に綺麗だ。俺も初めて聞いたときは驚いた。」

「それは是非拝聴させて頂きたいものですね、シキ様。」

少し強めに名を呼ぶと、シキが胡散臭げな笑みを向けながら頷いた。

「確かに、私も是非聞きたいなあ。」

この大根役者め、という言葉をリュウキは必死に飲み込んだ。

この胃袋の強度を試すかのような茶会はいつまで続くんだと、菓子

を齧りながらリュウキが嘆いていると突然周りの空気が変わった。シキも異変に気づいたようで、今までと違った意味で目を細める。他の三人は気づいていない。背後の近衛も気づいていない。しかしこれは明らかな殺気だ。

二人は一瞬お互いの顔をちらりと見やり、小さく頷くと席を立った。突然表情を厳しくして立ち上がった二人に、何事かと二人の近衛兵が動く。目の前の三人も何が何だか解らないようだ。

「シキ！左だ！」

瞬間、音もなく植木の茂みから放たれたのは暗黒の矢。

反応できたのはリュウキとシキだけだ。

リュウキはテーブルを蹴りながら隣りに座っていたレイラを、シキはリュウキが蹴ったテーブルの向かいにいたライラと修也を地面に押し倒すように庇う。

「きゃあっ！！！」

二人が気づいてから動くまで一瞬のことだった。

それぞれの頭を抱きこんで庇い、有難いことに無駄にでかいテーブルを背に矢の飛んできた茂みを伺う。そのまま中庭の入り口の方を見ると近衛が一人倒れていた。一人は物陰に隠れながら他の兵を呼んでいる。

因みに、今日はリュウキもリーンで用意されていた武官用の服を着ているのでとても動きやすい。ドレスなんぞで来なくてよかったと思いつながら、リュウキはシキに目をやった。

「私が出ます。」

リュウキの小さな呟きにシキはしっかりと頷く。相手は魔術を使う

ようなので、応戦するならリュウキが適任だろう。

しかし飛び出そうとしたリュウキに、シキに庇われていた修也が驚く。

「何を…今出たら危な…」

「煩い、黙れ。」

止めようとした修也を苛立ったように押さえ込みながらシキが低く唸った。そのまま頭を庇っていた手で口を塞いでリュウキを見る。

「行け、リュウキ。できれば捕縛だ。」

できなければ殺せ、と支持を出すシキに身動きの取れない修也の目がこれでもかというほど見開かれる。しかしリュウキは気にせず、そのまま頷いて飛び出した。

テーブルに隠れていてはその向こうの様子は伺えず、動けない修也に判るのは物音のみだ。

修也がこの世界に来て1年足らず。

未だ勝手が判らず殆どの生活を王城の中で過ごしている彼は、この世界で当たり前のように繰り返されている戦いや魔術というものをしっかりと目にしたことはない。

それが今、目の前で、しかもつい一年前まで同じ世界にいたはずの従妹が繰り広げているのだ。音しか聞こえないとはいえ、その切迫した雰囲気は充分に伝わってきた。

「リュウキは9年で変わった。」

小さく呟かれた言葉は、自分を押さえつけている大男のものだ。

「もうお前が知るリュウキじゃない。」

すべての感情を押し殺すように放たれた言葉は、修也の心に深く突き刺さった。

金属のぶつかる音と時折放たれる光が大分落ち着いた頃。

中庭の入り口には多くの兵と王太子ジャンの姿が見えた。

シキもそれに目をやり、テーブルの向こうの惨劇が落ち着いたことを確認すると三人を押さえていた手を離して立ち上がる。

王女二人に手を差し出し立たせると、自分で立ち上がった修也諸共王太子率いる一団に任せた。

近衛がしっかり盾になっていることを確認してリュウキを振り返る。そこには二人を地に沈め、ロープを纏った魔術師らしき人物の首筋に愛用のサーベルを突き立て片足で押さえつけているリュウキの姿があった。

魔術師は身体が動かせないのか地に伏せたままだが、その瞳だけはキラキラと睨むようにリュウキを見上げている。

「衛兵！あの者を魔術師用の牢へ連れて行け！」

王太子が支持を出すと、リュウキの足元の魔術師に3人の近衛が駆け寄り腕を押さえながら引きずり起こした。

それと共に足を退けながら、リュウキは地面に突き立てていたサベルを引き抜く。

「待て、念のために……。」

そう言いながら両脇を衛兵に固められた魔術師に近づくと、彼女は左手の人差し指と中指を揃えて魔術師の額に沿え小さく何かを呟いた。

途端にポツと指先が光ったかと思うと魔術師がカツと目を見開く。

「……………貴様っ!!！」

「魔術の込められた言葉を奪った。これでこの魔術師は術を使えない。」

ニヤリと笑うリュウキを憎々しげに見上げた。

「金目の悪魔めっ!!必ず我が同胞が報復に来るぞっ!!!!！」

ずるずると引きずられながら、その姿が視界から消えるまで、魔術師は呪いの言葉を叫び続けた。

特に気にした風もなく、踵を返してシキ達の下に来たリュウキは、少しづつが悪そうに己の上官を見上げた。

「申し訳ありません、二人殺してしまいました。」

頭を下げたりリュウキに頷き、シンはそのままジャンに目を向ける。

「構わない、術師だけでも捕らえられたことは貴殿の功績だ。」

ジャンは満足気に頷き、労う言葉をかけたあと、しかし…と続けた。

「あれはレキの者だろうか？」

「御意にございます。魔術の陣、戦い方から推測するにあれは彼の国の魔術師かと。ただし、剣士の方は流れの傭兵のようです。」

「ならばあ奴らに用はない。」

そういうと、王太子はそのまま残りの兵に指示を出しに行った。

それを確認したりリュウキがシキと共に、近衛に守られるように立ち尽くしている修也と王女二人に近づく。

「お怪我はございませんか？」

柔らかく微笑むリュウキの顔は、先ほどの戦闘の匂いなど微塵も感じさせなかった。

「あなた方のおかげで私たちは無事です。ありがとうございます。」

心底ほつとしたように応えたのは第一王女のライラである。

それに小さく頷いたりリュウキを見やり、次いで一歩前に出たシキが三人の顔を見回し口を開いた。

「王女殿下はお部屋へお戻りを。片付いたとはいえここは危険です。それから…」

ちらりと修也を見つめる。

「神子殿は腕にお怪我をされているようだ。近衛兵はお二人をお連れしてくれ、神子殿は我らが手当ていたしますのでこちらへ。」

その言葉にリュウキの肩がピクリと跳ねる。

シキの意図に気づいていない近衛と王女二人は、心配そうに修也を見つめたものの、この二人が付いていてくれるなら安心とばかりに引き上げていった。

はじめ 1

沈黙が痛い。

扉を閉めた途端、灯りが消えるように笑みを消したシキに、もう呆れを通り越して言葉も出ないリュウキだったが、続く沈黙にもう本気でこの場を逃げ出したい気分になっていた。

実は今夜にでも一度レキに発ちたいリュウキにはあまり時間がない。そのことから、修也と話す時間を作ってくれたシキには感謝したいのだが、その気持ちもどこかに飛んでしまいそうである。

部屋の主に対して本当に申し訳ないのだが、取り敢えずリュウキはシキに向き直った。

「シキ、悪いが席を外してくれないか？」

その言葉に納得がいかないシキはむっつりと口を閉ざしたままだ。

「…シキ…頼む。ある程度話したら呼ぶから。」

本当に申し訳なさそうなりユウキに、一呼吸置いて深い溜息をつく。と、シキは軽く手を上げ寝室に消えた。

その背に小さくすまないと声をかけ、リュウキは修也に目を向ける。修也はというと、俯いていた顔をちょうど上げたところだった。

二人の視線がばちりと交わる。

「…竜姫、本当にごめん。」

搾り出すような声は悔恨に満ち、それでも彼は全てを受け止めようとリュウキを見つめる。

「じゅめん。」

その言葉しか、自分には無いのだというように。

震える声で紡がれる謝罪の言葉に、リュウキの胸がちくんと痛んだ。

「違う、修也。修也だけが悪いんじゃない。」

自分は彼の謝罪の言葉を聞きたかったわけではない。自分の過ちを伝え、彼に心から幸せになってもらうために話したかった。

しかし、修也の方はそんなことを言われるとは思ってもみなかったのだらう、リュウキの言葉に弾かれたように顔を上げる。彼が予想していたのは罵りの言葉だったから。

そんな修也を見つめながら、リュウキが続けた。

「私も同じだ。恋じゃなかった。」

「……それは…どういう？」

「修也、私気づいたんだ。修也も私も確かに付き合ってたけど、恋じゃなかった。」

未だ話しの意図が掴めず、修也は訝しげにリュウキを見つめる。

「私はただ、昔の修也に戻ってほしかったんだ。小さいときから、優しい修也に憧れてた。私はあの時、修也への気持ちを恋だと勘違いしてたんだ。」

修也も私に恋をしていた訳ではないだらう？

そう尋ねられ、はっと息を呑んだ修也は、少し戸惑いながらも申し訳なさそうに頷く。

そう、修也自身リュウキへの気持ちが恋ではなかったことに気づい

ていた。それは、彼に笑顔を取り戻してくれたライラへの気持ちを
知ったからである。

ライラに出会って初めて人を愛することを知った。それを考えると
リュウキへの気持ちは確かに恋ではなかった。

言ってしまうば、あの時は誰でもよかったのかもしれない。

母親の言われるままに生き、自分が何をしたいのかも判らなくなっ
ていたあの頃。子供としか言いようが無い八つ当たりの気持ちや、
自分勝手に深まるばかりの孤独を、手頃な距離にいたリュウキで埋
めようとしたのだ。

本当に酷い男だと、修也は自嘲の笑みを浮かべた。

そんな修也にリュウキは小さく苦笑する。

「修也、そんな顔するな。」

「…でも…いや、ごめん、俺ホントにどうしようもないガキだった。」

何かを堪えるように目を細め、片手でぐしゃつと前髪を掴む。

修也が本気で悩んでいるときの仕草だった。

「なあ、修也。私もう26なんだ。」

唐突な言葉に修也が軽く首を傾げる。

「ぶつちやけ、もうお前よりずっと多くのことを経験したし、大抵
のことじゃもう傷つかない。」

強気な笑みを浮かべる女は、確かに修也が知らない顔をしている。

「それに、修也にとっては一年足らずの記憶だろうけど、私にとっ
てはもう九年も前のことなんだ。実はちょっと忘れかけてる。」

だから、気にするなど。
そう言って彼女は笑う。

「それに、私はどっちかというと安心したんだ。」
「安心？」

「ああ、修也はずっと自分を押し殺して生きてきたのに、世界にまで弾かれて…もうダメだと思ったんだ…私が見たかった、修也の笑顔がもう見れないと…。」

「……」
「だから、修也がまた笑えるようになって、ちゃんと愛する人を見つけたこと、本当に嬉しかった。ほっとしたよ。」

その言葉に、修也の視界がゆらりと揺れた。

リュウキはきつと、自分には想像できないくらい辛い思いをしてきたのかもしれない。いや、してきたに違いない。

それは、再開した時修也が王城にいたことに対しても驚いていたことと、それと同じくらいほっとしていたことから伺える。それに彼女は、初めからヒリュウの王城にいたわけではないということも言っていた。

自分は最初から周りに手助けされ守られていた状態にも関わらず、どうしようもなく不安だったのに、あの17歳になったばかりの少女は誰に助けられることもなく、本当にたった独りきりで生きてきたのかもしれない。
きつとそれらを乗り越えて、あの頼りなかった少女はここまで強くなったのだろう。

あのシキという男の言つとおりだ。自分が知るリュウキは、もつとこにもいない。

自分も強くならなければ、そう思った。

「竜姫。」

「何だ？」

「俺、確かに竜姫が言うように、竜姫に恋をしていたわけじゃなかった。寧ろ竜姫を利用してた。」

修也の瞳に力が宿る。

「うん。」

「それでも、あの頃普通でいられたのは、リュウキが笑ってくれたからだ。」

自分自身を見失い、何をやっても手応えが無かったあの頃。

外出先から帰宅する途中でいつもすれ違う、従妹の変わらない笑顔に救われていたのも事実だった。

恋じゃなかったけれど、それでも彼女を望んだのは自分だ。

「ありがとう。」

全ての思いを込めて、今やっと伝えられる。

「俺、この世界で、ライラと幸せになる。」

告げた決意に、目の前の女性は満足そうに微笑んだ。

「ところで…」

取り敢えず、話したかったことは話せたし、お互いしっかり納得もしたので、約束どおりシキを呼ぼうとリュウキは席を立ったのだが、

その彼女を修也が呼び止めた。

「あの恐い人は竜姫の何なんだ？」

恐い人という表現にリュウキは小さく苦笑を零す。

「この世界の、私の家族だ。」

自慢げに告げられた言葉に、修也はああ殺されるかもしれないと思
った。

はじめ 2

「で。」

不機嫌そうに腕組みをして仁王立ちしている男に、リュウキは今日何度ついたか判らない溜息をつく。

「で、つて？」

何が聞きたいか理解しているくせに、そんなことを聞き返すリュウキに、シキも若干苛ついたように眉を顰めた。

そのピリピリとした空気に、修也が顔を引きつらせる。

が、リュウキは大して気にした風もなく、軽く謝りながら続けた。

「…すまない、冗談だ。お互い納得するまで話せた。私も気持ちを伝えたいし、修也も話してくれた。ありがとう、シキのおかげだ。」

だから機嫌を直してくれるか？

そう首をコテンと傾げるリュウキにシキはちっと舌打ちする。

確信犯だ。このしぐさに自分が弱いことを目の前の女は知っている。まあ、正確には自分と兄とコウリがなのだが。

しばらくそれを睨むように見つめていたシキが、はあっと溜息をついた。

「わあかったよ！！もう何も言わねえ！そのかわり…」

ほっと安心しかけたリュウキが、最後の不穏な言葉に眉を顰める。

「そのかわり…何だ？」

「そのかわり、こいつ一発殴らせる！」
「だっ……」

駄目に決まっているだろう！？と言いかけたリュウキを修也が右手で制す。

それすら気に食わなかったのかシキがひょいと片眉を上げた。

「いい、俺もケジメつきたいから。」

修也の言葉にリュウキが目を見開く。

「馬鹿を言うな！こいつが殴ったらケジメ程度じゃすまないぞ！」

顔が歪む、と叫ぶリュウキに若干怯むが彼の決意は変わらないようだ。

挑むようにシキの前に立つ修也に、リュウキは頭を抱えた。対するシキは青筋を浮かべながら笑みを浮かべている。その手はポキポキと指を鳴らしていた。

「よし、いい度胸だ。」

「お願いします。」

身長が低いわけではない、寧ろ高い方の修也でも、シキの前に立つと随分小さく見える。更に身長だけでなく、どちらかと言うと修也は細身なので、筋肉隆々なシキとでは殆ど大人と子供だ。

「歯あ食いしばれ。」

ああ、一応リーンの神子なのに、歪んだ顔をどう説明しようかと、現実逃避に走るリュウキをよそに事はどんどん進んでいる。

シキの低い声に、その目を強く開いたまま修也はぐつと顔に力を入れた。

次の瞬間、パンッと乾いた音が響いたと思うと修也がその衝撃によるめく。が、その顔はリュウキの想像していたような惨劇にはなっていないかった。

平手。しかも左手。

てつきり、チャンスとばかり殴り倒すと思っていたリュウキは、目を丸くしたままシキを見た。それに気づいたシキが少し決まり悪そうに目を逸らす。

「まあ…なんだ…一応同盟国の神子だからな。」

その歯切れの悪い言葉にリュウキが噴出す。修也は訳が解らず呆然とシキに視線を向けたままだ。

「和睦を結びにきたのにまずいだろうがっ！仕方なくだ仕方なく！」

どんなに声を荒げてても、リュウキの笑いは止まらない。そのうち、修也もありがとうございますなどと言う始末である。

どうにも収集がつかなくなったシキは、もう寝室に逃げ込んでしまおうと踵を返す、が、ふと思いついたように再びこちらを向いた。

「リュウキ、お前今夜出るんだろう？そいつもだけど、取り敢えず王には言うだけ言ってから行けよ。」

言葉に笑っていたリュウキがそのまま笑みを引きつらせ、次いで小さく舌打ちした。

ここでその話を出すのは意地が悪い。おそらく意趣返しのもりだろうが。

修也はそれを見逃さなかった。

「どういうことだ？竜姫どっかに行くのか？」

リュウキはそれに答えない。恨めしげにシキをにらみつけるばかりだ。

何度呼んでも黙り込む彼女に、痺れを切らした修也がリュウキの肩を掴んで視線を合わせた。

「竜姫、聞いて。確かにお前はもう俺より年上で、俺のこともガキに見えるかもしれないけど……」

一端言葉を切って、しっかりとリュウキを見つめなおす。リュウキは修也の言葉にゆるゆると首を振っていた。そんなことはない、と言っているのだろう。

修也は小さくありがとう、と呟いて続ける。

「それでもお前は、俺の大事な従妹なんだ。」

だから何かあるんだったら教えてほしい。そう告げられた言葉に、リュウキは目を瞬かせる。が、すぐに小さく息を吐き出した。

「私の周りは心配性の兄上殿ばかりだな。」

呟いてはにかむように浮かんだ笑みは、修也が幼い頃に見たような少し幼い笑みだった。

「修也は今回のこと、何か聞いているのか？」

話すとは決めたものの、一応国と国の問題なので、確認のためにリュウキは尋ねた。

「レキという国が最近この国に戦をしかけようとしていることと、この国だけじゃ対抗しきれないからヒリュウ国に助けを求めたということは聞いている。」

だからリュウキ達が使者として来たんだろう？

そう尋ねる修也に、リュウキは何とも言えない表情になった。確かに間違っではない。まさにその通りであるが。

自分達は使者としてきただけではないのだと、和睦を結んだ後は自分達が先陣切ってレキに乗り込むのだということを、きつと修也は解っていない。

使者として話すために来たのだと思っっているのだろう。

案の定、その後続く修也の言葉は予想通りのものだった。

「今度ヒリュウの軍が港から来ると聞いている。リュウキは宰相補佐だっけ？すげえな、戦争が終わるまで王城にいるのか？」

きつと役職もよく解っていないのだろう修也に、リュウキはどう伝えたらいいものかと考えた。

が、それを見事に砕いたのはシキである。

「んなわけねえだろ。リュウキは俺の参謀なんだから戦になれば軍を率いてレキに行く。」

ストレートに言いすぎだ。しかし、今度のこれは明らかに天然だろう。

リュウキは頭を抱えた。修也を見れば信じられないとばかりに目を見開いている。

「どういうことだ！？戦場に行くのか！？」

「何言ってるんだ、当たり前だろう？」

「何で竜姫が！」

食って掛かる修也に、驚いているのはシキの方だった。参謀としてリンに来たのだから、戦に赴くことくらい解っていると思っただのである。

これでは、今夜リュウキがレキに潜り込むなんて言った日には卒倒してしまうと二人は思った。

思った瞬間、お互い視線を合わせる。己を心配してくれる修也には悪いが、これは言わない方がいい。

「修也、言いたかったことはそのことだ。」

未だシキに食い下がるようにして問い詰めている修也に、リュウキが申し訳なさそうに声をかけた。

そして、今回自分が来たのは和睦のためと戦に出るため。戦に備えるために、一端ヒリュウに戻るが、二三日で戻ってくる、ということとを告げる。

「…だって…そんな…戦なんて…」

戸惑うのは無理も無い。自分達のいた世界は、戦争はあってもすべてテレビの中の出来事だったのだから。しかし、ここは違う。

「修也、大丈夫だ。私は強いから。」

それでも不安はぬぐえない。

「……たく。お前今日見たらどう？こいつはちょっとやそつとじゃ死なねえよ。それに……」

はつきりと言い切るシキに、修也は納得しきれない様子で眉を潜めたが。

「それに、俺が行くんだ。大事な家族を見す見す死なせるわけねえだろう？」

その絶対的な自信を持って告げられる言葉に、修也は口を閉ざすしかなかった。

「シキの大馬鹿野郎。」

あの後、渋る修也をなんとか説得し、危なくなったらすぐ逃げると約束をして漸く話を終えることが出来た。部屋を出るそのときまで、修也は心配そうにリュウキを見つめていたが、一応納得して帰ってくれたようだ。

彼の去った部屋には、少しづつが悪そうなシキと不機嫌を隠そうともしないリュウキが対峙している。

「……すまん。まさか、あぁなるとは……」

「普通に生きてれば、他人の死なんてほぼ見ないような世界だって

前に話しただろ!？」

確かに聞いていた。だが、本当に聞いていただけだったらしい。

「いや、まあ…そうなんだが…だってよお…俺が初めてリュウキと会ったときはそんな印象受けなかったし…」

当たり前だ。リュウキがシキと初めて会ったとき、もう既にリュウキはこの世界で6年を過ごしており、どこからどうみても流れの女傭兵だったのだから。血を見て恐いとも言わなかったし、寧ろ自分から敵に突っ込んでいた。

困惑するようにシキの呟きを聞きながら、それもそうだと思っしてしまつリュウキである。確かに、実際に見ない限り理解するのは難しいかもしれない。

「でも、お前はそんな国から来たのに、一人でしつかり生き抜いてきたんだな。」

心底感心するようなシキの言葉に、リュウキは数度目を瞬かせると少し照れたように苦笑を浮かべた。やはり憎みきれない男である。というか、自分はヒリュウ王家に連なるものにとことん弱いらしい。

「だからこそ、みんなに出会えたんだ。」

生きてきてよかった、と。

嬉しそうに笑みを浮かべるリュウキを見つめ、シキはほっと息を漏らした。

影

黒いノースリーブに黒いズボン。

腰には濃い色の厚手の布を巻きつけ、間に小さなナイフと大きな針のようなものを仕込む。その上から薬の類が入った小さな袋を引っ掛け、ズボンの裾は広がらないようにブーツに仕舞い込み、ついでにそこにも細身のナイフを仕込んだ。首元には顔を隠すための大きな目の布を巻きつける。

あとは表は草色だが裏地が黒っぽい外套を羽織れば“影”の完成である。

明るいうちの移動時は草色の外套を、暗くなったら裏地を使い移動する。昼間に黒を羽織ると逆に目立ってしまうからだ。

因みに例によってシロは、外套の中のリュウキの肩に納まっていた。

先ほど、シキの部屋を出た後そのままリン王の執務室まで行きカルドウス王に謁見を願うと、意外なことにそれほど待たずして謁見は叶った。

運が良かったと思いつつ、王に今夜レキへ赴くことを伝えると、国境まで抜けるための手形をくれた。

今、リンはレキの不穏な動きのため国を挙げて警備を強めている。なので領を抜けるだけでも検問が敷かれているので、少々手間がかかるのだ。リュウキ一人くらいならば通れないこともないが、何の苦も無く通れるのならそれに越したことは無い。

実は手形はカルドウス王が事前に準備しておいてくれたらしい。

ヒリュウの一行が到着すれば、レキへ斥候を送るだろうことを考慮してである。

リンは騎士の国なので、観察方にはあまり長けておらず魔術にもあまり頼らない国だ。なので、斥候の件もヒリュウの観察方を頼るつもりだったのだろう。まあ、こちらも王城を遠慮なく使ってしまうのでそれはお互い様なのだが。

ただ、宰相補佐という地位にいるリュウキが直接偵察に向かうとは思っていなかったらしい。それには心底驚いていた。

取り敢えず二三日後には戻ってくることを伝えて、執務室を後にしたりリュウキは、軽く腹ごしらえをしてから準備をし、“影”の様相で再びシキの部屋に戻ってきていた。

「じゃ、ちょっと行ってくる。」

まさに、ちょっとそこまでのノリである。

「お前…もうちょっと他に言い方あるだろうよ。」

「そんなもの気にする性質たちだったのか？」

本気で首を傾げるリュウキに、シキはがっくりと肩を落とすと、もういいとばかりに手を振った。

「無理はするなよ。」

それでもやはり心配なのだろう、いつも言うことを聞かないリュウキにしっかりと釘を刺す。

「大丈夫だ、心配するな。」

「お前の大丈夫は当てにならない。無理だと思ったらすぐ逃げてこい。」

なおも続けるシキに、リュウキは小さく苦笑を零すと視線を合わせてしっかりと頷いた。

「了解。じゃあ、行ってくる。」

「ああ、頼んだぞ。」

シキの声にニヤリと笑みを浮かべて笑うと、次の瞬間あっという間に彼の目の前から消えていた。

「ヒリュウの悪魔が動きました。」

僅かの光も届かぬ地下の一室。

暗い眼を揺れる水盆に落とした女が単調な声で呟く。ゆらゆらと揺れる水には、“影”となったリュウキの姿が映し出されていた。

「愚か者どもが…只人と獣の分際で我らに牙を剥くといふのか。」

忌々しそくに吐き捨てられた声は、少し掠れた男のものだ。男は女の向かいで同じく盆の中に目を落としていた。

「ですが、この娘は使えます。」

「ふうむ。」

女の声に考え込むように男が黙り込んだ。

その様子をちらりと見上げた女が真っ赤な唇をニッと吊り上げる。

「まず手始めに、この娘を捕らえましょう。この娘を餌に、獣どもを引きずり出せばよろしいですわ。」

袖が水に触らぬよう片手でそっと押さえながら、女の白い指が水面に弧を描く。

その指に引きずられるように揺れるリュウキの姿に、男もにんまりと顔を歪めた。

王城を誰に見つかることなく抜け出たリュウキは、そのまま一気にリンとレキの国境を目指していた。その間、いくつか領を越えたが、その度に手形のありがたみを感じている。

まさにフリーパス。面白いくらい簡単に通れてしまうので、是非とも今回のことが片付いた後も有効利用したいものだと言形を返す前に偽造を決意したリュウキである。

王への謁見の申請が長引くと予想していた上での夜の出発予定だったので、思いのほか早く通ったリュウキは、予定よりも早い時間に城を出ていた。

昼過ぎには城を出て、上手い具合に途中の村で馬も手に入れたので、このまま走り続けられれば夜中には目的の国境付近に辿り着けるはずだ。

兎に角まずはそこからと、リュウキは無心で手綱を振るった。

予感

何か言い知れぬ不安を感じる。

己は魔術師でもなんでもないが、勘は鋭い方だと自負しているシンが、不意にそんなことを思った。

コウリが言うには、ヒリュウ王家の三人は異様に勘が鋭いらしい。それは遺伝なのか何なのか、シンにも判らない。だが、確かにそれは彼自身も感じていた。

特にヒリュウ王家の血を色濃く受け継いでいるシンは最も感覚が鋭く、危険察知能力においては、術でも使っているのではなかるうかというほど優れている。

そんな己が何かを感じたのだ、単なる気のせいとは思えなかった。

「コウリ」

己の向かいで膨大な書類を異常な早さで処理している男に声をかける。

彼の宰相は書類に目を通しながら、僅かに顔を上げてちらりとシンを見た。

「何です？」

「嫌な予感がする。」

「貴方のそれも久しぶりですね。リーンですか？」

コウリが少し目を見開いて、今度はしっかりと顔を上げた。

「解らん。だが何か嫌な感じがするんだ。」

「…予定では今宵、リュウキがレキに向かう日でしたね。」

「まさかリュウキに何か…」
「不吉なことを言わないでください。」

言い出したのはどつちだと思いつながらシンは小さく息を吐いた。リュウキにはシロがついている。あの騰蛇が竜にも匹敵するほどの力を持っていることを、シンもコウリも知っていた。余程のことがない限り、彼女を害することは難しいだろう。それにまだシンの予感が何についての危険を訴えているのかも判らない。

コウリは少し考えるように俯くと、すぐさま顔を上げて口を開いた。

「…今朝出発した後発隊の中に、影を5名ほど入れました。港に着き次第、リュウキのもとへ向かわせましょう。」

「リュウキは既にレキへ向かっているのだろうか？場所は判るのか？」

その問いに、にっこりとコウリが笑みを浮かべる。

「大丈夫です。出発前にリュウキに持たせたアンクレットに、彼女の居場所が判るようロウに術を仕込ませました。あ、勿論リュウキにはちゃんと伝えていきますよ。」

本当に抜け目のない宰相である。

「“影”にはリュウキの副官を入れています。彼にアンクレットの受信機を持たせましたので、至急伝令を出しましょう。」

コウリの言葉に頷いたシキが、少し考えるように口元を隠す。次いで顔を俯け、深く溜息をついた。

「…やはり俺も出るべきだったか。」

「何を馬鹿なことを。」ご自分の弟君と腹心の部下を信用なさい。」
にべもなく言い切ったコウリを見上げ、シンはそうだなと頷く。

「まあ、腹心の部下というより、未来の王妃だけだな。」

ニヤリと笑ったシンに、コウリはピクリと片眉を上げた。

次いで凍えるような笑みを浮かべて、目の前でニヤニヤと笑う王に
向き直る。

「まだ寝言を言うような余力があるようですね。貴方は無駄に消費
するばかりのようなので、私が上手く使って差し上げますね。」

そのまま立ち上がり人の顔程の高さに積みあがった書類の山を持つ
と、心底楽しそうにシンの目の前にどさっと落としました。

リーンとレキの国境には、町ひとつ分程の川幅を誇る大河が流れて
いる。

ゆったりと流れるその河はグウレイグ河といい、上流が泥を多く含
む土地のせいかその流れは白く濁り川底は目視できない。所々かな
りの深さを持つ上、肉食の生物も生息していることから、緩やかな

流れに油断して飛込もうものなら対岸に辿り着くことなく命を落とすこと請け合いの魔の河だ。

そして、この河のもう一つの特徴が、どこまでも続く川岸に響き渡る不気味な音である。

グウレイグ河の兩岸はごつごつと黒い岩場が連なっており、その岩場のせいなのか、風が吹くとまるで女の悲鳴のような音が響くのだ。その不気味さもあって、人々がグウレイグ河に近づくことは殆どなかった。

リュウキも例に漏れることなく、今現在も耳に届く不気味な風の音に眉を顰めていた。

「…何度聞いても嫌な音だな。」

頭の中を引つ掻き回すようなこの音は、まるで人の正気を奪うような、そんな狂気を思わせる。

「ただの風の音だろ。さっさと行こうぜ。」

肩口から聞こえる声はシロのものだ。どうやら彼は平気らしい。

リュウキがやれやれと軽く肩を竦めると、もぞりとシロが身じろぐ心配がした。

「ここからは歩きかあ…」

馬はグウレイグ河に辿り着く前の最後の村で置いてきた。

どうせその村を過ぎれば岩場が続くので、馬で行くのは不可能だからだ。まあ、リュウキが考えていた通り日が変わる前には国境に辿り着いたので、取り敢えず重畳といったところか。

リュウキは口元を隠すように巻いていた布を下ろすと、右手をすっ

と前に出しながら何事か小さく呟き、そのままその手で自らの両足を撫でた。

途端、彼女の足元に小さな風が渦巻く。

「よし、行くぞシロ。」

「おうよ！」

口布を元に戻しながら川縁まで歩くと、数度つま先でとんとんと大地を叩き、そのままぐんつと河に飛び出した。水面に足が着くか着かないかのところで着地をするように膝を曲げる。

普通ならば水中に沈むはずの身体は、靴底すら水に濡れることなく、土色の水面を本物の地面の上かのように走り始めた。

レキ 1

魔術師の国といっても、国民全体がローブを纏った妖しげな雰囲気だとか、国中が暗雲に満ちているとか、そんなことは全くない。

村も町も普通に人々が暮らしており、他国と違うことは他に比べて日常生活で使われる魔術が多かったり、軍隊が魔術師中心というだけである。他には魔術に対する研究も他国より進んでいるという点くらいか。

転移術や召喚術といった高度な魔術も、レキの魔術師達が中心に研究し発展させたものだった。

夜の闇が朝焼けに染まり、太陽が昇り始めるころ。

リュウキはレキの王城の南、カーマという町に来ていた。

カーマは城下町からもそれほど離れておらず、徒歩で半日も歩けば城下町に入れる距離にあるので、小さな町ではあるがそれなりに発展してる。

ここまで来るのに一日弱。

あとはここを拠点に城下町の様子を調べ、王城に潜り込むのに一日強、それから戻れば予定通りである。

取り敢えず宿に入ることにしたリュウキは、王城寄りの町外れにある少し古めの宿に入った。

入り口の扉に“風見鶏”とかかれた宿の屋根には、なるほど鮮やかな彩色の風見鶏がくるくると回っていた。宿は一階部分を飯屋として開いているので、この時間は朝食に合わせて準備をしているのだろう、食欲をそそるようないい匂いが漂っている。

リュウキは口元の布を下ろしながら、カウンターで名簿が何かに目を通してしている恰幅のいい中年の女性に声をかけた。

気づいた女性は名簿を置きすぐに笑顔を向ける。

「あら、いらつしゃい！」

「こんな時間にすまない、部屋は空いているだろうか？」

「大丈夫だよ。ちょうど一部屋空きがあるからね。」

「頼む。」

あいよ、と愛想よく笑う女性が一端背を向け戸棚から鍵を取り出した。

因みに、リュウキは今魔術を使って瞳と髪の色を目立たないよう茶色に変えているので、見た目はただの旅人である。

「はいどうぞ、二階の一番奥の部屋だよ。」

「ありがとう。」

「どうせこんな時間なんだ、朝食でも食べてかないかい？」

「いいのか？まだ準備中だろう？」

「ああ、あんたみたいな美人さんなら大歓迎さ！」

大きな声で笑う女性に、少し照れながらも笑顔を返したりリュウキは、ではお言葉に甘えて…とすぐ近くのテーブルに向かった。

すると、カウンターにいた女性がすぐにメニューの書かれた木の板を持ってくる。

「何にする？」

「じゃあこれを。」

見せられた板に三つほど並んでいる文字の一つを指すと、女性は大きく頷いて厨房へ行き何事かを叫んだ。

「すぐ持ってくるからね！」

そうリュウキにも叫ぶと、そのままカウンターに入り再び名簿らしきものに目を通し始める。

リュウキは自分が腰掛けている椅子の足元に、申し訳程度の荷物を置くのと腰をずらして細い背もたれに身を預けた。すると、首元で僅かにもそもそと何かが動く。

「…リュウキだけずるいぞ。」

小さく零れたのは首に巻いている布に隠れたシロの声だった。

リュウキは宿めるようにぼんぼんと首元を叩くと、小さく苦笑を浮かべる。次いでぐるりと店内を見回した。

随分長いこと開いている宿なのか、建物の中は外同様少し歴史を感じさせるような雰囲気がある。しかし汚いという印象は受けなかったので、店主の管理が行き届いているのだろう。

今日はこの後部屋に不要な荷物を置き、馬を調達した後レキの城下に向かう予定だ。

ここに来るまでにレキの魔術師の衣装を手に入れたので王城付近までは楽に入り込めるだろう。

そんなことを考えながら窓の外を見てみると、目の前にトンと音を立てながら湯気の立つ皿が置かれた。

「はい、お待ちどうさま、ゆっくり召し上げね！」

見上げると、先ほどの女性とは違う、若い娘がにこにここと笑いながらこちらを見ていた。

「ああ、ありがとう。頂きます。」

その笑顔ににこりと笑って返すと、少し顔を赤くした娘ははにかみ

ながら厨房へ戻っていった。

リーンの東の端に、海に面した町がある。

漁業が盛んなその町には高い防波堤を備えた要塞があり、港を行き交う船は完全に管理されていた。

普段出入りするのは漁師の船が殆どなのだが、今朝は町の人々が見たことのない船が続々と港に入っている。その船の大きさもさることながら、その造りも素晴らしいものだった。それらは明らかに軍船だ。

しかし、町の人々も要塞を守る兵士たちも慌てることなく、寧ろ歓迎の声を上げていた。彼らはその軍船がヒリュウから来た遠征軍だと知っていたからだ。

東の町はレキの国境に近く、襲撃こそ受けていないものの、最近の不穏な空気に皆不安を感じていた。

そんな船の甲板から、一人の青年が町を見下ろすように立っていた。彼の視線の先には次々と陸に上がる騎士や魔術師たちが積荷を下ろしている姿がある。

と、不意にキィィとまるで耳鳴りのように小さく響く音が青年の耳に届いた。

彼はそれが何なのか知っているようで、何かを探すように空に目を向けるとある一点で視線を止める。そこには、真つ青な空の中にぽつんと墨を落としたような影があった。

その影はどんどん大きくなり、青年の下へと近づいてくる。

青年はその影に合わせるように、すっと左手を高く掲げた。影は迷うことなくゆったりと速度を落とし彼の手の側面辺りに着地する。それは、竜騎士たちの操る竜を小さくしたような生き物だった。大地の色をした小さな竜は、一度だけ翼をはためかせると丸く愛らしい眼を青年に向けた。

青年は小さな竜の顎を、猫の子でも撫でるように一撫ですると、小さく微笑んでご苦労様と呟いた。そのまま竜の足首に結ばれている人間の男の親指程の銀の筒を取り外す。

彼は竜を肩に止まらせると、その筒の先端を取り外し中に入っている紙を開いた。

紙に記された内容にさっと目を通すと、一呼吸おいて小さく何事か呟く。途端、彼の手の中に入った紙はぽつと音を立てて燃えた。

「…リュウキ様…」

茶色の髪がふわりと風に舞う。

緑の眼をすっと細めた青年は、僅かに眉を寄せると踵を返して船内へと消えた。

レキ 2

自分の指先すら目視できない闇の中。リュウキは必死に走っていた。彼女の白い頬には赤い線が走り、脇腹からは止まることのない血液が未だに流れ続けている。

と、背後から再び何かが迫る気配がした。

リュウキは頭で考えるより先に大きく地面と思われるものを蹴って跳躍する。先ほどまで己が走っていた位置からゴウっと大きな音がして何かが通過するような気配がした。

風見鶏で食事を済ませたリュウキは、カーマの町で調達した馬で昼前には城下町の門をくぐる事ができた。

レキの城下を一通り探索した彼女は、そのまま王城へと足を向ける。入城のための巨大な門には、甲冑を着込んだ兵士が二人立っており、背後の壁には魔術の陣も見えた。おそらく侵入者が無いよう王城を囲む壁に何らかの魔術が施されているのだろう。

リュウキは構うことなく門に近づき、堂々と兵士に声をかけた。

「すみません、仕官試験を受けに来たのですが。」

その声に兵士二人が顔を見合わせる。

「今日は予定していないが？」

「所要のため先日の試験を受けられなくて…。ですが、私の師が再試験できるよう手配してくれたのです。」

怪訝そうに見つめる兵士に、にっこりとリュウキが微笑む。

次いで懐から綺麗に丸められた書状を取り出すと、二人がじっと注視する中リュウキはくるくるとそれを開いてみせる。

「ほら、ここに魔術師長様の印もいただいています。」

確かにそれは、魔術師長の使う正式な書類に押すための印だった。

二人は再び顔を見合わせ頷くと、一歩ずつ横にずれて道を開ける。

リュウキはそれに小さく頭を下げ、笑みを浮かべながら、書状を元の形に纏めつつ足を進めた。

レキの王城は所々に魔術の陣が施され、それぞれその区間に入る権利がある者しか出入りできないようになっていた。

魔術の陣はその代の魔術師長、つまり国一番の魔術師が代替わりする度にかけて直すので、おいそれと破れるものではなかった。魔術の陣を破れるものは、その陣を作った者を凌ぐ魔力を持つ者しか破れない。

リュウキは至る所に記されている陣を見つめながら、ふむと考え込むように息をついた。

「私じゃ難しいかな。どうだシロ？」

誰にも聞こえないように、自分の肩口にだけ届く声で囁く。

「俺に不可能はねえ。こんな弱つちい陣すぐに破ってやる。」

自信に満ちた答えに小さく笑ったリュウキは、人目を避けるように植木や建物の陰を伝いながら王城の北、魔術師達が研究を行っているらしい建物へと足を向けた。

緑色の丸い葉をつけた蔦の這う建物の裏、木で作られた小さな扉の前でリュウキは自身の首元に手を添えた。すると、そこからするとシロが手を伝って顔を出す。

ここは魔術師達の研究棟の裏手、大きな壺と木箱の置かれた勝手口のような場所だった。

リュウキは無言でシロを扉に近づける。シロは何を言われなくとも心得ているのか、するりと首を伸ばすと、木の扉に焦げ付いたように記されている魔術の陣に向かってふっと息を吹きかけた。

途端に陣は淡く光を発し、すぐに何事もなかったかのように元の色に戻る。

「ほらよ、これで入れるぜ。」

振り返りながら得意げに小さな翼をぱたぱたと動かすシロに、リュウキは小さく笑みを浮かべて礼を言うと、彼を再び首元に戻した。

建物の中はしんと静まり返り、人の気配など全くしない。

それはそれで好都合なのだが、人一人いないとなると逆に疑わしく、リュウキは警戒を強めながら壁伝いに足を進めた。灰色の石の壁は、手をつくるとひんやり冷たく彼女の体温を奪っていく。

狭い廊下の先に、いくつかの扉が見えた。こちら木で作られており、建物の内部だからか魔術はかけられていないようだ。

扉の前に背を預け、中の気配を伺うものの、どの部屋からも全く人の気配はない。

取り敢えずと、一番手前の扉に手をかけたリュウキは、音もなく開くとそのままずりりと部屋の中へ身を滑らせた。

そこは誰かの書斎だろうか。

壁際にはいくつもの本棚が並べられ、机の上には難しそうな文字の並んだ分厚い本や、何か液体を入れるためだろうか透明な薄いビン、それから部屋の持ち主のものだろう誰かが殴り書きした紙等が乱雑に置かれていた。

足音もなく机に近づいたりリュウキは、散らばった紙の上に目を落とす。それは魔術の研究の過程を記したメモのようだった。どれも一般の魔術師がほいほいと使えるような代物ではなく、かなりの魔力を必要とする転移術の類である。

その後他の部屋にも入ったが、どの部屋でも研究していたのは転移術だった。それも単純な物品を少量運ぶものではなく、大規模な運搬を仮定したものや、多数の人間を運ぶことを仮定したものだ。リュウキはその綺麗な眉をきゅっと寄せると、それらのメモの一部を持参した筆記具に手早く書き写す。それを大事に懐にしまうと、彼女は最後の部屋を出た。

途端、石造りの廊下に出たはずの彼女の周りを侵食するように闇が覆う。

驚きに見開いたリュウキが、僅かに残る窓の光に向かって跳躍するも時既に遅く、彼女は深い闇の中に吞まれた。

水盆の上に揺らめく女の手がぐるりと弧を描く。

その下の水面の中では、傷だらけのリュウキの姿があった。彼女は己の身にかけた術を解き、黒髪を靡かせながら金色の目を苦痛に細めている。

その姿に、悦に入ったような笑みを浮かべる女は、青白い人差し指を水盆に向けると小さく呪文をつぶやいた。すると彼女の指先に真っ赤な光が灯り、じわじわと盆の水の中に吸い込まれていく。

「ふふふ…いいわ、もっとお逃げなさい。」

不気味な声は、誰の耳に届くことなく闇に消えた。

「くそっ…限が無い!!!」

目が使えずとも、気配を辿ることはできる。

傭兵時代に養った感覚で、次から次に襲い来る目視できない敵の攻撃を避けながらリュウキは大きく舌打ちした。避けることは可能だが、これでは体力の消耗が激しい。

先の見えない攻防は、彼女の気力と体力を大いに削っていた。

これは明らかに敵の罠だった。

建物内のあの人気の無さも、リュウキを罠に落とすために用意されていたのだろう。おかしいと感じていたはずなのに、まんまと敵の手に落ちた己を心の中で詰る。

しかも分の悪いことにシロと離れ離れになっていた。

建物内に入ってからも、ずっとリュウキの肩口にいたシロは、術の発動と同時に陣の外へ弾かれたらしい。この暗闇の魔術の中に取り込まれたのはリュウキ一人だけだった。

だが、とリュウキは考える。

この世界で、あの騰蛇に魔力で勝てるものはないに等しい。それだけの力を持つ彼は、きっと今頃陣の外で、術を壊すためにリュウキを取り込んだ魔力の元を探していることだろう。シロがそれを見つけて出すまで、なんとか逃げ切れればいいだけの話である。

リュウキは常に彼女のためを思い行動する口の悪い騰蛇を信じ、迫り来る何かの気配を探りながら必死に走った。

どこまでも続く闇の中。

おそらく術のせいなのだろう、もう何時間も経過している気がする。人間がかけた術を破るまで、シロがこんなに手古摺るはずがなく、きっと自分の時間の感覚が狂わされているのだろうとリュウキは思った。

流石の彼女も額に汗を浮かべ、肩で息をし始めていた。

先ほどまで延々と走り続けていたが、時間の感覚がおかしいことに気づいたリュウキは体力温存のため立ち止まり、迫り来る敵にのみ反応するようにしていた。

目はどうせ使えないので視覚は遮断する。耳に入る音と肌で感じる殺気の風にのみ集中した。

先ほど避け損ねた巨大な何かが擦った脇腹から血が流れるのを感じるが、魔力を集め回復しようとする度に、再び襲ってくる何かに邪魔された。そして、また何かがりゅうキの背後に迫る。

「……くっ……」

おそらく巨大な茨のようなものなのだろう。脇腹を掠めたときに触れたのは、巨大な蔓のようなものとそこから生えた棘らしきものだった。

背後から己の足元を狙う蔓を紙一重で避けながら、血止めだけはと手に魔力を溜めて脇腹に触れる。が、その瞬間。

「……ちっ……くしょ……またかつ!!」

間髪いれず真横から突進してきた蔓に回復を阻まれる。そればかり

か、脇腹に伸ばしていた腕を僅かに擦ってしまった。これでは怪我の箇所が増える一方である。血を流しすぎたリュウキの頭は、少しでも気を抜くと霞みに落ちてしまいそうな程限界に近づいていた。

「面倒なっ！！こうなったら…」

兎に角、一端血を止めるための隙が欲しい。魔力を消費するのは避けたいところだが、このまま血を流し続けると魔力の前に気を失ってしまう。

リュウキは舌打ちしながら早口で呪文を呟き、両手を左右に開くと一気に魔力を爆発させた。

「燃え尽きろっ！！！」

途端、彼女の周りを炎が包む。

ゴウツと唸りを上げながらリュウキを中心に螺旋を描いて燃え上がる炎が、次々と迫り来る巨大な蔓を襲った。それと同時に、再び早口で呪文を唱えると自らの脇腹に手を当て血止めをする。未だ炎は彼女を守るように包んでいた。が、次の瞬間。

「…いつ…ああっ！！」

一瞬の隙を突いて炎の合間を潜り抜けてきた蔓が、彼女の右足に絡みついた。

すらりと長い右足に、棘の生えた蔓が巻きつく。

彼女が痛みに呻き僅かに動きを止めた瞬間、両の腕にも同じように蔓が巻きついた。

無数の棘が、リュウキの白い肌に突き刺さる。

「……う……あつ……ぐ……」

少し身じろいだけで、全身を貫くような痛みが走った。大量に出血し、一瞬意識が飛びかけるも、身体に走る激痛に気絶することも出来ない。

「……く……そ……っ」

もう一度魔力を放出して蔓を焼ききろうにも、痛みで集中できず、失血で青みを増した唇から漏れるのは苦痛の滲む吐息まじりの声だけだ。辛うじて無事な左足を駆使しつつ踏ん張っているが、今にも崩れ落ちそうである。

と、そこへするすると布を引きずるような音が聞こえてきた。リュウキは激痛に耐えもがきながらもそちらへ目を向ける。その金色の目は未だ強い光を宿していた。

「ふふ……生きの良い獲物だこと。」

「……誰だ……」

闇の中でリュウキが確認できるのは、音と空気のみである。しかし、その女の持つ異様な雰囲気は、彼女にそれ以上の不気味さを感じさせていた。

それと同時に気力を振り絞って両手に魔力を集中させる。

「あら、まだ元気があるようね？」

女はそれに気づいたのか、すっと白い手を払うように動かした。リュウキには衣擦れの音しか聞こえなかったが、次の瞬間再び彼女に

激痛が走る。

「ぐっ……………このっ…」

体重をかけていた左足に衝撃を受け、とうとうリュウキは膝をついた。両腕を茨の蔓に捕らえられたまま両の足を折り、上半身を痛みで丸めながら、それでも目の前にいるだろっ己を捕らえた張本人をギラギラと睨みつける。
青白い頬を一筋の汗が伝った。

「ああ、いいわ。やっぱりとても綺麗ね。」

うつとりと女が呟くと同時に、目の空気が揺らめき、リュウキの頬に何かが触れた。

今度は茨ではなく、ひんやりと冷たい人の手だ。否、形こそ人の手だが、その冷たさはもう死人のものようだった。

リュウキの背をぞくりと何かが走る。嫌悪感が一気に募り、反射的に頭を振るって手を跳ね除けた。

「……………貴様…何者だ…」

ゆらゆらと揺れる意識をなんとか気力で保ちながら、決して屈するものかと目に力を入れて声を振り絞る。

「何者？…そうねえ、何なのかしらね？」

さも楽しげに答える女は、異常なほど柔らかな声で笑った。
まるでお気に入りの玩具を手に入れた少女のようだ。リュウキはそれが不気味で仕方ない。

「ねえ、私貴女にお願いがあるのよ。」

この状態でも願いも何もないだろう、とリュウキは目を細め挑戦的な笑みを浮かべる。

「たった一つ。聞いてくれる？」

「人を…甚振って、楽しむような…女、の願いなんか…誰が聞か。」

「ふふ…そう言わないで。」

荒い呼吸を繰り返しながらも、気丈に告げたリュウキの言葉に、女が怪しく笑う気配がした。再び頬に冷たい指が触れる。

「私の願いは…」

どこか恍惚としたその声でゆっくりと言葉を紡ぎながら、女は指を滑らせた。

それと同時に両腕を拘束する蔓に力が加わり、リュウキは強制的に上体を起こされる。苦痛に呻く彼女を見つめながら、女の死人のような指が一つと動き、汗の滲んだ白い首筋を通して鎖骨を辿り、リュウキの胸、ちょうど心臓の辺りで止まった。

「貴女の身体。」

告げられた言葉に、リュウキの顔が訝しげに歪んだ。

「…意味、が…解らない。」

「あら、そのままの意味よ？貴女の身体、私にちょうだいな。」

「…なっ……………ああっ！！！」

まるで物分りの悪い子供に聞かせるように、くすくすと笑いながら女が囁く。それと同時にリュウキのふくよかな胸の上で止まっていた指にぐっと力が入ったかと思うと、驚くことにそれがずぶずぶと彼女の胸に沈み始めた。

傷は無い。血も流れない。

しかし服越しにあつたはずのそれは、確かに今リュウキの胸に沈んでいた。

ゆっくりと、女は苦痛に歪むリュウキの顔を見つめながら指を沈める。第一関節が入り、第二間接、更には他の指まで沈もうとしたとき。

「…っ…リュウキ!!!」

何かが割れる音と共にシロの声が闇に響き、霞む視界に真珠色の少年の姿を捉えた瞬間、リュウキの意識は闇に沈んだ。

ゆらゆらと揺らぐ意識の中、ふわりと風が頬を撫でたと思うと次いで全身を浮遊感が襲った。

落ちる、と身体の感覚は危険を訴えているが、己の身を包む腕の温かさに根拠の無い安堵も感じる。

僅かに漏れた吐息は、髪を巻き上げる風の音に消えた。

リュウキが意識を失っていた時間はほんの僅かだったらしく、彼女が目覚めたときは未だレキの王城内だった。

どうやら彼女が畏に落ちた後、すぐに魔力の元である陣を探し出したシロがそれを破壊し彼女を術中から引きずり出したらしい。陣が張ってあったのは、リュウキ達が忍び込んだ建物の3階部分、物置のような空間の更に奥だったらしく、彼は引きずり出した瞬間意識を飛ばしたリュウキを抱えて壁に大穴を空けるとそのままそこから飛び出し脱出したのだ。

腕の中のリュウキはまさに満身創痍といった感じで、一応意識は取り戻したようだが、ぼんやりと視線を彷徨わせている彼女の腕や足には、未だ茨が絡みついたままである。茨の蔓は途中で焼ききれたように先端が焦げていた。

地面に着地するなり大きく跳躍したシロは、王城の城壁をまるで重力が無いかのように飛び越え城下の外れにある森に身を隠す。

一瞬で周りを見回して一際大きな木を見つけると、リュウキを抱えたまま再び跳躍して枝に飛び乗った。次いで木の幹に向かって何事か呟き、ごつごつとしたそれをすつと指で撫でる。それに応じるように発光した大木が、さわさわと風に揺れるように動いたかと思うと、シロとリュウキを外部から守るように葉を茂らせた。

それを確認したシロは、リュウキの手足に絡みつく茨の蔓を忌々し

く睨みながら丁寧に取り除く。棘が皮膚を抜け出る痛み、リュウキが小さく呻いた。

「リュウキ、リュウキ！」

「……………し……………る……………」

ぼんやりと開いた眼を少年に向け、彼女は青白い面に小さく笑みを浮かべた。

「なに……………人間のふり、してんの。」

「馬鹿野郎っ！てめえこそ何やられてんだよっ！」

こんな状態でも憎まれ口をたたく彼女に、脱力するようにシロが溜息をついてがつくりと肩を落とした。

「ざまあねえな。」

「…まっただ。」

「仕方ねえから回復してやるよ。」

言葉とは裏腹に、未だ心配の色を浮かべた少年の金の瞳を見上げながらリュウキは苦笑して小さく詫びた。

再び少年は何事か呟くと今度は己の親指を口元に持っていく、ガリつと皮膚を噛み切ると、じわりと滲み出た真っ赤な血を口に含む。そのまま逆の手でリュウキの首を支えると、彼女の青白い唇に己のものを重ねた。

リュウキの口の中に僅かに鉄の匂いが広がる。それを感じた途端、彼女の身体を淡い光が包んだ。光は彼女の痛々しい傷口の上にふわふわと留まり、肌を撫でるように滑って傷を消し去っていく。

「あー…助かった。」

「おい、こら。解つてると思うが、傷塞いだけだぞ。流した血は戻らないからな。」

「おー。」

傷が消えた途端動き出すとするリュウキを押しとどめ、慌てたようにシロが彼女を抑える。

大木の太い枝に二人並んで身体を落ち着けると、リュウキが改めてシロに目を向けた。その目がまだどこか虚ろなのはおそらく大量に失血したためだろう。

「ホント…久しぶりにやばかった。」

「リュウキがあそこまで追い詰められるとはな。」

しみじみと二人して溜息をつく。

「悪いな。人型なんて疲れるだろ？」

「ばーか、俺様を甘くみんなよ。」

人の形に姿を変えたシロは、元の姿を思わせるような真っ白な容姿をしていた。

髪も睫毛も真っ白、僅かに赤みの差した肌も人に比べて明らかに白い。はつきりと色があるのは強い瞳の黄金くらいだ。シロがこの姿をとるのは珍しく、実はリュウキも、もうかれこれ一年以上は目にしていない。

顔の造りも人形のように整っているの、ともしれば白磁の工芸品を見ているような趣さえあった。人の世に出れば誰もが振り向き、放っておかないだろう。

まあそれが鬱陶しいというのも、彼が人型を取らない理由の一つなのだが。

「ありがとう、おかげで命拾いした。」

本気で危なかった、ともう一度呟く彼女の声に、先ほどまでのリュウキの様子を思い出したシロは盛大に眉を顰めた。

「にしても、何であんなのが人の世にいるんだ。」

「…術師を見たのか？」

「見たもなにも、あれは…」

信じられない、といった風のシロの様子に、先を促すようにリュウキが首を傾げる。

「…俺もちらつとしか見なかったが、あれは人間じゃない。あれはゴルゴネスだ。」

「ゴルゴネス…だと？」

ゴルゴネスとは、この大陸に伝わる堕ちた神のことである。ゴルゴネスは三姉妹の総称で、彼女達は背に翼を持ち人間と大蛇が交じり合ったような姿をしていると言われている。人間の子供を好み、浚って食うのだ。怪力を持つ上に魔術も使う、その上殆ど不死と言われているのだが、しかし…

「まさか…神話の中の話だぞ？」

そう、ゴルゴネスなど言うなれば物語の中の化け物に過ぎない。そんなものが、果たして存在するのか。

「…でも確かに、特徴もそのまんまだったぞ？」

「じゃあ何故私もお前も石にされていない？」

ゴルゴネスの最大の特徴として、彼女達にはそれぞれ強力な石化能力があった。

その目で睨まれたものは、確実に石にされるのだ。シロは上手い事かわしたのかもしれないが、リュウキは無防備に顔を晒していたため、相手がゴルゴネスならばいつでも石にできたはずだ。

「目が潰れてた。」

「…何だと？」

「目がある部分が焼け爛れてたんだ。あれじゃ眼力は使えない。」

なるほど、確かに石化の魔力の源である目がなければ能力は使えない。しかし、石化の能力が使えないとはいえ、あれは魔術を使っていた。それもかなり強力な。

シロの言うことを信じないわけではないが、あの女がゴルゴネスだとはまだ断定できない。できないが、あれだけ強力な化け物がレキにいるとなると脅威である。これからレキの戦力として出てくるならば、並大抵の魔術師や騎士では太刀打ちできないだろう。

「召喚したのか…創り出したのか…」

兎に角、リュウキがその足で手に入れた情報に加え、これらを早くリーンで待つシキヤヒリュウのシンとコウリに伝えなければならぬ。

闇に捕らわれる前に得た、あの大量の転移術の研究も気になった。

「兎に角：予定より早いけど、一端引き上げるか。」

やはり全ては上手くいかないかと一人心中で反省しつつ、ふらつく足を叱咤して立ち上がるとリュウキは木々の隙間から見えるレキの王城を睨みつけ、小さく唇を噛んだ。

「…次は…必ず…。」

低く唸るような呟きに、隣で彼女を見つめていた少年が目を細めた。

一時撤退

レキの城下を出てからは、兎に角走った。

魔術師は魔力が強いほど射程が広い。あれ程の魔術師ならば、レキの国土内くらいは把握できる魔力を持っている可能性もある。もしくはそれ以上か。

シロはともかく、リュウキは今傷が塞がったとはいえ応戦できる状態ではない。全力疾走さえ、本音を言えば相当きついのだ。

時折シロがこちらを気遣うように見ながら、隣を飛んでいる。彼は術を解き、いつもの小さな騰蛇の姿に戻っていた。

「もうすぐ河だ！」

霞む視界を必死にこじ開け必死に手足を動かすリュウキに、シロが鼓舞するように声をかける。声と共に流れてくるのは、シロの眩い力だった。

リュウキとも異なる世界から降りてきたこの獣は、彼女と違いかなりの力を制限されている。普通に使うだけでも辛いだろくに、更に己に分け与えてくれているのだ。

「…助けてもらってばかりじゃ格好がつかない！」

自らを奮い立たせるように呟き、ぐっと足に力を入れて走った。

どうにかグウレイグ河のほとりまで来た一人と一匹は、ごっごつと大きく張り出た岩陰に身を潜めた。

シロが再び簡単な不可視の結界を張る。となりを見るとリュウキが

肩で息をしながら岩に背を預けて息を整えているところだった。

「…くそ…どうもおかしいと思ったら、魔力も食われてた。」

忌々しそつに両手を見ながらリュウキが吐き捨てるように呟く。どうやらあの闇の罫の中で捕らわれていたとき、血と共に彼女の魔力も奪われていたらしい。

「確かに、リュウキにしちゃあ魔力が底つくのが早えな。」

「まあ、ここまですれば何とかなる。それくらいは残ってる。」

はあっと大きく息を吐き、頬に伝う幾筋もの汗をぐいっと腕で拭くと、対岸を見つめながら勢いをつけて立ち上がった。次いで来たとき同様、足に風の魔術をかけて数度地面を爪先で叩く。それに合わせてシロが張っていた結界を解いた。

「もう一踏ん張りだつ。」

声と同時に河へと飛び出した。

「逃げられてしまいましたわね。」

小さく溜息をつきながら、残念そうに女が呟く。するりと指を滑らせた先には、真つ赤な血液を滴らせた茨が根元だけを残して焼け落ちていた。茨の真下にも、点々と赤い水溜りが出来ている。

女は指の先に付着した赤を口元に引き寄せ、うっとり見つめながら二又に分かれた舌でぺろりと舐め取った。

「やっぱり欲しい……」

役に立たないはずの女の目が、にいつと細められる。明らかに光を宿していないその瞳は白く濁ったまま空を彷徨っていた。

「アレー！アレー！いるのか！？」

血の残り香に酔ったように佇んでいた女を、無粋な男の声が呼ぶ。少し白けたような表情を浮かべた女は、小さく溜息をついて背後を振り返った。

「アレー！エウリュアレー！」

するするとまるで蛇が這うようにエウリュアレーと呼ばれた女は進む。む。

すっと伸ばした手が何も無い空間を一撫でした瞬間、闇が裂けるように光が零れた。

「アレー！女はどうした！？」

苛々と肩を怒らせた男が、闇からするりと顔を出した女の首元を掴

んだ。大きな手には、彼女の首を折らんばかりに力を入れられていたが、エウリュアレーは眉一つ動かさないまま静かに微笑んでいた。その笑みに底知れぬ不気味さを感じた男が若干怯んだように言葉を呑む。

「逃げられましたわ。」

「何！？何故だ！それでは女を城に入れた意味が無いではないか！」

「本当に…残念でしたわ。獣に邪魔をされました。」

ふわり、ふわりとどこかのんびりと響く声に、男が更に苛立ったように手に力を込める。しかし女の方はどこ吹く風だ。いくら首を絞めようと、焦りもしなかった。

「いいか！お前を飼ってやってるのは、その魔力のためだ！上手く使えぬのなら即刻処分してやるからな！！」

表情を変えない女に、苛立ちを隠さない声で怒鳴ると、男は投げ捨てるように女の首を放り出す。

その勢いで地に両手をついたエウリュアレーを睨みつけ、僅かながらも気が済んだのか大きく息を吐き出すと、そのまま踵を返して去っていった。

「…短気な方。」

特に気にした風も無く小さく呟いた女は、再びするすると闇の中へと消えていった。

河を渡ったリュウキとシロは、川岸の岩場を抜け森に入った途端感じた複数の気配に動きを止めていた。

彼らを取り囲むように近づく気配は複数で、おそらく四つか五つ、相当気配を消すのが上手い連中である。普段のリュウキならば、やれるもんならやってみるとばかり己を囿にして気配駄々漏れ状態で迎え撃つのだが、今日はそうはいかない。体力も魔力も温存しておきたいし、できれば相手に気取られず片付けたい。

というわけで、リュウキは本気で気配を消した。それはもう、野生の竜が気づかない程に。

しかし、おかしなことに複数あった気配のうち一つが真っ直ぐに己に向かってきているのだ。リュウキに限って気配を消しきれていないなんてことはありえない。無言でシロに視線を送っても、首を振るばかりである。シロにも原因が判らないようだ。

しかしこのままではまずい。明らかに己の位置がばれている。

仕方ない、こうなったら応戦するかとばかりに溜息をついたリュウキは、すぐさま脳内を戦闘モードに切り替えると足に仕込んでおいたナイフを手を取った。

自分に真っ直ぐ向かっていった気配が前方に迫る。どうやら真正面からくるらしい敵に、馬鹿めと嘲笑を送りながら大地を蹴った。

茂みの直ぐ向こう、自分の射程に入った相手に一気にリュウキが飛び掛る。黒い装束を纏った何かは、驚いたように一瞬怯んだ。その隙を突いてリュウキが背後に回り両膝の裏を強かに蹴る。その勢い

のまま地面に膝をついた人物の首に腕を回してナイフを突きつけようとした。が。

「りゅっリユウキ様！僕です僕っ！！」

突然耳に届いた聞き覚えのある声に、今度はリユウキが驚いた。相手のふくらはぎを足で踏みつけ首を拘束したまま、はてと考える。

「僕です！貴女の副官のギイですよっ！」

少しずれた頭部の巻き布から見えたのは、確かにリユウキが良く知る茶髪のおかつぱ頭だった。

一時撤退 2

「悪かったよギイ。」

黙々と作業をする己の副官を見つめながら、ばつが悪そうにリュウキが呟いた。

無言で腕をとっては怪我の有無を確認し、脚を眺めてはおかしなところがないか確認したギイは、顔にありありと不服を浮かべたままリュウキに視線を合わせる。

「…で。僕の気配だと判らない程、どこを怪我されたんです？」

「だから、怪我はしてないって言ってるだろう！？」

シロに治してもらったし、とは口が裂けても言えない。

この口煩い部下は、リュウキの怪我に過剰なほど反応し、更に質の悪いことに全て彼女の上官である宰相に報告するのだ。

細々と、どんな小さなことも漏らさず。

もう殆どストーリーカーと変わりはない。いや、小姑とも言うのか。

そうこうしているうちに、ギイがリュウキのブーツを脱がせてズボンの裾をずり上げた。

「セクハラだ…。」

「は？何ですそれは。」

言葉の意味が解らなかったのだらう。訝しげに眉を顰めたギイが、なおもおかしなところはないか見ている。

そうなのだ、ストーリーカーやセクハラを訴えたくても、この世界にこれらに相当する言葉が存在しないのだ。

何だかもうどうでもよくなってきたリュウキは、何度目か判らない

深い溜息を漏らした。

「とかけ蜥蜴はいるか？」

一通り上官に怪我がないことを確認したギイに、リュウキは唐突に尋ねた。

まだ少し納得していないような顔をしていた副官は、彼女の問いに小さく頷く。

蜥蜴とは、ヒリュウで使われている伝令役の小さな竜のことで、ギイにリュウキの下へ向かうようにコウリの支持を持ってきたのもこの蜥蜴と呼ばれる竜だ。

「何かお急ぎで？」

「ああ、陛下と宰相殿に至急な。」

「シキ様の下へではなく？」

「それは今から全速力で戻って伝える。」

その言葉に、ギイの瞳が再び冷たく光った。

「…それだけ魔力消耗している上、足元覚束無いくせに何を仰るんです？」

「そんなことを言っている場合じゃない。兎に角急いで戻る。」

「リュウキ様！」

「命令だ。ギイ・デリア。」

普段、リュウキの口から命令なんて言葉は滅多に出ない。

それだけ今の状況が切迫していて、一時の猶予も無いということだった。

ギイはぐつと言葉を飲み込み、僅かに俯くとすぐに強い眼をリュウキに向ける。

「…解りました。ただし、魔力はもう使わないでください。次の町に着き次第、馬もこちらで用意します。」

リュウキの中でも、それが最善の方法だと認識されたい。彼女は素直に頷くと、ギイの後方で蜥蜴を連れてきた影の一人に目を移した。次いで胸元から小さな紙と筆記具を取り出し、素早く何かを書き記す。そのまま左手を伸ばして蜥蜴を受け取り、小さな足に取り付けられた筒の中に紙を仕舞いこんだ。

「これを陛下に。頼んだぞ。」

しっかりと目を合わせて呟くと、彼女は左腕を天高く掲げる。まるでその勢いを借りるように大空へと飛び出した小さな竜を見送ると、彼女はすぐに立ち上がって僅かに乱れた服を直し部下達を振り返った。

「相当な術の使い手がいた。いつどこで干渉されるか判らない。」

もうレキを出て、端とはいえリンに入っているにも関わらず告げられた言葉に、それぞれが目を細める。

「情けないが、私はあまり戦力にならない。二人は先に、町で馬を用意しておいてくれ。」

申し訳なさそうに告げられた二人は、小さく笑みを浮かべてお任せくださいと応えると、一気にその場から姿を消した。リュウキは残る三人に目を向ける。

「今から急ぎ、リーンに戻る。」

全員が一齐に頷き、動き出したリュウキを守るように囲み走り出した。

大規模な転移術にゴルゴネス。

不吉な言葉が示すのは、一体何なのか。リュウキの中で、嫌な予感ばかりが募る。

レキの狙いは本当にリーンだけなのか疑わしい。

リーンは騎士の国。ゴルゴネスのような化け物を使わずとも、レキの魔術師を総動員すればどちらが強いかわずと知れる。

ならば、あのゴルゴネスは対リュウ軍用のものなのだろうか、リーンがリュウに援軍を要請してきたのはつい最近のことだ。あれ程のものを用意するには、少し時間が無さ過ぎるように感じた。

それとも、もともとあの手のものをほいほいと召喚できるような魔術師がレキにいたというのか。それはそれで脅威ではある。あれ一体ならともかく、そう何体もあんなものに出てこられたら、流石に苦戦を強いられるだろう。

それに、やはりリュウキが気になっているのは転移術である。

リーンを攻めるだけならば、レキは隣国なのでそう大層な転移術は必要ないように思われる。

ならば、レキは何を狙っているのか。

否、何処を狙っているのか。

何やら本気できな臭い。

己の予想が外れてくれることを、リュウキは心から願った。

リン 1

大きく予想を外れた邪魔は入ったもののその後の追撃は無く、リュウキは宣言していた日数を守り帰って来た。リンの王城に入り、まずは己の現上官の下へ急ぐ。

ちょうど日暮れの時刻に差し掛かる今。弱っているとはいえ、彼女が人知れず城に入り込むことは容易なことだった。

リュウキを守るように並走していた部下達は、ギイを残して姿を隠している。

彼ら影の存在はヒリュウでも極秘のもので、おいそれと他国の王族に姿を現す訳にはいかないのだ。リュウキの副官であるギイ自身も、普段リュウキの専属文官を隠れ蓑に影としての己を隠している。文官の衣を着た彼が、一度刃物を持てばそこの騎士よりも強いなど誰が思うだろう。

そんなわけで、明らかに文官でも武官でもない様相の彼らが堂々と王城に入るわけにもいかず、二人は誰にも見つからぬようシキの部屋へ向かった。

今ならまだ夕餉前の彼を捕まえられるだろう。

二人は息を潜ませ、窓の外からシキの部屋に彼以外がいないことを確認すると、音も立てずに室内へ入った。

「…お。帰って来たな。」

いきなり現れた黒装束の二人に、驚くことも無くシキが振り返る。リュウキは口元を隠していた布を剥ぎ取りながら、彼の元に近づいた。因みに、ゴルゴネスにボロボロにされた服は、帰ってくる途中にギイ達が用意してくれたものに着替えていたので、一見出て行った形と同じである。

「ただいま戻りました。」

「…何か格好がキレイすぎやしねえか？」

が、それが逆にシキの目に付いたらしい。汚れてもいない服に彼は眉を顰めた。

「私が優秀な証拠…」

「合流したとき、リュウキ様のお召し物がボロボロでしたので私達で用意しました。」

「ギイ！」

さらりとかわそうとしたリュウキの言葉を遮って、ギイが単調に告げる。

シキの心配性を知っているリュウキは、特に報告することもないだろうと、否寧ろ知らせたくなかったのだが、目論見を台無しにされて咎めるように副官の名を呼んだ。

「はあ？…何があつた？」

どうか耳に届きませんようにと願ってみたものの、この距離でシキが聞き逃すはずも無く。

恐る恐る彼を振り向くと、そこにはギイの言葉に眉を顰め明らかに不機嫌なオーラを出した男がいた。

「…いや…ちょっと…レキで化け物に遭遇して…」

「化け物だあ？」

歯切れの悪いリュウキの言葉に、苛ついた様子を隠しもしないシキが腕組みをして彼女を睨む。

シキはリュウキが彼女の身に起こったこと、おそらくは怪我を負ったことを隠そうとしたことに腹を立てていた。

「そつ、そつだ、それを早く報告するからっ！」

「怪我は？」

「…いや、だから報告…。」

「怪我は？」

「…」

有無を言わさぬ詰問にリュウキは言葉を飲み込み、事の原因となつた己の副官を恨めしそうにじろりと睨む。

しかし当のギィといえ、その視線を受けても何処吹く風だ。

「おい、リュウキ。こっち向け。」

それを見て更に顔を顰めたシキは、ガシッとリュウキの頭を掴んで自分の方に向けさせた。

無理矢理視線を合わそうと身を屈めてリュウキの高さに下りてきたシキの顔に、彼女の視線は逃げるようにきよるきよると彷徨う。まるで叱られる子供のように僅かに尖らせた唇からは、あーとかうーとか、そんな言葉しか出てこない。

「リュウキ！」

少し強めの声で名を呼ばれると、彼女はビクリと肩を揺らした。次いで観念したようにのろのろとシキに視線を合わせる。

「いや、あの…あのな。途中までは順調だったんだけど…。」

「…だけど？」

「レキの王城に…魔術師の研究棟があつて…。」

「あつて？」

「ちょーつと油断したつていうか…予想外に魔力を持った化け物に襲撃されまして。」

むっと黙り込んだ上官の顔が恐い。

「ちょっと…怪我を…ついでに魔力もとられちゃったり…なんかしちゃったり…して。」

とても簡単に纏められた言葉は、明らかに端折っている。後ろでは副官が冷気を出し始めていた。

ああまるで敵地にいるようだと思いつながら、この状況を打破するべく、リュウキはしどろもどろに続ける。

「う…あ…でも、ほら、シロに全部治してもらったし。情報もきっちり持ってきたし。」

どう控えめに見ても、必死に言い訳する子供にしか見えない。

「あつ！ほら！ちゃんと死守したんだぞ！！！」

思いついたように胸元から取り出した数枚の紙切れは、しかしシキにとって逆効果だったらしい。

「…俺は、危なくなったら逃げろつつたよな？」

「やつ…やつ…でも、そこはほら任務はまっとうしないと！他の奴等も命かけて…」

「馬鹿野郎！引けるときは引け！毎度命をかける奴があるか！！！」

空気が震えた。確かにリュウキは感じた。

あまりの剣幕に首を竦めて、思わず目を瞑りながら再びリュウキが意味の無いうめき声を零している。

確かにシキの言うとおり、今回は無理に情報を集めなくとも、すぐに一端戻って手勢を連れてレキへ向かうこともできたのだ。

「何か反論はあるか？」

「…ゴザイマセン。」

「で、どの程度の怪我だったんだ？」

「…命に関わらない程度…。」

「…てめえ。」

それでもまだ口籠るリュウキに、シキは頭痛を耐えるように目の間を軽く指で押さえた。次いで、大きく溜息を零して最後の手段とばかりに目を細める。

彼の視線はリュウキの顔から彼女の首元に移っていた。そこには少し厚めの布が巻かれている。

「リュウキ以外の人間とは、口をきかないのは重々承知だ。だが、こいつは何を言っても無茶をする。できればしっかり釘を刺したいから、何があつたか教えてくれないか？」

それはリュウキに放たれた言葉ではなく彼女は一瞬訝しげに首を傾げたが、次いで何かに思い当たったのか、はっと首元を抑えた。が、首元の彼が己以外の人間の呼びかけに応えるはずがないことに思い至り、少し安堵を滲ませながら息を吐く。

しかし、一呼吸の後彼女の予想に反して、するすると顔を出したシキに、リュウキは本気で慌ててしまった。

思わず阻止しようと思つた手で首元を布ごと押さえるも、少し遅かつたらしい、真っ白な騰蛇は既に彼女の目の前に姿を現していた。

リン 2

「重傷だった。」

金色の目をシキに向けたまま、真珠色の騰蛇が告げる。

リュウキは慌てて彼を抑えようと動くが、背後の副官と目前の上官の刺さるような視線に邪魔され、渋々と動きを止めた。

それを確認したシロが、淡々と彼女がレキの城に入ってから敵の術中に落ちたこと、手足を茨の棘で貫かれ重傷だったこと、傷は治したが失った血液と奪われた魔力は回復していないということを伝えた。

話が進むにつれ、シキは次第に目を細め己の肩を抑える部下からは殺気染みた冷たい何かが漂ってくる。

リュウキは居た堪れない空気から逃れるように顔を背けた。どうにも今回は分が悪すぎるようである。

「いきなり声をかけてすまない、ありがとう、感謝する。」

全てを聞き終わってからシキが深々と頭を下げる。

シロはそれを見て少し居心地が悪そうに首を引くと、小さく何事か応えた後にすいーっと窓の傍まで飛んで行き、手頃な場所を見つけるとそのままとぐるを巻いて目を閉じてしまった。

リュウキは、裏切り者めと横目で見やりながらも、こちらを睨みつけるシキにぎくしゃくと視線を戻す。

「……どこが命に関わらない怪我だった？」

低く低く告げられた声は、明らかに怒りを表していた。

「や…ホント…命に別状は…ちょっとシロが大げさで…」

更に言い訳を続けたリュウキに、とうとうシキの雷が落ちた。

「取り敢えず、報告だけ聞く。」

どっかりとベッドの横にある椅子に腰掛け、シキがそれ以外は受け付けんとばかりに告げた。

ここはリュウキに充てられたリーンの一室で、彼女自身はベッドの中で横になっている。その顔にはありありと不満が浮かべられていたが、彼女の隣で腕組みをして見張っている上官と反対側で貼り付けたような微笑を浮かべる副官に、漸く諦めたのか深い溜息をついた。涇々と口を開く。

「まず、レキの国の魔術師が城に召集されている。」

「戦のためか？」

「そうだ。しかし、その召集のされ方が半端じゃない。」

隣国との戦は、既にレキの国民全てが知る事実だった。

リュウキが王城へ向かう途中で立ち寄った村や町にも、王城からの召集令状が届き、目ぼしい魔術師や腕の立つ者達が根こそぎ集められていたのだ。それも、老若男女問わず本当に辺境の村まで、しか

も強制的に集められていた。それなりの代価は出ているようだが、それにしてもあまりに荒々しい召集に、リュウキ自身その手の話を聞く度に呆れてものも言えないほどだったのだ。

「だから、さぞ多くの人間が王城にいるのだと思っただが……」
「いなかっただのか？」

「ああ、寧ろ戦を控えている割りに少なかつたな。集めた兵を動かしているという訳でも無いし、一体あの人数を何処にやったのやら」

「で、だ。その後例の魔術研究の棟に入ったんだが、ちょっと気になるものを見つけたんだよ。」
「気になるもの？」

「ああ、後でロウにも見てもらおうと思っただが、これを見てくれ。」

それは先ほどリュウキが懐から取り出した、数枚の紙切れだった。小さな紙切れには殴り書きで魔術の陣や呪文らしきものが書かれている。

「おそらく転移術の類だと思うんだが、かなり大規模な転移を仮定して創られてる。」

ベッドの上に広げられた紙切れに、シキとギイが身を乗り出して覗き込む。それぞれ一枚一枚手に取りながら、書かれている内容を見つめた。

シキは魔術を使うわけではないのでよく解らないが、ギイはそれな

りに使えるのでメモの意味も理解しているようだ。

「本当だ。これ、かなり高度な転移術ですよ。」

「そうなのか？」

「ああ、そこら辺の魔術師一人じゃ陣すら敷けない。」

「僕も使える自信ありませんね。というか無理です。」

「私だつて一人じゃ厳しい。」

三人は紙切れを睨むように見つめながら、言葉を失くす。しばらくしてリュウキが再び口を開いた。

「それに加えて、例の化け物だ。」

「お前がやられたヤツか？どんな魔獣だつたんだ？」

己を捕らえ、完膚なきまでに捻じ伏せた相手を思い出したのか、リュウキの顔が悔しげに歪んだ。その黄金色の瞳には、怒りの炎が揺れている。

「魔獣なんてもんじゃなかった。シロが言うから真実だとは思って……。」

「何だつたんです？」

「…ゴルゴネスだ。」

その名を聞いた瞬間、ひゅつと二人が息を呑んだ。有名な神話だ。この大陸の人間ならば子供でも知っている物語の中の化け物の名に、どちらの顔にもまさかという色が浮かぶ。

「闇の中だつたから私は実際見ていない。私もシロに聞いたときはまさかと思つたさ。」

「そんな…ゴルゴネスなんて、堕ちたとはいえ神の名ですよ？」

信じられない、と呟くギイにリュウキは無理も無いと思う。シキを見れば彼もどこか茫然とリュウキを見つめていた。

「まあ、あいつがゴルゴネスだろうとなかろうと、馬鹿デカイ魔力と力を持っていることは確かだ。あれが戦に出てくるとなると、かなり手強い。」

「そうだな…流石に部隊の編成を考え直さなきゃならんか。」
「それに…」

それに、リュウキにはまだ気になっていることがあった。レキの魔術師の失踪、大規模な転移術、ゴルゴネス。この三つは何を指すのか。リーンに戻るまでにずっと考えていたことがある。

「それに、これは全て私の憶測なんだが…レキは、本当はヒリュウを狙っているのではないか？」

そう、リーンを越え、更には生身の人には越えられないはずの山脈を越えて。

大量の武器と兵士と、魔物を送り込むために。

あの巨大な転移術を創り出そうとしているのではないかと。

リュウキの言葉に、シキとギイが茫然と互いの顔を見合わせた。

リーン 3

「ありえるな。」

難しい顔で眉を寄せているシキが、ぽつりと呟いた。そう、確かにリュウキの予想は十分に考えられる話だった。

魔術師の国であるレキは、魔術と人々の暮らしが密接に関係している。

例えばそれは、居住空間の照明や温度調節であったり、作物の実りを助けるものであったりと、かなり生活感に溢れる使用方法である。

他国でも魔術の研究はされているが、それは戦闘術であり普段の生活で民のために使われるものは殆ど無い。一見、文化の発展とも考えられるレキの技術は、その実魔術に頼らなければ人々の暮らしがままならないという、北の過酷な大地が原因とも言っている。

そう、大陸の北部レキ国は、夏は灼熱の太陽に焼かれ冬は氷の大地に閉ざされる、人間が暮らしていくには酷烈な地域なのである。

対して、大陸の東に位置するヒリュウは一年を通してそれほど気候が変わらず、森と水に恵まれた地域だ。暖かな日差しが豊かな大地を包み、土も肥えていて作物も良く育つ。

まさにレキ国にしてみれば、この世の楽園なのだ。

「レキがヒリュウを狙っているにしても、まずはリーンを落とさねばならない。普通はそう考える。」

「そう油断させておいて、大規模な転移術で直接ヒリュウに攻め入る…か。」

油断。それに加えて、今ヒリュウの兵力はリーンに分散され自国の守りも薄い。

「まさに、狙い時ってわけか。」

ぎりつと口を噛み締めたシキが、鋭い眼をリュウキに向けた。

「リュウキ、このことシンには？」

「伝えた。ギイ達と合流した時にちょうど蜥蜴がいたから。」

「おそらく、もう目を通していらっしやるかと。」

付け加えるようにギイが告げ、それを見たシキがよしと頷いた。次いで再びリュウキに目を向ける。

「お前の読みは多分ほぼ確実だろう。そうなってくると、レキが転移術を完成させていたとして、奴等

がヒリュウに渡るのは、俺たちの本隊がレキに侵攻する時か。」

今、リン王城で待機している翼竜隊と術師隊、それから現在港から王城に向かっているヒリュウの本隊を動かせば、彼らがヒリュウへ援軍に戻るのには容易ではない。翼竜隊とて、そう短時間で王の下に戻ることは難しいだろう。

レキは、おそらくそのタイミングを狙っているのだ。

「…本隊が着き次第レキへ向かおうと思っていたが…これじゃあ難しいな。」

難しい顔でシキが唸ると、残る二人も眉を寄せて黙り込んだ。顔を俯け、考え込んでいたリュウキが再び顔を上げる。

「影で奇襲するか。」

その言葉に、はっと二人が顔を上げた。

「私の回復にはそう時間はかからない。全快を待っているうちに、コウリに残りの影を寄越すように頼んで、揃い次第レキへ向かおう。」

「リュウキ！」

「レキが行動を起こす前に、転移の陣を壊して術師長を片付ける。そうすれば、後方の心配も無くなる。」

「リュウキ！待て！いくら何でもそれは……」

危険すぎる。そう訴えるシキの顔には苦悩が浮かんでいた。

「だが、それしか方法が無い。」

そう、それが最善。それが後方：ヒリュウの心配をせずに戦える唯一の方法だ。シキもそれは痛いくらい解っていたし、ギイも理解しているようで何も言わない。

しかし、どちらかというと魔術よりも接近戦に長けた影が、高位の魔術師達を相手にするのは危険すぎた。

「しかし！」

「シキ、確かに私は一度命の懸け時を間違えた。だが、今回はその時だ。私たちが行かねば、ヒリュウが傷つく。」

「……！！！」

「私もお前やシン、シャルシュ殿やコウリを家族だと思っているし、ギイヤ国にいるみんなが大切だ。彼らの生きるヒリュウを守るためなら、喜んで死地に向かおう。」

「……馬鹿野郎が。」

苦く低い声でシキが呟き、それにリュウキが小さく苦笑を零す。

本当ならば、リュウキにそれを命令するのはシキの役目であるはず

なのに、彼は優しすぎた。シキも自分の役目を解っているので、悔しげに唇を噛む。

「…すまねえ、リュウキ。」

「馬鹿、謝る奴があるか。というか、危険だが死に行くわけじゃないぞ。」

「絶対だぞ。」

「当たり前だ。それに私はあいつに借りを返しに行くんだ。」

あいつとは、一時とはいえ彼女を捉えたゴルゴネスのことだろう。そう呟いた瞬間リュウキの瞳に炎が宿った。それを見たギイもすっかりと頷きシキの目を見つめる。

「僕らも是非、その化け物にご挨拶したいですね。何せ僕らの大事な隊長に傷をつけたんですから。」

にっこりと笑うギイの目は笑っておらず、僅かに殺気も滲んでいた。そんな副官の冗談とも本気ともつかない言葉に、リュウキが再び苦笑を浮かべる。彼としてはかなり本気だし、実は他の影の総意でもあるのだが。

リュウキは再度シキを見た。

「大丈夫、必ず全て片付けて、レキへの道を開いてやるよ。」

黄金色の眼がきらりと光る。白い面には、自信に溢れた強い笑みが浮かんでいた。

リン 4

ふわりと小さく風を起こして、リュウキの白い手首に小さな竜が舞い降りた。

彼女は空いている方の手を伸ばして竜の頭を一撫でしながら、自分の目前までそれを引き寄せる。次いで予め用意しておいた小さな紙切れを竜の足首の筒に仕舞ったあと、再び腕を高く掲げてそれを送り出した。

「…頼んだぞ。」

一気に黒い影しか見えなくなった蜥蜴を見つめ、リュウキは睨むように空を見上げた。

「リュウキ、準備は出来たか？」

蜥蜴の消えた空をしばらく見つめていた彼女の背に、低い男の聲がかかる。リュウキは一呼吸の後、くるりと踵を返して男を振り返った。

そこにいたのは、甲冑こそつけていなかったが武官の正装をしたシキだった。

「ああ、大丈夫だ。」

「あれは連れてきた蜥蜴の中でも速いやつだからな、俺たちが王に謁見しているうちに兄上の下に着くだろう。」

そう言いながらリュウキの隣に並んだシキは、先ほどまで彼女が見上げていた空を仰ぎ目を細めた。

つい先刻リュウキが飛ばした蜥蜴には、レキの思惑を考慮した進軍

の延期とそれを打破するために影で奇襲をかけること、それから残りの影をリーンに寄越して欲しいことを記したものを持たせてある。シキが言うとおり、あの蜥蜴は他のものより少し身体が小さい割りに翼の力が強く、とても早く飛ぶことができるので、蜥蜴がヒリュウの王城に到着しシンとコウリが書簡に目を通すまで、おそらくその時間はかからないだろう。

シキとリュウキの予想では、今夜にでも要請通りシンが影をこちらに送り込んでくれるはずだ。それも、港からではなく竜騎士を使って山脈から。

援軍のことはシンとコウリに任せるとして、シキとリュウキがすべきことはリーン王にレキの様子とそれに伴う作戦の変更を伝え、了承してもらったことだった。

「そろそろ時間だ、行くか。」

「ああ。」

王への謁見は、先ほど話が纏まったときに人を使いに出して申し入れている。またもや早い対応で応えてくれたカルドウス王は、すぐに時間を空けてくれた。この後、シキとリュウキは王の下へ向かう予定だ。

ギイはリュウキがレキで得てきた転移の陣を、術師隊の長である口ウに検分させるため彼の下へ行っている。

「今夜中に全てを終わらせる。勝負は明朝だ。」

シキの言葉に強く頷いたりリュウキは、その目に宿した炎を心に刻み付けるように空を見つめ、王の下へと向かうシキの後に続いた。

「リーン王城にヒリュウの本隊が近づいておりますわ。」

淡々と、流れるような声でエウリュアレーは告げた。目の前には、彼女の主であるレキの魔術師長が暗い笑みを浮かべて彼女の操る水盆を見下ろしている。

エウリュアレーの目は生まれてこの方光を宿したことがないので、男の顔の作りも表情も判らない。が、見えない分感覚の優れた彼女には、男の陰湿な性質が手に取るように判った。

「あとどれくらいで王城に入る？」

「恐らく、明朝には。」

「ふん、のろまな兵どもめ。早く我が国に攻め入れればいいものを。」

苛々と足を踏み鳴らす男は、どうやらヒリュウの本隊に早く攻め入って欲しいらしい。エウリュアレーは、彼の望みには全くもって興味は無いが、それによって自分の手に入ってくるであろうものを思い浮かべ小さく笑みを浮かべた。

己を創り上げたこの男は、エウリュアレーを完全に捕らえ制御していると思っっている。

しかし実のところ、男が自分を捕らえておくために作り出したこの空間も、彼女が一度力を爆発させれば吹き飛んでしまうことをアレーは知っているし、目の前の男を引き裂くことだって難しいことではない。己にはそれだけの力があることを、彼女は知っていた。

この醜い男の下にいるのはもう飽き飽きしていたし、すぐにも術を破り殺してしまってもいいのだが、彼女にはまだ男を生かしておく理由がある。

魔術師長の下にいてこと叶うエウリュアレーの望み。

それは、男に初めて水盆で彼の王国を覗けと言われたときに見た、あの輝きを手に入れることだ。

夜の闇を集めたような黒い髪を靡かせているのに、真昼の太陽のような光を放つ黄金の瞳を持つあの娘。水盆にかざす己の指先から流れ込んでくる姿に目を奪われた。

あれが欲しい、と。

あれは私のものだ、と。

そんな思いが身の内を駆け巡ったことを、彼女は今も覚えている。否、今現在もその思いは失せることなく、己の身の内に留まっているのだ。

だから、あの輝きを手にするまでは、この目の前の醜い男を殺すわけにはいかなかったし、殺すつもりもなかった。

そんな彼女の思惑に気づきもせず、未だ優位に立っていると思いついでいる男の言動を見るたびに、アレーは笑いがこみ上げて来る。

この男は、確かにこの国では一番の魔術師らしいが、アレーから見ればただの頭でっかちで、彼が本当に国一の魔力を持っているようには見えなかった。

自分を創り出したのも、多大な犠牲を払ったからである。

そう、この男は辺境の町や村から集めた、普通よりも魔力の強い者たちを代償に自分を創り出した。アレーの身には、彼らの命が今も蠢いているのだ。

ただ、少しだけ命の力が不足していたらしい、男が欲しかった全てを石に変える力は生まれず、彼女の目には光すら宿ることはなかった。それ故、男は彼女を度々失敗作と罵る。光が見えずとも、感覚の鋭いエウリュアレーには、特に気にかけることもなかったのだ。

が。

まあ、兎に角、今のところはまだ生かしておいてやるということだ。己の望みが叶う時、それが男の命が終わる時。

望みが叶う瞬間をうっとりと思像しながら、エウリュアレーは耳障りな男の声に答え続けた。

リュウキとシキが通されたのは、王の間と呼ばれる謁見用の広間だった。

広間には、王だけでなく王太子はじめ宰相や今回の戦に関する武官の長たちが揃っている。実は、王への謁見を申し入れる折、進軍の作戦変更に関することを相談したいということと、それに伴い関係する人間を集めて欲しいことを伝えていたのだ。

二人は広間に入るなり周りを見回すと、そのまま王の座る玉座の前まで進んだ。次いで流れるように膝を折る。シキは中央、王の正面に、リュウキはシキの斜め後ろに控える形で礼をとった。

「突然の謁見の申し入れ、真に失礼仕る。リン王には、多大なご配慮を頂き感謝いたします。」

「いや、こちらが世話になっていていること故、気に召されるな。それより、何やらレキで不穏な動きがあったとか…」

早々に口上を切り上げ、本題に入ってくれたカルドウス王に、再び頭を下げたシキが大きく通る声で言葉に答えた。それはリュウキが先ほどヒリュウに飛ばした書簡に書かれていた内容とほぼ同じだが、影の存在を省いたものだ。

「ならば、現在こちらに向かっているヒリュウ本隊を動かさず、まずは小隊で奇襲をかけるということか。」

「御意にございます。」

奇襲部隊はヒリュウの術師隊と騎士団の精鋭。まずは彼らにレキの思惑を阻止し、万全の状態で本隊を動かす。そうシキは説明した。実際のところ、奇襲部隊は“影”が務めるが、そこは言わずとも作

戦は伝わる。

「奇襲部隊が揃うのは今夜。体勢を整え、明朝には出立いたします。」

「

一通りの報告を終え、了承の意をもらうとシキは再び頭を下げた。明日、リュウキ達がレキに潜り込み全てを片付ければ、ヒリュウの本隊もリーンの騎士たちも一気にレキに攻め入ることが出来る。

この戦の要であるリュウキは、王とシキのやり取りを聞きながら、確実に任務を果たせるよう頭の中で起こりうる全ての事象を繰り返し想定していた。

日も沈み、城の所々に松明が灯る頃。

リン王城の敷地内、広い兵舎の広場には港を経由して渡ってきたヒリュウの騎士団が勢ぞろいしていた。彼らは予定通り、明日の午後リュウキ達が凱旋するまで待機である。

それと殆ど時を同じくして、ヒリュウから影の増援部隊も到着した。こちらは、山脈を越え城下町間近の人気の無い荒地まで竜騎士に運んでもらった後、そのままリン王城に忍び込み、到着していたヒリュウの騎士団に紛れるように待機しているらしい。

兵舎の様子を見に来ていたギィから報告があった。

「これで全て揃ったな。」

シキが小さく息を吐きながら呟く。それに応えるようにリュウキがしっかりと頷いた。

「明日の明朝、騎士と術師に扮した部下を連れてレキへ向かう。」

「ああ、頼むぞリュウキ。」

任せろ、と応える彼女の傍にはギイが真剣な顔で立っていた。彼もリュウキと共にリーンへ向かうので、明日は術師の格好に扮して行動する予定だ。

因みに、敵の目を眩ます為、明朝出発前にロウに不可視の術をかけてもらうことになっている。

「ああ、そうだ。さっき騎士団の奴らが兄上からの書状を持ってきたぞ。」

不意に思い出したように告げたシキが、懐をもそもそと探り始めた。そこから出てきたのは、光沢のある綺麗な紐で巻かれた真っ白な紙だ。

「また…高そうな紙だな。重要書類か？」

「いや、単なる…まあ読めば解る。」

それを見るなり眉を顰めたリュウキの一言に、シキが苦笑を浮かべて書状を手渡す。リュウキは胡散臭げに彼を見やりながらも、紐を解いてくるくと書状を広げた。

そこに並ぶ見覚えのある文字に少しだけ表情を緩めながらも、読み進めるうちにだんだんと眉を寄せる。

「…ただの小言じゃないか。」

そう、内容は全て、リュウキの身を案じる言葉と、今回の奇襲について十分に気をつけるようにという言葉に始終していた。

王が自ら筆を取ってくれた上に、己を氣遣ってくれていることがありありと解る文面だ。嬉しくないはずがない。嬉しくないはずがないのだが、如何せん、このての書状にこんな高級な紙を使うのは如何なものか。

リュウキは溜息をついて頭痛に耐えるようにこめかみに指を添えた。

「まあ、ほら兄上も王じゃなかったら自分が先陣切って戦いたいくらいなんだろうし。」

「そんなに前線で戦いたいのか？」

「いや、そういう訳じゃ…。」

お前を守りたいんだ、という言葉は口が裂けても言えないシキは、語尾をにこらせたまま黙り込んだ。それを見たリュウキが僅かに目を瞬かせ、次いで解っているとばかりに苦笑を浮かべる。

「…まったく、私には何人父親がいるんだか。みんな心配性ばかりだな。」

“守りたい”という気持ちは伝わったらしいが、明らかに理解の方向性が間違っている。

何度も思うが、せめて父親は止めてくれと、がっくりと肩を落とすて溜息をつくシキの内心に気づくことなく、リュウキが照れたように小さく笑った。

作戦開始

夜明け前の広場に少し冷たい風が通り抜けた。

一年の殆どを温かな気候で過ごすヒリュウの兵たちにとっては、少し寒いくらいかもしれない。

しかし、日本の四季に対応してきたリュウキにとっては、寧ろ気持ちの良いくらい風が吹いていた。

雨が落ちてくるほどではないが空は分厚い雲に覆われ、おそらく朝日が昇ったとしても、その温かな光が大地に届くことは無いだろう。これから奇襲をかけるにはちょうど良い天候だ。

今、リン王城の兵舎正面には、リュウキ含め三十名の武官に扮した影たちが、黒髪を風に靡かせながら凜と立つ彼女の背後で整列して頭を垂れている。

それぞれの隣には彼らの騎乗する馬が佇んでいた。そして彼らの正面にはカルドウス王とシキが、その両隣に近衛を従えた王太子以下全ての王子、王女たちの姿が見え、第一王女であるライラの隣りには、何か言いたげにこちらを見つめる修也の姿もある。

ちらりと一瞬視線を横に呷いただけで全ての顔を把握したリュウキが、改めてしっかりと王に視線を向けた。

「これより我ら三十名、必ずやレキの思惑を打ち砕き、彼の国への道を切り開いてまいります。」

高すぎず、低くも無い、よく通る澄んだ声が広場に響く。

それは、しっかりとした意思を持ち、背後に跪くリュウキの部下達の耳にも届いた。そのリュウキの覚悟の滲む声に、王がしっかりと

頷く。

「ヒリュウの精鋭たちよ、務めを果たし、必ず生きてこの地に戻られよ。」

武運を祈る、そう続けられた言葉にリュウキは短いがはつきりとした声で応え、そのままくるりと踵を返して手を掲げると、二十九名が一斉に馬に騎乗した。

それを確認したリュウキが、自らも隣に佇む青毛の馬にひらりと跨る。

僅かに手綱を引き、馬を斜めに向かせてシキにしっかりと視線を合わせると、彼は力強く頷いて応えた。

「出立！」

大きく声を張り上げたリュウキは、馬の腹に踵を強く打ちつけて一気に走り出す。

それに続くように他の隊員が綺麗に列を成して駆け出した。

彼らが走り去った広場を、朝の冷たい風が吹き抜けていった。

「頼んだぞ、リュウキ。」

目の前を通過する一瞬、しっかりと自分に目を合わせて駆け抜けていったリュウキは、あのいつもの強気な笑みを浮かべて笑っていた。その笑みをしかと目に焼きつけ、心に刻むようにシキは目を閉じしばし俯く。

「優秀な、副官だ。」

彼女が去った方向を眩しそうに見つめながら声をかけたのは、王太子ジャン・リーンだった。その隣には他の王子や王女たちも同じ方向を見つめている。

「ええ、あいつは優秀で、大事なヒリュウの家族ですから。」

「随分信頼しておられるんだな。黒翼：流浪の傭兵は何故ヒリュウに？」

ジャンの言葉に、ぴくりと片眉を上げ、ついでふっと小さく笑みを零したシキは、ゆっくりと彼に振り返った。

流浪の傭兵、黒翼は三年前のリュウキの姿。

聖なる色を宿した無敵の魔法騎士の噂は余程の田舎で無い限り知らない者はいなかった。また、彼女を己の騎士にしようと大陸中の領主、更には国主が黒翼を求めたのだ。

彼女を得ることができたことは、本当に幸運だったと思う。その反面、リュウキの居場所はヒリュウしかないという根拠の無い確信をシキは持っていた。

それは、他国がリュウキを黒翼として求めたのに対し、彼らが彼女を唯のリュウキとしてヒリュウの一員に求めたということも大きく関係しているだろう。彼女も黒翼としてではなく、リュウキとしてヒリュウで生きることを選んでくれたのだから。

それはシキ達にとって、とても誇らしいことだった。

「黒翼は戦場ではなく、一人の人間として帰る場所を求めているからですよ。」

そう、それがヒリュウだった。ただ、それだけのこと。

そして彼女は今、帰る場所を守るために剣を取り戦っているのだ。シキは再び、彼女が去った方向を見つめて、そっと目を細めた。

広い大陸で、大きな戦が幕を開けようとしている。

ある者は、私欲を叶えるために。

ある者は、迫り来る闇に抗うために。

山脈を股に掛けた人間の欲望が、動き始めようとしていた。

ぶるる、と馬が顔を打ち振るい、目の前の岩場に足を止めた。リュウキは宥めるように闇色の毛を撫でると、軽やかに背から下りる。それと同時に背後に続いていた数名の影も、同じく馬から下りた。

リュウキはしばらく岩場を見つめ、次いで彼らを振り返った。

「皆、これより徒歩でレキに入る。」

彼女の声に、言葉を発することなくそれぞれが一斉に頷いた。

今、彼女の前にいるのは九名。リーンを出たときに比べ、その人数は彼女を含めちょうど三分の一になっていた。

ここは先日渡ったグウレイグ河付近の岩場。

リュウキはここに入る前に、彼女の率いていた部隊を二つに分けた。それぞれ二箇所から渡河し、三分の二の人数で編成した班は転移陣の搜索と破壊を、ギイを含むリュウキの少数班は化け物討伐を主に動くことになっている。

最低でも転移の陣の破壊を、できるならば化け物とそれらを作り出した魔術師の始末も。それが今回リュウキたちに課せられた任務だ。なので、彼女は搜索と破壊の班に人数をかけ、化け物と術師の討伐には魔力と戦闘に長けた者たちを当てた。彼らはそれぞれ通信用の魔具を持ち、いつでも連絡が取れるようになっていた。

「河を渡ったら一気に王城へ向かう。各々覚悟してついて来い！」

強い言葉に全員が跪き、深く頭を下げた。

それに応えるようにしっかりと頷いたリュウキが踵を返すと彼らもすぐに立ち上がり、彼女を先頭に黒い岩場へと姿を消した。

奇襲 1

彼女の姿が見えない。

少し苛立ったような吐息を零し、水盆の前に佇み両手をかざして己の魔力を送り込む。

それは水を通してレキの南西側からリーンにじわりと広がり、その情報を吸い取ってエウリュアレーの知りたいことを伴い彼女の下に還ってくるはずだった。確かに水盆は、彼女にいくつかの情報を与えてくれるが、アレーが最も知りたい輝きの姿がどこにもないのだ。

もしや、ヒリュウに戻ったのだろうか。否、とすぐにその考えを否定する。

茨に捕らえられ、それでもなお己を睨み付けていたあの目は、必ず彼女が再びアレーを殺しにくることを伝えていた。そう、あの太陽のような気高き光が、受けた屈辱を晴らすことなく逃げ帰ることなどありえないのだ。

アレーの中には確信があった。

おそらく、不可視の術でもかけているのだろう。流石東の大国、こちらの術師もかなりの力を持っているので、その者たちの仕業だとアレーは考える。

それが示すことはただ一つ。彼女の望むものが既に動き始めているということ。

あれが己の下へ向かっている。

そう考えただけでアレーは幸せな気分になった。

早く、早くと、まるであの男のように気持ちばかりが急ぐ。

あの男に伝える必要はない。彼女が来るならば、あの男はもう用済みである。それに、次はもう逃がすつもりもない。あの輝きをもう一度この闇に捕らえ、この醜い身体を捨てて彼女と一つになるのだ。

それが闇に繋がれた哀れなゴルゴネス、エウリュアレーの唯一つの望みだった。

「搜索班は南側から侵入後二人一組で散開、私たちは西側から棟の最上階、まずは魔術師長を押さえる。」

自らの耳に納まっている通信用の魔具に手を添え、リュウキが囁くような声で告げた。

別働隊も既にレキの王城に侵入し、潜伏しているので魔具の効果が届く距離にいる。それを示すように、彼女の魔具から応の音が僅かに届いた。別働隊を任せた影の三席である。

先日リュウキが侵入した研究棟の前に、再び彼女は立っていた。

あの時と違うのは、一人ではないということ。単独行動の多い影だが、彼らの結束は固かった。

それぞれがそれぞれを支えあい、信頼しつつ任務をこなしている。リュウキとて、何も一人で全て片付けようなどと傲慢なことは思っていない。己一人の力など所詮微々たるものだど理解しているのだ。

任務を遂行することこそ第一。
そんな彼女にとってこれほど心強いことはなかった。

「シロ、頼む。」

了承を伝えるように、にゅっと首元から姿を現したシロが、呪文を唱える。

「遮断する。」

言葉と共にシロの金色の目が一瞬輝き、魔術師の巣窟であるレキの研究棟を透明な陣が包んだ。

範囲に比例してかなりの魔力を消耗するこの陣は、陣の中と外の空間を完全に遮断する。陣を敷いている間は魔力を消耗し続けるため、リュウキは滅多に頼まないのだが、今回はそうも言っていない。陣が広がり、建物をすっぽりと飲み込んだことを確認したリュウキは、一旦深く呼吸をして睨むように目前の建物を見上げた。

「行くぞ！」

囁くような声は、しかし確かな力を持ち“影”たちの背中を押すようにしっかりと響いた。

建物内は、前回同様しんと静まり返っていた。

かなり広い建物なので、全ての気配を把握しきれぬわけではないが、それでも静か過ぎた。

先日の失敗もあり、リュウキはかなり警戒しつつ先へと進む。

まず目指すのは最上階の魔術師長の部屋だ。

馬鹿と煙は何とやら、とはよく言ったもので、どうやらこの長も高いところが好きらしい。

前回の調査中、無理な徴兵令を出しているのは魔術師長であることが判っていた。彼女にしてみれば、その事実だけでも彼の人間が大馬鹿者であると判断するに足りる。

あの化け物を管理しているのもおそらくその人物だろう。

一応他の可能性も考えてはいるが、あれだけの化け物を魔術師長の目を掻い潜って留めているとは思えない。それに、そんな力のあるものをただ放置しているとも思えなかった。

おそらくどこかに隠しているのだろう。陣を張ったどこかの部屋にそれを聞き出すためにも、まずは魔術師長だ。

リュウキはちらりと背後のギイたちを確認すると、そのまま一気に最上階を目指した。

レキ国の魔術を総括していると言っても過言ではない、現魔術師長ライズ・ヒューはその陰鬱な外見に見合った暗い野心を持っていた。それは、彼が他の上級魔術師と大差ない実力にも関わらず、家柄と金銭でその地位を手に入れたことから伺える。

ライズは己が皆を従えるだけの力を持っていないことなどとうに知っていた。

だからこそ、魔術師長就任の折、その位に就く者が最初に行わなければいけない仕事である王城の結界の再構築も、秘密裏に集めた優秀な魔術師達に金を握らせやらせたのだ。今まで彼は、己の魔力ではなく貴族である家に有り余っている金を使ってその地位を守ってきた。

魔術師の実権が強いこの国で、魔術師長の位に就くということは、国の決定権を王と分け合うほどの権力を持つことに等しい。

魔術師長という位に就いてから、ライズの野心は更に燃え上がった。金は元より、手に入れた権力を使い己の手足を手に入れ、最強の化け物を創り上げたのだ。

それもこれも、全てはヒリュウを手に入れるため。ひいてはこの大陸を支配するためだ。

竜を味方につけるヒリュウの軍力さえ手に入れさえすれば、あとは雪崩れ込むように己の両手に全てが手に入る予定だった。

ヒリュウの獣を従えるための化け物も手に入れた。

山脈を越えるための転移の陣も既に準備できている。

あとはそう、馬鹿な彼らが何も知らずにレキに進軍してくるのを待

つばかりだ。

ただ、あのゴルゴネスの何を考えているか解らないような薄笑いも、毎度不安の種ではあるが、まああの化け物がどんなに力を持っていても、集めた魔術師たちに作らせた闇の檻に入れている限りは問題ないだろう。

兎に角、そろそろヒリュウの本隊が動いてもいい頃だ。

抜かりがないよう、もう一度転移の陣を確認しておこうと彼が緩まる頬をそのままに、術師たちのもとへ向かおうと席を立った瞬間、彼は床に叩きつけられた。

「…ぐっ…何奴っ!？」

一瞬見えたのは黒い影。

一体何が起こったのか解らず、茫然と首だけで周囲を見上げると、己の四肢を押さえつけ床に這い蹲らせるように何者かが拘束しているのが見えた。

格好はよく見知ったレキ国の上級魔術師の正装である。

「きっ…貴様らっ…何をやっている!? 離せ! 離さぬか!!!」

渾身の力を込めて抵抗するも、腕も足もピクリとも動かず、間接がぎしぎしと音を立てるだけだった。己の状態を理解したライズの顔が、一気に怒りと屈辱で歪む。

「お…のれえっ! 魔術師長であるこの私にこんなことをしてただで

済むと思うなっ！！！」
「お決まりの台詞だな。」

途端、耳に届いたのは女の声。しかし、声が放たれたのは己の四肢を押さえている者からではなく真正面からのものだった。その声の元を辿るように、怒りに燃える眼をそちらに向ける。

そこには、同じようにレキの上級魔術師の正装を着た何者かが立っていた。首から口にかけて大きめの布を巻いているため、その顔は確認できない。

怒りの中に見えた訝しげな色に、女が目だけで小さく笑った。

「ああ、これか？ここに来る途中支給品保管庫があつたからな、ちよつと拝借したのさ。」

ひよいと服の先をつまんで言う女はその軽い口調とは裏腹に、息も止まるような威圧感を持っている。

ライズは潰されそうになりながらも、なけなしの矜持をかき集めて睨みつけた。と、次の瞬間彼女の目を見て何かに気づく。

「…っ…！？…貴様っ…その金目は…ヒリュウの悪魔っ！！！」

その言葉に女が僅かに目を瞬かせ、次いで再び目を細めて笑う。

「ああ、そうか。レキじゃあこの色は悪魔の色だったな。」

くすくすと、楽しそうに笑う女が、笑みを浮かべたままライズに歩み寄る。それを鋭い視線で追いながら、彼はぎりりと唇を噛み締めた。

女の足先が男の顎をぐいっと持ち上げ、遠慮の無いその衝撃にライズは小さく呻く。

「ふふ…お前の命運も尽きたようだな。まずは転移陣と化け物の居所を吐いてもらおう。」

「…っ…馬鹿か貴様。誰が貴様らなどに…ぐっ…ぎいっ…！」

ライズの言葉を待たず、女の足が勢いをつけて彼の頭を踏んだ。踵の角を使って更に頭部を踏みしめる。

苦しさと同様に震えながらライズが僅かに顔をずらすと、その鼻からは赤い筋が流れていた。

「素直に答えれば命まではとらんぞ。抵抗すれば約束はできない。」

「…くっ…がっ…あ…貴様…リュウキ、とか言ったな…」

「あれ？私も有名になったもんだなあ。」

「がっ…があっ…！」

「そんなことで有名になってどうするんです。」

男の四肢を押さえていたギイが、溜息をつきながら呼吸をするようにライズの腕をひねる。膝裏を脚で押さえつけながら男の片腕を背中中で折り曲げぐっとな押しした途端、僅かな振動と共に、ぼきりと音が響いた。

「ぎいっあっ…！がっ…！」

びくりと、衝撃にライズが背を反らせ、青白い顔を更に真っ青にして悲鳴を上げた。

彼を押さえつける二人は構うことなく更に力を加える。

「ほら、早く言ったほうが身のためぞ。お前もまだ死にたくないだろっ？」

「くっ…悪魔めっ…誰が話すものがっぎあっ…！」

ぼきりと今度は先ほどとは反対側の腕から音がした。
リュウキがライズを踏みつけている足を曲げ、膝に片腕を掛けて僅かに顔を寄せる。

「愚かな男だ。そんな実力でヒリュウを落とそうと思ったのか？」

「自惚れもいいところですね。」

「ぐっう…貴様らあっ！！！」

ぐぐつと足裏を押し戻す力に、リュウキが少し目を見開く。が、ぐつと足に体重をかけると、力尽きたように再びライズは床に伏した。

「見た目の割りになかなか根性がおありのようだ。金だけで地位に就いたのかと思ったが、その根性のおかげでもあるのかな。」

足先を左右に動かし横つ面を踏みにじられ、ライズの顔が怒りで真っ赤に染まる。しかしその怒りも両腕の痛みで持続せず、罵りの言葉を上げたくとも口から出るのは意味を成さない呻きのみだ。

「ぎっぎっ…ぐがっ！！！」

「ははは、なんの鳴き声だそれは。ほら、まだ苦しみたいのか？」

ばきん、と今度は右肩だ。次いでライズの右手が開放されたが、既に彼の右手はだらりと力を失っていた。

「仕方がない、時間切れだ。」

「初めから吐かせる気なんてないでしょうに。」

「がっああっ！！！」

リュウキの言葉に溜息をついたギイが、おまけとばかりにライズの

左肩も砕く。

それを確認したりユウキが、ライズの頭を解放してその場に屈みこんだ。そのまま遠慮の無い力で男のぼさぼさの髪をがしりと掴み、自分の目線に合わせるように引き上げる。

彼の顔は涙こそ流していなかったが、床の埃や鼻血と涎でぐちゃぐちゃに汚れていた。リュウキは構わず金色の目を近づける。

口元の布をずらして囁くように何かを呟くと、痛みで虚ろだった男の目が更に虚ろに霞んだ。

「……くっ……あ……。」

ゆらり、ゆらりとライズの瞳が揺れる。今にも白目を剥きそうな目を見つめながら、リュウキが確認するように僅かに首を傾げて瞳を覗き込んだ。

「……意外と抵抗するな。まあ、術師としての腕も悪くはないからかだが……。」

彼女が楽しそうににやりと笑って、再び何事か囁いた瞬間、ぐるんと男が白目を剥いた。

奇襲 3

「おい、次はどっちだ？」

長い廊下の角で背をぴったりと合わせ、死角の気配を伺いながらリュウキが己に続く部下に尋ねる。否、正確には部下に担がせている魔術師長ライズに。

「…う…あ…み、ぎ…階段、下り…」

途切れ途切れに零れる言葉を聞くなり、すぐに正面を向き言葉通りの方向へ進んだ。

体格の良い隊員に担がれたままのライズは、ぽっかりと虚ろな目を宙に彷徨わせながら半開きにした口から涎を垂らしている。その瞳に光は無く、そこに彼の意思はない。

「更に下か。地下だな。」

先ほどリュウキがライズに掛けたのは傀儡の術である。

この術は対象の意思を奪い術師の虜に堕とし、その名の通り操り人形にするのだ。ただ、条件として対象よりも強い魔力を持つてかけなければ成功しない上に、墮ちる度合いも魔力の差によって変わってくるのでなかなか難しい術なのだ。

因みに、魔術師長を傀儡に堕とした段階で、既にレキが開発している転移の陣のありかも聞き出し、別働隊に知らせてある。

彼らも今頃、陣を破壊しに向かっているだろう。

ライズの言葉通り薄暗い階段を下ると、そこは真っ直ぐに伸びた狭い廊下に出た。

ぼつり、ぼつりと灯りの続く廊下の壁は、まるで地下牢のように陰気な空気で充満しており、建物自体ひんやりと冷たい印象を受けたが、ここは上の階よりも更に冷気が漂っている。

「ま…っすぐ…ま…すぐ…やみいろの、扉…。」

ぶつぶつと、自我を持たないライズが呟く。

彼の壊れた音は、廊下の雰囲気も相まって不気味に響いた。

「…あれか。」

そう長い距離も進まず、その扉は見えた。

ライズの言葉どおり、単純に黒というよりも全ての色を混ぜて作られたような闇色の扉は、中央に金色で封印の陣が記されている。

複雑なその陣は、如何に頑丈に封じられているかを表すようだった。

「シロ。」

「ああ、いる。この中だ。」

小さな声が首元から聞こえる。

一歩進み出たリュウキは、不意に踵を返して背後の部下達に向き直った。

「件のゴルゴネスは石化を使えない。が、怪力と魔力は凄まじい。普通の魔獣と同様に考えるな。」

囁くような声は、しかし居並ぶ部下達にしっかりと届く。

「迷うな。隙を見定め確実に一撃を入れる。だが無理だと思ったやつは即刻引け。死ぬことは許さない。いいな。」

強い言葉と強い瞳。

厳しい言葉は、しかし自分達を気遣う想いが含まれていた。彼らは金色の瞳を見つめて一様にしつかりと頷く。

それを確認したリュウキが首元に手を伸ばし、それに応えるようにシロがするすると手に移った。

そのまま流れるように彼女が腕を扉に近づけると、シロが首をもたげて何事か呟く。背後では、ライズを担いでいた一人が、用済みとばかりに彼を廊下の隅に放り投げた。

「よし、行くぞ！」

リュウキは小さく、しかしはっきりと告げると、封の解かれた扉を勢いよく蹴り開けた。

何処までも続く闇。

それはつい先日、リュウキ自身が体験したものに似ていたが、明らかに違うのは部屋の周囲に点々と僅かばかりの灯りがあり、その周囲だけぼんやりと浮いて見えるということだった。

ただし、本当に申し訳程度の灯りなので、そこ以外は壁の形すら判らないのだが。

「あら…まあ…貴女から来てくれたのね？」

と、闇の向こうから聞き覚えのある女の声が聞こえた。それと共に

するするという布を引き摺るような音も僅かに響く。
その音を耳にした瞬間、リュウキ達はそちらを見据えそれぞれ腰を低くして構えた。

「化け物め。先日の借りを返しにきたぞ。」

「ふふ…化け物なんて無粋な名前で呼ばないで。」

リュウキの静かな言葉に、ただただ嬉しそうに答える女は闇の中からじわりとにじみ出るように姿を現した。
その醜悪な姿に背後で何人かが息を呑む。

「私の名はエウリュアレー。」

しつとりと、囁くように告げた女の下半身は巨大な蛇のものだった。所々つぎはぎで出来ているそれは巨大で、あれに巻き取られたら人間ではひとたまりもないだろう。上半身は人間の女のものだが、その細部を見ればやはり蛇のものに似ていた。極めつけはその髪と思われるもの。
彼女の髪は太い筒のようなものがうねうねと蠢き、明らかに意思をもっているように見える。

「エウリュアレー、死ぬ前に答える。」

「何かしら？」

「お前はライズ魔術師長に呼び出された、もしくは創られたのか？」

ライズという名を告げた瞬間、エウリュアレーの目がすつと細まる。

「醜いあの男…美しい貴女が口にするような名ではないわね…。」

「答える。」

「ふふ…半分正解かしら。」

「半分だと？」

「私は創られた存在。創りだそうとしたのはあの男。でもあの男にそんな力などないもの。」

確かにそれは、ライズを見たときにリュウキも思ったことである。上級魔術師程度の魔力しか持たないライズに目の前の化け物を召喚、もしくは作り出すことなどできるとは思えなかった。

「：他にお前を創った魔術師がいるのか？」

「そういつ風にも言えるわね。」

のらりくらりと応答を楽しむように告げられる言葉に、リュウキは内心苛々ともどかしくもあつたが、それは表面には出さない。もし他に化け物を作り出せるような魔術師がいれば、そちらも押さえなければならぬのだから。

それだけは、聞き出す必要があつた。

「そいつはどこにいる？」

リュウキの問いかけに、アレーは赤い唇の端を引き上げにいつと笑つた。その笑みにリュウキが僅かに眉を寄せる。

「私の中。」

「何？」

「みーんな私の中に取り込んでしまつたわ。」

言葉にリュウキも背後の影たちも目を見開いた。そしてリュウキはその言葉の意味を考え戦慄する。

「魔術師長は…集めた術師で、お前を創り上げたのか。」

行き当たった答えに、僅かに掠れる声でリュウキが呟いた。
その言葉に目の前の化け物がゆらりと揺らめく。

「ご名答。やはり貴女は頭も良いのね。」

まるで母親が我が子をほめるような言葉に、リュウキはぐっと唇を
噛み締めると、これで話は終わりとはかりに深く息を吐く。

「化け物め。やはりお前は始末する。」

甲高い金属音を立てながら、リュウキは愛用のサーベルを引き抜い
た。

奇襲 4

「援護しろ！」

声と共に踏み出したリュウキが、エウリュアレーの首に向かって飛び掛り、目にも止まらぬ速さでサーベルを一閃する。

アレーの首筋を切り裂いたと思われた刃は、しかし再び現れた巨大な茨に阻まれていた。

蔓は色も形も巨大なだけの植物のはずなのに、異常なほどの硬度を持つているようで蔓に生えた鋭い棘で彼女の攻撃を受け止めていた。小さく舌打ちしたリュウキはそのままサーベルを引いて一端着地し身を低くする。と、そこにどこから湧いてきたのか、今度は人の脚程の太さの茨の蔓が八方から襲い掛かっていた。彼女はそれを紙一重で避ける。

と、そこにいきなり炎が上がり、リュウキを捕らえようとしていた蔓を一気に包んだ。

見れば、エウリュアレーと距離をとりながら取り囲むように立った影達がそれぞれの方向から炎の陣を張っている。

「…邪魔な小虫ね。」

少し不快そうに眉を寄せたエウリュアレーが右手をすいと横に風ぐすると、その軌跡を辿るようにアレーの周囲から紫色の煙が立ち上った。

いち早くその正体に気づいたリュウキがはつと振り向く。

「ギイ！！！」

「お任せを！！！」

鋭い声に答えたギイが何事か呟く。次いで両手を左右に突き出し周囲の空気を混ぜるようにその手を正面に戻した。

「押し流せ!!」

声と同時にギイの両手から大量の水が放射される。それはアレーの足元から上がった煙を包み込み、そのまま床に縫い付けるようにはしゃんと音を立てて落ちた。

それと同時にギイの両側に居た二人が呪文を唱える。すると今度はエウリュアレーを冷気が包み、彼女の周りの空気が薄っすらと霞み始めた。

「ふん、その程度の魔力で私を捕らえられるとでも?」

パキパキと凍り始めた自らの足元を見つめ、エウリュアレーが鬱陶しそうに呟く。

次いで両手を斜め下に構えそのままゆっくりと掲げると、その動きに合わせて凍った床を割り開き新しい茨の蔓が出現した。

それらはアレーを縛り始めていた氷をバキバキと割りながら天井付近まで蔓を伸ばす。

リュウキたちは一端距離をとるために、一足飛びに後方へと下がった。リュウキは影達に視線を送り小さく頷く。

「焼き尽くせ!!」

彼女の掛け声と共に全員が手をアレーに向け魔力を放出した。同時に、エウリュアレーを取り囲むように伸びていた蔓が一斉にリュウキ達に向かって伸びてくる。

彼らの中央で、炎と茨がぶつかり合った。

メラメラと燃え落ちていく茨の蔓は、しかし後から後から生え続け、

炎を突破しようと蠢いている。

とうとうそのうちの三本が炎の壁を越えて影たちに迫る。が、彼らは逃げることなく魔力を放出し続けた。

ザン

と、荒々しい音と共に舞ったのは三本の蔓。

サーベルを素早く薙いで蔓を切り落としたリュウキが、そのままの素早く武器を逆手に持ち腰を屈めて矢を射るような格好を取りながら弓を引く。

「貫けっ」

その流れる動作の軌跡を辿るように、彼女の指を真っ白な光の線が撃いだ。それはまるで純白の弓矢のようだった。

彼女がその矢を放つように手を開くと、低い位置からエウリュアレーに向かって真っ白な光の矢が放たれる。それは炎をくぐり茨の蔓を縫ってアレーの胸元を真っ直ぐに目指していた。

バシユウツと音を立てて、それが化け物の胸を貫く…かに見えた。

「ふふ…いいわ、やっぱり素敵。」

が、後僅かのところでエウリュアレーの目の前に伸びた蔓に阻まれる。

リュウキは予想していたようで大して気にせず、更に次の矢を構えた。

今度は引くほうの指を全て開いた状態で弓引き、矢を放つように振り絞っていた手を弾く。すると先ほどと同じ光の矢が五本一気に放たれた。射抜くことを確認せずに、リュウキはそれを連続で行う。

エウリュアレーの身に光の矢の雨が降り注いだ。

「やれ!!」

その矢の勢いに、炎に対抗していた茨の勢いが弱まり、アレーを庇うように彼女の周りに茨が集中する。それを見逃さず、リュウキは炎を出していた部下達に大きく声をかけながら、自らも更に弓を引いた。

炎と光の矢の豪雨に見舞われたアレーの姿は黒煙で隠れ、それでもリュウキたちは攻撃を止めなかった。

魔力の大量放出に、影達が額に汗を浮かべ始めた頃、リュウキが矢を放つのを止めて立ち上がり違う呪文を口にして空気を裂くように右手を軽く薙いだ。

「やったか？」

少し離れたところからは誰の口からかそんな呟きが零れ、リュウキが手を動かすと同時にエウリュアレーがいるだろう正面に充満していた煙が突風に払われる。

風は煙を散らすと共にリュウキたちの前に見えない壁を作った。

と、次の瞬間流れていた煙を裂くように一本の茨が物凄い勢いで伸びてきた。

それは風の結界に阻まれ速度を緩めながらも無差別に彼らを絡め取るように迫る。リュウキはそれを阻止しようと両手を正面に突き出し、茨の向かう方向へと魔力を放出した。

「リュウキ様っ！！！」

ギイの悲鳴のような声が響く。

自分達に迫ってきた茨は、リュウキの風に押し戻された。しかしその風を生み出した本人は、床を割って這い出てきた五本の茨に囲まれていたのだ。

一瞬の出来事に誰もが動けずただ目を見開く。ギイだけが僅かに固まった後叫びと共に動いていた。

しかし茨の動きが早すぎて、数歩の距離なのに間に合わない。しかもそれを阻むようにギイ達とリュウキの間にも茨が床を割って飛び出す。

「小虫が邪魔をするでないわ！」

煙の引いた中、アレーは蛇の胴体に無数の穴を開け、血を流しながらこちらを強い瞳で睨みつけていた。

それでもその口端は引き上がり、彼らを見下すように嘲笑を浮かべている。

「させるかっ！！！」

それを見たリュウキが迷うことなくギイたちに迫る茨に魔力を向けた。再び彼らを風が包み、今にも襲い掛かろうとしていた茨の群れを弾き飛ばす。

アレーがにんまりと笑みを浮かべた。

「いけませんっ！！リュウキ様！！！」

「愚かな。貴女の欠点はその甘さ！」

ギイが悲痛な声を上げる。

対してエウリュアレーは思惑通りとでも言うように勝ち誇った笑みを浮かべていた。同時に、リュウキを取り囲んでいた五本の茨が一斉に彼女へ向かう。

誰もが諦めかけた、その時。

「甘えのはてめえだ。」

リュウキの首元から、この闇の中でも判る真珠色の何かが飛び出した。

それが彼女の目の前で僅かに発光した瞬間、リュウキの周りを真っ白な炎が螺旋を描いて包む。その美しい炎が、彼女に襲いかかろうとしていた茨を悉く焼き尽くした。

リュウキは、まるで解っていたかのように静止したまま正面を見据えている。

エウリュアレーの顔に浮かんでいた笑みが消え、激しい憤怒の色が浮かんだ。

「…お…のれえ……獣ごときが、二度も私の邪魔を……」

全身をぶるぶると震わせながら、盲いた両目を真っ赤に染めたアレーの地を這うような声が響く。視線だけで命を奪えそうな目が、未だ白い炎で包まれたシロを睨みつけていた。

「てめえこそ、たかが蛇ごときが。この俺様に勝てるっても？」

不適な声は、いつもより低めの少年の声である。その白い面には蛇の顔にしては不自然な笑みが浮かんでいた。

「助かった、シロありがとう。」

「これでまた貸し一つな。」

「ああ、帰ったらたっぷり返すよ。」

アレーから視線を離さず交わされる会話は、彼らの勝利を確信している声だった。

その場違いなほどの余裕を見せる二人に、エウリュアレーが屈辱に震える。ぎりつと口元から歯が鳴る音が聞こえた瞬間、彼女の周りからこれまでとは比べ物にならないほどの巨大な茨が次から次に飛び出してきた。

「…おのれ…おのれ…私を愚弄しておって…もう、貴様など要らぬ！
！」

ゆらゆらと、エウリュアレーの周囲の空気が怒りと溢れ出す魔力で揺れている。リュウキは僅かに目を細め、腰を低くして再び戦闘態勢をとった。

それに倣うようにギイ達も腰を低くする。

「全員炎で押し戻せ！ギイは私の援護だ！
！」

叫ぶ声と同時に、アレーが激しく両手を薙いだ。それに続くように巨大な茨が一斉に彼らを襲う。無差別に、主人以外の命を刈り取ろうと動く茨は、縦横無尽に動きながら突進してきた。

「死ねっ！
！」

アレーの無情な叫びが響く。

しかし、影たちの前には放たれた炎の壁ができていた。その中からギイがリュウキに向けて魔力を放出し、彼女に迫る茨を次々に焼き尽くしている。彼が開いた道に、リュウキは笑みを浮かべて踏み出した。正面には、怒りに狂う化け物の姿。

ギイの炎を縫って襲い来る茨をひらりひらりとかわしながら、リュウキはシロを伴いエウリュアレーへと突き進む。あと数歩という距離で勢い良くサーベルを構えると、それを確認したシロが彼女の手元に向かってかぱっと口を開いた。

次の瞬間、リュウキのサーベルを白い炎が包む。

「これで、終わりだっ！！！！」

はっとアレーが身構え、慌てて身を守るように茨を出すも、リュウキはそれを身を滑らせるようにしてかわし、化け物の懐に飛び込んだ。

低い位置から鋭く放たれる一閃。

アレーの脇を走るようにすり抜けながら、リュウキは大きくサーベルを振り切った。

一瞬、全ての時が止まった。

襲い掛かっていた茨も、それを押し戻していた炎も。

表情すら固まってしまうたように動かない空間で、最初に動いたのはリュウキだった。

ゆっくりと化け物を振り向きながら、サーベルに付着した真っ赤な血を払う。

それをぎこちない動きで確認するように、目を見開いたアレーが顔だけでリュウキを振り返った。

「…そ…んな…」

ごぼりと、掠れた声とともに、エウリュアレーの口から大量の血が溢れ出す。

それからゆっくりと己の腹に眼を向けると、そこには腹を割るように赤い線が一本。それを確認した途端、ぐらりと彼女の身体が傾いた。

ずずず…と音を立てながら、腹から上が滑るように胴体から落ちていく。次の瞬間、全てが崩れるように蛇の下半身と周囲に伸びていた茨が次々と床に倒れた。

女の上半身も床に投げ出されるように、ちょうど仰向きになる形でリュウキの目の前の床へと落ちる。

見ると、浅い呼吸を繰り返しており、途切れた腹から流れ出る大量の血液は、化け物の命がそう長くは無いことを知らしめていた。

リュウキはそれを確認して、アレーの巨大な下半身と茨を挟んだ向こう側の部下たちをちらりと見やり小さく頷く。

それに応えるようにギイを始め全員が頷き、魔力の放出を止めた。途端、上がっていた炎が一瞬で消え失せ、部屋に残ったのは化け物の巨体と巨大な茨、それから所々崩れた瓦礫と立ち上る煙だけになった。

虚ろな目をそれでも己に向けるエウリュアレーに、ゆっくりとリュウキが近づく。

他の影たちはいつでも動けるように彼女の周りに詰めようとしたが、リュウキ自身に手を振られて拒まれてしまった。

気をつけるとばかりに強い視線を送ってくるギイに苦笑を返しつつ、リュウキがアレーの顔の横で膝を折る。近づいて初めて見えたアレーの髪は、様々な種類の蛇でできていた。先ほどまで蠢いていたそれは、今はもうピクリとも動かず、ぐったりと床に垂れている。

「…殺しなさい。」

先ほどまでの狂ったような色は、その声からは感じられない。震える吐息とともに紡がれたアレーの言葉は、とても静かな響きだった。

「お前は、私に何を望んでいた？」

それに促されるように、考えてもいなかった言葉がリュウキの口をつく。

その言葉にアレーは小さく笑うと、盲いた目を静かに伏せた。

「…光が、欲しかったの。」

「光？」

「そっ…ひかり…美し、い…わた…しの…。」

再び開いた瞳は何かを見つめるように揺らめき、一瞬リュウキのもとと合わさるとそのまま命の輝きを失った。

紡がれた言葉の意味はすっかりとは判らなかったが、何となく、そう何となく、闇の世界で飼われていた彼女の願いがリュウキには解った気がした。

しばらくその死に顔を見つめていたリュウキは、そっとエウリュア

レーの生気の無い目に掌を添えると、ゆっくりと滑らせてアレーの
眼を閉じた。

吉報

きらきらと。

白い火の粉を巻き上げながら、光のような炎が魂を失ったエウリュアレーの肉体を焼いていた。

炎を司るシロの、浄化の白炎。

それは、哀れなゴルゴネスの屍を黒く醜い塊に変えることなく、まるで光が飛散するように焼かれる傍からさらさらと粒子となって分解されていくようだった。

まるで光の中に還るように。

そう長くは無い時間だったが、リュウキを先頭にその光景を見つめる影たちは、言葉にならない思いを胸に、闇の中で生きた彼女の最期をしっかりと目に焼き付けた。

擦り傷等の軽症を除き、動きに支障が出る程の怪我を負った者が4名。

敵陣に乗り込んでこの程度で済んだのは、やはり彼らが優秀だからだろう。

あとは、シロという味方もあったからか。

エウリュアレーの屍を片付けたリュウキたちは、闇の扉の前に置き去りにしていた魔術師長を伴い建物の外を目指した。

転移の陣を担当していた別働隊は既に無事任務を終え、建物の入り口付近に身を潜めているらしい。

事が終われば長居は無用。後は見つかる前に退散するだけである。

シロのおかげでしつかりと建物内と外部が遮断されていたため、無駄に衛兵が駆けつけることもなく、一団は脱出することができた。王城の壁を越えた瞬間シロが陣を解いたので、しばらくすれば魔術研究棟の異変に気づかれるだろうがその頃には後の祭である。

転移の陣も無い彼らには、ヒリュウへ攻撃をしかけることも、逃げることもできないので、真つ向からリーンへ進軍するか降伏するかしないだろう。

もつとも、この愚かな魔術師長が、ゴルゴネスを創るためにそれなりの数の魔術師を犠牲にしたため、レキには戦を仕掛けるほどの戦力は残っていないだろうが。

それこそ、リーンの騎士団ですら余裕で勝利を掴めるほどに。

まあ、ヒリュウに有利な条件で同盟を進めるためにも、それらをリーン側に報告する必要はないのだけれども。

リーンへ帰還する道すがら、一人の死者を出すことなく術師長という捕虜まで手に入れて成し遂げた諸々の報告を二匹の蜥蜴に持たせ、一方をヒリュウの王と宰相に、もう一方をリーン王城にて待つ大將軍に送った。

その表情は少しの安堵を滲ませていたが、隊長としての意識か、未だ警戒の色を濃く浮かべていた。

「ライ！ロウ！進軍の準備をしろ！」

兵舎の入り口でシキの晴れ晴れとした声が響く。

その声を受けた当の二人は、言葉の意味を理解して顔一面に喜色を浮かべた。

「奇襲が成功したんですね！」

「ああ、死者も無い。明日の朝には戻るそうだ。」

その声に周りで聞いていた何人かの騎士や術師たちも胸を撫で下ろす。

彼らはリュウキたちが“影”ではなく、参謀と騎士・術師の精鋭だと思っっているので、今回の少人数での奇襲を誰もが案じていたのだ。

「それから、ロウ。」

「はっ」

「レキから魔術師長殿がおいでだ。丁重にもてなせ。」

にやりと笑って告げられた言葉に、術師隊の長であるロウが僅かに目を見開く。

「一国の魔術師長が…それはまた、もう戦況は見えたも同然ですね。」

「ああ、おそらくレキは総崩れだ。今回の戦、これで負けたら皆家名返上だな。」

「それどころか恥ずかしくて国境またげませんで。」

二人の会話に苦笑を浮かべたライが口を挟んだ。

確かに、長を失った魔術師の国に竜騎士まで担ぎ出して戦をしかけるのだから、負けたら末代まで笑われるに違いない。

リュウキからの報告は、それほどまでにヒリュウとリーンの優勢を示すものだった。

レキは既に落ちたも同然である。

「こりゃあ、剣を交える前に降伏の声が聞けるかもなあ。」

「そうならば一番いいんですがね。」

そう、どんなにレキの戦力が落ちていとはいえ、剣を交えればこちらも無傷とまではいかないだろう。叶うことならば、開戦前にレキが降伏してくれるのが一番良かった。

ただし、ここまで派手な奇襲をかけたので、レキ側としてもそう上手くは落ちてくれないだろうが。

現在のレキ王が、民を第一に考え王としての矜持よりも国の安寧を考える賢王ならば可能性はあるだろうが、残念ながらそうは思えなかった。

それは、件の愚かな魔術師長をのさばらせて置いたことだけを見ても判るだろう。

「何にしろ、油断はするな。奇襲部隊が帰還すれば、直ぐにでも出る。」

「「御意。」」

術師隊と翼竜隊の隊長二人が同じ動作で膝をつき、シキに向かってしっかりと頭を垂れた。

リュウキの無事も確認し、気分が良かったせいかもしれない。

少し中庭を回って戻ろうなどと思わなければよかったと、シキは僅かに眉を寄せた。

うんざりと視線を向けた先には、先日手心を加えたとはいえ殴った男が、己を見据えて道を塞いでいた。

そのもの言いたげな視線に、ついつい深い溜息を漏らしそうになりながらも、僅かに息を吐くに留めた自分を誰か褒めて欲しい。

「で。リーンの神子様が他国の武官ごときに何の御用でしょう。」

面倒極まりないという気配が若干出てしまっていたが、それくらいはご愛嬌ということだ。

相手はその空気を読み取ったのか、不快げに眉を寄せながら自分よりもずっと高い位置にある顔を見上げて目を細めた。

「リュウキのことだ。奇襲って何だ、どういふことなんだ!？」

「…今更かよ。」

シキにしてみれば、任務完了の知らせを受けた今、確かに今更な話である。

が、修也にしてみれば、ヒリュウに戻るだけと聞いていたのにあの突然の出立で、詳しい話を聞きたくとも他国の大將軍という地位に就いているシキに、神子とはいえ實際居候の自分が声をかけるわけにもいかず悶々と時を過ごしていたのだ。

偶然ばったり道を塞いでしまったこの状況は願っても無いことだった。

確かにリュウキを裏切ったという後ろめたさはあるものの、大事な従妹ということは変わりないので、彼にとっては女の子であるリュウキが敵国に侵入しているこの状況に心配と不安でいっぱいなのである。

それにリュウキがリーンを発つてからずっと考えていたので、もうシキに対する畏怖よりも心配する気持ちが上回っていた。

「俺は聞いてないぞ!」

「そりゃあ、言っていないからな。」

うんざりと答えるシキは、もう隠そうなどとは思っていないらしい。彼はリュウキが大事なのであって、目の前の彼女の従兄のことなど考えてやる義理はないのである。

「何故言わなかった！？ていうか女にそんなことさせんなよー！」
「お前に言う必要があったのか？というか、そんなことを言う権利がお前にあるのか？」

まあ、一応言うとはひっくり返りそうだったからという理由はあるのだが、それを説明するのも面倒なシキは切り捨てるように答えた。

「なっ…それはっ！」

必要は、無い。言う権利も確かに無い。

昔の話はさておき、修也とリュウキには薄いが血という絆がある。

しかしそれも、今の彼らの立場を考えると重要視されることでもなかった。特にシキにとっては。

寧ろ彼にしてみれば、修也は大事な家族を傷つけた憎い対象でしかない。

修也もそれは痛感していた。だから言い返せない。
ぐっと押し黙る修也に、シキが再び溜息をついた。

「もうお前が知るリュウキじゃない。」

いつか聞いたその言葉に、修也が怯えるようにぴくりと肩を揺らした。

「俺はそう、言ったよな。お前、まだ理解してなかったのか？」

「…いや。」

理解はしていた。この短期間で見た従妹は、確かに彼が知る彼女ではなかった。

「本人は言うつもりないだろうし、俺も詳しく言うつもりはねえが……」

何を話し始めるのかと、修也が暗い顔を上げる。

「あいつ……リュウキはヒリュウに仕官する前、お前が想像つかないような地獄を見てきた。」

「……」
「あいつがこの世界に落ちたとき、山脈の南側：ヒリュウとホウは荒れててな。海を越えて押し寄せる諸外国の船団と戦争してたんだ。」

長い長い戦乱の世。

今でも各地に傷跡を残すそれは、現在の繁栄が嘘だと思える程ヒリュウに血と暴力という不幸を撒き散らしていた。それは、王城から遠く離れ小さな田舎の村ほど影響が酷く、十七歳のリュウキが落ちたのはそんな暗雲立ち込める荒れた大地の真っ只中。

「今までここで生活してきた奴らでさえ今日を生き残ることで精一杯だったんだ。知り合いもいねえ、言葉も解らねえ、そんな娘に生きろっていう方が酷だろう。」

この世界に落ちて一年も経たない修也には、情景すら浮かばなかった。今現在、レキとの戦争ですら実際に見てもいないし話を聞いて知識としてあるくらいである。
解らない。それが情けない。

「お前に解るか？訳の解らない世界で、いきなり斬りつけられる恐怖を。檻の中に入れられ、まるで獣のように扱われる屈辱を。」

それは彼女の過去なのか。修也はシキの言葉に混じる怒りと、従妹の暗い過去の片鱗を感じ息を呑んだ。

「あいつは全部乗り越えて今を生きている。心配するのは勝手だが、あいつの今を否定するような発言はするな。」

お前とは格が違うんだ、と。

男の目に浮かぶ侮蔑の色に、修也は唇を噛んで頂垂れるしかなかった。

進軍 1

奇襲隊帰還の知らせがシキの下へ届いた頃、ヒリュウの翼竜隊・術師隊・騎士団、それからリーンの全騎士団の同盟軍は既に王城前の広場で進軍の準備を整えていた。

ヒリュウ軍の総司令は、王弟シキ・ヒリュウ。

リーン軍総司令は、王太子であるジャン・リーンが務めることになっている。

リーン軍には他に、第二王子であるレイベルトも参戦するようだ。

彼は武よりも戦略に長けた王子なので、参謀としての意味合いが強いだらう。

他にも、リーン側には経験の浅い王子たちを助けるために、彼らの脇を固めるように老齢の騎士、おそらく將軍だらう。恰幅の良い男が二人揃っていた。

実は奇襲隊からの知らせを受ける前にはもう準備を始めていたので、今日の夕方には進軍できるようになっている。シキが如何にリュウキを信頼しているかが伺えるだらう。

早朝凱旋したリュウキ率いる奇襲隊の隊員は、リーン王城正面から入らず兵舎側の小さな門から帰還した。

レキの魔術師の正装の象徴である長い外套はレキを出るときに脱ぎ捨て、中に着ていた簡単な上下に一般的な土色の外套を身につけた彼らはどうみてもみすばらしい旅人のようだったが、もともと示し合わせていたため簡単に入ることができた。まあ、リュウキの金目を見れば彼女がヒリュウの宰相補佐だということはすぐに判るだらうが。

兎に角、無事帰還した彼らは、そのまま兵舎で待機していたロウの

下へある目的を果たすために向かったのだ。

「ロウ。」

リュウキは部下を伴い、ヒリュウ術師隊が駐屯している兵舎の小さな会議室のような部屋に来ていた。中には隊長であるロウがもともと組み上げていたのだろう、人が三人ほど入れる複雑な陣を広げて待っている。

「リュウキ様、お疲れ様でした。」

「ああ、ありがとうございます。」

銀髪の若者が切れ長の目を細めうつすらと笑みを浮かべて彼女を迎えた。その声には、リュウキを労わる気持ちと、確かな信頼がにじみ出ている。

「では、奇襲部隊の方々は順にこちらの陣に入ってください。流石に回復も無しに参戦はきついででしょうか？」

「ああ、助かる。」

どうやらロウは、疲弊して帰還するだろう奇襲部隊の面々を気遣って、回復のための陣を作っておいてくれたらしい。

魔將軍とも呼ばれる彼の魔力はそれこそヒリュウでも一級品で、その攻撃術も然ることながら回復術も並外れたものを持つ。ヒリュウ国自慢の術師の一人である。

リュウキはロウの言葉に笑みを浮かべて答えると、そのまま背後を

振り返りギイを先頭に順に陣に入るよう促した。

彼女自身は陣に入らず、部下の一人から大きな麻袋を受け取り、少し重そうに担いでロウの元へ向かう。しかし、そんな彼女に背後から待ったの聲がかかった。

「リュウキ様、何をなさってるんです。貴女が一番消耗してるんですから先に陣にお入りください。」

言わずもがなギイである。

リュウキは僅かに眉を寄せると、その声に言い返すべく口を開こうとした、が。

「そうですね、貴女はシキ様の大事な方。さつさと回復してください。」

今度は前方から彼女には若干意味の解らない言葉が掛けられた。

挟み撃ちとはこのことだ、と納得のいかない顔でぱくぱくと口を動かしていたリュウキが、深い溜息をついて麻袋を床に投げ出す。袋からは小さな呻き声が聞こえたが、誰も気にすることなく彼女を見つめていた。

どうやら、ギイの背後に居る者たちも、リュウキが陣に入らない限り動かないつもりのようなのだ。

「…忘れてた。お前ら二人揃うと碌な事が無いんだった。」

ぶつぶつと文句を言いながらリュウキは陣へと足を進める。

そう、ギイとロウ、この二人は宰相の覚えも良く、公私問わず話すことが多いからか、最近頓に性格が似てきている気がするのだ。勿論、ヒリュウの黒い宰相様にある。

リュウキにとってはあまり嬉しくない状況だった。一人なら兎も角、

二人揃うと口で勝つのは容易ではない。

こういうときは、早々諦めて言う通りにした方が精神的ダメージが少ないことを、リュウキは既に学んでいた。

どうでもいい話だが、このロウという男に加え、シキの直属の部下であるライの両名は、自他共に認めるシキ信者である。勿論、それとは別に王であるシンにはしっかりと忠誠を誓っているのだが。

リュウキは床に焼き付けられたように敷いてある陣の上に足を踏み入れた。そのまま、中央の何も描かれていない、円の中心に立ちゆつくりと目を閉じる。

すると、足元の陣がぼんやりと光を放ち、少し黄みを帯びた光が彼女を包んだ。黒い髪がゆつたりと揺らめく。

ものの数秒で起こったそれは、リュウキが目を開くことで終わりを告げた。

彼女はそのまま陣の外へと向かう。

「うーん、流石ロウの回復陣。完璧だ。」

己の掌を見下ろし、開いたり閉じたりしながらリュウキが感心したように呟いた。

「ふふ、ありがとうございます。では、皆さんもどうぞ。」

その言葉にロウが嬉しそうに笑みを浮かべ、背後に続く隊員たちにも陣に入るよう促した。

ぞろぞろと、次から次に陣に入る部下を確認したりリュウキは、床に放っておいた麻袋に歩み寄ると、今度は苦も無くそれを脇に抱えた。そのままロウを振り返り、視線を合わせると彼も心得ていたようで

しつかりと頷く。次いで二人で陣から離れた部屋の隅へと向かった。

「シキから聞いてるな。」

「ええ、間抜けな魔術師長どのはこちらでお預かりいたします。」

「ああ、夕刻までに頼む。」

綺麗な笑顔を浮かべたロウの目は、先ほどとは違い冷めていた。

リュウキはロウに告げながら、準備してあった粗末な木の椅子に麻袋をどさりと下ろす。ちょうど先端の部分で括られていた紐を解くと、ずるりと下がった麻布から一人の男が顔を出した。

奇襲部隊がレキから連れ帰ってきた魔術師長ライズである。

「また：随分と締りの無い顔をされていますね。」

まるで汚いものでも見つめるようにロウが呟いた。

ライズには未だリュウキの傀儡の術がかかっているようで、彼の瞳は虚ろに開きだらしく開いた口からは涎が垂れていた。

「暴れられても面倒だから、結構強めにかけたんだ。」

少し申し訳なさそうにリュウキが呟く。勿論、彼女のその気遣いが向けられたのはライズではなく、ロウに対してだ。

「まあ、これくらいなら簡単なお話くらいはできるでしょう。まだ僅かに自我は残っているようですし。」

笑顔で応えるロウに、ほつと息を吐いたリュウキが小さく頷いた。

「じゃあ、後は頼んだ。」

「お任せください。」

この綺麗な若者が、にっこりと浮かべた笑みの奥に真っ黒な心を隠していることは、この場に居る誰もが知っている。恐らくこれから容赦の無い尋問をかけるつもりだろう。

それもこれも、これから進軍するシキのためである。

リュウキは軽く苦笑を零して、部屋を後にした。

進軍 2

ここ数日顔を隠していた太陽も今日は姿を見せ、雲ひとつ無い真っ青な空がどこまでも続いている。

リーン王城には、戦の幸先を示すように爽やかな風が吹いていた。真っ白な石造りの広場に集うのは、ヒリュウ・リーン連合軍の猛将とそれを支える兵士達。綺麗に列を成す姿は、大陸の長い歴史の中でもそう見られるものではないだろう。

広場尾王城側、整列する兵士達の正面には、一際目立つ甲冑を着込んだ將軍や王族が顔を合わせ、それぞれ何事かを確認するよう話し合っていたり、連合軍の全景を見据えていたりと様々である。刻々と近づく出陣の時間まで、各々緊張の時を過ごしていた。

「シキ様。」

その姿が広場に入った途端、ばらばらだった多くの目が彼女に集まる。

職業柄注目されることに慣れてしまっているリュウキは、特に気に留めることもなく己の上官である大將軍シキのもとへと近づいた。彼女らしからぬ敬称は、勿論場所を考慮してのことである。

はつきりとはりのある声に、シキが目を向けた。どうやら彼は王子と話をしていたようだ。リュウキにはシキが壁になって王太子が見えなかったらしい。彼女は申し訳なさそうに頭を下げながら近づいた。

「ご苦労だったな、リュウキ。」
「本当に。リュウキ殿のおかげで此度の勝ちが決まったようなものだな。」

シキとジャンがそれぞれ声をかける。ジャンは心底そう思っているようで、その目には尊敬の色も浮かんでいた。彼らの言葉にリュウキが僅かに苦笑して小さく首を振る。

「勿体無いお言葉です。それに、此度のことは私一人では成し得ませんでした。優秀な部下達のおかげですよ。」

彼女は決して己を過信しない。これまで挙げた多くの功績も、周囲の手助けがあつたからこそだとしっかりと理解している。それはシキやリュウキの部下達にとって、とても好ましいことであり、彼女に多大な信頼を寄せる所以でもあつた。

ただ、それは高い地位にある者ほど理解するのが難しいことである。普通はそうは思えない。挙げた功績は全て己のものにしたいのが人の心情だ。それが戦を左右する程の功績なら尚更。

だから、いとも簡単にそんな言葉を返すリュウキに、ジャンは僅かに目を見開いた。

「謙虚な方だな。普通は部下の功績も当たり前のように己のものだと言つたろうに。」

「こいつはそういう奴なんですよ。」

言われた本人よりも嬉しそうに応えたのはシキだ。まるで身内の誉れは我が事とばかりに明らかに喜んでいた。ともすれば、何万何千という兵が見ている前で頭でも撫でられそうな勢いである。それは流石に勘弁してほしいリュウキは、それとなくシキから一步身を引

いた。

「それよりも、お話中でしたよね。腰を折って申し訳ありませんでした。」

「いや、構わない。まだ刻限まで時間がある故、経験豊かなヒリュウの大將軍殿に兵法についてご教授を頂いていたところだ。」

「それはそれは、是非私も一緒にさせて頂いてよろしいでしょうか？」

「そんな大層なものでは無いんですがね。」

ジャンは本気で言っているものの、リュウキは明らかにふざけ半分である。面白そうに目を細めるリュウキを見て、シキは小さく溜息をついた。

リュウキの持つジャンの印象は、そう悪いものではなかった。

文武、どちらかという武寄りの王太子は若く生気に満ち、父王譲りの寛大さと風格を持ち合わせた王子だと思う。少し若さが目立つが、それは年を重ねれば問題ないだろう。

おそらく、彼の国の次代の世も揺らぐことはなさそうだ。

それに、彼の周りには王を補佐する人材も申し分なく揃っている。第二王子のレイベルトはその筆頭で、次代の王を支える次の宰相は彼に違いない。これは周囲の認めるところでもあるらしく、実際レイベルトは普段から現宰相に付き従い、政や外交を学んでいるようだった。

文に秀でた第二王子と、武に秀でた王太子。仲も悪くはないのでリ

ーンは次の御世もしつかりと安定して治められるのだろう。
これならきつと姫君も幸せになれるに違いない。
シキとジャンの話聞きながら、自国で待つシャルシュを想いリュウキは満足気に目を細めた。

太陽が僅かに傾き、白い石造りの広場を濃い色の光が染めている。
奇襲のために出ていた人員も、それぞれ割り振られた部隊に入り改めて整列していた。

先ほどまで打ち合わせをしていた將軍や王子たちも彼らの前に整列し、その中央には王太子とシキを従えたりーン王が僅かに細めた目で全体を見渡している。その眼からは普段の柔らかさが消え、見るものに畏怖を覚えさせるような威圧感が伺えた。

流石にレキという魔術大国から騎士中心の武力で国を守り続けただけのことはある。

「多くは言わぬ。ただ、勝ちて帰ることを信じて待つ。」

たった一言。

かけられた言葉はそれだけだったが、低く響くその声はしつかりと兵たちの心に届いたらしい。次の瞬間、広場は地を揺らすような歓声に包まれた。歓声というよりは、士気を煽るような雄叫びと言った方が正しいだろう。

大地も震える叫びに眉一つ動かすことなく、王はしつかりと頷いて出陣の号令をかけた。

グウレイグ河畔にて開かれた戦端は、ヒリュウ・リン連合軍三万五千、レキ軍二万という大規模な布陣を見せたにも関わらず、戦い自体は行われなかった。レキ王が和平を申し入れ、兵を引いたからである。

リユウキ率いる奇襲部隊が魔術大国であるレキの戦力と思惑を事前に打ち砕いたため、レキ王が怖気づき要は命乞いをしてきたのだ。

グウレイグ河を、少数の側近だけを連れ敵陣へと渡ったレキ王は青白く悲壮な顔をした老王で、ヒリュウの属国になる代わりに一族の存続を願い出た。これにより、一国の存亡をかけたこの戦は、ヒリュウ・リンの無血勝利に終わったのである。

そして各国の動向を決める細部の話し合いは、山脈を越えたヒリュウの地で行われることとなった。

瑠璃の誓い

なんとも呆気ない戦終焉の知らせは、すぐにヒリュウ王城にも届いた。

とはいえ、殆どはリュウキ率いる奇襲部隊の決死の働きが決め手であるということは周知の事実なのだが。

この遠征中、ヒリュウ・リン間を一番多く往復している俊翼の蜥蜴が、ヒリュウ王と宰相の下へ舞い降りたのは、グウレイグ河での布陣から一日足らずのことだった。

「シキ様より、蜥蜴が来ました。」

「降伏したか。」

「そのようですね。」

シキが事ある毎に蜥蜴を飛ばして報告していたので、シンもコウリモレキの状況を時を遅えず把握している。諸々の状況を考え、最終的にはレキが降伏を選ぶことは予想できていた。

「思ったより早かったな。」

「ええ、かなり大掛かりな企てをしていたので、それなりに粘るかと思いましたが、全ては王ではなく魔術師長が動いていたようですね。」

「現レキ王の器が知れるな。まあ、理由はどうあれ引き際を弁えているところは認めてやるう。」

コウリに渡された小さな紙切れを見ながら、シンが遠きグウレイグ

の国境を思い目を細める。

これからレキは、リーンを通してヒリュウが支配することになるだろう。それはレキ王が望んだことであり、やり方を間違えなければ現状を嘆く声の多いレキの民達も納得するはずだ。

国を一つ潰せば、その分そこに暮らす民達や彼らの土地を奪うことになる。それは、国一つ分の人間の恨みを買うことになり、それを拭うには現ヒリュウ王であるシンの一生を捧げても難しいだろう。今回、無血勝利を収め、レキの民とその土地を侵すことなく戦を終えたことは、ヒリュウにとって多大な意味を持っていた。山脈と海を越え、翼竜隊も出し兵力を注いだ甲斐もあるというものだ。

「リュウキには本当に頭が上がらん。」

「ええ、今回の彼女の功績は前大戦に勝るとも劣らないものになりましょう。」

満足気に息を吐いたシキが小さな紙を机に放り、背もたれに体重をかけながら目を閉じる。

三年前、近寄る者全てに牙を向け孤独と戦っていた女が、今は自分達を家族と思い、家であるこの王城、故郷となったヒリュウの地を守るために戦っている。

未だ前線で、時には血を流しながら身体を張っていることは心配ではあるが。

まあ、そろそろ王城で落ち着いて欲しいというのが彼らの本心だ。

「コウリ。次は俺たちの出番だぞ。」

「ええ、心得ております。シキ様とリュウキの働きに応えるために、抜かりなく全て終えてみせましょう。」

これから各々の国の軍を引き、ヒリュウの地で戦の終結を宣言しそれに伴う盟約を結ぶことになる。

大陸の統一。

シキが立太子として立つてからの夢が、遂に実現しようとしているのだ。

ギラギラと、国の未来を見据えて強く輝く翡翠を見ながら、コウリは高まる心を抑えるように目を閉じた。

連合軍凱旋の知らせは、リン王城に届くとすぐに国民にも布告された。

これまでレキの脅威に怯えていたリンの国民は歓声を上げて喜び、自国の騎士たちとヒリュウの英雄たちに感謝の歌を捧げた。

レキの国民は、降伏の知らせを受け誰もがこれまで以上の苦しい生活を覚悟したが、グウレイグ河を越えることなく軍を引いた連合軍に取り敢えずの安堵を感じていた。

まだしっかりと盟約が交わされていないため、未だレキ国民は不安を抱えて生活しているものの、ヒリュウで条約が交わされればそれもすぐに落ち着くだろう。

ヒリュウでは勿論、自国の英雄達に向けて、その圧倒的な強さに改めての敬意払い、まるで祝砲のような歓声でもって彼らを迎えた。グウレイグ河での対峙からおよそ一週間後のことである。

グウレイグ河から凱旋し、リン城下町を上げて迎えられた連合軍は、王城にて盛大な祝福の宴を上げ、その後シキとリュウキ率いる翼竜隊の面々を残し、再び港を介してヒリュウへ帰還した。翼竜隊

も今回は山脈ではなく船と同じ道筋で帰還することを予定していたが、どう考えても船より翼竜隊の方が早く移動できることから、ヒリュウへの入城を合わせるために彼らの帰還を遅らせたのだ。

ヒリュウの大軍が引いたあとのリーンの王城は随分と静かになり、以前の落ち着きを取り戻していた。以前と違うのは、城を取り巻く空気の明るさだろうか。

今、王城の一角では明朝リーンを発つシキ達との別れを惜しみ、王族と側近達が宴を開いていた。

シキは武官の衣装を纏い、リュウキはカルドウス王より贈られた艶やかな衣装を身に纏っている。

リーンの民族衣装を意識したそのドレスは、淡い色を重ねた薄い絹の踝まである布を、腰の部分で色鮮やかな太めの帯で纏め、首下や四肢の先を細かな金の装飾で飾った華やかなものだった。

普段着慣れない衣装に、若干動きがぎこちないリュウキを見て、隣に座るシキが小さく笑う。

因みに、ギイは影たちを率いて先に船で帰還しているのでこの場にはいない。

連合軍の凱旋の折、盛大な宴の席が設けられたにも関わらず、覚めやらぬ喜びを表すように皆祝杯を掲げていた。王も今宵は無礼講と決めていたのか、いささか箍が外れた面々に柔らかい目を向けている。その隣には苦笑を浮かべながらも、安堵の色を浮かべた王妃がゆったりと座っていた。

リュウキは酒気の漂う広間を見渡し、少し風に当たろうと杯を持つたまま中庭に出た。周りは誰もそれを咎めることなく、次々と杯を

重ねている。

しばらくそうして風に当たっていると、背後から誰かが近づくと気が配がした。

「リュウキ様。」

高く澄んだ声が夜風に消える。

リュウキは声に応えるように、ふわりと裾を遊ばせながら振り返った。

「これは…ライラ王女殿下。」

意外な人物にリュウキは僅かに目を見開き、次いで軽く腰を沈めて礼をとる。

「ご一緒してよろしいかしら？」

「ええ、私などでよろしければ。」

貴族の姫君のように着飾ったリュウキから、まるで騎士のような言葉を受けライラは小さく笑った。

リュウキも自覚はしているのか、それに苦笑で返す。

「此度のこと、本当に感謝しております。私などが言うのは痴がましいことですが、リーンに住まう者の一人として礼を申します。」

「それこそ私には勿体無いお言葉です。私は自国を守るために動いたに過ぎません。」

「それでも、貴女方が取った行動でリーンが救われたことは変わりありませんわ。」

ゆったりと微笑む第一王女の目には強い光が宿っていた。

リュウキはそれを見て、もしかするとあの賢王の血を一番濃く引いているのは、王太子ではなくこの姫かもしれないと、頭の端で何となく思う。

ライラの言葉に深く礼を取り直し、謝辞を受け入れたリュウキは第一王女の燃えるような赤毛を見つめて僅かに目を伏せた。しばらく無言だったライラがふと空に視線を向けて目を細める。

「…シユウから、貴女のことを聞きました。」

唐突な言葉にリュウキは杯に添えた手をピクリと揺らす。しかし、その表情は先ほどと寸分違わぬもので、彼女の心の動きは読めない。

「私のこと、と言いますと？」

応える声も静かに凪いでいた。

「貴女がシユウと同じ世界から来たこと。貴女とシユウが血族であること。…そしてその関係も。」

その言葉に、リュウキの眉が少しだけ寄った。それは殆どのことを話したであろう修也に対する非難ではなく、純粹な困惑だった。さて、どう言ったものかと失礼を承知で杯に口をつける。

「王女殿下はそれを知って私に何を？」

出てきたのは些か淡々としすぎたものだったが、ライラは構わず口を開いた。

「私は…貴女から大切なものを奪ってしまったのですね…」

その言葉に今度こそ不快を感じたりユウキの眉がきゅっと寄る。その後が続くだろう言葉を遮るために、リュウキは少し口調を強めて告げた。

「謝罪はいりませんよ。どう聞いたか知りませんが、私にとっては全て納得した上で終わったことです。」

「…謝罪は、しません。私もそのような生半な気持ちではありませんし、それほど愚かではありません。私が貴女に謝罪することは、リュウキ様への侮辱だと理解しております。」

では、何を言いたかったのかと、先を促すようにリュウキが首を傾げた。

彼女を見つめるライラの瑠璃色の瞳は、まるで夜空のように深い色を宿していた。

「ただ、貴女に伝えたかったのです。私のシュウへの気持ちを。世界を渡り、この地に落ちたばかりのシュウは、今の輝きなど見る影もなく、生を諦め己を殺しているようでした。」

それはリュウキがこの世界に落ちるまで、彼女が心を痛めながら見ていた修也だ。

「貴女はきつと、彼の傍でそれを案じ、彼の行く末を想っていたのでしょうか。だからこそ、その貴女に私は誓います。」

瑠璃の煌きがリュウキを捕らえる。

「私は、シュウを必ず守る。あの笑顔を一生守り続けます。」

白い面は決意を浮かべ、強い意志を持って放たれた言葉はリュウキ

の胸に確かな熱を宿した。それこそ、まるで騎士のような言葉にリュウキがゆつたりと笑みを浮かべる。

剣を持つでもなく、魔術を行使するでもない。

この姫が武に秀でているという噂など終ぞ聞いたことはなかったが、それでもその言葉はリュウキの信頼に足るものだった。

これほどの姫が、異国の地にいたとは。

リュウキの心には確かな喜びと、姫に対する敬意の念が浮かんでいた。

「貴女のような方に出会えて、私の従兄は本当に幸せだ。」

ほっと安堵を滲ませた言葉にライラの肩が僅かに震える。

「これからも、私の大切な従兄あにをよろしくお願いいたします。」

ゆらりと揺れた瑠璃色の瞳を見つめながら、リュウキは深く頭を下げた。

凱旋 1

真つ暗な洞窟の中、ぱきりと何かが割れる音が響く。

それは小さな小さな音だったが、確かに何かが崩れる音だった。

何百、何千もの月日の間、誰一人として立ち入ることの無かった氷の洞窟に、今その時が訪れようとしている。

ぱきり。

ぱきり。

暗闇の奥、巨大な氷の壁の表面の小さな欠片が、一つ、また一つと崩れ落ちた。

その音は留まることなく延々と続き、ぱらぱらと複数の欠片が零れ落ちる程になる頃、洞窟全体がずずずと地鳴りと共に震え始めた。

みし、という音と共に氷の壁が悲鳴を上げる。

今度はどさりと、洞窟の入り口を塞いでいた雪が滑り落ちた。

長い年月、洞窟と外界とを遮断していた雪の一部が崩れ、暗闇の中に光の筋が落ちる。

洞窟内は青白い氷の壁で出来ており、僅かに射した光の筋を反射して洞窟の奥を淡く照らした。

最奥と思われた氷の壁は、ごつごつとした他の部分と違い、透明感を持っていて薄っすらと中が透けて見える。青く不気味に光る氷の内部に、じわりと滲むように何かの影が見えた。

と、次の瞬間。

ビシイイイイイ...

空間を裂くような音が洞窟に響き、影を包む氷の壁に蜘蛛の巣状のヒビが走った。

右上の端から走ったそれに続くように上下左右からも、大きく、小さくヒビが走る。

ごとり、と音を立てて、壁の一部が落ちた瞬間、まるで胎動するよううに滲んだ影がゆらりと動いた。

「お兄様！」

バン！と音を立てて両開きの扉が勢いよく開いた。思わず顔を上げたシンとコウリの目に、ふわりと金髪を揺らし頬を興奮で僅かに染めたヒリュウ国第一王女シャルシュ・ヒリュウの姿が映った。

「シャルシユ様：せめてノックをなさいませ。」

その王女らしからぬ作法に、コウリが眉を寄せて米神を引きつらせる。

「あら、ごめんなさい。でも居ても立ってもいられなくて。」

ことりと小さく首を傾げながら、シャルシユが申し訳なさそうな笑みを浮かべた。しかし反省の色は見られないので言われることを承知で入ってきたのだらう。確信犯だ。

コウリが小さく溜息をついた。

「お気持ちは解りますが、貴女が焦ったところで帰還の時刻は早まりませんよ。」

「解っているわ。でももうそろそろ着いてもおかしくない時間でしよっ?。」

そわそわと落ち着きの無い仕草で頬に手を当てたシャルシユが彼らの傍まで近づいてきた。彼女も連合軍凱旋の知らせを受けてはいるものの、やはり己の目で見るまで安心できないらしい。

「ねえ、お兄様。私、広場で待っていてはいけなにかしら?。」

「そう急くな。姿が確認でき次第知らせるよにと…」

苦笑を浮かべながら告げたシンの言葉を遮るように扉を叩く音が響いた。

その音を聞くなり、脇に控えていた近衛が扉を開くのを待たず、シャルシユが入り口へ駆け寄る。

開かれた扉の前には城内警備に当たっている兵の一人が少し息を切らしながら立っていた。

おそらく駆けてきたのだろう、彼はドアが開くなり正面に構えていたシャルシュに驚き、びくりと肩を揺らした。ふわふわと揺れる金髪と白磁の面を至近に見つめ、彼の顔が真っ赤に染まる。

「しつ失礼しました!！」

「あら、待って! 違うのよ、ごめんなさい。大丈夫よ、早く報告してちょうだい。」

何を思ったか反射的に踵を返そうとした兵士に、今度はシャルシュが驚いた。

慌てて声をかけ報告を促しながら、彼と王の間を阻まないように身を引く。

おろおろとお互いに場を譲り合う姿に、奥で見ていたシンとコウリは溜息をつきながら苦笑を浮かべた。

「良い、気にするな。翼竜隊が見えたか？」

王の言葉に、慌てて姿勢を正した兵士が声を上げる。

「はっ! 王城北東側の空に確認しました。本隊の方も今しがた城門に入ったとのことです!」

「ご苦労。では、皆で迎えに行くとするか。」

シンが手にしていた書類を机に放り、席を立つ。シャルシュも兄に続こうと横に並び、いつもは口煩い宰相も、今日は文句を言わず部屋を出る王に続いた。

ゴオオオウ、と。

いくつもの旋風を巻き起こしながら、巨大な竜達が舞い降りた。

先頭は光の中黒々と映えるシキの黒竜。

その背後に続くのはライの燃えるような赤竜である。

出陣の折はバルコニーで送り出したヒリュウ王家と側近の面々だったが、今回は同じ広場に降りてきていた。

王城の広場を吹き抜けて行く突風に、王の真っ白なマントが大きく翻る。

シンは太陽の光に目を細めながら、黒竜の背に乗る二人を見上げた。逆光で表情の細部は見えなかったが、すっと首を垂れた竜の背から一人ずつ地面に飛び降りるのが判る。彼らはそのままシンの方へと歩いてきた。

先頭はシキ、その斜め後ろに続くのがリュウキだ。彼らの背後でも、続々と竜騎士達が竜の背から降りていた。

シキとリュウキは真っ直ぐにシンの下へと進み、目の前まで来て流れるような動作で膝をつく。

そのまま一度垂れた頭を上げて、しっかりと王の翡翠を見つめた。

「遠征隊一同、誰一人欠けることなくただ今帰還致しました。」

堂々と誇らしげに告げられたシキの声は、凱旋の喜びに満ちた広場にしっかりと響いた。

凱旋 2

「それで、ジャン・リーン王太子殿下はどんな方でしたの？」

にこにここと、少し酒気で目元を染めたシャルシュが悪戯っぽい声で首を傾げた。

隣で杯を重ねていたシンとシキ、それからコウリがそれを聞いて一斉に固まり次いで溜息をつく。

シャルシュに至近距離で問いかけられたリュウキはきょとんと目を瞬かせていた。

「…シャル…いきなりそれは無いだろう。」

四人の代表のように呟いたシンの声に、シャルシュはにっこりと笑顔で返した。

「あら、どうして？戦の話ばかりでは折角の夜が台無しだわ！」

遠征軍が王城に帰還した後、夕暮れ時からヒリュウ王城で開かれた宴は、既に夜も更け既にちらほらと自室に帰る者たちが出始めている。後は残った面々で好きに騒ぐとして、リュウキたちは頃合を見てシンの私室の一つに引き上げ五人で改めて飲み直すことにしたのだ。

宴の間中、リュウキやシキは始終戦の話や他国の状況を質問攻めにされ、シャルシュやコウリはゆっくり話ができなかった。

シャルシュの主張に、それもそうだと頷いたリュウキが杯を傾けながら口を開いた。

「確かに、もうそろそろ飽きましたね。それに王子方のことは姫君

との約束でしたし。」

うんうんと頷くりユウキに、シャルシュがほら見るとばかりに兄二人と宰相を見やった。

「まあ、確かに私も気になるところではありません。で、リユウキ、どうだったんです？」

納得したように、リユウキに続いて頷いたコウリが彼女に目を向ける。

初めにシャルシュを嗜めたシンも気にはなるらしく、つられるようにリユウキに目を向けた。シキは実際会話をしているので聞きたいことはリユウキの評価の方である。

色とりどりの四対の目がリユウキを見つめた。彼女は少し考えるように宙に視線を彷徨させた後、静かに口を開いた。

「そうだなー…まあ、賢王の息子だけあって、そう悪い方ではなかったな。勉強は苦手のようだが出来ないというわけではないし、武に秀でたお方だ。」

「あら、じゃあ小兄様寄りの方なのかしら？」

「…俺寄りだと不満か、シャル。」

「ふふ、いいええ、そんなこと言っておりませんわ。」

からかうようにくすくすと笑うシャルシュに、シキが不満げに眉を顰めた。

「あー…でもシキのように両極端ではないので、文武両道と言えなくもないか。」

「おい、お前もどついう意味だ。」

「仕方ありません。残念ながらシキ様は知略には向いていないでしょう?」

追い討ちをかけるようなりユウキとコウリの言葉にがっくりとシキが肩を落とす。それを見た他の四人が一斉に声を上げて笑った。

「まあ、ほらシキの武は誰にも引けを取らないんだから自信持て。」
「リュウキ、それは間違ってるぞ。シキより俺の方が武に秀でている。」

「…兄上まで…俺に味方は居ないのか…。」
「何をおっしゃるの?小兄様はこんなに人気者ですのに。」

そういう人気者にはなりたくない、とシキが杯を重ねた。その肩を宥めるようにシンが軽く叩く。

結局は仲の良い兄弟なのである。
それを見てやんわりと微笑んだリュウキが再び口を開いた。

「王太子殿下は17歳。もう一人前と認められているとはいえ、未だ経験も浅く少々お若いところがあられる。」

「ああ、それは確かに俺も感じたなあ。」

「お年がお若いことは私も存じておりますわ。」

「いや、そういうことじゃねえんだよシャル。」

リュウキとシキの言葉にシャルシュが首を傾げる。が、シンとコウリは何となく理解できたようで、なるほどと呟きながら杯を重ねていた。

「おっしゃっている意味が解りませんわ。」

「ん……どう言ったらいいんだか。」

「シャルシュ殿、お若いというのは殿下のお年のことではありません

ん。確かにそれもあるとは思いますがね、落ち着きといいますか、何といたしますか。こつ、極端な話お心のままに突進してしまうことがあったりとか。…引くべきところは弁えていらっしやるので、暴君というわけではないのですが。」

「ふうん、やっぱり聞けば聞くほどシキお兄様だわ。」

「おい、俺はそこまでじゃねえぞ。これでも考えてるんだ。」

「存じていますわ。」

何となく解ったような顔のシャルシュがすぱりとシキの言葉を切る。それにまた笑い声が上がると、シキは諦めたように溜息をついた。それまで話を聞くことに徹していたシンがぐいと杯を傾けて口を開く。

「ならば、シャルにはちょうど良いかもしれぬな。」

「そうですね。他の王子方も才溢れる方ばかりでしたが、私もシャルシュ殿のお相手にはジャン王子がよろしいかと。」

「そうなの?」

「ええ、我らが自慢の姫君は、知に長け己を律することをしっかりと身につけていらっしやるので、多少若さの残る方の方が合つと思えますよ。」

手放しに褒めるリュウウキの言葉に、流石のシャルシュもちよつと照れたらしく、頬を染めて僅かに口ごもる。その可愛らしい姿にリュウキが小さく笑った。

「その方が制御しやすいですね。」

「ああ、そうね。そうだったわ、お母様がよく言っただらしたわね。」

リュウウキの言葉に、何かを思い出したようにシャルシュが頷いた。今は亡きシンとシャルシュの生母である前王妃は、貴族の出とは思

えぬ器の広さがあり、気品を持ちながらも活発で皆に慕われた方だった。側室を母に持つシキも、わが子同様に彼女に育ててもらったのだ。大戦の折に命を落とした彼らの父である王と運命を共にした、強く優しい女性である。

ただし、少しだけ突飛な言動が多い女性だったのだが。

「…母上はそんなことを言っていたのか？」

シンが米神をひくつかせながら眉を寄せた。

「ええ、よく私に話してくださいましたわ。夫婦円満の秘訣は殿方に悟られず操ることなんですって。」

いかにもあの王妃が言いそうなことに、男性陣が一斉に頬を引きつらせた。

彼女の言う殿方とは王のことではなかるうか。しかし、それを聞いた三人は確かに言われてみれば思い当たる節があることに気づき肩を落とした。

普段皆の前では威厳に溢れていた父が、母の前では別人のように崩れていた姿を思い出す。

シャルシユは構わず続けた。

「ええと…そうよ、お尻に敷くのが一番だと仰っていたわ。まずは優しく微笑みながらお話を聞いて差し上げること。それから安心させた上で弱音を吐かせるのよ。そうなればこっちのものだと…あら、お兄様方もコウリもどうしたの？」

王太子の未来を思い、少しだけ切なくなった三人は、得意げに話すシャルシユから目線を外して深い溜息を吐いた。誰も彼も哀愁を漂わせながら、今は亡き王妃に向けて、何てことを教えてくれたんだ

と心の中で呟く。

その影でリュウキがくっくと肩を揺らしながら笑っていた。

白い夢と黒い子供

どこまでも白い空間で、小さな影が佇む。

少年とも少女ともつかぬその子供は、闇を集めたような黒髪を背丈よりも伸ばし、白い地面に墨を零したような流れを作り出していた。

子供はこちらに背を向けたままぴくりとも動かない。

ただ、何かを求めるように白だけの頭上を見上げるのみである。

どこか心を締め付けられるようなその光景に、子供を抱き寄せようと近づくが、いくら足を動かしても子供に近づくことはできず、その小さな命を孤独で縛る白い空間に苛立ちを覚えた。

が、次の瞬間。

ざわり

足元から背を駆け上がるように悪寒が走る。

全身が震え、開いた毛穴からざわりと汗が滲むのが解った。

何だこれは。

身体全体で警戒しながら視線を向けたのは、子供の真っ黒な髪。

ただの黒だと思われたその髪をじっと見つめてみると、その黒の中にぞわぞわと蠢く何かが見えた。
それを認識した途端、更に全身が総毛立つ。

何かが、いる。

白い空間に広がる闇の中に、何かが。

闇がずるりと動くと同時に、子供がゆっくりと振り向いた。

一対の黒い眼が、リュウキを虚ろに見つめていた。

シロと契約してから、リュウキの身体には様々な変化があった。

その最たるものとして、誰が見ても判る黄金色きんの目である。彼女がシロと初めて出会い、彼と魂を繋ぐ契約をした瞬間からリュウキの瞳は黒から金に色を変えた。それと共に、彼女の持つ魔力の量もぐんと上がり、身体能力や身体の頑丈さにも影響した。竜ほどとは言わないが、野生の獣並の動きや回復力を持っている。

その物理的な変化とは別に、精神的な面でも変化はあった。一つが感受性である。

それは肉体的な感覚ではなく、気配というか雰囲気というか、いかなれば第六感的な感覚だろうか。

リュウキはしばしば、ただの夢とは思えないような何かを見ることがあった。

それは彼女の過去であったり、未来であったり、または彼女の与り知らぬところであったりと様々である。

シロに尋ねれば、どうやらやはり彼の影響らしく。

シロは全知とまでは行かないが、何かを察知する能力に長けているので、それが夢という形で表れたのだと言っていた。

そういうわけで、彼女はいつもたかが夢と決め付けず、何か違ったものを見たときは必ずシロに相談するようにしていた。

「子供…ねえ。」

「ああ、多分十歳前後くらいかな。性別は判らなかつたが…綺麗な顔をしてたから女の子かな。」

「いや、そりゃあ判んねえぞ。綺麗な男なんて探せばいくらでもいるだろ?」

「まあ、確かに…」

探さなくても、身近にいるのだがとリュウキは思う。
王すら言い負かすヒリュウの宰相殿のことである。

「いい感じはしなかったんだよな？」

「ああ、久しぶりに怖いと思ったぞ。」

「へえ。」

本当に珍しいと思ったのか、シロが丸い目を更に丸くして驚いた。

「黒い髪、黒い瞳、まるで俺と会う前のお前みたいだな。」

「…確かに、言われてみれば顔も何となく日本人のようだったよな…。」

そう、夢から覚める瞬間、最後にこちらを見つめた顔は、まるで彼女の知る人種のような作りをしていた。

「私と修也以外にこの世界に落ちた人間がいるということか？」

「うーん、まあありえないことはないけど…」

でも滅多に無いことなんだと、シロが眉を寄せて唸る。

「落ち着いたらちょっと外を回ってみるか。」

その様子にリュウキも首を捻りながら、溜息をつきつつ呟いた。
明らかに不吉な夢を放って置く訳には行かない。

宰相補佐という重要な地位についているものの、ある程度の自由を許されているリュウキは、影の任務に託けて時々好きに国内や諸国を回っている。

まあ、そう長い時間城を空けるわけにはいかないの、寄り道程度のものなのだが、それによって彼女が持ち込む情報は、なかなか馬鹿にできないものだった。

そのため、シンやコウリは自重するように度々注意を促すものの、完全に禁止するということはない。

リュウキもそれを理解しているので、害にならない程度の寄り道を楽しんでいた。

実害を受けて迷惑しているのは、彼女の副官であるギイだけである。

直接会話はしないものの、リュウキのせいでいつも書類仕事を抱えている哀れな副官に、リュウキ以外に興味の無いシロにしては珍しく同情した。

同盟

遠征軍が帰還してから五日後、三国の王がヒリユウに集まり今回の戦の終結を宣言すると共に、敗戦国であるレキに戦勝国であるヒリユウとリーンから盟約が提示された。

今回の立場を考えれば、その内容は全てヒリユウに偏ったものになってもおかしくはないのだが、ヒリユウ側が事前にリーンへ提示したものは、意外なことに三国の益を平等に考えたものだった。

中でも特に目を引いたのは、敗戦国に科せられるべき賠償金についてである。

実際に剣を交えることはなかったもので、土地や人に対する賠償はなかったものの、二国を動かし、ヒリユウに置いては翼竜隊も出して多大な兵を動員されたので、無粋な話ではあるが、かかった費用はかなりの額になっている。

当然、賠償金としてレキが二国に献上する金銭や物品も相当なものになるだろうと思われるし、レキ国にとっても頭の痛い問題だったのだ。

しかし、実際ヒリユウが出してきた内容はレキの懸念を裏切るものだった。

その内容は次の通りである。

まず、リーン国へこれまで襲撃してきた国境付近の町や村への復興費や保証金、そこへ派遣された人員にかかった費用を負担することそして今回の遠征で二国が消費した予算の半分を負担するというものだった。

確かに額を考えれば相当なものになるのだが、これは今まで類を見

ない程の寛大な処置である。

少し甘すぎるといふ声も上がりはしたが、現在のレキ国で無理な賠償金を集めたところで、レキ国民の不満が高まるだけだということ、その他の条約で今後ヒリュウに有利な方向へ働くようにすることで皆納得させた。

この盟約を結ぶことで、ヒリュウはレキやリーンの国民の多大な支持を受けることになるだろう。

それこそ、名実共にこの大陸を統治する国として。

レキの国主にはリーンから信頼できる人材を送ってもらうことになった。名目上レキはヒリュウの属国となるが、実際支配するのはリーンである。

ヒリュウで行われた三国会談に出席したレキ王は、その王朝の最後の王として用意されていた三枚の書面に調印した。

王の血判を使ったその書面は、盟約が破棄された時以外で紛失しないように魔術がかかっており、そのまま各々の国で大切に保管されることになる。

全てを済ませたレキ王は、何かから解放されたように表情が抜け落ちていた。

それは重責から逃れられた安堵だったのか、はたまた一国の王という地位を失ったが故の絶望だったのか、おそらくそのどちらもだったのだろう。

淡々と進む会談を宰相の隣で見つめていたリュウキには、彼の人は他の二国の王に比べてあまりにも凡庸に見えた。

「それにしても、流石、としか言いようがありませんな。」

リン国王、カルドウス・リンが癖のある栗毛をかき上げながら感嘆の息をついた。

「ありがとうございます。しかし、私などカルドウス王に比べれば、まだまだ雛鳥の域でしょう。」

ゆったりと笑みを浮かべて言葉を返すのは、ヒリュウ国王シン・ヒリュウである。

三国会談の後、必要な手続きを済ませるために数日ヒリュウに滞在したレキ王は、戦後処理をするため二国の王に失礼でない程度の挨拶を済ませて早々に国へと戻った。

カルドウス王も明日には帰国することになっている。

帰国を控えた前夜、年は違えど国を治める二人の賢王は、顔を突き合わせて酒を酌み交わしていた。

御年67の老王は、目の前の年若い王に先ほどから感嘆の声を連発している。

その目は心底本気の色を見せており、どうやら世辞ではなく心からの意を伝えているらしい。流石にこそばゆいのか、珍しくもシンが照れたような苦笑を浮かべて杯を重ねていた。

彼の隣には、王弟であるシキが、背後にはコウリが控えている。

リュウキも声をかけられたが、王族同士の席に割って入るのもどう

かと思つた彼女は丁重に辞退していた。

しばらく取り留めのない話を続けていた二人だが、不意に杯を置いたカルドウス王がシンを見た。空気の変化を聡く感じたシンも杯を置いてカルドウス王に目を向ける。

「シン王よ。先日、シャルシュ王女にお会いしました。」

妹姫の名に、隣で聞いていたシキがピクリと肩を揺らす。

「我が最愛の妹は如何でしたか？」

「とても素晴らしい姫だ。」

しっかりと告げられた言葉は、確かにシンを満足させるものだった。同盟を結ぶ折、リン王太子の元へヒリュウ第一王女が嫁ぐことは既に彼の国へ打診されてる。

また終戦の宴を開いた際、シャルシュもリン王に会っていたが、その後改めて挨拶に行ったようだった。

「美しく、知に溢れ、己というものを知っている。」

どうやら自分たちの自慢の妹は、その溢れる魅力を持って彼の賢王をも虜にしたらしい。カルドウス王の言葉の端々に、シャルシュへの好感が溢れていた。

「是非、我が王太子妃に欲しい。」

すっと細まった瑠璃色の瞳がしっかりとシンを見据える。己が招いたこととはいえ、シンは少し複雑な思いだった。

王としては望ましい言葉。

兄としては望まない言葉。

救いはシャルシュが未だ恋を知らないということだろうか。

未来の王妃という確かな地位を約束されたことに安堵を覚えつつも、どこか寂しさを感じずにはいられない。

シンはしばし目を閉じて、何かを噛み締めるように小さく息を漏らした後、しっかりと一對の瑠璃を見据えた。

「我がヒリュウの大事な玉。しかとお頼み申し上げる。」

これにより、リン王太子にヒリュウ第一王女が嫁ぐという、二国間の婚姻による固い同盟が結ばれることとなる。

調査 1

翌日、改めて丁寧な謝意を述べたカルドウス王は、近く婚約のために王子をヒリュウへ向かわせることを約束して帰国した。

戦が終わりに、結ばれた同盟はすぐに国民に布告され、ヒリュウの城下町は未だ祝賀のお祭り騒ぎが続いていた。

が、国王はというと、今日も変わらず氷の宰相に睨まれながら山のような書類を片付けている。

窓を開けていれば遠くに聞こえる城下の喧騒に、シンは深く溜息をついた。

「手が止まっていますよ。息を吐いてる場合ですか。」

「コウリ。俺も皆と勝利を祝いたいぞ。というか、息を吐かねば死ぬだろう。」

「ですから、それが全て片付いたらいくらでもどうぞと言っているではありませんか。そんな長い溜息など吐いているから終わらないのです。」

言葉と共にコウリが指差したのはシンの目の前に積みあがった大量の書類だ。

俯いても目に入るそれに、シンが心底嫌そうに顔を歪めた。

「何て顔をしているんです。ほら、これも全てヒリュウの平和のためと思えば書類の山も愛しくなってくるでしょう?」

「無茶を言うな。俺は紙じゃなくてリュウキと祭りに行きたいんだ。」

「それはそれは。残念ながらリュウキも陛下と同じ状況ですので無理ですよ。」

ギイに見張らせています、というコウリの言葉にシンが頬を引きつらせる。その光景が目には浮かぶようで、彼は遠い目で空を見つめた。

「ほら、惚けてないで手を動かさない手を。」

既に王に向ける言葉ではない。

「俺はそろそろ涙が出そうだ。」

「おや、漸く書類に愛を見出せましたか？手さえ動かして頂ければ構いませんよ、いくらでもお泣きなさい。」

「お前の血は緑だろう！」

「何を馬鹿なことを。寝言は寝てから言いなさい。」

「…はあ。」

もう言葉を返すことを諦めたシンが、渋々と書類に目を落とす。この白々しいまでの白い紙と淡々とした文面に何を見出せというのか。そんなことを思いつつも、物凄く早さで処理していくシンは、流石一國を纏める王だ。文句を言いつつしつかりとこなしていく様子に、コウリは小さく苦笑を浮かべた。コウリとて鬼ではない。口では辛辣なことを言うものの、可能であれば日頃休まず働いているシンに時間を空けてやりたいとも思うのだ。

しかし、シンが戴冠して片手の指ほどの年数も経っていない今、王である彼がやるべきことは山積みだった。

そういうコウリ自身も、シンを見張る傍らで同じような量の仕事をこなしているのだが。

やれやれと小さく息を吐きつつ、コウリも自分の書類を片そうと踵を返したとき、大きな音を立てて扉が開いた。

「毎回毎回、あなた方はここが王の執務室だという認識があるのでしょうか。」

コウリの白い米神に、くつきりと血管の形が浮き出ている。

目の前には、重厚な扉を片手で跳ね除けるように入ってきたリュウキが書類片手に冷や汗を垂らしていた。

「いや、ほら、ちょ…文面確認したら、つい。」
「ついではありません。そんなもの自室で済ませてきなさい。」

不味い。非常に不味い。

米神に血管を浮かべて切れ長の目を更に細めた己の上官に、僅かにリュウキがたじろいだ。

何でこんなに機嫌が悪いのか解らず、彼の言葉を思い出してみる。そうだ、コウリは“あなた方”と言った。

ということとは、軽々しく扉に飛込むようなことをするのは己だけではないらしい。おそらく、コウリの怒りが爆発したのも偶々だったのだろう。今ここに入ってきたのがその誰かであれば、そいつが怒りの対象になっていたはずだ。

何だか理不尽なものを感じながらも、どう考えたところで悪いのはリュウキである。

せっかく“お願い”をしにきたのに、これでは切り出そうにも雰囲気が悪い。

「…う…えーと…申し訳ありません、でした？」

「…何故疑問系なんです。」

「申し訳ありませんでした、以後気をつけます！！」

最敬礼だ。書類を抱えて冷や汗を流す宰相補佐が、扉の前で最敬礼をしている。

それを見たシンが、噴出そうとしたのか手の甲を口にあてて頬をびくびくさせていた。

それに気づいたリュウキはコウリ越しにじろりとシンを睨みつけた。

「何か不満でも？」

それを見咎めたのはまたしてもコウリだ。

「いいえ！滅相もございません！！！」

びくうつと肩を揺らして自分の斜め上辺りに視線を固めたリュウキに、コウリが一呼吸の後深い溜息をついた。

「…以後気をつけるように。といっても無駄でしょうけど。」

ちくりと刺された最後の嫌味は初めの表情を考えれば可愛いくらいだ。

どうやら氷の上官は怒りを収めてくれるらしい。ほっと息を吐いたリュウキが、肩から力を抜いて一歩コウリに近づいた。

「あ…はは…善処します。で、書類提出に来たんですけど。」

へらりと笑うリュウキを胡散げに見つめたコウリが、差し出された

書類の束を受け取った。こちらもなかなかの嵩があり、シン程ではないものの彼女が膨大な量の書類を片付けてきたことが判る。一枚一枚、しかし物凄く早さで紙をめくり目を通しながら、コウリがちらりとリュウキに目を向けた。

「提出はギイに任せなかつたのですか？」

「あ？あー…ああ、ちよつと別件があつて。」

「別件？」

本当に目を通していいのか疑わしい早さで書類を確認したコウリは、リュウキの言葉に首を傾げながら己の机に紙の束を乗せた。それを見ながらリュウキも王の前まで足を進める。

「陛下と宰相様にちよつとお願いが。」

「祭りなら却下だぞ。俺が終わるまで皆道連れだ。」

「や。確かにそれもあるんだけど…って、何でシンに付き合わなきゃいけないんだ!？」

「何でもだ。俺の仕事への意欲を削らぬためにも我慢しろ。」

「…そついうの八つ当たりって言つんだぞ。」

「承知の上だ。」

むすつと鼻息荒く応えたシンに、こいつは何歳児だと心底呆れながらも、彼の前にある紙の山を見て納得した。確かに、他を道連れにしたくもなるだろう。

「まあまあ、冗談は置いておいて。ちよつと真面目な話、一週間程城を空けてもいいか？」

真面目という言葉と、どこか真剣な表情のリュウキに、シンが手を止めて彼女に目を向けた。コウリも話を聞こうと傍に寄ってくる。

「実はちよつと気になる夢を見て…」

少し眉を寄せながらも、リュウキが先日見た夢の内容を細かく彼らに話した。

それを聞いた二人は、どうやら彼女が本当に心配しているらしいことを理解し、考え込むように小さく息を吐く。

「黒髪黒目の子供ですか。それはまた…縁起の良いものではないのですか？」

確かに、黒はこの大陸で聖なる色なのだが。

「いや、何かすごく嫌な感じがした。何て言うんだらう…おぞましいとか、そんな感じだった。」

「…穏やかじゃないな。」

シンもコウリも、リュウキの勘は重宝している。

もし何かがあるとすれば、大事が起こる前にどうにかしたいところではあるが。

何分、夢という不確かなものな上、情報も少なすぎた。

「ですが、それだけの情報でどう調べるんです？」

「うーん、問題はそこなんだよな。取り敢えずヒリュウを回ってみて、最近何か変わったことが起こってないか聞き回ってみようとは思ってるんだが。」

「なかなか地道な作業ですね。」

そう、手間も時間もかかり放題だ。容易なことではないだろう。

「しかし、それ以外方法が無いな。」

ふむ、と目を伏せたシンの言葉に、リュウキが小さく頷く。

「リュウキの勘は馬鹿にならない。もし何かが起こる前兆ならば、備えておくに越したことはない。起こらなければそれはそれでいいしな。」

「…幸い、同盟も恙無く進んでいますし、一週間程度なら貴女一人城を空ける程度問題ないでしょう。ギイにはまた苦勞をかけますが。」

「ああ、よかった。ありがとう。じゃあ、取り敢えず何もなくても一週間経ったら一度戻って報告する。」

「頼むぞ。」

「よろしくお願いしますね。」

声にしつかりと頷いたリュウキは、早速支度をするため踵を返して自室に戻った。

調査 2

自室に帰るなり、ギイに先ほどの件を伝えると、見るからに不満そうな顔をされた。

が、理由が理由なので納得しざるを得なかったらしい、いつ出るのかと聞かれたので今日の夜にでもと応えようと、彼は大きな溜息を漏らす。

「はあ。結局また僕が机仕事ですか。」

恨めしげに上官を見上げるギイに、リュウキは少しだけ申し訳なさそうに苦笑を浮かべた。

「ああ、毎回悪いな。私の副官になったのが運の尽きと諦めてくれ。」

「まあいいですけどね。別にもう慣れましたし。」

「ははは、やー、優秀な副官持つと安心して動けるからいいな。」

「煽っても何も出ませんからね。僕じゃできないものはきっちり一週間分残しておきますから。」

そのおつもりで、としつかり告げられた言葉にリュウキが僅かに頬を引きつらせる。この様子では、一週間後帰って来たときには、また先ほどまでの地獄の時間を味わうことになりそうだ。

「ギイ。私の印を預けていくから。全部お前の判断に任せる。」

「そういう問題ではありません。ていうか、ばれたら懲罰ものですよ。」

「ばれなきゃいいんだ、ばれなきゃ。」

「ばれるに決まってるじゃないですか。何で居ない人の印があるの

か突っ込まれます。」

「むう…何て融通の利かない職場だ。」

唇を尖らせて不満を言うリュウキに、ギイは再び深い溜息を吐いた。彼女の大らかなところは長所でもあるが、こと書類仕事となるとこの大雑把さが短所になる。それもかなりの。

だからこそ文官を輩出している家の息子である己が、彼女の下につけられたのだらうけれども。

「兎に角、何も判らない以上、もし必要ならちゃんと人を使ってくださいね。お怪我とかなさらないように。」

彼の言う人というのは、“影”の隊員のことだ。

「ああ、分かったよ。世話をかけるが留守中よろしく頼む。」

「あ、アンクレット。忘れずに持って行ってくださいね。」

その言葉にリュウキがピクリと動きを止めた。

アンクレットとは、遠征のときもリュウキがつけていた、装備していればその人間の正確な位置が判るといふ魔具だ。

「…何だかあれをつけていると、追跡されているようで落ち着かないんだが。」

「持って行ってくださいね。」

「…わかった。」

副官の笑顔が怖い。

彼の背後に黒いものが見えた気がして、リュウキは小さく肩を震わせた。

「よし。準備完了。」

少なめの荷物にいつもの草色の外套、中は平民の衣装なので安い布でできている。普段、金色に輝き他を圧倒する瞳は、今魔術を使い当たり障りのない緑に変えられていた。同じく、髪もありふれた茶色に染めている。

“影”としてではなく、旅人として外を回るときのリュウキのいつもの格好だ。

シロは目立つのでこれもいつもどおり外套の下、リュウキの首に巻きつけていた。

「取り敢えず、城下を一周してそのまま一気に山脈近くの村へ行く。」

「闇の腕の近くか？」

「そうだな。検討もつかないから、怪しそうな所から攻めていこう。」

リュウキお得意の数を打てば当たるだろう戦法に、シロが小さく溜息をついた。何度も言うようだが、今回はそれが一番の方法なのでから仕方ない。

何だか釈然としないものを感じつつ、シロが小さく身じろいだ。

「当たればいいんだけどな。」

「一週間もあれば当たるだろう。」

「お前：ヒリュウだけでもどんだけ広いと思ってるんだ。」

気楽なりユウキの言葉に、呆れたようなシロの声が聞こえた。

兵舎横の厩には、それぞれ階級ごとに区切られた馬達が管理されている。

副隊長以上の者には個人用の馬が用意されており、リュウキにも彼女専用として管理されている馬がいた。

その馬はリュウキがヒリュウへ仕官した時にシンより贈られた馬で、少し小柄だが軍馬の中でも一、二を争う駿馬だった。

「今回もよろしく頼むぞ、クロ。」

光沢のある青毛の馬は、先日の奇襲でリーンが用意したものよりも硬質な輝きを放っている。ともすれば、それはまるで毛皮というよりも硝子細工のようだった。

青毛の馬はヒリュウでも珍しく、厩の殆どの馬は明るい色合いを持つものが多かったので、クロは一際目立っていた。

それはまるで己を見ているようで、リュウキは初めて顔を合わせたとき、すぐにこの馬に親近感を覚えたことを覚えている。

「...どうでもいいけど、その感性どうにかしろよ。」

ポツリと、首元から聞こえてきたのは溜息交じりのシロの言葉だ。シロの名前もリュウキが付けた。そして彼女の馬の名前はクロである。

確かに傍から見れば安易過ぎるかもしれない。

思い返せば、この青毛の馬を彼女に贈った王も、リュウキの名付け

たクロという名前に微妙な笑みを浮かべていた気がする。あの時の彼に今の打ち解けた気安さがあれば、間違いなくその感性に突っ込んでいたことだろう。

「何でだよ？特徴掴んでいいだろう、な？クロ。」

しかしその特殊な感性にリュウキ自身は気づいていない。

その上、名付けられた側である目の前の青毛の馬も、特に嫌がっている様子もなく、寧ろ呼ばれば嬉しそうに駆け寄ってくるので周りはそれ以上何も言えないのである。

今のところ彼女の感性に難癖を付けるのは、被害者であるシロのみだ。

もう片方の被害者であるはずの馬は、シロの味方になるどころか加害者に顔を摺り寄せていた。

「…お前それでいいのかよ。」

「いいんだよ、なー？」

肯定するように鼻息を漏らしたクロに、リュウキは嬉しそうにぺしぺしと彼の頬を軽く叩いた。

調査 3

闇の中を真つ黒な馬が駆け抜けて行く。

小柄な馬はどこまでも続く草原を、まるで風のように走っていた。

夜空には満点の星空と、ぽっかりと白く浮かぶ月。

その絵画のような光景は、誰の目に留まることもなく一瞬で過ぎ去っていった。

城を出て城下にある酒場を手当たり次第に回ったりリュウキは、大した情報を得ることもなく、そのまま宿を取らずに町を出た。

未だお祭り騒ぎの続く城下町で、昼間の諜報活動してもよかったのだが、日頃城下を専門に潜んでいる“影”がいるので、そっちに任せることにしたのだ。

何分手間と時間がかかることなので、端折れるところは端折ってしまいたいのが本音である。

リュウキ自身、数を打つことは得意だが、できれば効率の良いやり方を取りたかったのも事実だ。

というわけで、城下を一周した彼女は、取り敢えず闇の腕付近の村へと向かうことにしたのである。

魔獣の住処である“闇の腕”。

先の戦の折、リーンへ渡る際越えた森は深く広大で、大陸を東西に分ける山脈の麓の半分以上の距離に面し、人の住める地域と山脈とを分断していた。

“闇の腕”の入り口にある村々は、常に魔獣の脅威に晒されてはいないものの、一方で魔力豊かな土地で取れる、貴重な資源のもたらず利益に縋り生活していた。

そういう理由もあり、危険の伴う地域だからといって荒れ果てている訳でもなく、寧ろ下手に城下に近い地域よりも栄えている集落の多い地域だ。

“闇の腕”に沿うように点々と構える村々は、そこで採れる魔力を含んだ岩石や植物を加工して、定期的に近隣の町に売ることによって生計を立てていた。

中でも、東寄りの一際活気のある村であるカレスの集落は、資源のみならず魔具として加工する技術も持っているので、多くの傭兵や魔術師が集まる場所だ。

リュウキが城下を出て真っ直ぐ向かったのは、このカレスという村だった。

彼女自身魔術を扱うため、何度か足を運んだことのある村で、一応国からも希望の魔具を支給されてはいるのだが、その種類の多さやたまに珍品を見かけたりすることから、術師隊や“影”の中でも穴場的な村だった。

知識のある者にとっては見ているだけで面白いので、距離がある割りに休みの度に出かける者も少なくない。

リュウキは村の入り口でク口から下りると、そのまま手綱を引いてぐるりと周りを見回した。

「…しばらく見ないうちに、また随分変わったな。」

活気があるといっても、以前来たときには未だ田舎の集落といった風情を見せていたのだが、この短期間にどれだけの利益を上げたのか、ただの柵に魔獣避けの陣を張っただけだった村の入り口も、人の背の倍程の木の門と村を囲む塀が出来ており、見張りらしき者の姿も見える。

これではもう村というより町だ。

まあ、自国の村が栄えることは歓迎すべきことなので喜ばしい限りだが、と僅かに苦笑しつつ開け放たれている門を潜るべくリュウキは足を進めた。門番に軽く笑みを向けつつ入ったリュウキは、真っ直ぐに村の深部を目指す。その外観はかなり様変わりしていたが、建物の並びはそう記憶と変わりなかったので迷うことなく歩くことができた。

彼女が向かったのは、看板も何も出していない、少し大きめの民家のような建物である。

リュウキは建物の横にある駒繋ぎにク口を繋ぐと、迷うことなく正面の戸を開き、ずかずかと建物の中へ進んだ。

ただの民家と思われた建物の内部は、戸をくぐるとまるで工房のようない室内が来訪者を迎える。その室内の正面奥には、カウンタ―越しにしかめっ面の老人の姿が見えた。

片目に硝子玉のようなものを取り付けた彼は、リュウキに目を向けることなく眉を寄せながら手元の小さな石を無言で睨みつけている。

その様子に、ふと笑みを浮かべたりリュウキは、つかつかとカウンターに近づいた。

「コン爺、久しぶり。」

頭の上から降ってきた高めの声に、老人が硝子球の隙間からリュウキを見上げる。

しばらく彼女に目を向けたまま、ぱちぱちと瞬きを繰り返していたが、すぐに手元の小石を置いてリュウキに向き直った。

「何じゃ、お前さんか。しばらく顔を見なんだから死んだと思ったわ。」

「うっわ…久しぶりに会ったと思ったらそれですか。」

にべもなく言い捨てられた言葉に、リュウキが苦笑しつつも、構うことなく肩にかけていた荷物をどさりと床に置いた。

「ホント、変わってないなあ。」

「この年になってそうほいほい変わってたまるかい。それで、何の用じゃ？」

「やー、ちょっとまたしばらく厄介になりに来た。これをお願いできるか？」

言葉と同時に、リュウキが荷物から小さな袋を取り出す。拳ほどのその袋はカウンターに置くとゴツンと硬い音を立てた。どうやら中身は数個の石のようだ。

コン爺と呼ばれた老人はピクリと片方の眉を跳ね上げると、袋から中身を取り出して一つ一つ確認していった。それは所々に赤を滲ませた乳白色の石だった。

全てを確認した老人が、にやりと笑ってカウンター横の細い階段を

示す。

「…部屋はちゃんと取っておる。好きに使え。」

「ありがとう。毎回悪いな。」

「なあに、お前さんは質のいい石を持ってくるからな。お安い御用だ。」

老人の言葉に軽く手を上げて応えたりユウキは、そのままトントンと軽い足取りで二階に続く階段へと上った。

調査 4

コン・ジェインの魔具専門店は、通な魔術師の間では有名な店だ。看板が無いので一見普通の民家なのだが、店主であるコンが扱う品はとても質がよく、どこから仕入れてきたのか解らない高い魔力を持った原石や、優れた加工技術で作られる少しマニアックな魔具を扱うので、実はカレスの集落でも一、二を争う繁盛店である。

しかし異常な人気の裏には、大抵何かの理由があるもので：彼の店にも、おいそれと人に明かせぬ理由があった。

コン・ジェインの店は、店主のコンとその孫娘のジェシカがたった二人で切り盛りしている店なのだが、実はヒリュウ国の密偵、“影”の拠点の一つだったりする。

“影”の主な仕事は情報収集なのだが、三十人強の人数だけで国内外の情報を把握することは実際不可能だ。なので“影”にはその地域ごとに情報を提供してくれる協力者がいる。その殆どが元“影”の隊員だったり、何かしらの縁を持つ元傭兵だったり様々だ。

彼らは普段、宿屋や酒屋、飲食店などの人の出入りが多く情報が集まりやすい店を経営している。勿論、密偵ではなく一般の客も出入りする一見普通の店だ。

普段は大衆向けの店を営み、国から要請があれば情報提供するのが拠点である彼らの役割だった。

コン・ジェインも、ヒリュウの“影”として暗躍していた過去を持つ。彼の娘でジェシカの母親は現在現役の“影”としてリュウキの下で働いている。娘婿であるジェシカの父親は騎士団に所属していたが、前大戦の折他界してしまっていた。そのことと老いを理由にコン・ジェインは王城を離れ、孫娘を預かりカレスの集落で店を開

いたのだ。

因みに、彼の店を拠点として利用する際“影”達が土産として持ち寄る原石が、コン・ジェイン魔具専門店が上質な魔具を提供できる理由の半分であつたりする。

あとの半分は、元“影”であるコン・ジェイン自身が、現役時に比べて若干衰えたものの、そこらの傭兵や魔術師には負けない戦闘力を保持しているため、危険な土地でも楽に材料を確保できるという理由もあるのだが。

今は店を切り盛りする傍ら、可愛い孫娘に魔術を教えているようだ。というわけで、二人暮らしには少し広すぎるくらいの建物の二階には、コンとジェシカの居住空間とは別に“影”達が利用するための客室が用意してある。

リュウキは“闇の腕”周辺を調べるために、このカレスの拠点を利用することにしたのだ。

部屋に入ったリュウキが荷を降ろし、外套を外して再び下の店舗に降りた。

すると、先ほどまでカウンターで作業をしていたはずのコンが、ちょうど作業台を片付け店の入り口にある窓の布を下ろそうとしている姿が目に入る。

「あれ？コン爺もう店仕舞い？」

王城を出たのが夜。それからカレスまで一気に駆け抜け、集落に入る頃には日が中天に差し掛かっていた。今はちょうど昼過ぎだが、店仕舞いには早すぎる時間だった。

「お前さんが来たからの。何ぞ聞きたいことがあるんじゃない？」

ひよいと片眉を上げてにやりと笑う表情は、彼が現役の頃からよく見せていた表情だ。

彼は大戦が終わってすぐ引退したので共に“影”として動くことはなかったが、リュウキは傭兵時代に術師の格好をしたコンと肩を並べたことはあった。

懐かしさに少しだけ目を細めたリュウキが笑みを浮かべて息を吐く。

「はは、察しが良くて助かるよ。商売邪魔して悪いね。」

「なあに、これも商売だからの。」

気にするな、と笑いながらカウンターの椅子を顎で示すコンに、小さくお礼を言ったりリュウキが促されるまま腰を下ろした。対するコンは階段へと足を進める。

「ジェシカー！客に茶を持ってきてくれんか？」

口元に手を当てたコンが大きな声で二階へと声を張り上げた。が一呼吸待っても何の返答もない。

「ジェシカー！！」

「コン爺、いいよ別に。」

更に大声を張り上げるコンに、リュウキが苦笑を浮かべながら声をかける。が、今度はすぐにボタンという音に続き焦ったような足音が聞こえた。

「ごめーん、おじいちゃん何ー？」

「まったく…客に茶を頼む。」

「はーい、ちよっと待ってね！」

応えた声は鈴がなるような少女の声だった。

呆れたように溜息を吐くコンも、諦めたように苦笑を浮かべているが、その目には声の主を大事に思う温かな気持ちが溢れていた。

しばらく二階を見つめていたコンが、苦笑を浮かべたままカウンタ―越しのリユウキの目の前に腰掛ける。

「最近ジェシカも魔石の加工をするようになってのう。」

「へえ！コン爺の血筋ならいい技師になりそうだ。」

「いやはや、身内の欲目かもしれんが：あの集中力はワシも驚いたよ。じゃが、確かにあの娘には才能がある。」

顎を撫でながら感心するように頷くコンに、リユウキがゆっくりと笑みを浮かべた。

「こりゃあ将来が楽しみだな。」

どうやらすっかり爺馬鹿になっているらしいコンにくすくすと笑っている、二階からトントンと軽い足音を立てながら噂の孫娘が下りてきた。手には木の盆と二つのカップ、それから小さな小皿を乗せている。

「いらっしやい、リユウキさん！お久しぶりですね。」

にっこりと笑った少女はカウンターに近づくと、持ってきた盆を置いてそれぞれの前にカップを置き、ちょうど彼らの真ん中の位置に小皿を置いた。どうやら中身は菓子のようなようだ。

「久しぶり、ありがとうジェシカ。綺麗になったね。」

「ふふ、ありがとうリユウキさん！」

盆を両手で持ち口元を隠したジェシカが、僅かに頬を染めてにっこりと笑った。

「いくつになった？」

「今年で十五になるわ！」

「ついこの間までちっこい形でワシの後にくっついて回ってた娘がもう十五とはなあ…ワシも年を取るはずじゃの。老いには勝てんわ。」

「もう！おじいちゃんったら、またそんなことばかり。まだ全然元気でしょ！」

しみじみと呟くコンの言葉に、ジェシカが呆れたように溜息をついた。それを見たリュウキが今度は声を上げて笑う。

「ははっ、確かにコン爺はまだまだそこらの傭兵くらい敵じゃないな。」

「そうよ！お店丸投げして余生を楽しもうなんて思わないでよね！」

「もう余生に入っとるはずなんじゃがのう。爺をあんまり扱き使うもんじゃないぞい。」

「聞いた？リュウキさん。おじいちゃんったら最近こんなことばかり言うのよ？」

「ああ、きつとジェシカが一気に綺麗になったから不安になってるんだよ。」

「不安？」

「どごその馬の骨に捕まらないよう、自分に構ってほしいのさ。」
「何を馬鹿なことを言っとるか！」

きよとんと目を丸くしているジェシカに対して、顔を真っ赤に染めたコンがリュウキを怒鳴る。どうやら本気で恥ずかしいらしい老人

に、げらげらとリュウキが笑うと、コンが恨めしげな視線を向けてきた。

「そうだったの？おじいちゃんったら…」

柔らかに笑ったジェシカがコンの傍に寄ると、コンはむっつりと黙り込んでしまった。

「私はまだおじいちゃんに教えてもらいたいことがいっぱいあるの。そう簡単に出て行かないわ！」

笑顔で言い切ったジェシカがコンの肩に抱きつく。

「何を言っ取る！早く婿を見つけてさっさと出て行け！」

そう怒鳴りながらも、彼女の腕を振り払わず顔を真っ赤にしているコンに、リュウキもジェシカも声を上げて笑った。

二、三言話したジエシカは、気を利かせたのかお盆を持って「ごゆつくり」という言葉を残し二階へと消えた。

目の前では彼女が入れてきてくれたトオ茶がゆらゆらと湯気を立ち上らせている。因みに、トオ茶というのは紅茶に似た自然の甘みを持つお茶で、ヒリュウの平民の一般的な飲み物だ。

「さて、何が聞きたい？」

カップの中身に息を吹きかけ、口を湿らせるようにトオ茶を一口、口に含んだコンが、軽く咳をしてリュウキに向き直った。

リュウキもそれに倣うようにトオ茶に口をつける。因みにシロはジエシカが来た段階で反対側の影に隠れるように身を潜めていたが、今はリュウキの膝でとぐるを巻いていた。

小さく息を吐いたリュウキがカップを静かにカウンターへ置く。

「ここ最近、この地域で変わった噂とか現象はないか？」

「ふうむ。こりやまた何とも大雑把な質問だな。」

「実はまだはつきりとしたことは解らないんだ。」

そついうと彼女は夢のことを簡潔に話した。それを聞いたコンが小さく唸って考え込むように顎を一撫でする。

「どんなことでもいい。何かないか？」

「…そつじやのう…：そついえば、魔獣が増えたか。」

「魔獣が？」

「いや、絶対数が増えたというよりも、森の入り口まで出てくる魔獣が増えたといった感じかの。」

「…。」

闇の腕に住む魔獣たちは、滅多なことが無い限り森の外へは出てこない。

それは、闇の腕に漂う濃厚な魔の気を魔獣達が好み、食料も豊富であることから、わざわざ苦手な日差しが当たる森の外に出る必要が無いからである。

ただ出ることができないというわけではないので、たまに気紛れに森の入り口まで出てくるものや、人の気配に刺激されて出てくるものがいるにはいるのだが、そう頻繁にあることではなかった。

「ワシは人の出入りが多くなった所為かと思つとつたんじゃが…。」
「なるほど…。」

確かに、その可能性は大きい。

気配やにおいに敏感な魔獣たちは、カレスの集落が発展するに伴い、住処の周囲をうろつく人間の気配が増え、気が立っている可能性があった。

二人で考え込むように眉を寄せていると、ふと何かを思い出したようにコンが顔を上げる。

リュウキもそれに気づきコンに視線を向けた。

「…つい最近この店に立ち寄った流れの術師が話しておつたんじゃが…。」

少し訝しげに話し出したコンに、リュウキが僅かに首を傾げた。目で先を促す。

「術師はこのカレスの更に西、ソルの村から来たらしい。そ奴が言うには、ソルを出て半日ほど歩き、野宿の準備をしていたんだと。」

「…ソルから半日というと…だいたいカレスとソルの中間地点じゃないか。あんな所で野宿なんて…何を考えているんだその術師は。」
「ワシもそう思ったさ。聞けばどうも、よう知らんで歩いてっつたらしい。それなりに力はあるが、まだ若い術師じゃった。」

魔獣の森“闇の腕”は場所によって漂う魔の濃さが違う。

魔が濃ければ濃いほど魔獣は育ち、そういう場所は世間一般で大物と呼ばれる能力の秀でた魔獣が多いのだ。

ソルとカレスの中間部は、“闇の腕”で最も濃い魔の気を持った場所だった。

「…運が良かったな。」

「その通りじゃ。魔獣の影すら見なかったようじゃからの。ただ、その男が気になることを言っておったのよ。」

「気になること?」

「…曰く、山が唸りを上げていた、と。」

「山?…山脈のことか?」

「そうじゃ。雲に覆われた空から響くように、地鳴りのような不気味な音が聞こえてきたらしい。しかし、どれだけ待っても大地が揺れることもなかったそうじゃから…もし全て本当の話ならただの地鳴りとも思えんのじゃよ。」

「…そうか。山が唸る、ね。確かに、気にはなるな。」

その言葉を聞いたコンが、少しだけ眉を寄せながら小さく溜息を吐いた。

「…じゃが。調べようにも、場所が悪すぎる。」

そう、地鳴りの場所は、闇の腕の最深部を越えた先。人が踏み込むには不可能な土地である。

おいそれとどうにかなるものではなかった。生半な気持ちで手を出せば、命を落とすことは確実である。

「いや、手は無いこともない。」

「…あつても碌な手ではなかるうに。」

リュウキの性格を知るコンにしてみれば、溜息の出る話だった。

「あまり好き勝手やりおると、ミンロン家の次男坊に灸をすえられるぞい。」

その言葉にリュウキの頬がひくりと引きつる。

ミンロン家の次男坊とは、リュウキの直属の上官で氷の宰相と名高いコウリ・ミンロンのことである。痛すぎる釘を刺されたリュウキは嫌そうに眉を顰めた。

「…今回は許可も取ってある。宰相公認の王からの勅命だぞ。」

勅命に宰相の公認も何もないのだが、状況を言えばリュウキの言ったことはほぼ合っている。

「王城から出ることに關してじゃろ？まさか流石の宰相殿も、お前さんが闇の腕に入ることなんぞ考えてもおらんだろうて。」

確かに、その通りである。

コンがこれを王城に知らせれば、今度は強制帰還命令が出るだろう。要は、リュウキが無理をしないよう、この腹芸の得意な老人は遠まわしに脅しているのだ。

「…無理はしないぞ。」

「当てにならんわ。」

むう、と黙り込んだリュウキに、コンが先ほどの仕返しとばかりに
声を上げて笑った。

調査 6

大地の焰

海原の風

巡る、廻る、黒い星

謳えよ謳え、命の奏で

叫べよ叫べ、魂の声

願いを集め、眠る子供と

非情な神の子守唄

白い闇が守るのは

永久^{とわ}の誓いと業^{とわ}苦の徒

選べ、選べ、運命^{さだめ}の環

全てはお前の身の内に

お前の全ては他が為に

白い世界で孤独な子供が歌う。

感情の無いその歌は、聴く者にどこか薄ら寒さを感じさせ、リュウキは小さく身震いした。

それと共に、この不気味な歌を過去にどこかで聞いたような気がして、彼女は更に不快げに眉を寄せる。

例の如く近づくことの出来ない黒髪の子供は、真っ白な空間の中央にぼつんと背を向けて佇んでいた。そして、歌が終わると同時に、子供がゆっくりとリュウキを振り返る。

以前見た夢と違ったのは、そこで夢から覚めなかったこと。

ゆっくりと振り返った子供の顔は、確かにリュウキの知る日本人の子供のようだった。この世界の人種はどちらかというところ欧米風の顔形をしているので、東洋の顔立ちには珍しい。

長い髪をベールのように引き摺りながら、黒い子供が一步こちらへ近づいた。

…。

「え?」

…。

「何?何がいたい?」

子供がゆるりと首を傾げながら、真つ黒な瞳で真つ直ぐにリュウキを見つめ何かを告げている。その声らしき音は聞こえていたが、肝心の何を言っているかが解らなかった。

…る。

な、契約の時が来る。

「契約の時?」

リュウキの声が届いているのだろうか、彼女の問いに子供がゆつくりと頷いた。その瞬間、曖昧だった子供の声が、意味を成してリュウキの耳に届く。

古の契りが解^{ほど}け、新たな契約の時^{とき}が来る。

青い星の愛し子たち、やさしいやさしい業苦の子よ、
選べ、時は近い…

「何を言っている?」

白い檻に我はある。

「それは何処だ?」

白い檻、全ての集う場所。

「判らない。」

四つの中心、天^{そら}への扉。

その言葉を残し、子供はゆっくりと目を閉じる。

「おい!待て!」

子供の臉に合わせ、リュウキの視界も真っ白に霞んでいった。
リュウキは咄嗟に手を伸ばしたが、夢はそこで途切れた。

「…っ！！」

目前に伸ばした手は空を掴み、呼び止めた言葉はただの吐息となつて唇から零れた。

夢の割りに不思議なほどはつきりと記憶に残る情景は、まるで直接脳に焼き付けられたようだ。

っ、と頬を伝つた汗を、夢の余韻を振り払うようにぐいと拭い、リュウキは小さく息を吐いた。

傍らを見れば、枕の横でとぐるをまきながらも僅かに頭をもたげてこちらを見ているシロと目が合う。

「また何か見たのか？」

「ああ…。」

「黒い子供の夢か？」

コクリとゆっくり頷いたりリュウキが、思案するように視線を宙へと投げた。

「今度は話したぞ。」

「意思疎通ができたのか？」

「ああ、過去や未来の夢というよりも、あれは子供が渡ってきていた。」

“夢渡り”という言葉がある。

それは、能力を持ったものが眠っている他者の意識下に潜り込み、夢や深層心理に干渉することを指す。これは、魔術の類で成されることではなく、特殊な人間や魔物が一つの能力として持って生まれ

る能力だった。そういう能力があるということは、少し詳しいものであれば知識として知っているが、実際夢を渡れる者に会った者などそうそういない。

リュウキ自身、この世界の生き物でそんな能力を持つものに出会ったことはなかった。彼女の知る唯一の“夢渡り”能力者は、現在傍らに居るこの異世界の白い騰蛇のみである。

例の子供が“夢渡り”で彼女の夢に現れたということは、子供が現在もどこかで生き存在しているということだ。

「何を話したんだ？」

「…謎かけのようなことを言っていたな。それと、歌も聞こえた。」

焼き付けられた夢の記憶は、少しも褪せることなく、リュウキの頭にしっかりと残っている。

あの無感情に歌われていた歌ですら、一言一句違わず歌うことができた。

「契約…か。何か面倒くせえことが起こりそうだな。」

「ああ、しかもかなり根が深そうだ。」

古の契り。子供はそう言っていた。

人や人ならざる者が行う契約と呼ばれるものの類は、総じて性質の悪いものが多い。契った者の想いすら戻ってくるそれは、何も知らない第三者が手を出すと何かしらの手痛い返礼を受けることが多いのだ。

そういうものには関わらないことが一番だった。

「白い檻…四つの中心、か。」

「…そこに、子供がいる。」

「厄介だな。近づいて大丈夫なのか？」

いい印象は一つも受けない。
子供に近づけば、リュウキ自身に不吉なことが起こりそうな気がした。
それでも…。

「それでも、行くしかない。」

そう、何の情報も無い今、唯一の手がかりである黒い子供の居場所をつきとめるしか手はないのだ。
シロはやれやれとでも言うように溜息を吐くと、何かを考えるように頭をゆらりと揺らした。

「白い檻、白い檻…四つって何だ？その中心、か。」

「…四つ…四つの、国？」

己の呟きに、はっと目を見開いたリュウキがシロを見ると、彼もこちらを向いて目を丸くしていた。

「四つの国の中心、天へ最も近い場所といえは…。」

「山脈、だな。」

「くそっ…確かに、考えてみりゃ一番怪しい場所だ。白い檻、確かにあの山は真っ白だな。」

「闇の腕どころか、また山脈かよ。」

「あ…どうすっかなあ。ばれたらコウリに一ヶ月は外出させてもらえないかも…。」

「…一度城に戻りゃいいじゃねえか。」

「いや、だって相談したところで、あいつら絶対許可しなさそうだし。」

「そりゃあなあ…。」

むう、と唇を尖らせて唸るリュウキを見やりながら、確かに彼女の言うとおりの王城に住まう者たちがそう易々と彼女が一人危険な地へ赴くことなど、聞くまでも無く却下しそうだった。とは言ってもいくら訓練を積んだものとはいえ、おそらく“影”達ですら山脈に登り調査をすることなど不可能に近いだろう。城へ帰り手勢を集めて、という選択肢はリュウキの中には既に無い。異世界の獣、騰蛇と契約しているリュウキだからこそ、何とか可能なことだった。

「俺は反対だけど…後が怖いぞ。」

「それでも、私が行くしかないだろう。」

既に決意の色を見せて煌く金目に、シロは大きく溜息を吐いた。

「…む。」

この王は机に住んでいるのではないだろうかというくらいの間を、執務室で書類と格闘しているシンが、小さく唸り声を上げて唐突に顔を上げた。

いつも見張り役の宰相は、王の斜め前にある彼の執務机で己の仕事を片付けている。

時折紙が擦れる音が響くだけの室内では、王の漏らした声はしっか

り宰相の耳に届いていたらしい。
コウリは首を傾げながら王を見た。

「…何か誤りでも？」

「…いや。」

コウリの言葉にゆるく否定の意をこめて首を振ったシンが、訝しげに眉を寄せる。

その様子にコウリは訳が解らず目をぱちぱちと瞬かせ、普段の様子と異なるシンに、彼の言葉を待つように黙り込んだ。しばらく無言の間が続いた後、漸くシンが口を開く。

「…何か…嫌な予感が…」

「またですか？」

「そう言うな、俺の所為ではない。」

勘はいいが、そう頻繁に感じることはない。

つい先日の遠征でやはり何かを感じたシンの勘は、あれからそう時間の経たない今日、また何かを察知したようだった。

「しかも、またリュウキが城を出ている時ですね。」

「あいつはまた何か良からぬ事に足をつっ込んでいるんじゃないか？」

「その可能性は大きいと思います。」

「まったく…無理はするなど、常々言い含めてあるのだがな。」

「それをきちんと理解できる方であれば、常々言葉に出す必要はないでしょう？」

「…それもそうか。」

どうやっても自分から厄介ごとにつっ込んでいく性質の彼女に、二

人の男が呆れと諦めを込めた溜息を吐いた。

調査 8

大陸を分断する山脈は、その標高の高さから山頂付近は年中雪と氷の世界である。

その中で最も標高の高い場所が、ソル・カレスの二つの集落のちよつと中間にあたる場所であり、闇の腕近隣の集落へ訪れる旅人達が最も警戒する場所でもあった。

大陸で広く知られる危険地帯の一つである。

「防寒具と防瘴布、水と干し肉くらいは持って行くか？」

「馬鹿野郎、ちゃんと魔力増強剤と魔獣避けも持って行け。」

「おい、お前さんらちいつと待て。本気で森の深部に入る気か!？」

あれやこれやと店内を見回りながら準備していくリュウキとシロに、コンが慌てて声をかける。

シロはコンが近づくなり口を閉じてしまったが、リュウキの顔の影からコンの方を伺っていた。

「ああ、どうやら手がかりはそこだけらしいな。お代はしっかり払っていくから心配するな。」

「馬鹿もん！そういう問題じゃないわい！しかも防寒具なんぞ持って…まさか…。」

防寒具と聞いて思いついた場所に、コンの顔から血の気が引いていく。

闇の腕ならまだしも、否それでもかなり心配なのだが、山脈まで足を伸ばそうとしているリュウキに気づき、老人の顔から昨日までの余裕が一切消えていた。

「山脈に行こうというなら話しは別じゃ。昨日は森の手前側までだと思ったから脅すだけで済ませたが…すまんがもうお前さんの上官に連絡させてもらおうぞい!!」

「ああ、構わない。コン爺が連絡せずとも、宰相殿には位置確認用の魔具を着けられているからな。向こうが受信の魔具を使えばすぐに知れることだ。」

「使わねば判らんじやろう!」

そりゃあまあ確かに、と呟くりユウキにコンが苛々と声を荒げた。が、当のリュウキは何処吹く風である。

おそらく、コンがこれから王城へ蜥蜴を飛ばしたところで、彼女の上官達が手を打てるのはリュウキが闇の腕へ入ってしまったからになるだろう。大急ぎで勅を出したところで、彼女が発ってしまったからでは同じことである。

コンが何を言おうと、リュウキは思いとどまってくれそうにはなかった。

「昨日の今日で何があつたんじゃ?」

そう、明らかに昨日話していた雰囲気と違うのだ。

昨日までは何も判らないものを手探りで探していたため、リュウキは闇の腕を調べることに對してもそれほど執着を見せていなかった。怪しそうだからという大雑把な理由だけだったからだろう。

しかし、今日のリュウキはもうそこに何かがあるとはかりに焦点を闇の腕のその先、山脈に絞っている。

訝しげに眉を顰めるコンに、リュウキは小さく息を吐いて物色する手を一端止め老人に向き直った。

「リュウキ、何があつた?」

「昨夜、また夢を見た。」

「例の夢か？」

「ああ、私に呼びかけてきた。山脈に人が生きているとは思えんが……いや、寧ろ人ではないのかもしれないな。子供はそこにいるらしい。」

「なおさら反対じゃ。危険すぎる！」

「駄目だ。時間が無い。」

「時間？」

「ああ、時が近いと言っていた。それに私も……根拠は無いが、躊躇している暇は無い気がするんだ。だから、」

邪魔するなら、容赦はしない。

そう告げながら向けられた真っ直ぐに向けられた金の瞳に、コンが小さく息を呑んだ。

何か言おうにもその瞳に見つめられただけで身体が竦み、言葉がせき止められる。

コンとて無駄に長い年月を重ねてきた訳ではない。衰えたとはいえ、未だ己の身と孫娘くらいは守れる力は残っているし、何事にも動じないよう心も鍛えてきた。

それが今、言ってしまったえば己の半分ほども生きていない娘の眼光に怯んでいる。そう、コンは確かに畏怖を感じていた。

今にも目を背けてしまいそうな己を叱咤して、何とか金色を見返ししながら深く深く息を吐く。

「……仕方の無い奴じゃの。」

諦めの色を濃く滲ませたコンの言葉に、リュウキは鋭く光らせていた眼を和らげた。

次いで、僅かに眉を垂れて申し訳なさそうに目を伏せる。

「悪い、コン爺。心配してくれてんのは解るんだ。」

少しの罪悪感を滲ませた目が、それでも強い意思を持って再びコンを見つめる。

どこか幼さすら感じさせる先ほどとは別人のような表情に、老人は苦笑を浮かべた。

「いい。その代わりに、ちゃんと無傷で帰ってこい。」

「いや…流石に無傷は…」

「何じゃ、自信が無いのか？」

その言葉にリュウキが僅かに唇を尖らせ、むうと唸る。

「意地が悪いぞ爺さん。」

「なあに、お前さんほどではないわ。」

「まったたく。」

ふおっふお、とわざとらしい笑い声を上げる老人を、胡散臭げにリュウキが見やる。シロは既に興味をなくして、いつものように彼女の肩に落ち着いていた。

「ああ、そうじゃ。店にあるもんなら金なんぞいらんから好きに持って行け。」

コンは右手をひらひらと振りながらそう告げ、カウンターに腰を下ろす。

リュウキは老人の言葉に目を僅かに見開き、首を傾げた。

「いいのか？」

「いい、いい。お前さんが戻ったときの戦利品を期待しとるでな。」

「…そういつことか。」

何食わぬ顔でそう言い放ち、カウンターの中の作業机で魔具を調整しはじめた老人を見て、リュウキがくっくと喉をならすように笑う。

「期待して待っていてくれ。」

そう告げられた言葉に、コンは手元の石に視線を預けたまま、口元だけを動かし苦笑を浮かべた。

闇の腕 1

「ギイ、少し頼みたいことがあるんですが。」

もう慣れてしまった王の執務室。

いつものように、上官であるリュウキが処理すべき書類を提出してきたギイは、王の斜め前に机を並べる宰相に呼び止められた。

「はい、何でしょう？」

「貴方が管理しているリュウキに持たせたアンクレットの受信具で、彼女の位置を見てほしいのです。」

「わかりました、今ここでご覧になりますか？」

「ええ、よろしくお願いします。」

“影”を纏めるリュウキの現在地は、時に重要な極秘情報の一つとなることもあるので、最も信頼に足る彼女に次いで能力の高い“影”であるギイが管理している。

現在地を示す送信具であるリュウキのアンクレットに対して、ギイの持つ受信具はピアスの形をしており、それは何時如何なるときも彼の耳に納まり、使用するときを除いて外されることはなかった。

「少々お待ちください。」

そう言うと、ギイは己の左耳にある真っ赤なピアスをそっと外す。その形状は、金色のフックピアスの先端に、細長い八面体の赤い石が揺れる少し大きめのものだ。

彼がそれを手に持つと同時に、コウリが大陸の地図を渡してきた。頭を下げながらギイがそれを受け取る。

「ギイ、ここへ。」

すると、王が自らの執務机を空けそこを示した。

どうやらそこで見せるといふことらしい。

ギイは恐縮して身体ごと向き直り、しっかりと礼を取ると王の下へ近づいた。コウリもそれに続くように立ち上がりギイの隣に並ぶ。

「失礼いたします。」

そう一言告げて、ギイがコウリから受け取った地図を王の目の前で広げた。少し色あせた地図は小さめのものだったが、かなり細部まで記されており、一目で上質なものであることが判る。

ギイの管理する受信具は、対象の人物を示す方法が二通りある。

一つは、主に近距離に対象者がいる場合にとる方法で、先の遠征でギイが行っていた方法だ。

対象者の居る方向をピラス自身が指し示し、所謂コンパスのような形で使用する。

もう一つが今から行つ方法で、対象者が遠距離にいる場合こちらの方法を取ることが多い。

これは、受信具の他に地図が必要となり、それにピラスをかざして位置を指し示す方法である。これを行うには満たすべき二つ条件があり、まずは対象者が地図内に存在すること、それからある程度細密に記されている地図が必要なのだ。

コウリが用意したこの地図ならば、まず問題ないだろう。寧ろかなり正確な位置まで判るはずだ。

ギイはピラスの鉤状の部分を摘み、広げた地図の上に赤い石の部分をかざすと、小さく何事か呟いた。途端、先端の赤い石が淡く発光しゆらりと小さく揺れる。

「示せ。」

ギイが発した言葉に応えるように、石が更に動いた。

真つ赤な先端が何かに引つ張られるようにぐぐつと真横を向く。ギイはそれに逆らわず、そのまま石が引かれた方向へ手を滑らせた。すると、彼が位置を移動するに連れ、真横に浮き上がっていた石がだんだんと斜めに下がり、遂にはびたりと真下を指す。

ギイは確認するようにその場所で何度かゆらゆらとかざした手を僅かにずらす、石の先端は一箇所を指し動こうとしない。

三人は地図を覗き込むように頭をつき合わせてその一点を見つめた。が、その状態でしばらく全員が固まる。

「ギイ。」

「…残念ながら壊れてません。」

王の呟きに、何かを察したギイが低く応えた。その目は未だ石の示す一点に釘付けである。

「私の詰めが甘つございました。彼女の行動力をなめていたようです。」

「いや、コウリの所為だけではない。俺も判断を誤つたな。」

二人同時に深い溜息を吐くと、地図から視線を外して目を閉じ米神に指を押し当てる。

見事に揃った動作は、あまりに彼らの心情を表しすぎて笑えなかった。

「…リュウキ様…。」

もう怒りよりも心配の方が色濃く出ているギイの眩きが、無情な石が指し示す先にいるだろう人物に届くことは無い。
三人はもう一度確認するように地図を見つめる。
そこには、僅かに滲んだ黒い文字で“闇の腕”と記されていた。

生い茂る木の枝と葉で日の当たらない森は、木々が密集しているのかと思いきやそうでもなく、かなり広めの感覚で高く幹を伸ばしたそれらが、まるで天井のように広く枝を伸ばしていた。
少し湿り気の多い地面には至る所に苔が生し、踏みしめると柔らかい感触を伝えてくる。

目の前に広がる深緑の世界に、リュウキは小さく息を呑んだ。

「凄いな…。」

長く傭兵として旅をしてきたリュウキも、流石に“闇の腕”に入るのは今回が初めてである。

そのおどろおどろしい名称から、森の内部はもっと暗く陰気で意味の判らない色の植物や魔獣が蔓延る世界だと思っていたのだが、実際はかなり予想からかけ離れたものだった。

寧ろこの見渡す限り神秘的な景色に、リュウキはどこか神聖な空気をさえ感じている。

しかし、一帯を包む空気は確かに濃い魔の気を帯びていた。
もういつ魔獣と遭遇しても不思議ではないくらいである。

リュウキは周囲を注意深く見渡しながら、コンの店で手に入れた防瘴布で口元と鼻を塞いだ。

「こつちだ。だんだん魔の気が濃くなってきた。」

彼女の横ではパタパタと小さな翼を動かしながら、シロが前方を見据えて告げる。するり、と真珠色の長い胴が宙を進むように動いた。

「よし、さつさと進むぞ。」

「油断するなよ。」

シロの言葉ににやりと笑みで応えたリュウキが、柔らかな苔を踏みしめ走り出す。

真っ白な騰蛇はその背を見つめながら、彼女を追うように翼を大きく羽ばたかせて後に続いた。

闇の腕 2

ゆらり、ゆらりと黒い影が動く。

波打つように揺れるそれは、分厚い半透明な氷の向こうでゆっくりと動き続けていた。

所々にヒビが入り一部が崩れた氷の壁は、今にも崩れそうになりながらも何とか役割を果たしている。

ゆらり、とまた影が動いた。

この洞窟が崩壊を始めてからもう数日、未だ崩れないまでも地鳴りを伴う洞窟全体の振動は断続的に続いている。

それはまるで、何か得体の知れないものがこの世に生れ落ちる前兆のような。

それが母の胎を突き破り生れ落ちる前触れのような。

決して喜ばしくないことが起ころうとしているように思えた。

ゆらりと、黒い何かが蠢く。

洞窟全体に低い音を響かせながら、再び洞窟が振動を始めた。

「シロ！右っ！！」
「ほらよっ！！」

リュウキの声に合わせて、真っ白な騰蛇が右を向いた。そのままかばつと口を開くと同時に、開いた口の前に小さく複雑な陣が浮かび上がり、そこから高熱の白い炎がゴォつと音を立てて放射される。

炎に焼かれた巨大な虫の群は、金属を擦ったような悲鳴を上げながら一瞬で骨まで消滅した。

シロはそのまま首を前方に振って目の前の虫の群も焼き尽くす。

「よし、シロ流石！」

軽口を叩くりュウキ自身も、片手に構えたサーベルに魔術の陣を展開させて虫の郡をなぎ払っていた。彼女がサーベルを振るう度、刃先が真っ赤に輝き切られた虫が次々と発火して炭と化していく。

淡く緑に輝く暗い森を駆け抜け抜けながら、ひらりひらりと黒と白が舞うように進んでいた。

と、突然真横から鋭い殺気がリュウキとシロを襲う。ぞくり、と背を這うような悪寒に、二人は一瞬で殺気に目を向けながら逆方向に大きく跳躍した。

まだ僅かに残る虫は、シロが一気に焼き払う。

「中ボスの御出しました。」

にやりと笑うリュウキが鋭く光るサーベルを構えなおすと、森の奥から青く光る目が残光を残しながらゆっくりと這い出てきた。その姿に、リュウキが僅かに目を見開く。

「お前：わざわざおいを嗅ぎ付けてきたのか。」

真っ赤な身体に人の作りに似た顔面、しかし歯は鋭く獣の牙がずらりと並ぶ。僅かに開いた口元からは、強烈な瘴気と涎を垂らしていた。その赤い身体はまるで獅子のような毛に覆われ、長く太い尾の先端は何か千切り取られたようになっていた。

「確かに、マンティコラは執念深く頭がいいからな。」

そう、それは先日翼竜隊が闇の腕を越える折、自分達が遭遇し撃退したマンティコラであった。

あの時は尾のみが襲ってきたため本体を見ることはなかったが、なるほど、なかなかの年月を生き抜いてきた魔獣だったらしい。その巨体も見事な毛並みもリュウキが見てきた彼の魔獣の中で、最も大きく雄雄しいものだった。

マンティコラは自慢の毒針を砕かれたことを恨んでいるのだろう。彼の獣がいたのはもっと離れた森だったにも関わらず、あの時最後に放たれた光の矢と同じ魔力を察知しここまで追ってきたようだ。

「ふん：毒針が使えねえならただの雑魚だろ。」

「油断はするな、こいつらはその巨体の割りにかなり素早いぞ。」

シロの言葉に、リュウキが小さく呟いた。

マンティコラの主要な武器は、その尾に持つ無数の毒針であるが、

それは先日リュウキがとどめとばかりに砕いてしまっているので使えない。しかし、まだ彼の獣には強靱な脚力が生み出す素早さと、岩をも砕く硬い牙がある。それに多少ではあるが魔術も使えるので、油断しているところらがやられかねない。

怒りに燃える青い宝石のような目が、ひたとリュウキを見つめていた。

リュウキも負けじと瞳に力を込めて睨み返す。

獣と戦うとき大事なことは目を逸らさないこと。それは魔獣といえども同じである。

「シロ、援護頼むぞ。」

「任せろ。」

瞬きも忘れたようにしっかりと開いた目をマンティコラに向けたままリュウキが呟いた。

シロがいつでも動けるように身を包むように魔力を展開させる。

金と青の四対の眼がカツと見開いた瞬間、両者は動いた。

闇の腕 3

柔らかな地面を大きな爪で抉りながら獣が踏み出した。

太く柔軟な筋肉の生み出す瞬発力で、マンティコラが一気に間合いを詰める。

リュウキはぐんと腰を落として構えると、射殺するような視線を獣に向けその動きに全神経を集中させていた。

獣の喉から低く唸るような響きが漏れた瞬間、大きな口がぱりと開いて目にも留まらぬ早さでリュウキに襲い掛かる。が、彼女は小さく息を漏らすと、獣の牙がその細い身体に食い込む寸前で素早く斜め前方に体重を移動させた。

金色の目を青い魔獣の瞳に向けたまま、その巨体の真横をすり抜けるようにかわす。

がちりと噛みあわされた牙は、彼女の長い黒髪すら捕らえることはできなかった。

リュウキはそのまま流れるようにサーベルを力いっぱい薙ぐ。赤く炎を宿した抜き身が、マンティコラの片側の脚二本を裂いた。

鮮やか過ぎるほどの真っ赤な血が飛沫をあげて大地を汚す。同時に、魔獣の口からまるで何かが破裂するような音が弾けた。マンティコラ独特の咆哮である。

リュウキはサーベルを振り抜き、その勢いそのまま僅かに跳びつつ身体を回転させて獣に向き直った。

タン、と軽快な音を立てて地に足をついたリュウキに対し、深く大地を抉りながらマンティコラが胴で地を滑る。大樹の幹に背を打ち付けて止まった獣は、身を震わせながら立ち上がるうとするも、巨体を支える半分の筋肉を断たれ、真っ直ぐ立つことすら敵わない。

それでもマンティコラは恨みと怒りを青の瞳に宿して目の前の標的を睨みつけていた。

「諦めて去れば、私は追わない。」

本来、殆どの獣は実力差を知らしめれば膝を屈し、従順の意を示すかその場を去る。

しかしマンティコラという魔獣は、一度これと決めた標的は逃がさず、矜持を傷つけられれば復讐を果たすまで身を削つても追い続ける習性を持っていた。

故に、リュウキの言葉は彼の獣に届くことはないだろう。それが解つていても、リュウキは尋ねた。

「去れ。そして生きる」

金の瞳がひたと獣を見つめる。

しかし、マンティコラの青い瞳から怒りの炎が消えることは無かった。寧ろ、馬鹿にするなとばかりに目を細め、唸りを上げて身を低くし臨戦態勢に入る。

リュウキはそれを見つめ、僅かに目を細めると小さく息を零した。

「そうか、残念だ。…シロ、やっぱ手え出すな。」

低く呟いたリュウキが、獣へと一歩踏み出す。

ひゅん、と音を立てて軽く振るったサーベルの剣先を、ぴたりと獣の眉間に合わせて斜め前方に構え、浅く小さな呼吸を繰り返しながら青い瞳を見据えた。

「行くぞ。」

声が放たれると同時に、マンティコラとリュウキが再び動く。

今度はリュウキも強く足を踏み込み前方へ駆け出した。

二つの影がぶつかる瞬間、裂けた足から血が噴出すのも構わずマンティコラが大きく前足を掲げる。そのまま鋭い爪が、小さな黒い影を引き裂こうと振り下ろされた。しかし、それを紙一重で避けたりユウキが、ぐつと膝を曲げて一気にマンティコラの頭上まで跳躍する。

そのまま宙で身を捻りながら、獣の大きな両肩の間に着地し、リュウキはサーベルを両手で握り締め大きく振りかざした。赤い刀身が真っ赤な毛皮に吸い込まれようとした、その瞬間。

「…っ！…ちっ！」

リュウキの右足に先端の千切れた尾が巻きつき、そのまま背後へ引き摺られた。

身体を支えていた足をとられて、リュウキの身体が大きく前方に傾く。しかし、彼女はすぐに上半身を擦ると身体を返し、尾の力に抵抗するため自由な左足で踏ん張りつつ、片手で獣の真っ赤な毛皮にしがみ付いた。そのまま反対の手でサーベルを握りなおし、風を切る音を立てて横に振りぬく。

長いマンティコラの尾が血飛沫を上げて飛ぶと同時に、獣の短い咆哮が森に響いた。

再び身を返したりユウキが、右足に巻きついたままの尾を払ってマンティコラの肩まで駆け上がる。

それに気づいた獣が彼女を振り払おうと首を振った瞬間。

ザシュウツ

肉を断つ鈍い音と共に、巨大な獣の項を鋭い一閃が走った。次いでマンティコラの背から、リュウキが軽い跳躍で離れ地面に降り立つ。彼女の足が地面につくと同時に、マンティコラの項からぶしゅつと

音を立てて大量の血飛沫が上がった。飛沫を上げたままマンティコの巨体が大きく横に傾く。それまでの素早さが嘘のようにゆっくりと倒れた魔獣は、地響きを上げて地に伏した。

泥で汚れた毛皮を中心に、真っ赤な血溜りが勢いよく広がっていく。青く宝石のように輝いていた瞳は、既に生の光を失い濁り始めていた。

じっとそれを見つめていたリュウキが、大きく息を吐き出しながら、握り締めたサーベルを軽く振るう。

ひゅん、と音を立てて振るわれた刀身から、真っ赤な獣の血がびしやりと飛んだ。

懐に忍ばせていた布を取り出し、鋭く光る刃に付着した血を拭いながら腰の鞘に愛刀を納める。

リュウキは動かなくなつたマンティコラから視線を外さぬまま背後の騰蛇へ声をかけた。

「…シロ。頼む。」

「おう。」

リュウキの声に応えながら、少し離れて見ていたシロがするすると空中を這うように飛んでくる。そのままかばりと口を開くと、小さな陣から真っ白な炎が飛び出した。

シロの使う真っ白な炎は、焼かれたものの骨まで焼き尽くし浄化する。煙すら上げず真っ白に焼き尽くされる様は、神秘的ですらあった。

地面を抉っていた大きな巨体が白い炎に包まれ消滅するまで、そうかからなかった。

「ありがとう。」

「礼を言われる程でもねえよ。」

「いや、私の炎じゃこうはいかない。」

リュウキの操る炎は、シロと契約していることもあり通常の術師が使う炎よりもずっと威力はあるのだが、如何せんシロの扱うものは到底敵わない。

大きな魔獣の強固な骨まで焼き尽くすには、彼女の炎では荷が勝つてしまうのだ。

今まで多くの命を屠ってきた。

獣だけではなく、人も殺めた。

もういくつの命を奪ったかも覚えていないし、これからも奪い続ける自分はいつか今日のことを忘れてしまうのだろう。

それでも、とリュウキは思う。

それでも、奪ったその時だけは、奪ったその瞬間はしっかりとそれを見据えていたかったし、出来ることならしっかりと叩いたかった。たとえそれが、自己満足だとしても。

だからリュウキは逸らさない。己が奪うその瞬間の、命の炎が消えゆく瞳から。

怒りも恨みも悲しみも、全てを受け止めるために。

全てを踏み越え、己は生きていくのだと、自身に知らしめるために。

振り返れば、まさに修羅の道。血と暗い焰と闇の道。

己を支える足元に加わった真つ青な輝きを想い、リュウキはしばらくの間目を閉じていた。

闇の腕 4

森に入ってもうどのくらい歩いただろうか。

“闇の腕”で最も深く最も危険な森は、奥へ進むにつれだんだんと生物の気配が薄まってきているように思える。

高い天井を思わせていた大木はある一点を越えたところから姿を消し、柔らかく地を覆っていた緑の苔も、色褪せた茶と紫色のごわごわとしたものに様変わりしていた。

空は伺えるものの、重く立ち込める霧で殆ど視界は利かず、リュウキはシロの鋭い感覚を頼りに魔の気の濃さを辿りながら進んでいる。それでも彼女の進む速度に変化はなく、まるで全てを把握しているような足取りで先へ先へと歩み続けていた。

山脈の麓までおそらくあと僅か。

ここに至るまで、マンティコラに始まり様々な魔獣が彼女たちを襲ったが、そのどれもが二人の歩みを阻めるものではなかった。何頭かは実力差に屈し逃げたものの、撃退した半数はシロの浄化の炎に焼かれている。

霧で湿った岩を危なげなく踏みしめながら、リュウキが軽く跳躍した。そのまま前方に薄っすらと見えていた岩に、軽い音を立てて着地する。

少し歩き、少し跳んで、それを繰り返しながら足場を飛び移り進む。しばらくすると殆どの足場が白い岩場が変わっていた。

「見事な花崗岩かこうがんだな。」

「これだけあれば城下一帯改築できるんじゃないか？」

トントンと足元の岩を踵で叩きながらリュウキが小さく呟くと、応えるようにシロが笑った。

花崗岩という白っぽい石は、石造りを基本とするヒリュウでは最も一般的な建築材である。

その緻密な岩肌とキラキラと輝く色の粒の集合の見せる美しさが好まれており、その硬い材質も建物にはもってこいだった。

また、一年を通して殆ど気候が変わらないヒリュウの地も、この石材を使うに適していた。温度差が少ないことで、花崗岩の風化を防ぎ、長く建物を支えることが可能なのだ。

何より、花崗岩は削って磨けば素晴らしい光沢を放つ。

ヒリュウでは特に希少な岩でもないのに、この地に住まう平民から貴族の住まい、果ては王城まで花崗岩を使っているが、一般の民家で使用される花崗岩が、切り出されたままのごつごつとしたものを使っているのに対し、一部の貴族や王城では研磨された光沢のある花崗岩が使われていた。

因みに、花崗岩は白っぽいといってもその色合いに微妙な違いがあり、淡い乳白色のものから僅かに桃色を含むもの、青緑の粒を含んだものなど様々だ。

その種類の多さも人気の理由の一つだった。

「まあ、こんなトコまで入り込んで石切りをする殊勝な奴がいるとは思えんが。」

「確かに…まず軍隊でも率いてこなきゃ無利だな。」

人の手が届かないからこそその絶景。

淡く煌く白い岩肌と、濃い色の苔、それを包む幻想的な霧が作り出す景色は、何人も侵してはいけない場所だろう。

なるべくこの地を崩さぬよう、リュウキは足元に神経を集中させつつ先へと進んだ。

周りの景色が岩場から岩山へと変わったことで、二人は漸く山脈の麓へ入ったことに気づいた。

どうやら魔の気を辿ってきた道は間違っていないかったようである。ここからはほぼ山登り、否、岩登りといった方が適当かもしれない。しかし、リュウキは怯むことなく、荷を担いだままひよいひよいと適当な岩の足場を選びつつ跳躍し、時に片手で身を支えながら登り続けた。

「おい、リュウキ。地道に登ってないで俺に乗ればいいじゃねえか。」

いくらシロと契約して人並み以上の体力を持つリュウキとて、楽に登っているものの疲れないわけではない。薄っすらと額に汗を滲ませ始めた彼女の背後で、のんびりと翼を動かしている騰蛇が呆れたように声をかけた。

しかし、彼の声にはリュウキは否やで応える。

「いい。絶壁になって登れなくなってからにする。」

登れるうちは自分で登る、と告げる彼女に、シロがやれやれと溜息をついた。

彼の主人は、普段彼をからかい扱き使うくせに、ここぞというときは過保護なくらいに気を遣う。

おそらく、今回も後の不測の事態を考え、シロの魔力を温存しておこうと思っっているのだろう。巨大化して山を登るくらい、何のことは無いというのに。

寧ろリュウキ自身の体力を温存しておかなくていいのかとシロは思う。

黙々と登り続ける小さな背を見つめながら、シロは再びこっそりと溜息をついた。

リュウキがなかなかの速度で登り続けたため、そう長い時間が過ぎないうちに霧が晴れ空が見える位置まで登ることができた。

それでも、漸く目視することができた山脈の峰付近は雲に覆われ途切れている。

山肌から少しせり出た、一人が余裕で座れるくらいの岩場に腰掛けたリュウキが、頭上を見上げて溜息を吐いた。

「…道のりは遠いなあ。」

「だから乗れつつってんだろ。」

ふーっと長い溜息を吐いたリュウキに、シロがぼつりと呟く。

その不満げな声にリュウキが小さく苦笑を浮かべた。

「何で拗ねてんだよ。」

「拗ねてねえよ!!--」

「拗ねてんだろ？変な奴だな。」

くすくすと笑うリュウキに、真っ白な騰蛇の目元が僅かに赤く染まった。疲れを知らない翼をバタバタとはためかせて、真珠色の胴がうねうねと蠢く。

どうやら照れているらしい。

「そんなに拗ねなくても、ほら、もうそろそろシロにお世話にならないと登れないみたいだ。」

くい、と顎で示した頭上の山肌は、少しずつ白いものに覆われ、風に吹かれた雪の粒がキラキラと光を反射しながら舞っていた。

この世界で言う“契約”には、たくさん種類があり、特に何の影響も無い口約束程度のものから、肉体が朽ちた後も魂を縛る最も重いものまで様々である。

契約の重さの目安は、当事者にどれだけ影響を及ぼすかということと、破棄する時の制約の厳しさで決められているが、あくまで人間の目安だ。

また、契約の当事者には上下関係が発生することが多い。

それは保持する能力や魔力で決まる訳ではなく、契約者同士の意味で決まる。

例えば、竜と竜騎士の関係。あれも一種の契約であり、人間優位の主従契約である。

契約した人間の呼びかけに竜が応え、要望に従うのだ。彼らの契約は生涯魂を結ばないまでも、意識を共有するために一時的に精神を繋ぐ少し重い契約で、これを解くには両者の同意と一度破棄した相手とは二度と契約できないという制約を守らなければならない。

ただし、制約さえ解つていれば、どちらからでも契約を破棄することができるので、人間優位とは言っても、然程その主従関係に強制力は無いのである。

因みに、制約を破りもう一度無理矢理精神を繋ごうとすれば、どちらか、もしくは両方の精神が壊れてしまう。

そしてリュウキとシロも六年前に“契約”を交わしていた。

それも、竜と竜騎士の精神の契約よりも重い、魂の契約だ。

リュウキを主、シロを従として結んだこの契約は、当事者の死後まで縛られることは無いが、生きている限り二つの魂は縛られ、離れ

ていても意思疎通ができるし、お互いの能力や魔力を使うことができる。

更に、シロはある程度自分の能力や魔力を使えるが、全ての魔力を開放するには主であるリュウキの了解が必要だった。この契約で、従僕であるシロはリュウキよりも多くのことに縛られているのだ。

因みに、彼が万が一リュウキよりも先に死んだ場合、彼の魔力や能力は全てリュウキに譲渡されるという付加まであった。

彼が死に、リュウキに全てが譲渡された瞬間、この契約は全て消滅する。もしくは、リュウキがシロ以外の何かに命を奪われたとき、それから彼女が寿命を全うしたとき、同様に二人の間の契約は消えてなくなるようになっていく。

と、いうわけで、雪の積もり始めた山脈を登るにあたり、シロの巨大化が必要なわけだが、これは契約の制限の一つである主による認証と一時開放が必要不可欠であった。

「じゃあ、いくぞシロ。」

「おうよ、任せろ。」

先ほど、リュウキが休んでいた場所からまたしばらく登り、二人は今薄っすらと雪の積もった岩場で足を止めていた。

岩の上に立ったリュウキの前に、ぱたぱたと翼をはためかせたシロが向かい合って飛んでいる。

それを見つめていたリュウキが、すつつと息を吸い込むと同時に薄く目を細めた。

「蓮竜姫の名において、封印されし凶将の星、火神騰蛇の解放を宣言する。」

赤い唇から零れた言葉は、一つ一つに力が込められ、光の渦となつて流れるようにシロの体へと吸い込まれていく。
シロは煌く金目をとろりと虚ろに細め、己を取り巻く言葉の渦にうつとりと視線を彷徨わせていた。

「目覚めよ、つきしん“月白”」

言葉が放たれると同時に、シロの身体の内から幾筋もの光が溢れ、キラキラと輝く鱗が真つ白な光に吞まれた。

彼の居た場所が光の玉に変わる一瞬、白い騰蛇の輪郭がぼろりと崩れたように見えた。

ゴオオオウ

荒々しい音を立てて、ちらつく雪を手当たり次第に蒸発させながら青白い炎が渦巻く。

炎色反応ではなく、まるで星の光のようなその輝きは地上の生物が扱えぬ高温で、触れたものは一瞬で蒸発してしまうほどのものだ。契約者であるリュウキにとっては、熱風にも感じられない温度だが、ひとたび彼女以外のものが今のシロに近づけばただではすまないだろう。

ふわり、と黒い髪を靡かせながら炎の玉にリュウキが近づく。

そのまま流れるように右手を上げて、まるで大事な宝に触れるようにそつと炎の玉に掌を添えた。
青白い炎が、白い彼女の手を焼くことはなく、寧ろ愛おしむようにゆらりと揺れる。

と、次の瞬間、彼女の掌に触れた場所から炎が集うように収束し始め、それらは僅かに青みを帯びた白く輝く鱗に変化した。

青白い炎を吸収するように広がるそれは、やがて緩い曲線を描きながら大きな輪郭を形取っていく。
全ての炎を吸収し終わる頃には、巨大な騰蛇がゆったりと翼を広げていた。

「この姿は久しぶりだな、月白。」

ああ、その名で呼ばれるのもな。

「ふふ…気分はどうだ？」

いいぜ。すげえ開放感だ。

先ほどまでとは違い、声帯から発する声ではなくリュウキの頭に直接少年の声が響く。

どこか荘厳な雰囲気を持つ見た目に反し、いつもどおりの軽い口調に違和感を覚えたリュウキは小さく笑みを零した。

因みに、“月白”とはリュウキがシロと契約するとき、彼に付けた二人だけの知る名前である。

名を伴う契約は、それだけで二人の繋がりを強め、より強固な契約を交わすことができるのだ。

ほれ、乗れよりユウキ。

シロがゆっくりと空を進み、ちょうどリュウキの前に彼の後頭部が来るように移動した。

「よろしく、月白。」

それを目で追いながらふわりと笑ったリュウキが、トンと軽い音を立てて岩場から彼の背に飛び移る。

行くぜ！！

リュウキが項あたりに膝を折り、両手を彼の後頭部に乘せてしつかりと身体を固定したことを確認したシロは、大きく翼をはためかせて一気に上昇を始めた。

山脈 2

「昇り始めた月とその周りの青白い空が、お前とお前の使う炎に似ているから。」

何故この名前をつけたのかと尋ねると、女は無表情のまま、しかし目元を僅かに染めて答えた。

その時から、火の凶将である己の性とは似ても似つかないこの名前が、彼の宝物になったのだ。

ビュウ、と風を切る音を立てながらシロが白い山肌に沿って昇っていく。

視界の地面はだんだんと雪が深くなり、ついには岩肌が隠れ雪と氷

の世界に変わった。

「シロ、ちょっと速度を緩めてくれ。」

リュウキが彼の頭部に顔を寄せて大きめの声で告げる。

黙っていても意思疎通はできるので、声に出す必要は無いのだが、彼女はいつも必要なとき以外は伝心を使わず言葉を使うのだ。

シロも彼女の声は好きなので、多少聞き取りづらい状況でも特に何を言うこともなかった。

了解。ていうか、どこもすげえ魔の気だな。

前回山脈を越えたときは、ここまで山肌に近づいて飛んではいなかったので判らなかつたが、殆ど雪の大地すれすれを飛んでいる今、その魔の気の濃さに二人は驚いていた。

もう何が起こっても不思議ではないくらいだ。

「もう少し登ってみるか…。」

えか？
そうだな、天^{てん}への扉^{ひら}って言うくらいだから一番高えトコじゃねえか？

「はは、単純だな。でも確かに一理ある。」

シロの言葉にくっくと笑いながらも、リュウキはしっかりと頷いた。それを確認したシロが、ぐんと一度胴を沈めて羽を大きく広げる。

よし、んじゃ一気に行くぞ！

その言葉が終わるやいなや、シロが翼を物凄い勢いで上下させると、

白く輝く巨体が風を巻き上げながら速度を上げて再び上昇を始めた。

ぱきぱきぱきぱき。

氷の壁には、まるで大きな蜘蛛の巣のように巨大なヒビが入っている。

壁の前には、ヒビから崩れたいくつもの氷の欠片が零れ、既に小さな山を作りつつあった。

ごろり、と音を立ててまた一つ欠片が零れ落ちる。

それでも壁の全てが崩れることはなく、未だ耐えるようにそこにあった。

ぱき…ぱきぱき…ぴし。

ヒビの進む音は止むことなく続き、断続的に響く地鳴りの感覚も縮まっている。

ズ…ズズズズウン

再び低い音が響き始めた。
それと共に、洞窟の壁がカタカタと振動を始める。
とうとう、その揺れに耐え切れず、氷の壁の中央上部、人の頭ほどの大きな欠片がゴトンと大きな音を立てて地面に落ちた。

ズ…ズズズズウン…

唸るような低い音は、山肌を滑るように進む彼らの耳にもはっきりと届いた。

まるで本当に天が唸っているように、空から聞こえるその音にリュウキとシロが同時に目を見開く。

「シロ、お前正解。やっぱり上だな。」

ああ、…にしても、不気味な音だな。

「グレイグ河畔とどっちが不気味だろうな。」

苦笑を浮かべながら同意を表すリュウキに、シロが小さく笑った。
しかし、すぐに気を引き締めるようにどちらの顔からも笑みが消える。

「原因が判らない分、危険なのはこっちだな。」

違いねえ。

睨むように見上げた先には、まるで刃のように切り立った白い峰が姿を現していた。

山脈 3

ぎざぎざと天に刃を向けるノコギリのような山脈の、一際高い一角の中心。

真っ白な雪原の中に、ぼつりと一箇所だけ、まるで黒子のような黒い点が見えた。

風に舞い上がる雪で視界を制限されていたため、リュウキもシロも最初は岩が顔を出しているのかと思ったが、近づくにつれそれがはっきりと空いた穴、洞窟なのだという事に気づく。

そうして、それを確認した瞬間、何故だか判らないが二人とも“そこ”であると瞬時に悟った。

「シロ。」

ああ。

リュウキの声にシロが同意を示し、そのまま前方の黒い点に真っ直ぐと向かう。

洞窟に近づくにつれ、それぞれが物凄い魔の気と言いつれぬ何かを感じ取っていた。

どちらも口を噛み、全神経をそこへと集中する。

その黒い洞窟のすぐ手前、凹凸すら判断できないほど真っ白な雪面にシロはゆったりと着地した。

彼の翼が起こす風圧で、ぶわりと雪の粉が舞う。

そのまま長い尾を伸ばして洞窟前の雪をぐつと踏み固めると、そこに頭部を寄せてリュウキを促した。

「ありがとう。」

軽く礼を告げたりリュウキが、シロから飛び降り踏み固められた雪の上にキレイに着地する。

雪は僅かに沈み、彼女の小さな足の形をくつきりと残した。

それを確認したシロが僅かに飛び上がって雪面から離れる。次いで、そつと目を閉じた瞬間、彼の周りを青白い炎が包んだ。

周囲の雪を蒸発させながら現れたのは、いつもの真珠色をした小さな騰蛇だった。

小さな金目をぱちぱちと瞬かせたあと、翼をはためかせてリュウキの横へと戻る。

「お疲れ様。」

「おう！」

にっとリュウキが笑みを見せると、シロも目を細めてにやりと笑った。

しかし、二人はすぐに目の前の洞窟に目を向け、浮かんでいた笑みを消し去る。

腰に揺れる愛刀を確認するように一撫でしたリュウキは、大きく息を吐き出すとそのまま慎重に足を踏み出した。

外から見ると黒い点だった洞窟は、入ってみれば意外と明るく、氷の壁がまるで淡い証明のように青白く輝いていた。とはいえ、入り口の光を反射したものであったので、明るいと言っても何とか視界が

利く程度なのだが。
それでも、人より感覚の優れたリュウキやシロにとっては十分な明るさである。

ぱきぱき…ぱき…

先程、洞窟に足を踏み入れ外界の風音が遠のいた辺りから、二人の耳は不気味に響く小さな音を捉えていた。

おそらく氷にヒビが入っている音なのだろうが、洞窟を形成する上下左右の不透明な氷の壁は何処までも分厚く頑丈そうで、崩れているような気配は無い。

「奥からか…。」

緩く蛇行している洞窟は奥に進むに連れて光が届かなくなり、だんだんと視界が暗くなってきている。まるで黄泉への入り口のようだと思いつつながら、リュウキは何が出てきてもすぐに対応できるよう神経を尖らせていた。

しかし、どれだけ進んでも魔獣は愚か、生物の気配すらない。

ぱき…ぱききき…ぴし…

変化といえば、この音が大きくなるくらいか。

「リュウキ。」

「…ああ。」

そうこうしているうちに、どうやら洞窟の最深部に辿りついてしまったようだ。

眉を潜めるリュウキの目の前には、前方を大きく塞ぐ分厚い氷の壁が広がっていた。

リュウキは首を廻らせ壁を見定めると、そのまま警戒しつつも近づいてそつと手を伸ばす。

流石に薄暗くてよく判らないが、洞窟を形成する氷の壁とは少し質が違つようだった。

更に、至近で感じるぱきぱきという音と、足元に降り積もつた氷の欠片を見て、崩れかけていたのはこれだったのかと得心する。

リュウキは再び壁から数歩はなれて距離をとると、左手を前方に掲げて何事か小さく呟いた。

彼女の言葉が途切れると同時に、上向けた白い掌の上にぽつと温かな光が生まれる。

その光はほんわりと輝き、彼女の周囲、目の前の氷の壁の全容が判るくらいの範囲をしつかりと照らし出した。

「…っ！」

「なんだ…こりゃあ…？」

表れたのは、やはり周囲の壁とは違い透明感を持った青みを帯びた氷の壁。

そこには、幾筋もの白いヒビが蜘蛛の巣状に入り、所々が欠け落ちていた。

しかし二人が目を奪われたのは、氷の壁の向こう側。

青い氷の中で、ゆらり、ゆらりと揺らめく黒い影は、まさしく“ヒト”の形をしていた。

「これは…いつたい…。」

思わず、そんな言葉が口から零れる程、その光景は不思議で、不気味だった。

絶えず揺らめいているその影は、おそらく“それ”の髪なのだろう。だらりと力なく伸ばした四肢は短く細い、頭部と思われるものから足の先までの長さを考えても、未発達の子供のものを思わせる大きさだった。

子供。

そう、髪の毛の長い子供である。

「…お前か。」

ぼつりと呟いたリュウキが、すいと軽く左手を払うと、掌に浮かんでいた光がぼわんと宙へ移動する。そのままそこに停滞して洞窟内の明るさを保っていた。

そこにはちらとも視線を寄越さず、氷の壁に目を釘付けにしたままのリュウキが再び壁に近づいて手を伸ばす。

「リュウキ？」

彼女らしからぬ迂闊な動きに、シロが注意を促すように名を呼んだ。しかし、彼女はそれにすら応えない。

そうこうしているうちに、両手を伸ばした彼女の掌が、ひたと氷の壁に触れた。

「リュウキ!」

「…っ！！」

その瞬間、髪だけを靡かせていたはずの黒い影がぐにやりと蠢いたかと思うと、長く伸びてきた腕と思わしき影が分厚い氷越しにリュウキの掌と重なる。

驚いて手を引こうとしたリュウキはしかし、己の手が凍りついたように動かないことに目を見開いた。

「なにっ！？」

とくん、と。

冷たいだけの氷の壁から掌に伝わったのは、不思議なことに小さな鼓動だった。気づけば、目の前の影が伸ばした手は、まるで水中を進むかのようにリュウキの掌のすぐそこまで迫っている。

と、リュウキとシロの目の前で信じられないことが起こった。

「…手、が…！？」

氷の壁を突き抜けて、ゆっくりと青白い子供の手がリュウキの手に絡んだのだ。指の一本一本を絡ませながら、小さな白い手がぎゅつとリュウキの両手を握る。

「このっ！！」

「待て！シロっ！」

それを見たシロが、焦ったように口を開いて陣を展開させた。恐らく炎で焼き払おうとしたのだろう、しかしその行動をリュウキの厳しい声が止める。

「何で！？」

「いい、大丈夫。」

リュウキは子供の顔らしき影をしっかりと見据えたまま告げるが、どう見ても大丈夫には見えないシロには焦りの色が浮かんでいた。リュウキの声に従うものの、いつでも炎を出せるように魔力を集中させている。

「何か…言ってる。」
「何？」

リュウキの視線は影から離れない。それどころか、彼女は己の指に絡まる小さな手をそっと握り返した。青白い手から人肌の温もりが伝わることはなく、子供特有の柔らかさはあるものの、ひんやりと冷たい。しかし、先ほどから伝わる小さな鼓動は強制的な意思をもつてリュウキの抵抗を封じていた。寧ろ抵抗するという選択肢すら思い浮かばないのが不思議だ。

…っていた。
ずっと、まっていた。

リュウキの頭に響くその声は、確かに夢で聞いたあの声だった。

あおい、ほしの…いよこい。

「青い星。」
「リュウキ？」

ぼつりと零れたリュウキの言葉に、シロが訝しげに眉を寄せる。どうやら声は、リュウキのみに聞こえているようだ。

「シロ、繋がれ。声が聞こえる。」

リュウキは微動だにせず、シロに声をかける。低く告げられた言葉にリュウキの正気を確認したシロは、少しだけ安堵の息を吐いた。そのままするりといったもの低位置である、リュウキの肩に身を落ち着ける。少し意識をリュウキに集中させれば、まるで精神が混じるように意識が溶けた。

だれ？

いとどこではない、だれ？

「…っ！」

しかし、影は突如リュウキの意識に混じったシロに気付いたらしい。声の抑揚は変わらなかったたので感情は読めなかったが、すぐさま意識をシロに向けてきた。

だれ？

「私の半身だ。いつどんなときも共に在る。」

…ちがう。

「違うない。」

いいえ、ちがう。

それは、はんしんではない。

「好き勝手言ってくれるじゃねえか。なら、てめえがリュウキの半身ってヤツなのかよ？」

子供の答えが気に入らなかつたらしいシロが、少し苛立ったように嘲笑をこめて言葉を放つ。

いいえ、われは、ひとり。

あおいほしの、いとじご。もうひとりの、いとじごがそなたのはんしん。

ちとえにしをわけた、たったふたつのそんざい。

そこでリュウキがはっと目を見開く。

「青い星とは、地球のことか!？」

ちきゅう、そう、あおいほし。

「どういうことだ? “ちきゅう” っつと、リュウキの元いた世界か?」

「ああ。」

「じゃあ、半身ってのは…。」

たった一人、リュウキと共に異世界からここへ落ちた存在。

“修也”

リュウキとシロの頭を彼の名前が過ぎった。

「お前は、何だ。何故こんなところに封印されている？」

白い面に僅かな動揺を浮かべたまま、リュウキが子供に尋ねた。子供の言うもう一人の“いとご”に思い当たったものの、未だ正体のはつきりしないものを前に迂闊に名前を出すことは避けたい。兎に角、意思疎通はできるようだし、聞けば答えるようなので、リュウキはまず事態の解明を優先した。

われは、そなたとおなじもの。
そなたは、われとおなじ存在。

「どういう意味だ？」

われも、愛し子。
青い星の、愛し子。

しばらく問答を繰り返すうちに、初めのうちは呂律の回らぬようだった子供の声が明瞭さを増す。少し眉を寄せてそれに警戒を見せるリュウキは、しかし子供から手を離すことはなかった。問答は続く。

「お前も異世界に落ちた者か？」

渡りは必然。
神が我らを選んだ。

「何のために？」

世界のために。

「世界は“愛し子”に何を求めている？」

要の地を、保つこと。

「要の地とは？」

大地の焔、海原の風。

世界が封じた四つの要。

「この大陸か。」

世界の縮図。

神の箱庭。

要の地、選ばれた愛し子、封印された子供。

揺らめく影をじっと見つめるリュウキの傍ら、子供の言葉を聞く毎に表情を険しくするシロに彼女は気付かない。明らかに、話は不穏な方向へ向かっていた。

愛し子よ、選べ。

この地をめぐる黒星を抱く者を。

そなたか、そなたの半身か。

「ふざけんじゃねえっ！！！」

縋るように紡がれていた子供の言葉を遮ったのは、怒りに震えるシ

口の咆哮だった。

「言わせておけば、勝手なことをペラペラと……。」

リュウキですら今まで聞いたこともないようなシロの低く唸るような声が洞窟に響く。

彼は今、本気で怒っていた。

「遠まわしにのらりくらりと言いやがって。要は世界の贄じゃねえかっ!!！」

お前には、関係ない。

子供が僅かに不快を示す。

しかし、シロも更に神経を逆撫でされたようで、まるで竜の逆鱗に触れたかのように気を爆発させていた。

彼の周りの空気がゆらりと陽炎のように揺らめく。

「うるせえ。俺はこいつと魂を結んでる。リュウキのことで、俺に無関係なことなんか一つもねえ。こいつは俺の、ただ一人の半身。勝手に贄にされてたまるかっ!!！」

「シロ。贄って何のことだ？」

空気が揺れるような怒気に、しかしリュウキは怯むことなくシロへ声をかける。

シロは、リュウキの言葉に僅かに目を細め、心底忌々しいという意

を隠すことなく口を開いた。

「俺はもともと天の獣。人間が神だ仏だと崇める存在と同じ場所で生まれた。だからあいつらがやりそうなことは大体見当がつくし、世界が変わろうと人間の性質が変わらないのと同じで、神と呼ばれるやつらも大して根っこは変わらねえ。」

小さな獣の金の瞳が怒りで燃えている。

「あいつらは、よく“贄”を立てる。単純に、命を真つ直ぐ燃やす獣や植物と違って、人間には知恵があるからな。ときに生を逸れる無秩序な知恵は、他の命や神には理解できねえもんだ。そしてその無秩序は、生み出した人間の枠を超えて、他に影響を及ぼすほどの力を持つ。」

リュウキは、人々が神と崇めるものを実際見たことがないし、人中でもそれらの存在を目にしたという者は少ないだろう。見たという者ですら怪しいくらいだ。

それでも人は、神を崇め、神に縋る。

シロの言うことが本当ならば、人の言うところの世界を見守る神々は確かに存在していることになる。ただ、シロの様子からは人の想う神の像からかけ離れていそうではあるが。

リュウキ自身、異世界というものがあるのだから、彼女の世界で言われていた神や悪魔がいても不思議ではないな、くらいのことだった。

まあ、何年か前のリュウキが彼らの存在を知ったならば、己の境遇を思い崇めるどころか恨んですらいただろうが。

「あいつらは、面倒なことが大嫌いだ。無秩序の移ろいを見るのは

好きだが、それらが引き起こす世界の歪みを処理するのは手間がかかる。ただ消すだけでは、世界の秩序が許さない。強力な力を加えれば、またそこから歪みは生まれるから。だから、あいつらは歪みを埋める“贄”を立てるんだ。」

ぎりり、とシロの口元から肉の擦れる音が聞こえたきがした。

「大きく栄え過ぎるものあれば傍ら滅ぶものをつくり、強大な力を手にするものがあれば翻弄されるものをつくる。それらは広く散らすことで個の負担を減らし、等しく緩やかに行われるはずのものだった。それを個に背負わせればどうなるかなんて、あいつらだって判っているはずなのにっ！」

金色の小さな瞳が、刺すように子供を射抜く。

「何が“愛し子”だ！！クソ餓鬼、てめえがリュウキに負わせようとしてるのは、まさしく世界の歪みだらうっ！！？」

怒りの焰

大地の息吹と命の焰、眠りの海原と癒しの風。

管理に疲れた彼らは、世界の理に似た四つの要が眠る大陸に、縮図となるべき術を施した。

その土地が平和に保たれることは、即ち世界が平和に保たれることであり、その土地が怨嗟に沈めば、世界も闇に沈む。

広い世界を覗くことは、変化のない日々を送る彼らにとって、とても面白いことではあったが、それを続けるには常に生み出される無秩序な闇を処理するという手間がかかった。

だから彼らは世界の縮図である箱庭を作ったのだ。

箱庭は思いのほか上手く育った。

しかし、数千年も経たないうちに、世界と箱庭を無理に繋いだことで再び歪みが生じた。

こうなると、箱庭を壊して、生じた歪みを世界に均ならさなければならなかったのだが、なかなかの傑作である箱庭を崩したくなかった彼らは、歪みを均さずそれを呑み込む器を作ることにした。

無秩序の思い、理不尽な願い。

怒りや悲しみ、妬み嫉む心。

巡り廻る、人の欲の還る場所。

その全てを箱庭の中心、生み出した者と似て非なる者へ。

一を全てに模して、全てを一に負わず。

大きすぎる歪みを背負った一は、世界の秩序から弾かれ、輪廻の輪に戻ることにすら叶わず、孤独な箱庭に繋がれたまま、安らかな死すら許されることなく、魂を歪みに削られ続けるのだ。幾千の時をかけて。

しかし、そんなことよりも、彼らには箱庭を残すことの方が重要だった。

“愛し子”は、この世界のものにはなれない。

“愛し子”は、輪廻から外れたものでなければならぬ。

「だから、異世界から呼んだのか…。」

茫然と、リュウキが呟く。

なんて身勝手に、子供じみた理由だろうか。

そんなことのために、リュウキも、修也も、この世界に呼ばれたというのか。

あまりのことに、何の言葉も浮かばない。

しかし、彼女の語尾にかかるかかからないかのところで、隣で燻っていた魔力がとうとう爆発した。

「…っ！！シロっ！！」

目を見開いたまま弾かれたように隣に目を向け、子供と繋いでいた

手を振りほどいて、シロに手を伸ばす。
至近距離にいたはずの彼は、しかしリュウキの静止の声を受け入れることなく、伸びてきた彼女の手を掻い潜ってリュウキの正面に滑り込んだ。
そのままかばりと小さな口を開く。

「こんなもん、俺が跡形もなく消し去ってやるっ!!!」

一際眩く光る陣を展開させた彼の口から、勢いよく青みがかつた白い炎が放射された。

ゴオオオオオウ

氷の壁に、シロの炎が叩きつけられる。
高温で熱された壁が、ジュウつと音を立てて蒸発し、その周辺一帯が発生した蒸気で埋め尽くされた。
リュウキは慌てて距離をとるように数歩下がる。
シロも炎を放射したまま、ばさりと翼を動かして後退した。

「おい、シロ落ち着け！確かにむかつくが、そんな簡単に壊しているものなのか!？」

「知ったこつちやねえっ!!」

本気で頭に血が上っているらしい、ギラギラと小さな金目を煌かせ、て前方を睨みつける騰蛇は、殆ど咆哮に近い叫びを上げた。

「そんな犠牲がねえと保てねえ世界なんざ、ねえほうがいいんだっ
！！！」

最後のとどめとばかりに炎が勢いを増して壁を襲う。

そんなシロに、リュウキが慌てて手を伸ばした。

背後からの腕は、今度こそかわされることなく、シロの真珠色に輝く胴体に絡みつく。

「止める月白っ！！」

叫びながら片手で胴体を押さえ、もう片方の手で炎を放射する陣をかき消し、牙を剥き出しにしている獣の口を塞いだ。

己の身体を戒める白い手に、シロが苛立ったようにもがくも、名を呼ばれて身体の動きが鈍る。

「…っ！！…てめえっリュウキっ！！」

「ちよつと落ち着け！」

「うるせえ！これが落ち着いてられるか！！てめえっそれでいいのかよ！！」

「いいわけあるか！」

そう、リュウキだって理不尽な話にかなりの怒りを感じていた。

異世界に落とされ、もうすぐ十年。

今でこそ平穩無事に暮らしているが、その“今”を手に入れるまで多くの辛酸を舐め尽して来た。

果ては、己のみならず、大事な従兄を巻き込んで。

普通に暮らしていた自分達が、何故関係のない世界のために、わが身を犠牲にしなければならぬのか。

全ての憤りを罵りでぶつけ、未だ心に燻る疑問を全て問いただしたかった。

否、言葉だけでは足りないだろう。数発殴ったくらいでは気がすまない。

リュウキとて、それくらい怒っていた。

しかし、よく考えてみれば、目の前に居るのは自分と同じ境遇の子供。

地球から、関係もないこの世界の贅となるためだけに連れてこられ、おそらく永い時を氷の中に押し込まれ世界の歪みを背負ってきた子供である。

討つべきは彼の子供ではなく、それらを科した者達だ。

更に言えば、もうこの世界はリュウキにとって、簡単に壊れていいものではなくなっている。

彼女にとって、大事な家族が暮らす世界だ。

「兎に角、落ち着け！」

「……くそっ……！」

同じ色に煌く瞳を睨みつけ、シロは小さく舌打ちすると、鈍く抗っていた身体から力を抜いて、リュウキの腕の中に身を預けた。

細く白い彼女の腕は、白い騰蛇を抱きしめながら僅かに震えていた。

立ち上る水蒸気は周囲の氷の壁に冷やされ、すぐに冷たい雫となつて洞窟内にぽたぽたと落ちた。

足元には炎で抉り取られたような大小の窪みに、絶えず波紋が広がる水溜りができている。

辺りを辿るように視線を巡らせながら、リュウキはシロを腕に抱えた状態でゆっくりと後退した。

霞んでいた視界はすぐに開け、先ほどまでこちらと子供を隔てていた分厚い氷の壁が、シロの放った炎で殆ど溶けてしまっていることが判った。

氷の壁は僅かな凹凸だけを残し、青く輝く大穴に姿を変えている。どうやら壁の内部は水で満たされていたようだ。

しかし、殆どの水を炎が蒸発させてしまったようで、残っていたのは人の踝が浸る程度の水溜りだった。

その水溜りの中心に目を向けると、先ほどまで彼女の手を握り締めていた子供が、支えを失った人形のように倒れていた。

リュウキは宥めるようにシロの頭を一撫でして離すと、そのままゆっくりと子供に近づく。

「ぱしゃん、と小さな音を立てて彼女の足元を冷たい水が濡らした。

「リュウキ。」

少し不満げな声が、警戒を促すように彼女の背へかけられる。

それに軽く手を上げて応えたリュウキは、しかしその歩みを止めることなく子供へと近づいた。

青白い四肢はだらりと伸ばされ、明らかに子供の身長よりも長い髪

がその小さな顔を覆い隠している。髪はリュウキと同じ、まるで夜の闇のように真っ黒で、たつぷりと水を含んで少し重そうだった。

リュウキは素早く子供の全身に視線を巡らせた。

体つきを見ると、どうやら男の子のようだ。

彼女は警戒しながらも、子供の傍らに屈みこみ、その青白い頬にそっと手を添えてそのまま肌を滑らせるように張り付いた髪を掻き分けた。

そこに表れたのは、以前見たものより幾分頬はこけ目はくぼんでいるものの、夢を渡ってきた例の子供と同じ顔だ。

今はぴったりと閉じられている目は、おそらく髪と同じ真っ黒な瞳を隠しているのだろう。

僅かにずらした視線の先にある、骨と皮だけの腕を見つめ、リュウキは小さく眉を寄せた。

「…どうすんだ、そいつ。」

少し落ち着いたらしいシロが、するすると彼女の隣まで飛んできて子供を覗き込みながらぼそりと呟く。

先ほどまで異様な空気を放っていた子供は、今はただの人間の子供のようなあどけない顔を晒して意識を飛ばしていた。まるで死人のような肌色と体温だが、小さな唇からは空気の抜けるような吐息が漏れ、骨の浮いた薄い胸は生を示すように小さく上下している。

その姿のどこからも、邪悪な空気や魔力は感じられない。

とにかく、このままでは不味いだろうと決断したリュウキは、小さな子供の背と細い脚の膝裏に手を回し、何の躊躇もなくずぶ濡れの身体を抱き上げた。

じわりと彼女の衣服が濡れて色味を増す。

「まさか連れて帰るのか!？」

その背後から、信じられないと言わんばかりに目を見開いたシロが抗議の声をかけた。

「でも、このまま放つてはおけない。」

「こんな大層な術式がかかってたんだ。そんなもん連れて帰ったら何が起るか……」

「その術式を感情のままぶっ壊した奴が何言ってるんだ。」

溜息混じりのリュウキの声に、ぐつとシロが言葉を呑み込む。

氷の壁の封印を破壊し、子供を水牢から解放したのは確かにシロだ。子供の語った言葉の内容が真実ならば、この場と子供にかけられていた術式も子供が交わしていた契約も世界に関するほどのものである。一時の感情で軽々しく壊していいものではなかった。

「それに、もうこの場は壊れてしまって、何の痕跡もない。残る手がかりはこの子供だけだ。まだ死なれては困る。」

そう、先ほど放ったシロの浄化の炎。

その炎はこの洞窟内にかけられていた全ての術をなぎ払い、焼き尽くし、欠片も残さず滅していた。

氷の壁と水牢の封印が子供だけは守ったようだが、その子供も今は意識を飛ばして話を聞くことができない状態である。

明らかにシロの失態だが、彼の行動の理由を思うとリュウキは強く咎めることはできなかった。

シロはただ、リュウキの身を案じ、彼女のために怒ってくれただけなのだから。

「兎に角、見た感じ危ない術もかかってないし、嫌な気配も感じない。念のため魔封じの陣はかけておくから問題はないだろう。ただ、

確かに何が起こるか判らないから、念には念を入れてシロにも協力してほしい。」

頼む、という言葉と共に、強く輝く金目で真っ直ぐに見つめられたシロは、リュウキの言葉に小さく溜息を零して渋々と頷いた。

空になった洞窟から出ると、来たときに渦巻いていた魔の気が薄れていることに二人は気付いた。

どうやら周囲に渦巻いていた魔の気は、この洞窟から漏れ出ていたものだったらしい。大元の気が、シロの浄化の炎で悉く焼き尽くされ、山脈内の他の場所とそう大差ないくらいの状態に落ち着いたようだった。

全くなくなったというわけではないので、このくらいならば周囲に深刻な影響がでることはないだろう。

僅かに周りを見回したリュウキが、山脈を登るときにシロの力を解放したあの言葉を放つと、再び彼女の目の前に青白い炎の玉が現れた。

出現した全ての炎を飲み込んで、巨大な騰蛇が雪山に姿を現す。リュウキはその背に無言で乗ると、彼女の着ていた外套に包まれた子供をしっかりと抱きなおして片手を伸ばし、シロの項をゆるく撫でた。

シロはその感触に僅かに目を細めると、そのまま翼を大きく上下させてゆっくりと空へ浮き上がる。

落ちるなよ。

まだ少し普段よりも低い声で告げられた彼女を案じる言葉に、リュウキは僅かに苦笑を零して小さく頷いた。

「なりませんっ！！！！」

何時にも増して切羽詰ったような声が、王の執務室に響いた。扉の前で警備に当たる近衛兵二人も、何かと僅かに顔を見合わせる。

王と宰相の言い合いは日常茶飯事のことなので、幾分声高な会話が聞こえるのは常のことなのだが、こんなに焦ったような宰相の声は久しぶりだった。

無礼に当たると思いつつも、やはり気になるのか二人の近衛の意識は半分ほど部屋の中へと集中している。

と、突然ボタンと音を立てて彼らの背後の扉が開いた。二人は慌てて両脇に身体を退ける。

「王！お待ちくださいっ！」

「待たぬ。今日の分は終えた。」

「そういう問題ではありません！」

大股で部屋から出てきたのは、部屋の主である王その人だ。その背後から小走りで駆け寄るのは、盛大に眉を顰めた氷の宰相殿である。

「ゴウを呼ぶ。空から行けば問題ない。」

「問題大有りです！王が自ら出てどうします！？どうしてもというのなら、翼將軍がおりましよう！？」

「ライの赤竜よりも私のゴウの方が速い。」

「何をそう焦っておられるのです！？」

淡々と返される言葉に、少し苛立ったように声を荒げたコウリは、

ぴたりと歩みを止めて彼を振り返ったシンに小さく息を吐いた。コウリを真つ直ぐ見据えるシンの表情は固く、コウリとは違った焦りと苛立ちを浮かべている。

その表情を見たコウリが、訝しげに首を傾げた。

「何か良からぬことが起こる。もう曖昧な感覚ではない。」

「…予感、ですか？」

「そうだ。兎に角、リュウキを迎えに行かねば。」

「何があるというのです？貴方一人でなくとも、せめて翼竜隊から数人護衛を…。」

「いらぬ。全力で飛ぶゆえ、置き去りにする。」

意味が無い、と言い切るシンにコウリが大きな溜息をついた。

ヒリュウ国の竜騎士たちが騎乗する竜の中で、最も強く最も速く飛行するのはシンの竜であるゴウだ。彼の竜が本気で飛べば、現在所属している竜騎士たちでは追いつくことが出来ない。

普段、軽い口調で言い合いをしつつも、最後にはコウリの言葉に押され執務をこなすこの王は、時折その反動かと思うほど強引に全てを決めてしまうことがある。

シンも王としての立場はしっかりと理解しているため、国の未来に関することを独断で決めたりはしないのだが、それにしても国王が単独でというのは頂けない。

それに城下までなら兎も角、闇の腕付近まで行くというのだから、国の宰相としては何としても引き止めたかった。

が、シンの言う予感も馬鹿にできないのは確かだ。

コウリとてリュウキが心配なのは変わらないのだから。

「ならばせめて魔將軍をお連れください！」

「ゴウは俺以外を乗せぬ。」

話は終わりだとばかりに王が踵を返す。

にべもない王の言葉に、宰相はますます眉を吊り上げると、逃がすまいと王の後に続いた。

向かった先は宰相の執務室、本来コウリが使うべき部屋で、普段リコウキが使っているところである。コウリは殆ど王を見張る傍ら仕事を片付けるので、この部屋に戻ることは滅多に無い。

シンは躊躇することなく扉を押し開き、そのままずかずかと部屋に足を踏み入れると、目的の人物に目を向けた。そのまま大股で近づく。

彼は王が部屋へ入ってくるなり、慌てて立ち上がると礼を取った。

「そのままが良い。ギイ、追跡用の魔具を借りたい。」

その言葉に、ギイは僅かに目を見開く。彼が持つ追跡用の魔具といえば、先ほど王の執務室で使った、リュウキの追跡具だ。

「は…ですが…。」

僅かに戸惑うギイは、王の後ろで溜息を吐く宰相をちらりと見やるも、その諦めた様子に言葉を飲み込み、王が請うままに己の耳に納まる赤いピアスを手に取った。

小さな赤いそれを、大事そうに両手で支えてシンに差し出す。

「無理を言ってますまぬな。しばし借り受ける。」

「はっ。」

少し申し訳なさそうなシンの言葉に、ギイは深く頭を下げた。

ギイはこの追跡具を授けられたときに、王と宰相から常に肌身離さず持ち歩くことと、何者にも貸し与えないことを約束している。その命を、王自ら破ることに對しての謝罪だろう。

その王の配慮に、ギイは僅かに戸惑いながらもシンへ対する尊敬の念を深くした。

そうして、おそらくは己の上官を迎えに行ってくれるだろう、シンに心の中で深く謝意を述べる。

王を心配しているのだろう、複雑な顔をしている宰相殿には申し訳ないが、ギイは安堵を感じていた。

ゴオオオオウ

激しく獣の唸るような音を上げて、巨大な騰蛇の真横を吹雪を纏った竜巻が天地を無視して突き上げる。

僅かに身を傾けてそれを避けたシロは、大きな身体をくねらせて一気に山脈を下っていた。

先ほど、洞窟を離れリュウキと子供を背に乗せて、空へと飛び上がった瞬間それは始まった。

それまで魔の気の淀みもなく、普通の雪山の風景を晒していた山脈が、突然表情をかえシロたちに襲い掛かってきたのである。

山肌から離れようとするシロ目掛けて、雪を含んだ突風やら竜巻やらが次々と来襲していた。それは宛ら、彼らをその場から逃がさぬ

よつと雪山から伸ばされた腕のようで、次々と襲い来る風と雪に、シロは上手く山から離れることが出来ずに居た。更に言うと、どうにも山の空気が薄く、シロの大きな翼は先ほどから上手く風を掴みきれていない。

ちっ…面倒くせえ！！

思うように飛べない苛立ちから、シロが大きく喚いて舌打ちした。その間にも、雪の風はシロたちを襲う。

彼の背で子供を抱えたまま山肌を睨みつけていたリュウキが、素早く何かを呟いて片手を斜め後方へと伸ばした。

「いけっ！！」

親指と人差し指をぴんと伸ばし、雪の大地の一点を狙うように手を向けた竜姫が、大きく叫んだ瞬間、人差し指の先から真っ赤に燃える小さな炎の塊が現れる。

それはしばらく彼女の指に留まり、人の顔程度の大きさになると、彼女の指を勢いよく離れて前方に飛び出した。そのまま勢いを緩めることなく、真っ白な大地に吸い込まれていく。

炎が雪に埋もれ、視界から消えたと思うと、山肌の雪が大きく盛り上がった次の瞬間、ドオンと大きな音をかけて雪の斜面が大きく爆発した。

リュウキの放った爆炎により、シロは煽られた風を掴んで山肌を僅かに離れ猛攻は僅かに緩まったものの、それでも突進してくるような風は収まらない。

「まるで子供を追っているようだ。」

眉を顰めたりリュウキが吐き捨てるように眩き、腕の中の子供をしつかりと抱えなおした。

かかったたもんは全部焼き尽くしたと思ったんだがな。

心底怪訝そうなシロの声が頭に響く。

「…魔術の類ではないんじゃないか？」

確かに、リュウキの言うとおり、シロは先ほどからこの攻撃の要となる魔術の陣を探してはいるが、気配すら感じられなかった。全く訳が解らない。

いや、待てよ。もしかしたら…

「何だよ、シロ。」

懲りずに雪山から伸びてくる雪と風の腕を避けながら、シロがポツリと眩いた。

その声にリュウキが首を傾げる。

リュウキ、もしかしたらこれが、歪みの形なんじゃねえか？

「…っ！」

魔術の気配も感じず、しかし明らかに自然に発生した風ではない。世界の贅となっていた子供を中心に吹き寄せる風は、確かにそう言われてみれば納得できる。

なら、俺の炎が効くかもしんねえ。

シロの炎は浄化の炎。全てを正し、還す、終わりと始まりの焔。リュウキは僅かに考え込むように顔を伏せた。

俺のことなら気にすんなよ。まだ全然余裕だ。

「…でも、こんな短期間で二度も開放して、洞窟でも青炎を使っただろう？」

青炎とは、シロが普段使っている真っ白な炎よりもさらに高熱の炎である。

浄化の白い炎に比べ、滅多に使わない青い炎は正も邪も全てを巻き込んで消滅させ、無を生み出す炎だ。

青炎までは使ってたねえ。だから大丈夫だ。

確かに、先ほど洞窟で使ったものは青白くはあったが、青いというほどではなかった。

リュウキは少しだけ戸惑うも、周囲を見回し腕の子供を見つめて一瞬目を閉じる。次いで開いた金の瞳には、決意の色が浮かんでいた。

「すまない、少し辛抱してくれ。」

ああ、気にすんな。その代わりしつかり一掃してくれよ！

その軽い言葉に、リュウキが小さく笑みを浮かべた。

しかしすぐに表情を消すと、大きく深呼吸してすつと目を細める。

赤い唇が薄く開かれ、白い右手がすらりと宙に掲げられた。

「始まりの息吹、終焉の詩^{うた}、まわるまわる、輪廻の輪。等しく正しく総てを還せ……白炎っ！！」

流れるように、歌うように、魔力を交えながら言葉が紡がれる。

一つ一つが空気を震わせるように放たれたそれらは、最後の言葉が空に消えると同時にリュウキの右の掌に真っ白な陣となつて姿を現した。美しく微細な陣は、強烈な光とともに巨大な魔力を放射する。それは、シロが普段使っている白い浄化の炎だった。

しなやかな掌から放たれた炎は螺旋を描きながら、突風吹きすさぶ雪山の斜面にぶつかり、そのまま四方八方に広がっていく。

雪の大地から来襲していた、どこか淀みを伴った風を真っ白な炎が次から次に呑み込んでいた。

炎は目に見えないものを辿るように、しかし確かに何かを焼き尽くしながら斜面を広がる。

視界に入る範囲の全てを焼き尽くした白い炎が、きらきらと光の粒子を散らしながら四散するところには、先ほどまで荒れに荒れていた空気が嘘のように静まり返っていた。

真っ白な山脈に残ったのは炎で滅され凹凸を残した斜面と、ちらりちらりと天から舞う雪の粒だけである。

上手くいったみたいだな。

「ああ…大丈夫か？シロ。」

おうふー…このくらいどってことねえぜ。

誇らしげに告げる騰蛇に、リュウキが小さく笑うと、シロも安堵するよつにほっと吐息を漏らした。

しばらく雪の斜面を眺めていたが、二人はすぐに表情を改め前方に向き直る。

「今のうちに、さっさと下りよう。」

ああ、そうだな。

僅かに警戒を残したリュウキの声に、シロはしっかりと応えると、そのままぐんと長い胴体をうねらせて一気に山を下っていった。

「なあ、シロもう大丈夫だって。」

うるせえ。どうせだから森の入り口まで乗っかってる。

無事山脈を離れ、闇の腕の上空に差し掛かった頃。
もう4、5回は交わされた問答に、シロが少し苛立ったように胸をくねらせた。

リュウキの予定としては、山脈の麓にたどり着いた時点でシロには通常の大きさに戻ってもらい、そこから子供を担ぎ徒歩で戻る予定だったのである。

彼女とて、このままシロに乗って戻るのが一番速く、安全だということとは判っていたが、今回はシロの力をかなり使ってしまったている。それも短時間に、だ。

普段はシロを思う存分こき使っているように見えるリュウキだが、やはり長年連れ添ってきた相棒とあって、大事に思っているのだ。対するシロも、リュウキの気持ちは解っているし、ありがたいとも思っている。そんな彼女だからこそ、憎まれ口を叩きながらも力になりたいと思っているのだ。

しかし、普段リュウキ自身の無茶っぷりに比べれば、このくらいの無理は無理の内に入らないだろうとも思う。ここぞというときに我侂を言わない彼女を支えられるときくらい、多少無理してでも力になりたかった。

まあ、そんなことは一切口に出さないのがシロのシロたる所以なのだ。

渋々と口を閉ざすリュウキに、シロは小さく苦笑を漏らして大きく翼をはためかせた。

子供の目覚め

「下が静かだな。」

ぼつり、と呟いたのはリュウキだ。

その言葉に促されるように下 “闇の腕” に視線を向けたシロが、確かにと頷く。

来るときと同じくらい魔の気ではあったが、蠢いていた魔獣の気配がかなり薄くなっていた。

まあ、行きにあんだけ暴れば仕方ねえんじゃねえか？

「あー…やっぱりその所為かな。」

だと思っぜ？

どこかばつが悪そうに呟くリュウキに、シロがぐつくと声を漏らす。

最近森を出る魔獣が増えてたんだろ？これでちょっとは落ち着くだろうし、ちょうどいいじゃねえか。

「ああ、コン爺が言ってたな。でも何か森を荒らしたみたいで、どうも後味悪いな。」

はあ、と大きな溜息を吐くリュウキに、シロが苦笑を浮かべた。魔獣や、彼らが住む森を殲滅したところで、この世界の人間にとつてそれは功績である。誇りに思いこそすれ、誰も気に病んだりしないだろう。

しかし、リュウキは違う。

人も魔獣も一つの命として扱う。人を殺めることも、魔獣を殺めることも、彼女にとってそう大差なのである。

同じ、命を奪うという行為だと認識しているのだ。

本当に面白い女だと、シロは思う。

「お。」

そんなことをつらつらと考えていると、背からリュウキの声が聞こえた。

どうした？

「子供が動いた。」

言葉だけ聞けば何だか腹の子を伺う妊婦のようだと苦笑を浮かべたシロが、僅かに振り返りながら横目で背の二人を見やった。

そこには、小さな顔を苦しげに歪め、もぞりと動く小さな子供の姿。身体にまとわりつく長い髪を鬱陶しげに払いながら、小さな子供がゆっくりと目を開いた。

「大丈夫か？」

ぼんやりと、やはり夜の闇のような黒い瞳がリュウキを捉える。

未だ意識がはつきりとしていないようで、虚ろなその目は見えてい
るのか怪しいくらい揺れていた。

しかし、うっすらと開かれていた目がしっかりとリュウキを見つめ
た瞬間、大きく見開かれる。

「……あ……あ……う……。」

ぱくぱくと、何かを訴えるように開かれた口から出たのは僅かに掠れた音で、リュウキに子供の意思を伝えるものではなかった。が、小さな身体はガクガクと震え、見開いた瞳は恐怖の色を浮かべている。

尋常ではない子供の様子に、リュウキは眉を顰めて子供の頬に手を添えた。

小さな身体を抱きしめている方の腕には、痛まない程度の力を入れてしっかりと子供を抱く。

「おい、どうした？大丈夫か？」

それでも子供の震えは止まらず、もはや痙攣するように小刻みに揺れはじめた身体に、リュウキは焦ったように声をかけた。

焦点を失いそうな子供の目を合わせるために、リュウキは頬に添えていた手で子供の顔を強制的に己の方向へ向けると、覗き込むように子供を見つめた。

「おい！おいっ！」

どうした？

「解らない、子供の様子がおかしい。」

兎に角、森を出よう。飛ばすぞ！

「ああ、頼む。」

ぐん、とシロの翼が一層大きく上下したかと思うと、過ぎ行く眼下の景色の移り変わりが速さを増す。

リュウキは僅かに身体を後方に取られぐらつくも、しっかりと両足

で踏ん張り身体を固定した。

「おい！こつちを見るー！！」

その間も、必死に子供に語りかけ、どうにか子供の意識を保とうと軽く頬を叩く。

「おい！」

「…っ…あ。」

「何？何だ？」

「……………い……………けない…逃げっ……………っ！！」

子供の言葉が、僅かにリュウキの耳に届いた瞬間。

「なっ！？」

子供に纏わりついていた真っ黒な髪が、まるで意思を持ったようにずるずると動き始めた。

それはリュウキが子供を手放す暇を与えず、物凄い勢いで彼女の身体に巻きつき始める。

いけない、と思ったときには既に胸が固定され、腕も脚も僅かに動くのみだった。

「シロっ！！私を落とせっ！！」

彼女の身体に巻きついた髪は、そのままシロの胴体に及ぼうとしている。それを見たりリュウキは慌てて叫んだ。

背後の異変に気づいたシロが、再び背を振り返り大きく目を見開く。

なっ…何だあ！？

気付いたときには時既に遅し。彼の真珠色の胴体にも、真っ黒な髪の毛がしゅるしゅると巻きつき始めていた。

「くっ…そ…何なんだこれは!!」

ずるずると巻きつく髪は、リュウキの細い身体を締め付けながら拘束していく。

「…あっ…あっ…だめっだめえ!!」

腕の中の子供は、目を見開いたままガクガクと身体を震わせながら大きな瞳に涙を浮かべていた。

どうやらこの髪は、子供の意思に反して動いているようだ。

リュウキは大きく舌打ちすると、髪が巻きつき自由に動かない腕に渾身の力を込めて己の足首へと手を伸ばした。相反する力にぶるぶると腕を震わせるも、何とかそこまで手を寄せる。

そのまま足首に隠し持っていたナイフを取ると、小さくすまんと子供に呟き肢体に巻きつく長い黒髪に刃を当てた。

ざん、と音を立てて彼女の脚に巻きついていた髪が断たれる。

ぴんと張り詰めていた髪が、支えを失ったようにゆるりとゆるまり、リュウキはその隙に脚を大きく上げて絡まる髪を薙ぎ払った。

逆の脚、両腕、胴と、次々に髪を断っていく。

しかし、髪はそれを上回る勢いで彼女の身体に再び巻きつき始めた。

「くそっ！限がない！！」

そうこうしているうちに、シロへと巻きついていた髪が、今度は彼の翼の方へと腕を伸ばす。

それは不味いと、慌てて振り返ったシロが、首を伸ばして翼に伸びる髪を牙で引きちぎった。

うねうねと、闇の腕の上空を、大きな騰蛇が蛇行しながら不安定に飛んでいく。

「兎に角、何とか森の端まで頑張れシロ！！」

わかった！！

ずるずると、断たれてなお這い続ける黒い髪に眉を潜めながら、リュウキは前方に見える森の途切れを見据えて焦ったように叫んだ。

歪みの形

巨大な騰蛇の真っ白な胴体を、幾束もの黒い髪が埋め尽くしていく。それはまるで、闇に飲み込まれる光のように、禍々しい光景だった。鬱蒼と茂った森の上空を、苦しみもがくような動きでシロは必死に翼を動かす。

今この状態で、少なくなっただとはいえ魔獣の闊歩する森に落ちるわけにはいかなかった。

背のリユウキは、辛うじて動く右手でナイフを振り回しているものの、もう殆ど身動きが取れない状況である。

「…っ！…ぐっ…ああっ！！」

目の前に森の端が見え、あと少し飛ばせば闇の腕を抜けられるかというとき、突然背後から苦しげなりユウキの声が聞こえた。

シロが慌てて背後を振り返ると、そこには細い首を髪 of 束に締め付けられ、身体を震わせているリユウキの姿が見えた。かろうじて右手のナイフで首と髪の間隙間を作ろうとしているものの、ずるずると次から次に巻きつく髪 of 毛に圧迫され、ナイフの背が首筋にめり込みかけている。

リユウキ！！

「…い…かま…う…な…っ！」

取り敢えず森の入り口まで飛べ！！

もう声も出せないらしいリユウキは、最後の言葉を声を通さず伝心

してきた。

シロは大きく舌打して前方に目を向けると、翼の痛みも無視して力の限り飛び続ける。

もう少しだけ辛抱しろよ！あとちょっとだ！！

…頼む。

森の入り口まであと僅か。

シロはすぐそこに見えた木々の切れ目、広がる草原目掛けて直進しながら下降しはじめた。

ズザザザアア

大地を抉り、草を撒き散らしながら、シロは何とか森から僅かに離れた草原へ着地した。

衝撃に長い胴が激しく跳ねるも、皮肉なことになると巻きついた髪のおかげでリュウキも子供も、振り落とされることなくシロの背にくっついている。

しかし、その姿は殆ど黒で埋め尽くされ、子供の姿は見えず、リュウキも片目と手の先が僅かに見える程度だった。

ちらりと覗く肌は心なしか青白い。

シロは自らの身体が大地につくと同時に、青白い炎を巻き上げながらもがいた。

彼の輪郭が炎と共にぼろぼろと崩れる。

次いで残ったのは、巨大な蛇の形に落ち僅かに焼き切れた黒い髪と、

一際東になった二つの塊だった。
蠢く黒髪から小さな白い塊が飛び出す。

「リュウキ!!」

シロの叫びが聞こえた瞬間、黒い塊の二つのうち一つがもぞりと動き、もう一つの塊に覆いかぶさったように見えた。
次の瞬間。

「燃え尽きる!!」

怒りと焦りの咆哮が響くと同時に、シロの小さな口が開かれ、展開した陣から真っ白な炎が黒髪へと放射される。その小さな身体から出たとは思えないほど、一気に広範囲に放射された炎は、黒い髪を全て呑み込み焼き尽くしていった。
きらきらと、煙の変わりに空へと消えていく光の粒と共に白い炎が消え、黒に埋め尽くされていた二人の人間が姿を現す。

「リュウキ!大丈夫か、リュウキ!!」

慌てて傍へと飛んできたシロは、子供を抱え込みながら大地に横たわるリュウキの顔を覗き込んだ。

「リュウキ!!」

「くっ…げほっごほっ…はあっ!!」

その瞬間、今までせき止められていた空気を一気に吸い込んでしまった所為か、激しく咽こんだリュウキが、大きく身体を震わせながらごろりと仰向けに転がった。

彼女の呼吸を確認したシロは、ほっと息を吐いて下降すると、リュウ

ウキの頭の横にへたりと蹲る。

「あー…ホント、焦った…。」

シロはぐたりと首を垂れると、心底疲れたような声で溜息交じりの声を漏らした。

その小さな頭に、ぼすつと何かが被さって、シロは驚いて小さく身を震わせる。

「……シロ…助かった…ありがとう。」

どうやらリュウキの手のようだ。

血流が滞っていた所為か、いつもよりひんやりと冷たい指先は心地よく、シロは僅かに目を細めた。

ゆるゆると、シロの頭を撫でながら、漸く息を整えたりリュウキが大きく溜息を零す。

「にしても…空っぽだな。」

「おう。俺も空っぽだ。」

二人とも激しい動きと大技を使い続けた所為で、体力も魔力も殆ど尽きている。

もう本気で腕を動かすことすら辛かった。

「背中が痛え。」

シロはシロで拘束されながら無理に翼を動かした所為で、羽も痛めたらしい。先ほどまで激しく上下していた翼は今、くたりと大地に伏せられている。

「子供は？」

「ああ、大丈夫生きてる。また気絶してるみたいだな。」

警戒するようなシロの声に僅かに苦笑を漏らしながら、リュウキはのろのろと首を動かして子供を見ると、そこには先ほどと違い穏やかに眠る子供の姿があった。

異常に長かったその髪はシロの炎に浄化され、今は短い散らし髪を晒している。

「…そういえば。」

「んだよ？」

「夢の中の子供の髪。私はあれに恐怖を感じていた。」

そう、一番最初に見た子供の夢。あの夢の中の子供の長い黒髪は、何かを孕みながら蠢き、リュウキにおぞましい程の恐怖を与えていた。

「…あの髪が、溜めた歪みの象徴だったのか？全部焼けてしまったな。」

「俺の白炎は、本来そういうもんを昇華させるためのもんだからな。」

「シロの炎だから焼ききれたのか？」

「ああ、普通の炎じゃあれは焼けない。あれはもう子供の一部ではなく、あれ自体が別の集合体だった。」

蠢く黒を思い出し、シロが眉を顰める。

あまりに禍々しいそれは、この世の醜い欲望全てを集めたような、純粹な黒というよりもっとドロドロとした色だった。

そんなシロの見解に、リュウキがしばし黙り込み小さく頷く。

「私も、夢で子供の髪を見たとき、そう思った。確かに何かが蠢いていたんだ。」

あれが、歪みか。

この美しいはずの世界が生み出した闇の成れの果てか。

しかし、リュウキはこの世界がもつ美しさを知る反面、人の生み出す闇の深さも確かに知っていた。あれがそうだというならば、確かに人が生み出したものなのかもしれない。

「今は何も感じないが…山を下りるときもそうだったからな。」

「油断はできねえな。でも、まあ連れてきちまったもんは仕方ねえ。」

「何だ…私はてっきり捨てると言われるとばかり思ってたぞ。」

少し驚いたように目を見開くリュウキに、シロが少しばつが悪そうに俯く。

ぼんぼんと宥めるようなりユウキの手の動きに照れたのか、大人しかったシロが煩わしそうに頭に乗った白い手を振り払った。

「俺だってそこまで無慈悲じゃねえ！」

「ふふ…はいはい、なんだかんだ言ってシロは優しいもんな。」

「うるせえぞリュウキ！だいたいこつからどうやって帰るんだよ！」

「うーん、それが問題なんだよな！。あんまり長いしたくない場所だし。」

そう、森を抜けたといつても、未だ闇の腕の入り口は目と鼻の先。いつ気紛れを起こした魔獣が森を出てきてもおかしくない位置だった。

それでも、すぐには動けないくらい彼らは消耗している。ふざけた様なやり取りをしているが、なかなか深刻な状況だった。

「どーすっかなー。」

はーっと、大きな溜息とともに空に向かって放たれた言葉は、無情にも風にさらわれて消える。

その暢気な姿にシロが深く溜息を吐いたとき、空を仰いでいた二人の視界にきらりと光る金色の何かが見えた。

黄金の竜

キラキラと、眩しいくらいに光を反射しながら、それはまるで太陽のように輝いていた。

初め、本当に太陽と見間違えたリュウキは、しかしそれが少しずつ大きくなることで太陽とは違うものだということを理解する。

それと同時に、輝きがこちらに向かってくることに気付き、僅かに眉を顰めた。

「シロ、何か来る。」

先ほどのダメージが残っているのか、僅かに霞む目を険しく細めながら、リュウキが震える身体を叱咤して両腕を駆使し、上体を起す。

もし敵ならば、己は今の状態で戦えるのだろうか。否、無理でも、手にした情報と謎を解く鍵になる子供だけは、何とか城へ届けなければならぬ。

ぐっと唇を噛み締め、僅かに残った魔力を体内で構成し始めたとき、シロがのろりと首をもたげた。

「リュウキ、あれ、竜だ。」

「竜?...金の、竜?」

シロの言葉に、まさかと言わんばかりにリュウキが目を見開く。

金の竜は、このヒリュウに一頭しかいない。

「まさか...シン!?!」

訝しげな目で見上げた空には、悠然と翼を上下させる黄金の竜が見

えた。

「何で王自ら出てくるんだ!?!」

黄金の竜の背から、シンがひらりと飛び降りたとき、前方からかけられたのは少し掠れた非難の声だった。その言葉にむっと眉を顰めながら、声の方へ向いたシンがリュウキの姿を見て更に眉間の皺を深める。

「そんな形なりで何を言う。」

視線の先のリュウキは、所々衣服が擦り切れむき出しの肌には白い部分を探す方が難しいくらいの痣ができていた。特に首の痣には、細く赤い線が幾筋も入り、所々に血が滲んでいる。

少し苛立ったように駆け寄ってきたシンを見上げながら、リュウキは焦ったように僅かに身を反らせた。

シンはそれに構わず、リュウキの傍らに膝をつく。

「何だこの怪我は。シロまで動けないのか?」

足元には真珠色の獣が、むっとり口を閉じたまま顔を背けてとぐ

るを巻いていた。

リュウキはリュウキでシンの剣幕に怒られると思ったのか、ゆらゆらと視線を彷徨わせながら、唇を尖らせている。

その様子に大きな溜息を吐いたシンは、ふとリュウキの影に横たわっている小さな子供に気がついた。

「その子供はどうした？」

この場に似つかわしくない無防備な姿を晒す子供は、外套を巻き付けただけの姿で肌の色も頗るすこぶ悪い。

「夢の子供だ。山で見つけた。」

「山脈まで行ったのか!？」

藪をつついて蛇を出してしまつたらしい。
どうやら山脈に入ったことまで気付かれていなかったようだ。

「…リュウキ。いつもいつも言っていることだが、無茶をするなど何度言えば解る？」

低く唸るような声がかけられる。大きな声ではなかったが、それは確かな威圧を持ってリュウキの耳に届いた。

更にシンは続けようと口を開くも、すぐに思い直したように唇を噛み締めて小さく溜息を零す。

そのまま彼は何も言わずシロに手を伸ばすと、両手で壊れ物を扱うように抱えてリュウキの膝の上に乗せた。

「掴まる力は残っているか？」

「…そのくらいなら。」

意図を察してはつが悪そうに呟くりユウキにシンはしっかりと頷くと、リュウキの腕を取り己の首に回させて、そのまま彼女の背中と膝裏に腕を回して抱え上げた。

「ゴウ！」

軽々と彼女を抱えたシンが、背後に佇んでいた竜を振り向きつつ声をかける。

ゴウと呼ばれた黄金の竜は、シンの声に応えるようにのそりと身を起こしゆっくりと近づいてきた。

シンも腕の中のリュウキに振動を与えないように、ゆっくりと竜に歩み寄る。

主が目の前に来たのを確認した竜が、ゆっくりと身を沈めて伏せると、シンは竜の背に取り付けてある輿に、リュウキをそつと乗せた。そのまま一度輿を離れると、同じように子供を抱えて今度はそのまま輿に飛び乗る。

輿の支柱に背を預け、座り込んでいるリュウキの隣に子供を下ろすと、シンはゆっくりと前方を見据えた。

「帰ったらコウリの説教が待っているからな。」

「はっ!?!?…えー…。」

心底不満げに唸るリュウキに、シンがニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。

それを見たりユウキが、嫌そうに眉を顰める。

「諦める。無茶をしたお前が悪い。」

「…まあ、今回は自覚は…ある。」

「そうか、それはよかった。報告は帰ってから聞くが、お前はしばらく謹慎だ。」

「んな!？」

「当たり前だろう。ゴウ!」

納得いかないとはかりに声を上げるリュウキを横目に、シンが大きく声を上げた。

それと同時に、金色の竜がゆったりと翼をもたげる。金に煌くそれを大きく上下させると、竜の巨体がふわりと浮き上がった。

「…シン!」

「何だ?」

一瞬で空に舞い上がる竜に目を向けていたシンが、ちらりとリュウキを振り返る。

そこには、様々な感情に表情を崩したりリュウキが百面相をしていたが、最終的には、眉を下げてばつが悪そうな、申し訳なさそうな顔でシンを見上げる。

「…助かった。ありがとう。」

ぼそりと呟かれた言葉に、シンが目を瞬かせたあと盛大に声を上げて笑った。

帰城

「まったく！単独で闇の腕に入るなど、何を考えているのです！？」
あまりにも予想通り過ぎる言葉に、リュウキが小さく溜息を吐いた。
それを目聡く見咎めたコウリが、更に眉を吊り上げる。

「…まったく解っていないようですね。」

「いや、反省してる！反省してるって！！」

「知っていますか、リュウキ。二度以上繰り返す言葉は大抵が嘘な
のですよ？」

「はっ！？いやっ、そんなわけないだろ！！」

言葉を重ねるごとに目を細めるコウリに、リュウキは焦ったように
ぶつぶつと手を振りながら喚いた。

シンと共に帰城したりユウキは、そのまま王城の自室で手当てを受
けたあと寝台に押し込まれたまま動くことを禁じられている。

シンが出るときに手配してくれていたのか、医師を従えリュウキの
部屋で待ち構えていたコウリとギイは、傷だらけのリュウキの姿を
見るなり二人して鬼の形相に変わった。

治療を終えた後は、それから延々とコウリの説教を受けている。

その隣では、水や身の回りのものを整えているギイが、不穏な空気
を漂わせていた。

そのまた後ろで一人椅子に腰掛けているシンは、当然の報いだと言
わんばかりに黙り込んで目を瞑っている。

シロはというと、彼は特に外傷はなく、体力と魔力の消耗くらいな
ので特に何をするともなく、いつものようにとぐろを巻いて寝てい
た。

ただし、普段リュウキの枕元で寝る彼は今、途切れることなく続く

声から逃れるように窓辺に陣取っている。
そよそよと、心地よい風を受けながら、一人平和に眠る騰蛇を、リュウキは恨めしげにちらりと見つめた。

「あー、疲れた。」

ぼそりと呟かれた言葉に、杯に水を注いでいたギイが僅かに眉を顰めた。

そのまま彼は小さく溜息を吐きながらリュウキに杯を手渡す。
先ほどまで彼女に説教をしていた氷の宰相は、執務が残っているのか王と共に一端部屋を出て行った。また仕事が一段落したらこちらに来ると言い残して。
リュウキはというと、彼らが部屋を出た瞬間、あからさまにほっと胸を撫で下ろして肩の力を抜いたのだ。
そして今に至る。

「ありがとう、ギイ。」

渡された杯を受け取りながら、にっこりと笑顔を浮かべるリュウキに、今度は盛大にわざとらしくギイが溜息を吐いた。

「…もう一度コウリ様をお呼びしたほうがよさそうですね。」
「んな！？いやっ…何でだよ…！」

副官の無情な言葉に、リュウキが大きく目を見開いた。

「まったく反省の色が見受けられませんので。」

「そんなことはないだろ！さつきすっごい反省してたぞ！？」

「過去形じゃないですか。少しは持続させてください。」

「そうは言うがな…！ただだけの時間聞いてたと思うんだ？」

「それだけのことをされたんですよ！」

まったくもう、と今日何度となく聞いた言葉を再び繰り返す。

喉元過ぎれば何とやら、おそらくこの上官は、何かあればまた同じようなことを繰り返すのだろう。

一体何人が彼女を心配してはらはらしているか、知っているのだろうか。

今度一人一人書面に整理して提出してやるつか、と本気で思うギイだった。

「で、子供はどうなったんだ？」

リュウキが帰城したとき、リュウキ自身はシンの手でこの部屋に運ばれたが、例の子供を運んだのはギイだ。

細心の注意を払うよう、もちろん警戒も怠らぬよう伝えて任せたが、子供は別室に運ばれたらしくここにはいない。

「お隣ですよ。リュウキ様共々僕がお世話することになってます。」

「あー、ごめんギイ。」

「まったくです。…今はロウ殿が見ておられますが、先ほど覗いた様子では、特に問題ないようですよ。」

リュウキは先達で、大まかにではあったが、子供について一通りのことを治療を受けながらシンとコウリ、それからギィに話していた。だからこそ、国で一番魔術に精通しているロウ・シヨウが子供のもとに呼ばれたのだろう。

「…何かわかればいいんだがな。」

小さな溜息は様々な思いを秘めている。

先ほど、子供について話はしたが、神々の贄についてと己がその次代の贄になるかもしれないということは言えなかった。

ただ、子供が世界の歪みを集めてることと、それが子供の意思ではないこと、子供の溜めていた歪みをシロの炎を使って浄化したことを告げたのみだ。

全てを話したときの反応は解りすぎるくらい解ってしまったのだが、話さないという道は選べない。それは、臣としても、家族としても彼らを裏切る行為だと理解していた。

逆の立場になれば、己とてすっかりと話してほしいと思うだろう。

「はあ……」

「急いても結果は出ませんよ。今はゆっくりお休みください。」

解っているのかいないのか。

リュウキの頭の中が見えたような言葉に、リュウキは小さく苦笑を零した。

守るために

夜、窓辺に腰掛、ぼんやりと空を見上げていると、シロが無言で膝に飛んできた。

リュウキはそれを、自然な動作で受け入れながら、つるりとすべらかな真珠色の頭を撫でる。

まだ日も高いうちに帰城し部屋に閉じ込められてからずっと寝台で寝ていた所為か、夜も更けた時刻にも関らずリュウキの目は冴えていた。

傷という傷は既に回復してもらったので、あとは空っぽになった魔力が戻るのを待つのみなのだが、身体は少しの気怠さを感じるくらいなので、実際寝込むほどではないのだ。

普段身体を動かしてばかりのリュウキにとって、ただじっと部屋で寝ているのは退屈以外の何ものでもなかった。

「…まあ、考える時間ができてよかったのかな。」

小さく苦笑を浮かべてそう零せば、膝でとぐるを巻いているシロが怪訝に彼女を見上げる。

それに気付いたリュウキが、ちらりと彼に目を向け小さく笑うと、すぐにその笑みを消し去り真顔で再び空を見上げた。

「馬鹿なこと考えるなよ、リュウキ。」

「んー？」

シロの言わんとすることは解っていたが、つつい白々しくかわすような言葉を返してしまう。

とぼけた言葉に膝の上の騰蛇が不満げに眉を寄せた。次いでその小

さな口から大きな溜息が零れる。

「てめえが犠牲になったところで、何も解決しないんだからな。」
「…解っているさ。」

長い旅を共にしてきた騰蛇には、己の考えなどお見通しなのだろう。あまりにも真つ直ぐな言葉に、リュウキが苦笑を浮かべた。

シロの白炎で焼き尽くした子供の髪、即ち世界の歪みの成れの果ては、おそらくあれで終わりではない。子供が長いときをかけてその身に封じていた分は、全て浄化できたかもしれないが、新たな歪みが今この瞬間にも生まれていることだろう。

それは、永遠に途切れることなく、この世に人が生きている限り生まれ続けるものであり、たった一度の浄化で解決できるものでもなかった。

子供が言わずとも、それくらいは理解している。

ならばもし、この大陸、ひいてはこの世界を救うために一番簡単な方法は、やはり古いにしえよりの契約をリュウキが引き継ぎ、身を捧げることなのだろう。

そうすれば、大陸の秩序が保たれ、無秩序の生み出す歪みが人の世を脅かすことはない。
だが。

「私は残念ながら博愛主義でもないし、聖人君子でもない。名も知らないどこぞの誰かよりも、家族や友人たちを優先するし、もちろん世界なんぞの生贄なんてまっぴらだ。」

これが元の世界に居た頃のリュウキならば、大事な誰かの為に我が身を犠牲にしただろう。

しかし、ヒリュウの皆と共に生き、時に叱られながら、彼女は大事な誰かのために己を不用意に削ることが、実は愚の骨頂であるということを知った。

それは、ただの自己満足であり、相手が大切であればこそ、また相手も大切に思ってくれていればいるほど、お互いを不幸にすることだと学んだのだ。

だから彼女は、守るために身体を盾にして戦うが、必ず自分の身も守るようにしているし、なるべくなら傷を負わないように心がけている。

それは、己の傷を見て悲しむ人が、少なからずいてくれるからだ。まあ、実力の不足が原因で、未だ至らないところは多々あるけれども。

そんなわけで、思いがけずこの世界の闇の一端と己が異界から呼ばれた訳を知ったわけだが、子供の言う“愛し子”として何も言わず世界の贄になる気は全くなかった。

「問題は、歪みをどうするかだよな。」

リュウキがその役を放棄した場合、大陸に生まれる歪みは行き場を失い、この大地によからぬことが起こるのは明白だった。

かと言って、修也を贄にするわけにもいかない。それこそ、リュウキはお断りである。

というか、彼女はまずこんな馬鹿げた話を修也の耳に入れる気はなかった。

「手も足も出ないという訳でもないし、どうにかなりそうなんだが

なあ。」

そう、闇の腕での出来事で、シロの浄化の炎が歪みに有効だということとは判っている。

有効も有効で、雪山での猛攻にしても、子供の髪にしても、どちらも余すことなく焼き尽くすことができたのだ。

ということは、シロの浄化の炎を使えば、世界の歪みを正すことができるということである。

「あの餓鬼の髪みたいに、一箇所に集まっていれば話は早えんだが。」

「そうなんだよ、それが問題なんだよな。」

はあ、とリュウキが大きく溜息を吐く。

子供の話が全て本場で、歪みが人の心が生み出すものならば、発生源を辿って地道に浄化していくことは不可能である。

如何にシロが神がかった力を持っているとはいえ、大陸中の人間を浄化して回るのは不可能だろう。

それも一人一回で終わるものではない、無制限に断続的に、だ。土台無理な話である。

「リュウキ、お前腹括ってあいつらにちゃんと話せ。」

話して歪みを集める方法を探せ。

シロの言葉に、リュウキがぐつと口を噛む。

確かにそれが今出せる一番賢い答えだった。

魔力を回復するには、しっかりと食べてしっかりと寝ること。

というわけで、朝から大量の食事を腹に詰め込んだ、否、無理矢理詰め込まれたりリュウキは、喉元まで詰まっているような感覚に吐き気を催しながらも、必死に口元を押さえて耐えていた。

因みに、事的首謀者は、頭まで筋肉で出来ていると噂の我らが大将軍閣下である。

どうやら、ロウから魔力の正しい補充方を教授してもらってきたらしい彼は、朝っぱらから起きたばかりのリュウキの前に大量の食料を並べて満足そうに頷くと、そのまま己の練兵場へ去っていった。何とも極端で無責任な男だ。

「…シキ…あの、脳筋馬鹿…うぶ。」

ぐったりと椅子にもたれながら、常に顔を上向けているリュウキは、指の隙間からぶつぶつと恨みの言葉を漏らしていた。

下を向くと詰め込んだものが漏れなく逆流してきそうなので、下げると・屈むの動作はできない。

こんなことになるなら、申し訳ないから 勿論、作った者に対し

てだ　　といつて無理に食べたりしなければ良かったと、今リュウキは本気で後悔していた。

と、そこへ、未だ気分の悪さに動けずにいるリュウキの耳に、扉を叩く音が聞こえた。

契約 1

「…どうしたんです？」

昨日、ボロボロの身体で城へ戻ったときよりも顔色の悪くなっているリュウキを見つめ、コウリが訝しげに首を傾げた。

傷も治り、一晩明けて魔力も大分回復したはずなので、もう少しましな顔色をしていると思ったのだ。

「…実は、シキが…。」

そんなコウリに、つい先ほど大將軍が行った暴挙を、口元を押さえたりユウキが簡潔に説明すると、彼は眉を顰めて大きな溜息を吐いた。

「まったく、あの方は…。身体が弱っているときにそんな消化の悪いものを与えるなんて。」

そうなのだ。

朝、シキがリュウキのためにと置いていった大量の食料は、何故か嫌がらせのように油物やら肉類ばかりだった。

シキとしては、血肉をつけるという意味だったのかもしれないが、朝っぱらからそんなものを突きつけられたリュウキはたまったものではない。

流石に少し残したものの、殆ど平らげた己を誰か褒めてほしいくらいだ。

「でしたら、今日は止めておきますか？」

「…いや、行く。」

「大丈夫なんですか？」

「うん、ただの食いすぎだし。」

「結構な顔色ですけど。」

「まあ…動いているうちに消化するから。」

少し心配そうにこちらを伺うコウリに、そんなに酷い顔をしているだろうか。リュウキは己の頬に手を当てた。

とりあえず、朝食をとってから随分ゆっくりできたし、一応喉の辺りまで詰まっていたものも胃の入り口くらいまで収まったようなので、リュウキはゆっくりと立ち上がる。

実は今日、朝食を済ませてから、子供の様子を伺う傍らシンとコウリと共に、ロウ・シヨウの見解を聞こうと思っていたのである。

コウリはその準備が整ったため、彼女を呼びに来たのだ。

ゆっくりと立ち上がり、僅かに首を回して大きく息を吐いたリュウキが、コウリに目を向ける。

「待たせてごめん、行こう。」

言葉に小さく頷いて返したコウリが、小さく笑みを浮かべて踵を返す。

部屋を出るコウリの後を追うように、リュウキは小走りで彼に続いた。

隣室に移ると、そこには既にシンとロウが、寝台の中で眠る子供を囲んでいた。

彼らはリュウキとコウリが入ってくると、すぐに気付いたようで、子供から入ってきた二人へと視線を移す。

まだ少し顔色が治っていなかったのか、シンがリュウキの顔を見るなり眉を顰めた。

「おい、大丈夫なのか？何で青いんだ。」

その言葉に苦笑を浮かべながら、リュウキとコウリは彼らに近づいた。

同じ事を何度も言うのが億劫な彼女は、コウリに説明を任せたいのか、彼に視線を送る。

コウリも彼女の視線の意味をすぐ理解したようで、小さく溜息を吐いて口を開いた。

「シキ様が、ロウの助言を曲解したようで。朝っぱらから大量の肉を食わされたそうですよ。」

溜息交じりのその言葉に、シンは呆れたように目を細め、ロウはしまったと言わんばかりに顔を歪めた。

「申し訳ありません、リュウキ様。私が余計なことを言ったばかりに。」

シキ様に悪気はないのです、と心底申し訳なさそうに謝罪するロウに、リュウキは苦笑を浮かべたまま片手でひらひらと制した。

「いいよ、シキのあれはいつものことだ。」

力のない笑いに、ますますロウが萎縮する。

実を言うと、ロウは根っからのシキ信者なので、密かにリュウキを想う上官には是非とも彼女の力になって株を上げてもらおうと、シキに助言をしたのだが。

どうやら説明が足りず、裏目に出てしまったらしい。

あとでシキ様に追加でしっかり話さなければと、決意を固めつつ、

ロウは再び頭を下げた。

「だから気にするなって。それより子供はどんな感じだ？」

困ったように笑ったリュウキが、空気を換えてしまおうと本題に入った。

途端、崩れていたロウの顔が魔將軍の顔に戻る。

「はい、昨日少し潜らせてもらったのですが…。」

「混濁している意識に潜ったのか？」

ロウの言葉に、リュウキが目を見開いて眉を顰めた。

了承を得ている相手の意識に潜るならともかく、知人でもないどんな状態かも判らない相手の意識に潜るのはとても危険な行為だ。

場合によっては、相手の意識に取り込まれ、戻って来れなくなつて廃人になってしまう。

「ふふ、ご心配ありがとうございます。ですが、これでも私は術師の長です。」

にっこりと笑うロウの紫暗の瞳には、確かな自信が浮かんでいた。それを見たリュウキは続く言葉を呑み込み、話の腰を折ったことを謝る。

彼女の謝罪に笑みを浮かべて返したロウは、再び口を開いた。

「それですね、興味深いことが判ったのですよ。」

「興味深いこと?」

「はい、王も宰相様もこちらへ。リュウキ様もこれをご覧ください。」

ロウに促された三人が、彼の長い指が指した先、子供の額を覗き込む。

そのままロウが何事か呟くと、子供の額の中心に何かの模様が浮かび上がった。

「これは…。」

魔術の陣とも違うその模様は、踊り子や盗賊が好んで入れる刺青に似ている。

ただ、何の形を模しているのか判らないが、リュウキには何かの渦のように見えた。

「これは、何だ?」

シンが訝しげに首を傾げながらロウに問う。

「これはおそらく契約の印。この子供はどうやら何者かに契約で縛られているようなのです。それもかなり強力な。魂ごと縛り付ける類のもので。」

その言葉に反応したのはリュウキだ。

「相手は特定できるのか?」

「それが…実は契約の絆がどうも一つではないらしく、しかもかな

りの数でどうにも把握できませんでした。」

こんな無茶苦茶な契約初めて見ましたよ、と告げるロウに、リュウキが難しい顔で子供を見つめた。

契約 2

ロウが言うには、子供が結んでいる契約の絆の数は、本当に、それこそ星の数ほどと言ってもいいくらいのもらしく、その中の一つを適当に辿ることはできるが、主となる契約者を辿れと言われると、途方もない作業になってしまうとことだった。もう運に頼るしかないのだそうだ。

それを聞いたリュウキは、小さく溜息を吐いてしばらく子供を見つめると、顔を上げて何かを決心したかのように瞳に力を込めて周りを見回した。

「三人とも、ちょっと話があるんだが。」

その固い表情に、三人が三人とも何事かと首を傾げる。

リュウキは僅かに言葉を切って、一度口を嚙むと、シンとコウリに向かつて深く頭を下げた。

脈絡のないその行動に、二人が目を見開く。

「まずは、…ごめんなさい。」

「どうした？」

「何のことです？」

リュウキはしっかりと告げた後、頭を上げて、訳が解らず首を傾げている二人に目を向けた。

「実は、昨日話したことが全てじゃないんだ。」

「どういうことだ？」

「子供について、それから歪みについて、まだ話していないことが

ある。」

二人はその言葉を聞き、得心したように目を細める。

おそらく彼女のことだ、自分たちを気遣ったことだろうが、それでも肝心なことを自分一人で溜め込んでしまいうリュウキの悪い癖を知っている彼らは、またかと溜息を吐いた。

「貴女のそれは、いくら言っても直りませんね。」

「まったくだ。どうせまた一人で何とかしようと思っていたのだから?。」

二人の言葉に、リュウキがぐつと言葉を呑む。

まったくもってその通りだった。

罪悪感に顔を歪め、唇を噛む彼女の姿に、二人はやれやれと肩を竦めるとすぐに苦笑を浮かべた。

「まあ、今回は話そうとしているみたいですし。」

「ああ、どうやら少しはましになったようだな。」

進歩したじゃないか、そう軽く零すシンとコウリにリュウキがくしやりと顔を崩して、また一言ごめん、と呟く。

「いいですよ。で、何を隠していたんです?。」

リュウキは一度考えるように俯き、一呼吸の後顔を上げて口を開いた。

「全ては子供の証言だし、シロと私の推測もあるから、全部が全部真実というわけではないのだけど……。」

そう、少し緊張の色を滲ませた声で前置きを述べ、己が山脈で見聞きしてきたことを今度はこと細かく告げた。

人から見れば、神とも思われるべき立場の者が全ての原因だということ。

歪みは、彼らの娯楽の副産物であること。

子供はそれらを処理するため、つまり尻拭いをさせられていること。

もうすぐ子供は役割を終え、次の贄へと契約が結びなおされようとしていること。

そして、次の贄が自分かもしれないということ。

リュウキの出自を知らないロウがいたので、自分と子供が同じ世界から連れてこられたということは省いたが、シンとコウリは話の前後で察してくれたようだった。

彼らは、リュウキの話が終わりに近づくとつれ、眉を顰め、それぞれが顔前面で不快を表していた。

「何て身勝手な…。」

全てを話し終えたとき、低く怒りの滲む声で呟いたのはコウリだ。しかし、それは話を聞いていた三人の心を表した言葉だったので、シンもロウも険しい顔で黙り込んでいる。その目にはコウリと同じように怒りの色を浮かべていた。

「初めに言ったように、これが全て真実とは限らない。まずは子供が目を覚まさなくては何も始まらないし、それに…。」

己の為に怒りを感じてくれることを嬉しく思いながら、三人とは対照的に少し表情を崩したリュウキが静かに告げる。

「それに、私も不特定多数のために贄なんぞになろうとは思っていない。」

「当たり前だ。」

リュウキの言葉に、しっかりと強く応えたのはシンだ。

周囲を見れば、コウリもロウも、シンの言葉に同意するように頷いている。

それを見たリュウキは、小さくありがとうと呟き、嬉しそうに目元を染めてふわりと笑みを浮かべた。

「私とシロが考えるに、歪みを集めることさえ可能なら、贄なんて立てなくてもシロの白炎を使えば浄化することができるんだ。」

第三者の身勝手とはいえ、このまま放って置いたらヒリュウ国に厄災が降りかかるのは明らかである。次代の贄を立てないなら、他の手段をとということで、昨夜シロと考えたことを三人に話した。

「で、だ。さっきロウが、この子供は星の数ほどの絆で繋がれているって言ったよな。それってきつと大陸中の人間と繋がってるんじゃないかと思うんだよね。」

「ああ、確かに……言われてみればそうかもしれません。実は、数の多さも気になったんですが、もう一つ気になったことがあるのです。

「
曰く、子供と繋がっている絆の数が、少しずつ増減を繰り返しているらしいのだ。」

これにはコウリがなるほど、と声を漏らした。

「大陸中の人間と常に繋がっているのなら、新たに生まれる命と寿命を迎える命で増減を繰り返しているのかもしれないね。」

「ええ、状況から見てそう考えるのが自然でしょう。」

「ならば、その契約の絆の中心を、人ではなく他のもので代用できないのだろうか。」

シンの言う絆の中心とは、子供のことである。

「そうなんだよ、私もシロもそれを考えたんだ。」

シンの言葉に、リュウキが同意を示すように頷いた。

「確かに、それが一番上手くいく可能性としては高いですが…第三者が契約を書き換えるとなると、かなり大変ですよ。それもこんな複雑な契約…。」

むう、と唸るように口ウが呟く。

「いや、第三者なんかじゃないぞ。」

リュウキの言葉にどういう意味だ、と他の三人が首を傾げた。

「まあ、私は思いつきり第三者なんだろうが…契約の絆はこの大陸の人間に繋がっているんだらう？ だったら、シンもコウリも口ウも

契約者。第三者ではないはずだ。」

その言葉に、ロウが大きく目を見開いた。

コウリもシンも、言われてみれば、と顔を互いに見合わせている。

「全く関係のない第三者が契約に干渉するのは難しいが、少しでも関りのあるものならば話は別だ。」

「なるほど…確かにそうですね。すみません、私としたことがうっかり見落としていました。」

早速調べてみます、と意気込むロウに、リュウキはしっかりと頷いた。

契約 3

「それにしても、贅とはな。」

心底忌々しそうな溜息交じりの声が聞こえ、コウリは顔を上げた。

ここは王の執務室。

先ほど子供の眠る部屋で、ロウと共に聞いたリュウキの話は、すぐには信じられないような話だったが、ことヒリュウの平穩に関することに関しては行き過ぎるほど真剣に対応する彼女の言葉とあって、しっかりと理解することができた。

しかし、理解することと受け入れることでは話が別である。

「大事な家族を贅なんかにしてたまるか。」

シンとそっくりな顔で憤然と呟いたのはシキである。

彼は午前中ずっと練兵に出っていたので、今改めてシンとコウリに話を聞いていた。

ロウとリュウキは引き続き子供の傍で様子を見ている。

「リュウキをこの世界に呼んだことには感謝をしますが…。」

そう呟くコウリも苦虫を噛み潰したような表情だ。

「まったく、何でリュウキなんだ。同じ異世界から来た人間なら、あの男でもいいだろうに。」

コウリの言葉に頷いたあと、シキがぼつりと呟いた言葉に、シンとコウリがびたりと動きを止めて目を瞬かせ、一呼吸置いてシキを訝

しげに見やる。

シキはその視線を受け、しばらく首を傾げたあと、口に出してしま
った言葉に気付きましたと言わんばかりに焦り始めた。

「…シキ。どういうことだ？」

「もしや、リュウキの捜し人が見つかったんですか？」

そう、シキはリーンでリュウキがこの世界に落ちてからずっと捜し
ていた恋人　修也シユウが見つかったことを二人に話していなかった。
というのも、まず自分含めシンもコウリもシユウにいい印象を持っ
ていなかったし、更にリュウキはお互い様とは言っていたがシキに
言わせてみれば、シユウはリュウキを裏切った人間である。

彼ら二人、特にコウリがこれを知れば、シユウに対して何をするか
わからなかった。

リーン王太子の来訪を控えている今、無駄な火種は無いに越したこ
とはないのだ。

と、まあ謀略が苦手なシキがそんなことを考えて、敢えて報告しな
かったのだが、己の迂闊さにシキは舌打ちしたい気分だった。

どう誤魔化そうか必死に考えるものの、もともと口下手なシキが弁
の立つ二人に勝てるはずも無く。

大した抵抗もできずに、リーンでの一連のことを伝える羽目になっ
てしまったのだった。

「なるほど。そんなことがあったのか。」

「シキ様、そういうお話はすぐに頂かないと困ります。」

兄と兄貴分の目が怖い。

シンは口の端を緩く引き上げ物騒な笑みを浮かべているし、コウリは何者も取り込むような表面だけは清廉な笑みを浮かべていた。が、ここで重要なのは二人の目が笑っていないことである。

「…だから言いたくなかったんだ。」

普段、言い合いをしてばかりの二人だが、乳兄弟とあって手を組めば息はぴったりだ。

機嫌の悪い二人を敵に回して口論をすることほど無謀なことはないし、そんな状況に陥るのはこちらから願い下げだった。

だったのだが、今シキはその状況に陥りつつある自分に冷や汗が出そうである。

ちらりと、一番の問題である氷の宰相に目を向けると、視線がぶつかったとたん彼の笑みが深くなった。

シキの背を悪寒が駆け抜ける。

「なら、話は早いじゃないですか。余計な手間をかけず、リーンの神子を贄に出せば良いのです。」

につこりと綺麗な笑みで、残酷なことを告げる宰相に、これまた意地の悪い笑みを浮かべた王が同意を示す。

「そうだな、それがいい。神々も納得してくれるだろう。」

「シキ様も意地が悪い。早く教えてくださっていたら私たちもこんなに悩まずにすんだんですよ?」

「…おい。」

「そのための“神子”だろう?ちょうどいいじゃないか。」

「そうです。リーンとてそのように名前だけの神子を抱えているより、世界の役に立てた方が余程恩恵を得られるでしょう?」

どうやら相当お怒りらしい。

おそらく、シキ同様リュウキを裏切ったシュウに怒りを感じているのだろう。それに関しては同じ気持ちだが、それにしても言い過ぎではないか。

頭痛に耐えるように、シキは眉間を指で揉んだ。

ヒリュウ国の未来を担う三人が、どうしようもない口論を続けている頃、そんなことは露知らず、リュウキはロウと子供の眠る部屋に膨大な書を持ち込んであれやこれやと論議していた。

子供の枕元には、探るように寝顔を見つめるシロが枕もとに陣取っている。

床に広がる書物には、滅多に使われることの無い複雑な陣や、古に使われていた魔術の構成法が記されていた。

「あー、くそ。なかなかいいのが無いな。」

「惜しいのはあるんですけどね、こうして見ていると自分の未熟さを思い知らされます。」

まだまだ知識が足りない、そうぼやくロウに、リュウキが小さく苦

笑を浮かべる。

「国一の魔術師が何を言ってるんだか。まあ、それがロウのいいところなんだろうが。」

「いえ、本当に、まだまだ未熟者ですよ。」

どこまでも真面目な青年である。

術師隊での彼の人気は、この勤勉さと誠実さにあるのだろう。

「あ、リュウキ様、これ見てください。」

と、ロウが何かを見つけたのか、書物の一つを開いたままりュウキに差し出してきた。

リュウキは促されるまま、示された書物に目を落とす。

「これは……。」

「ええ、かなり古い術式なのですが、先程のと合わせれば……。」

そこにあっただのは禁じられた古の術だった。

先程リュウキが見つけた、交わした契約の流れを変える術。

たった今、ロウが見つけた、魂を物質に封印する禁術。

二つの希望の光が見えたとき、二人の背後で布の擦れる音がした。

子供の目覚め 2

もぞり、と寝台の上の塊が小さく動いた。

滑らかな布がたてたのは僅かな衣擦れの音だったが、戦いの中で鍛え上げられた二人の耳にはそれがはつきりと聞こえた。

リュウキとロウは子供の眠る寝台に目を向けたあと、お互いの顔を見合わせて、今し方手に持っていた書物を置き、静かに立ち上がる。そのまま何を言うこともなく、無言で寝台へと近づいた。

二人の目には、はつきりと警戒の色が浮かんでいる。もぞり、と再び子供が小さく動いた。

「……………」

少し漏れた呻きは、子供らしく高めの声音だ。

広い寝台の端に手をつけて、二人が子供の顔を覗き込むように身を傾けると、横向きに丸まっていた子供の黒く長いまつげが小さく震えた。

二、三度断続的に震えたまつげが縁取る眼に、一度きゅつと力が入ったかと思うと、顔の小ささに比べてやや大きいくらいのそれが、ゆっくりと開いていく。

露わになったそれは、リュウキが予想していた通り真っ黒な瞳だった。

同じく隣でその様子を見つめていたロウが、その瞳の色に小さく息を呑む音が聞こえた。

リュウキはそれに構わず、子供の額に白い手を伸ばす。

小さな頭の横で身を浮き上がらせたシロが、咎めるような目を向けていた。

その険しい金色の目は、明らかに警戒を促している。

リュウキは小さく苦笑を返すと、迷わず子供の額に手を添えた。軽く手を滑らせて頬にかかる髪を払ってやると、シロから大きな溜息が聞こえる。

『……………だ…れ……………？』

ゆっくりと子供の頬を辿っていた手が、その言葉を聞くなりピクリと動きを止めた。

少し高めの子供の声、その音から紡がれたのは、もう今では使うことのなくなった、懐かしい故郷の言葉。

どこか虚ろな瞳がリュウキを捉えたまま、小さな唇が再び開く。

『…お、ねえさん…だれ？』

それは、まさしく日本語だった。

『名前を教えてくださいませんか？』

少し迷った後にそう告げると、子供は小さな目を瞬かせて黙り込んだ。

今この部屋にいるのは、リュウキとシロと黒い子供だけである。

先ほど、子供が己と同じ国の出身だと知るなり、リュウキは口々に王と宰相を呼んでくるように頼んだ。今し方出て行ったので、もう少しすれば二人を引き連れた口ウが戻ってくるだろう。

その間に、リュウキは状況が掴めず狼狽する子供と意志の疎通をは

かろつと、のろのろと身を起こした子供の傍ら、寝台の端に腰かけて、もう何年も使っていない日本語で子供に語りかけていた。

『どつした？』

『…なまえ……わからない。』

悲しげに伏せられたまつげに、リュウキの眉がきゅっと寄る。しかし、すぐに表情を戻すと、うつむく子供の頭にそっと手を乗せ、ゆつくりと髪を梳いた。

『そうか。』

『ねえ、どこどこ？おねえさん、だれ？』

ゆるりと髪を撫でる手に僅かに目を細めた少年が、顔を上げて思い切ったようにリュウキを見つめる。真つ黒な瞳は、隠しきれない不安と困惑で満ちていた。

うつすらと涙を浮かべた瞳がゆらりと揺らめく。

『ここはリュウウ国の王城。私はリュウキ。ここで王のために働いている。』

『おつ…おつさま？』

『そうだ。お前、年はいくつだ？』

『……わからない。』

リュウキの夢に渡ってきたときも、氷の中で会話をしたときも、幼い見た目に反してすっかりとした口調で言葉を発していた少年は、今嘘のように呂律の回らぬ幼い口調で、不安げにリュウキを見上げていた。

見た目から、おそらく十を超えるか超えないかの少年には、それこそ幼すぎるくらい口の調である。

それからいくつか質問を重ねてみたが、不思議なことに十の子供が解るであろう知識はあるのに、少年自身のこととなると、まるですっぽりと抜け落ちたかのようにわからないことだらけであった。明らかに何者かの思惑がちらつき、眉を顰めたリュウキがちらりとシロを見やる。

その視線を受けたシロは、左右に首を小さく振ると難しい顔で何か考え込むようにうつむいた。

と、そのとき。

軽く扉をたたく音が響き、少年が僅かに肩を揺らす。リュウキはそれを宥めるように、ゆっくりと彼の頭を撫でながら、扉の方へと目を向けた。

「リュウキ様、ロウです。」

「ああ。」

そう、声を返すと小さな音を立てて扉が開く。

扉を支えるロウの背後にいたのは、国王であるシンとその宰相コウリ、それからちょうど手が空いていたらしいシキだった。

四人は寝台の上で身を起こしている少年に目を向けながら、それぞれと部屋に入ってくる。

対して、少年はというと、続々と自分に近づいてくる大きな男たちに驚いたのか、はたまたその鮮やかな異人の持つ色合いに驚いたのか、小さく身を竦めて傍らのリュウキにすり寄った。それに気づいたリュウキが、小さく眉を寄せる。

「おい、威圧するな。」

咎めるようにかけられた言葉に、今度は三人が眉を顰めた。

彼らの言葉を代表したのは王であるシンだ。

「威圧などしていない。」

「そつちにその気がなくとも、鮮やかな壁が三枚も並べば威圧されて当然だ。」

国の主柱たる三人を平気で壁扱いしたリュウキは、そのままロウに目を向けた。

「こんなのに囲まれてたら、話したくとも声も出ないぞ。ロウ、悪いがこちらに椅子を持ってきてくれないか？」

「……………わかりました。」

あまりな言い草に頷いていいものかと悩みながらも、彼女の口の悪さを諦めているのか、溜息をつく三人を見つめたロウは、言われるままに寝台の脇に椅子を用意した。

「で。この子供が貴女と同じ世界からきたというのは本当ですか？」

未だ納得のいかないような顔のシンとシキを置いて口を開いたのはコウリだった。

リュウキが異なる世界からきたことは、ロウには既に話している。今回、魔術に精通している彼の協力なしには事が進まないため、早々にリュウキ自身が話したのだ。

あまり易々と語れる話ではなかったが、ロウの忠義心や誠実さを考えれば、特に問題はないだろう。

「ああ、言葉も知識も私のものと共通する。」

滅多にお目にかかれない、異なる世界の住人が、これで三人現れたということだ。

珍しいこともあるものだ、リュウキに目を向けるコウリの隣で、シキはしげしげと子供を見つめる。その真剣な目が睨んでいるように見えたのだろう、少年はシキの視線から逃れるように、更にリュウキの細い身体に身をすり寄せた。

それに眉を顰めたのは、つい今し方リュウキに目を向けていたコウリである。

柔らかな苔を思わせる色の瞳をずっと細めると、ゆつたりと口元に笑みを浮かべた。

「子供とはいえ、男性がそのように女性に対し無遠慮に身を寄せるものではありませんよ。」

口調は穏やかだが、声音は氷のようだ。

ついでに言えば、目が笑っていない。

場違いにも程がある厳しい指摘に、リュウキが大きく溜息をついた。傍らを見れば、向けられた視線に、子供が怯えてリュウキの服を握りしめている。

コウリの言葉を理解できない少年が感じ取れるのは、自分に向けられた確かな怒気だけだ。少年の行動がコウリの怒りを更に助長していることなど、気づけるはずもない。

「大丈夫だ、落ち着け。」

すっかり怯えて縮こまってしまった子供の肩に手を回しながら、リュウキは囁くように子供につぶやいた。

僅かに子供の身体から力が抜けたのを確認した彼女は、コウリへ目を向ける。

「コウリ…別にそんなこと今はいいだろう。」

溜息混じりにかけられた、呆れたようなリュウキの言葉に、コウリが小さく眉を寄せた。

「いけません。躰は初めが肝心です。」

さも当然と言い放ったコウリ的心情が解るのは、同じ想いを持つシオンとシキ、それから彼らの想いを知るロウだ。

確実に気づいていないリュウキの態度に、三人が密かにコウリへ同情の目を向けた。

「そんなことのために呼んだんじゃない。兎に角、いいから話を聞いてくれ。」

本気で解っていないらしいリュウキの言葉に、今度はコウリ自身が溜息をつく、諦めたように口を噛んで、彼女に先を促した。

「さっきみんなが来る前に、ちょっと話を聞いてみたんだが…。」

少し難しい顔で少年を見つめると、少年は不安げな顔でリュウキを見つめる。

それに苦笑を零したりリュウキは、宥めるように彼の頭を撫でて、寝台の傍らで微妙な表情を浮かべている三人に目を向けた。

「どうやら、この子自身に関わる記憶だけ抜け落ちているようなんだ。」

「封印されている、ということですか？」

「その可能性は高い。もしくは、完全に消されているかもしれない。」

その言葉に、ロウが小さく唸る。

「封印されているだけならば、私が潜れば呼び覚ませるかもしれないが…」

「消されているとなると、戻すこともできぬか。」

引き継ぐように言葉を続けたのはシンだ。

王の言葉に、ロウが小さく頷いた。

「その場合、手がかりを得ることは難しくなる、ということですよ。」

ね？」

眉を顰めたコウリの呟きに、今度はリュウキが重く頷く。

「そういうことだ。一応目処は立ったとはいえ、できることならまだ情報は欲しい。が……。」

「子供の記憶を戻さねえ限り、どうしようもねえ、と。」

「そういうことだな。」

シンとシキも重く息をついた。

それを見ていたロウが、再び口を開く。

「封印されているにしろ、消されているにしろ、まずは潜ってみなければ話にならないでしょう？リュウキ様、今一度私が見てみましょう。」

「いや、潜るなら私が行く。」

きつぱりと、放たれたリュウキの言葉に、残る四人が一斉に顔を上げた。

その表情にはありありと反対の意が浮かんでいる。

「お止めください、危険です！」

「危険はロウとて同じ事。」

「いいえ、私はこれでも術師の長。この手の役は私のものです。」

言い放ったロウの言葉に続くように、シンが険しい目をリュウキに向けて口を開く。

「その通りだ。何のためにロウを呼んだと思っている？」

傍らを見れば、その言葉に同意を示すように、コウリとシキが頷いていた。

「これはロウの役目だ。」

「でもシン、この子の言葉がわかるのは私だけだ。それに簡単に潜るといって、ロウは一度この子の意識に潜っている。そう何度も潜るのは、この子に負担が掛かりすぎるだろう？」

その言葉に、四人が眉を顰めて口を噛んだ。

正論である。

確かに、人の意識に沈むのは、潜る側にも潜られる側にも多大な負担をかける。

潜る側の神経の摩耗もさることながら、潜られる側の精神が不安定であれば不安定なほど、両者に掛かる負担や危険が増すのだ。

「ロウが記憶の封印の否やを確認のために潜ったとして、結局はその記憶を読むために私が再び潜らなければいけないだろう。この中で子供の言葉が解るのは、私しかないのだから。」

そう、どう考えても、初めからリュウキが潜る方が幾分安全と言えた。

「それに、おそらく今一番この子が気を許せるのは私だ。」

子供の行動を考えれば一目瞭然のことであった。

不安に揺れる目で彼らを見つめる少年は、未だリュウキの服を握りしめているのだから。

四人は諦めたように大きく溜息をつくとき、確認するように順々に彼らに視線を合わせるリュウキに、それぞれが頷いていった。

記憶 2

再び寝台に横になった子供が、不安げにリュウキを見上げた。

彼女は子供のすぐ隣、柔らかな寝台の上に片膝を立てて座っている。その向かいには、ロウが腰掛けていた。

見守るのみのシンとシキ、コウリの三人は、少し遠巻きに寝台を見つめている。

『なにをするの?』

不安に揺れる黒い眼で、子供がリュウキを見上げた。

その声に、僅かに口端を上げてリュウキが微笑んで見せる。

『お前の記憶を探すんだ。』

『記憶?』

『そう。名前、思い出したいだろうか?』

首を傾げた子供が、その言葉に僅かに目を見開き、次いで大きく頷いた。

継のような目を受け止めたりユウキが、優しく子供の頭を撫でると、彼女は笑みを消し去りロウを見上げる。

強い視線を受けたロウがしっかりと頷き、子供の頭に乘せられているリュウキの手の上に己の手をかざして、すっと目を細めた。

「始めます。」

静かな声とともに、ロウの唇から流れるような言葉が零れ、僅かな呼吸音のみが響く部屋が彼の声で満たされていく。リュウキと子供の耳に届いたその声は、次第に二人の意識を奪っていくようで、彼

らはともにゆっくりと目蓋を閉じていった。

子供の身体に入っていた力が抜けると同時に、傍らで座っていたリユウキも、子供の頭に手を添えたままとさりと音を立てて寝台に崩れ落ちた。

足の裏に何かに触れる感覚はなく、己の身体を支えるものはなかったのだが、不思議なことにリユウキの身体はゆっくりと、まるで重力がなくなってしまうたかのように下へと進んでいた。

そう、落ちているというよりは、下に進んでいるという感覚だ。

周囲を見回せば、真っ暗な闇。

その中に、ぼつりぼつりと星のような光が浮かんでいる。

それらは、人の顔ほどの大きさのものから、針穴のように小さなものまで様々で、よく見るとつつすら何かしらの色がついているように思えた。

美しいというよりも、可愛らしいそれに、思わずリユウキの頬がゆ

るむ。

不意に、リュウキが足下のずっと下方を見下ろすと、それなりに大きな光だが、はっきりと輝く周りの光に比べ、どこかぼんやりと輝く光が見えた。

確かに光っているのだが、それは何と云うか、存在がとても希薄で、今にも消えてしまいそうに僅かにゆっくりと明滅している。

眉を顰めたリュウキが、どこか確信を持ってそれに近づくと、ただ単純に宙に投げ出していた身体の向きを変え、その淡い光の方向へと意識を向けた。すると、その意に沿うように、彼女の身体もずるりとそちらへ向かい始める。

まるで、いつか見た宇宙飛行士のようなだと思いつながら、リュウキは光の前まで近づいた。

淡い光の塊は、近づいてもその希薄さは変わらず、手を伸ばせば届く距離なのに遠くで輝く他の光の方が強い存在感を示していた。まるで星を取り囲むガスのように靄もやが掛かっているようだ。

リュウキは少し躊躇した後、そっとその靄に手を伸ばし触れてみた。すると、それは抵抗もなく彼女の白い指を通す。水面の波紋のように指の周りに僅かな流れを作りながら、ゆっくりと靄が濃淡を見せた。

リュウキは注意深くそれを見つめながら、霧に差し入れた指をそつと横に薙ぐ。

霧はそれにあわせてすーっと横に流れ、一瞬できた指の軌跡の僅かな隙間から、目映い光が見えた。それを見たリュウキが僅かに目を細める。

「…すまん、少し手荒にいくぞ。」

そう言つて小さく詫びると、彼女は一度手を引き指を戻して、今度は両手をまつすぐ霧へと突き入れた。少し勢いをつけて突き入れられた手は、彼女の細い手首のところまで霧に飲み込まれている。その周りには、先ほどよりも大きな動きで、霧が波紋を作っていた。リュウキはその状態で大きく息を吐き出すと、両手に魔力を集中させる。

そのまま左右に割り開くように大きく腕を動かすと、大小濃淡のある渦を作りながら、霧が左右へ散った。

腕を突き入っていた中央が大きく開け、そこから他の光よりもずっと強く目映い光が現れる。

あまりの眩しさに片目を閉じたリュウキは、しかし迷うことなくその光の中へと身体を進めた。

真っ白な光に彼女の身体が触れた瞬間、リュウキの身体は霧のように四散し、光の中へと吸い込まれていった。

王も国も無いその土地は、青い丘と呼ばれていた。

常に爽やかな風が草木を揺らす小高い丘は、それほど高くはない頂上に立てば視界の殆どを真つ青な空に埋め尽くされるため、その地に住む者が誰とも無くそう呼び始めたのである。

青い丘の麓には小さくとも綺麗な湖が広がり、まるで鏡のように空を写し込んだその湖　青の湖の畔には、布地の天幕が立ち並ぶ小規模な集落があった。

集落に住む人々は、その日自分たちに必要な分の命を狩り、命に感謝し、粛々と自然に逆らわず、森に生きる獣と同じように日々を繰り返しながら生きていくようだった。

しかし、そんな彼らにある日変化が訪れる。

同じ場所、同じ暮らしを続けていた彼らの下に、見たこともない色を持つ二人の子供が現れたのだ。

一人は少女だった。

誰も見たことの無いような黒髪に黒い瞳をした少女は、青い丘に現れた。

まるで舞い降りるように何も無い空から現れた少女を受け止めたのは、集落の中でも体躯のいい若者である。

見たこともない程の美しい少女を、若者は一目で気に入り、自分の

天幕へ連れ帰った。

もう一人は少年だった。

日に当たると僅かに赤みを見せる少女の黒髪に比べ、どこまでも深い夜空のような色を持つ黒髪に黒い瞳の少年は、青の湖に現れた。

突然わき上がった気泡とともに、水面に浮き上がってきた少年を救ったのは、集落の中でもあまり目立たない中年の女性だった。

彼女は我が子を亡くしたばかりの母親で、他に子供もなく、寂しい思いをしていたところに少年が現れたため、彼を見た途端まるで我が子の生まれ変わりとはかりに少年を抱きしめて我が家へ連れ帰った。

同時に現れた二人の子供。

出自も不明、容姿も言葉も異なる不思議な存在は、それまで平和に日々を暮らしてきた人々に小さな変化をもたらした。

その蝶の羽ばたき程度の変化は、やがて彼らの暮らしを揺るがす大きな波風となっていく。

どこまでも広がる青い空で、眼下に広がる小さな集落を見下ろし、リュウキは僅かに目を細めた。

彼女は今、まるで空に漂う雲のように、空中から眼下を見下ろしている。

大分地面から遠ざかっているものの、リュウキの身体が落下することとはなく、またただ制止しているわけでもなかった。

彼女が意識をどこかに向ければ、身体もそちらへ空を流れるように移動する。

まったくもって不思議な感覚だった。

更に言えば、空中といっても、それほど高い位置にいるわけでもなく、眼下の集落でちらちらと姿を見せる人々が空に目を向ければ、はつきりと視界に入る位置にいるというのに、どうやらリュウキの姿は彼らに見えなくなっているようで、先ほどから空を見上げる人間はいるものの、リュウキの存在に気づく者は皆無である。

ここからこうして集落を眺め始めていったいどれ程の時間がたっただろうか。

人々が青い丘、青の湖と呼ぶ場所に二人の子供が現れてから、随分と時が経った気がする。

二人の子供たちは、それぞれの庇護者に教わり、異国の言葉を理解するようになっていた。

ただし、庇護者の熱意の違いか、両者の理解度には差があったけれども。

それでも共に簡単な意思疎通はできているようだった。

「みず、くんできますー！」

不意に、集落から僅かに外れた小さな天幕の入り口が捲れ、少し高めの元気な声がリュウキの耳に届いた。中から出てきたのは、黒髪の少年である。

リュウキは少年の顔に見覚えがあった。

彼女が知る顔とは多少年齢が異なり、目の前の彼は若干成長しているものの、まさしくそれは、現在ヒリュウ王城で保護している例の子供と酷似していた。

間違いなく、彼だろう。

現在の彼が十くらいの年齢ならば、今リュウキの目の前で壺を両手に抱えて湖へと向かう少年は、十四・五くらいか。

寝台で怯えていた彼からは想像もつかないほど、少年は明るく活発な性格をしているようだった。

「リュウタ！今夜は集会の日だから少し多めに頼むよ。」

彼の背後から掛かったのは、暖かく少し掠れた女性の声。

少年は歩みを止め、くるりと振り返ると、満面の笑みで了承の意を伝えた。

「リュウタ、それがお前の名か。」

ぽつりと呟いたリュウキの聲は、しかし誰の耳にも届くことにはな
かった。

子供が平穏な集落に与えたのは、身分という変化だった。

それまで、老若男女それぞれがそれぞれに、できることをやりできないことを他が補っていた生活は、少しずつ変わっていった。

まず、少女を得た男が集落の王になった。

それまで誰を主に立てることなく、皆平等に日々を生きてきた人々の中に、支配するものと支配されるものの違いができた。切欠は、少女の一言である。

言葉を理解し始めた少女は、ある日男に問うたのだ。

「ここには、おうさまがないのね。」

特に深い意味があったわけでもない、本当に、ただ不意に疑問に思っただけの言葉だった。

しかし、男は“おうさま”という言葉に意味も解らず興味を引かれた。

疑問に思った男は、少女の言う“おうさま”が何たるかを聞き、理解した。

人を束ね、人を治め、導くものだ。

そのとき、それを語る少女の目には尊敬の色が浮かび、最後に放たれた“えらいひと”という言葉に男の心は一気に引きつけられる。

男は少女を愛していた。

しかし、少女の心は彼女の目に映る様々なものに惹かれ、自分一人に向けられることはない。

男は彼女の目が他に移る度、齒噛みするような思いを胸に抱えてい

ただ。

男は少女に問うた。

自分が“おうさま”になれば、ずっと自分だけを見てくれるか、とすると、男の言葉に一瞬大きく目を見開いた少女は、すぐに花のような笑みを浮かべて言ったのだ。

「もちろんよ。あなたがおうさまになるなら、わたしはずっとあなたのそばにいるわ。」

それから男は変わった。

これまで、女子供のために狩りをしていた男は、その力の矛先を獣から集落の人々へと変えた。

集落で最も屈強な体躯と優れた戦闘能力を誇っていた男は、あつとという間に集落の人間を掌握し、王となった男は彼らを支配するようになった。

男の作り上げた支配する者とされる者の関係は、男とその他を分けただけでなく、集落内の他の人間にも影響を及ぼした。

強者は弱者を守ることを忘れ、傲りを覚えた。

知恵を持つ者は、謀略と策略を使い他者を陥れる事を覚えた。命に感謝することよりも、奪い着飾ることを覚えた。

それらが集落に根付く頃には、王は集落の男を率いて他の集落を襲うようになっていた。

少女はそんな男の隣で、彼の奪った宝飾品で身を包みながら、花のように笑っていた。

たった数年で様変わりした集落を細めた目で眺めていると、少年リュウタが薬草を抱えて、彼を拾った女性の天幕へ駆け込んでいくのが見えた。

リュウキはリュウタの姿を追うように視線を向け、そのまま彼の消えた天幕へと足を進める。

分厚い布の壁は、しかし彼女には意味を成さず、リュウキは何の戸惑いもなくするりと天幕の布をすり抜け、内部へと入り込んだ。

そこには寝台と思しき敷き詰めた藁に布を被せただけの塊に横たわる女性と、その隣に座り込み悲痛な顔で女性を見つめるリュウタの姿があった。

女性は顔色が悪く、どうやら病にかかっているようだ。

「ネバ、ネバ！」

まるで死人のような顔色の女性に、リュウタが縋るような声で呼んでいる。

ネバとは女性の名前だろうか。

彼の必死な声に、ネバはうっすらと窪んだ眼を開いた。それを見たリュウタが、ほっと小さく息を吐く。

「ネバ、薬草とってきたんだ、ちょっと待っててね、今薬を作るから。」

そういうと、リュウタは素早く立ち上がり、すり鉢のような縦長の器と、円盤の中心を貫くように取っ手のついた器具を持ち出し、ネバの眠る寝台の傍らに広げている。

その片時も離れたくないと言っような行動に、ぼんやりと彼を見ていたネバがうつすらと笑みを浮かべた。

ネバという女性は、もともと薬草の知識に長け、村の中でも医師や薬師の役割を果たしていたらしく、弱肉強食の意識が根付いてしまった集落の中でも、彼女だけは迫害されることなく静かに暮らしていた。

リュウタはそんな彼女に、言葉を教わり、この世界で生きていく知恵を教わり、薬草や人体についての知識も身につけていた。

元々勤勉で努力家な性格なのだろう、彼はネバの教えを、まるで乾いた布が水を吸うように覚え、そんなリュウタをネバは誇りに思っていたし、我が子のように愛していた。

リュウタ自身も、初めの頃は何が起こったか理解できず、泣いてばかりだったが、今ではネバを母のように慕い、師と仰ぎ尊敬している。

お互い仮の母親と仮の息子という関係だったが、長い月日は彼らの間に確かな絆を作り上げていた。

しかし、それも今ネバの病に奪われようとしている。

あんなに生氣に溢れていた女性は今、まるで別人のように痩せ衰え死に瀕していた。

リュウタはネバから教わった知識を総動員して、日々薬草をかき集め、彼女を救うべく奮闘していたが、ネバの具合は悪くなる一方である。

「龍太！龍太！！」

と、突然天幕の外から甲高い声が響いた。
すり潰した薬草を水差しへと移していたリュウタが、聞き覚えのある声にきゅつと眉を顰める。
彼は構うことなく、水差しを軽く振ると、それを少しだけ小皿に移し、ネバの頭を抱え上げ口元へ近づけた。

「リュウタ、呼んでいらつしやるのはシヨウコ様では？」

「ネバは気にしなくていいから、兎に角飲んで。」

「でも…」

「大丈夫、ネバが飲んだら行く。」

頑として聞かないリュウタに、根負けしたネバがゆつくりと小皿の液体を飲み干す。

少し苦みのあるそれは、しかし胃に落ちてしまえば気持ちのよい清涼感をネバの胸に与えた。

我が子ながら、本当に腕のいい薬師になったものだと、ネバが皺の増えた目を細める。

ネバが全て飲んだことを確認したリュウタは、ゆつくりと彼女を寝台に横たえ、上掛けに使っていた布を丁寧にネバの身体に掛けた。

『龍太！龍太　！！いるんでしょ！！』

異国の言葉で掛けられる声を理解できるのはリュウタのみだ。

ネバは声で判断しているのだろうか、彼女には天幕の外で喚き続ける女が何を言っているのか理解できなかった。

「リュウタ。」

「…わかったよ。ちょっと行ってくる。」

急かすように掛けられたネバの声に、大きな溜息を零したりリュウタが、渋々と心底嫌そうに天幕の入り口へと向かった。

天幕の入り口をくぐると、日を背にして立っていたのは、少し赤みがかった黒髪の女である。

質素な布で身を包んだだけのリュウタと違い、彼女は綺麗な薄布と色とりどりの宝石で細い身体を着飾っていた。

その白い面は綺麗に整っているものの、苛々と荒れる感情を隠しめせずに眉を寄せているので折角の美女が台無しである。

リュウタは元の世界にいるときから、この気性の激しい幼なじみが苦手だった。

「何のご用でしょうか、シヨウコ様。」

慇懃に放たれた言葉に、女　シヨウコの顔が更に歪む。

『やめてちょうだい。あと日本語で喋って!!』

「でもそれじゃあ、いつまで経っても言葉上手くならないよ。」

『いいのよ! 大体話せるし、理解はできるもの!』

まるで癩癩を起こした子供のようにだと思いつながら、リュウタは大きな溜息を吐く。

異世界に落ちた二人の子供は、それぞれ時を重ねて二十を超える大人に成長していた。

リュウタとシヨウコはどうやら幼馴染みのようだった。

更に言えば、兄弟ではないものの、血縁関係はあるようで、それはリュウキとシユウヤの関係にとてもよく似ていた。

ちなみに、リュウキとシユウヤは親戚筋とはいえあまり似ていないが、目の前で並ぶリュウタとシヨウコはどことなく顔の作りが似ている。

が、リュウキが見る限り、どうやら中身は正反対のようだった。

勤勉で努力家なリュウタに比べ、シヨウコはどちらかというと他力本願な性格をしているし、リュウタはどちらかというと大人しく声を荒げることが不得手のようだが、対するシヨウコはリュウキから見てもなかなか激しい性格をしているように思える。

「まるで貴族のお姫様だな。」

小さく苦笑したリュウキがぼつりと零す。

彼女の眼下でリュウタを見上げる強気な瞳は、明らかにリュウタを見下していた。

「で、今日は何？」

呆れたようなリュウタの声に、シヨウコがむっと眉を寄せる。

何度言っても日本語を使おうとしないことにも腹が立ったのだろう。

リュウタは大人しいとはいっても、気が弱いというわけではなく、自分の主張は静かにしつかりする性格のようだった。

同じ年でも、一人で生きる術を学んできたリュウタと、他者の庇護に頼り切りのシヨウコとは人間としての土台に差がありすぎる。

『アダンが三日ほど家を空けるの。暇だから相手をして。』

態度を崩さないリュウタに、シヨウコは眉を顰めながらも、まるで頷くのが当たり前のように言い放った。

リュウタは表情を崩さなのまま、先日の集会でのことを思い出す。そういえば、“自称”王であるアダンが近々近隣の集落に男たちを率いて襲撃をかけると言っていたような気がする。

我欲に人を使うアダンを心から嫌っているリュウタは、不快そうに顔を歪ませながらも、それについては何も言わずにシヨウコに目を向けた。

ここで騒げば、いくら薬師といえど、ネバに迷惑がかかるかもしれない。

「無理だ。三日も家を空けられない。」

『何ですよ!?!』

「放置できない薬草があるんだ。薬が無いのは困るだろう?」

本音を言えば、あまり具合がいいとは言えないネバを一人置いていくのが不安だからなのだが、リュウタには目の前の女が自分を差し置いて他の誰かを優先させれば、癩癩を起こして面倒になることが解っていた。

腐れ縁ともいえる関係を長く続けてきた彼にとって、シヨウコの面倒くさい性格は解りすぎるほど理解している。

『そんなの、また用意すればいいじゃない!』

「簡単には手に入らないからね。申し訳ないけど。」

『私よりも草なんかを取るっていうの!?!』

何度となく聞いたその台詞に、とうとうリュウタが大きな溜息を吐いた。

自分はシヨウコの恋人でもなんでもないのに、彼にしてみればそんなことを言われるのは本当にお門違いもいいところである。

実際、彼女はリュウタに恋をしているわけではなかった。

今ではただ一人、言葉も習慣も共感できるはずのリュウタが、自分よりも他を優先させることに我慢がならないのである。

本当にただの子供の我が儘であった。

そう、シヨウコは我が儘なのだ。致命的に。

そしてそれに沿った外見ならばまだしも、無駄に精練な外見をしているところがまた手に負えない。

思えばこの世界にくる前も、彼女の容姿に周囲が騙されて、少なからず苦い思いをしていたのを、リュウタは今でも覚えていいる。

それがまたシヨウコの我が儘を助長し、二十歳を超えた今でも、まるで少女のような我が儘を彼女は繰り返すのだ。

そして、それはここでもまかり通ってしまふ。

自らを王と示した彼女の養い主も、初めから彼女の言いなりだったおかげで、幼かったリュウタは、これまでこの集落で、何度となく苦境に経たされ掛けたのだ。

いつもいつも、薬師であるネバに助けてもらったけれども。

「薬は人々の生命線。シヨウコだって病気をした時困るだろう？」

だからこそ、多少のことではネバの立場も危うくならないし、今薬師としての地位を持つリュウタも、ある程度の言葉を言い返すことができる。

これが、何の立場も無く王や王が庇護する者に刃向かえば、たちまち集落の人間全てから迫害を受けるだろう。皆、王の力に怯えている。

しかし、シヨウコにしてみれば全く面白くないことの上ない。

他の人間は、自分がどんなに無理を言っても否定せず聞き入れるのに、一番自分を理解してくれるはずのリュウタが自分の思い通りにならないのである。

それは、人を使って脅しても、周囲から孤立させようと手を回してみても、一向に上手くいかなかった。

今回も、目の前のリュウタは正論でシヨウコを追い返そうとしている。

シヨウコは齒噛みする思いで、とっくに自分の背を超えてしまった青年を睨み上げた。

『覚えてなさい。いつか目にもの見せてやるわ。』

いつにもまして暗く淀んだ眼に、リュウタの眉が僅かに寄る。
野花を踏みつぶしながら荒々しく去って行く女の背を見やり、リュ
ウタは深々と溜息を吐いた。

記憶 6

夜も更け、虫の囁く声も静まりはじめた頃。

リュウキはネバとリュウタの眠る天幕の中にいた。

彼女の耳には小さな呻き声が届き、時折寝苦しそうに寝返りを打ち上掛けを引きずる音が届く。

黄色人種特有の黄みがかった白めの肌にじんわりと汗を浮かべて、リュウタが夢の中でうなされていた。

初めてこの世界に来たときは、緊張と不安でよく眠れていないようだったが、年を重ねてからは、元々の大らかな性格からか、寝付きもよくぐっすりと眠るリュウタには珍しいことだった。

リュウキは何となく気になって、触れられないとは解っていたが、そっと彼の額に手を伸ばす。

まるで夢枕に立つ霊のようだと、苦笑を浮かべた。

が、彼女の手がリュウタの額に重なった瞬間、リュウキはぐんと引かれる感覚がして目を見開く。

そのまま手を引くこともできず、彼女の身体はリュウタに吸い込まれるように一瞬にして消えた。

この真っ白な空間は見覚えがある。

あれからリュウキは強制的にどこかに移動させられたようで、引きずられる感覚に一瞬目眩を覚えるも、僅かに目を閉じて開くとそこは既にどこまでも続く真っ白な空間だった。

これはまさしく、リュウキが初めて黒い子供の夢を見たときと同じ空間だ。

この空間にはあまりいい印象を受けたことがないので、リュウキは軽く眉を顰め周囲を警戒して気を張りつめた。

まだリュウキの意識から出た感覚はないので、彼の過去の出来事なのだと解ってはいたが、無意識に身体が緊張していた。

そのまま鋭く細めた眼で周囲をぐるりと見回す。すると、少し先に先ほどまで目の前でうなされていた青年が、真っ白な床に膝をついて、縋るように両手で彼の正面を叩いていた。

どうやら、リュウキに目視はできないが、彼の前には見えない壁のようなものがあるらしく、必死にそこを叩いている。

いつも冷静な彼にあるまじき行動に、リュウキは訝しげに眉を寄せると、トンと軽い動作で床を蹴ってリュウキの傍らまで跳躍した。

「やめっ…止める!!止めてくれっ!!」

初めて聞くリュウキの悲痛な声と、焦りと絶望をにじませた表情に、リュウキが眉を顰めて彼の視線を辿る。

その先には、見覚えのある赤みがかった黒髪の女　　シヨウコが宙

を見上げて嫌な笑みを浮かべているのが見えた。

『昌子!!!昌子!!!頼むっ!止めてくれ!!!』

とうとう母国語を使い始めたリュウタに、透明な壁の向こうに佇む女が笑みを浮かべたまま彼を横目で見やる。

『ふふ…今更呼んでも遅いのよ。馬鹿な男。』

にんまりと更に口角を上げて浮かべた笑みは、その清廉な美貌を裏切るねつとりと歪んだ笑みだった。

再びシヨウコが目の前の何かに視線を向ける。

リュウキは何が何だか解らず、シヨウコの視線の先を見定めようと足を進めたが、不思議なことに彼女ですら透明の壁を通り抜けることができなかった。

仕方なく、ぎりぎりまで壁に近づき、そう遠くはないシヨウコの目の線の先に焦点を合わせて耳を澄ます。

僅かに目を細めて見つめていると、何も無いはずの空間が小さくゆらりと揺らめいた。

『私、とっても怒っているの。貴方は唯一私を理解できるはずの男だったのに、貴方はちっとも私の言葉を聞かず、血も繋がってない女なんかをいっつも優先させた。』

暗い笑みを浮かべて、シヨウコが語る。

言葉を進めるうちに、彼女の瞳には確かな怒りが浮かんでいた。

『そうよ、元の世界でも、この世界でも、みんな私の言うこと聞いてくれたわ。みんなが私を美しいと言い、みんなが私の言葉を第一に聞いてくれた。なのに…』

シヨウコから笑みが消え、ぎりつと歯を噛みしめる音が響く。

『なのに、龍太だけが私の言葉を聞かない。龍太が、龍太なんかがつー!』

燃えるような怒りを浮かべて、黒い瞳がゆらりと揺らめく。叫ぶように語尾を荒げたシヨウコは、しかし一端言葉を切ると、小さく息を吐き出して、すぐに勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

『馬鹿な龍太。知ってる？私は神子なのよ。神様に選ばれた尊い神子。ただの人間の龍太には見えないみたいね。』

うつとりと目を細めたシヨウコが空中の何かに手を伸ばす。王に守られ、傷一つない滑らかな白い手が、何かを辿るように動いた。

『尊い神子に、ただの人間が刃向かうなんて許されることじゃないわよね。』

ふふ、とまるで少女のような声で笑うシヨウコの目に暗い何かを感じ、傍らでそれを見つめるリュウキが眉を寄せた。

『だから、罰をあげるわ。もう謝っても許してあげない。』

『罰なら俺に与えればいい!!俺自身を苦しめればいいだろう!?!』

『駄目よ、それじゃあ。龍太ってばとっても我慢強いんですもの。だから、ね。』

ふと、シヨウコが暗い視線を向けた先、彼女の足下がゆらりと歪むと、真っ白な霧が晴れるように一人の女が現れた。

女の意識は無いらしく、彼女は顔を伏せたままぐったりと横になっている。

『ネバっ！！』

リュウタの叫びに、くすくすと、さもおかしくてたまらないと言うようにシヨウゴが笑う。

彼女の足下に倒れているのは、どこからどうみてもリュウタの養母、ネバだった。

『ふふ、龍太は本当にこの女が好きねえ。血も繋がってないくせに。』

それでも、異世界で右も左も判らず、一人で生きることでもできなかったリュウタを救い育ててくれた彼女は、リュウタにとって母に等しい存在だった。

たとえば彼女が、亡くした子供の代わりにリュウタを拾ったのだとしても、それでもリュウタは彼女を母と思い、感謝と尊敬を寄せていた。

ネバ自身も、初めこそ亡くした子供の代わりと思っていたようだが、今ではリュウタを本当の息子と思っているし、そう言ってくれたのだ。

リュウタにとつて、ネバはこの世界で唯一の肉親といっても過言ではなかった。

『昌子っ！頼むっ！！その人だけは、その人だけは止めてくれ！！』

それ以外なら、何でもいうことを聞くから。

言い放つ声は焦りに掠れ、まるで血を吐くような叫びが白い空間に響いた。

「ネバっ！！」

がばり、と。

上掛けをはね除けながら、弾かれたように飛び起きたリュウタは、すぐに隣で眠っているはずの養母へと目を向けた。

日の出までそう時間はないのだろう、薄暗い天幕内は、しかし視界がまったく利かないほどではなく、少し目を細めれば僅かに物の輪郭が見えた。

リュウタが視線を向けた先、粗末な寝台の上には、ネバの輪郭が僅かに確認できるが、その細部までは見えない。

リュウタはぎこちない動きで寝台から降り落ちるように降りると、こわばった身体を無理矢理引きずるようにネバの眠る寝台の傍らまで移動した。

「…ね、ば？」

恐る恐るかけた声は震え、喉に支えるように引きつっていた。

最近、朝起きたら、眠っている間も苦しげに浅い呼吸を繰り返すネバの髪を梳き、熱の有無を確認するのがリュウタの習慣だった。

薄暗い中でも、こうして彼女の顔に近づけば、大きめの呼吸音が聞こえていたはずなのに、今日は全く聞こえない。

天幕の中に響くのは、己の身体から僅かに響く衣擦れの音と、リュウタ自身の少し乱れた呼吸音のみである。

リュウタは頭に浮かんだ事を即座に否定しながら、全身全霊の願いを込めてネバへと手を伸ばした。

幼少の頃よりもずっと節くれ立った長い指が、僅かに震えながらゆつくりと養母の顔へと近づく。触れる寸前で一端手を止めたリュウタは、一度大きく呼吸をすると小さく唾を飲み込んで再び手を進めた。

「……………うそ、だ。」

そつと触れた女の頬は、既に体温を失いつつあるのか、常に高めの熱を保っていたはずなのに、今は不気味な程冷たい。彼女はもう、生者の温もりを保ってはいなかった。

「ネバ、ネバ…ネバ。」

その声は、叫ぶという程激しさを伴ってはいなかったが、まるで迷子の子供が母を呼ぶように震え、悲痛な響きをもって繰り返された。信じたくない。

冗談だと思いたい。

そんな思いが、背後で彼を見つめるリュウキにも、溢れるほど伝わってくる。

リュウタは彼女に背を向けているので、リュウキに彼の表情は判らなかつたが、声と時折啜るように響く音から、目の前の青年が泣い

ているだろうことが判った。

「ネバ、ネバ、ネバ、ネバ……。」

青年が縋るように、動かない養母の身体を揺する。

動かないネバの身体から上掛けがずれ、寝台の下に落ちてしまっても、リュウタは構うことなく彼女を呼び続けた。

あれからどれくらいの間が経ったのだろうか。

既に日は中天を過ぎ、天幕の中にも布を通り越した光が届き、はっきりと彼らの姿を目にすることができていた。

天幕の角にある寝台には、髪を乱したネバが静かに横たわっている。リュウタは未だその傍らに跪き、冷たく冷え切ってしまった彼女の身体に熱を移そうとするかのように伏していた。

物言わぬ養母の身体を、先ほどまで延々と揺すっていた青年は、今はピクリとも動かない。

「……………なんで。」

と、突然零れた言葉に、背後に佇んでいたリュウキが僅かに目を細めた。

長い沈黙を破つたりリュウタの声は、いつもの柔らかさが嘘のように掠れ、震えている。

「なんで、ネバが死ななきゃならない。」

低く、低く、まるで何かに訴えるような呟きを零したあと、ゆっくりとリュウタが伏せていた顔を上げる。

泣いたことで赤く腫れた眼の奥には、どこまでも深い闇のように濁った黒い瞳が、恨みと怒りに揺らめいていた。

それからのリュウタは、今までの彼が嘘のように変わってしまった。否、変わったと言っても、集落の中で彼の変化に気づいた者は一人もない。

気付いたのは、彼の記憶を辿り、リュウタの傍で彼を見続けたリュウキだけである。

それほど、リュウタの演技は完璧だった。

今まで通り、穏やかな笑みを浮かべ、

今まで通り、薬師として集落の人々を助け、

ネバのいない天幕で、これまで通りの暮らしを続ける。

しかし、過去を共有するように、彼と共にあったリュウキはすっかり

りと見ていた。

穏やかな笑みを浮かべるその瞳が笑っていないことも、
薬師として働く彼が、今まで収集することがなかった薬草を集めて
いることも、

ネバのいなくなった天幕で、彼が独り静かに狂い始めていたことも。

すべて、すべて。

金色の瞳を悲しげに細めて、ただ静かに見ていた。

もう見慣れてしまった真っ白な空間に、ぽつんと佇む黒い影　リ
ユウタは、昼間の貼り付けたような笑顔を消し去り、感情がそげ落
ちた顔で何を思うこともなく、ただただぼーっと前方に目を向けて
いた。

目を向けていたというよりも、目が開いているというだけのように
見える。

誰に知られることもなく、静かに狂っていくリュウタは、ある日を
境に頻繁にこの夢を見るようになっていた。

彼が眠りに落ちこの空間にくる度に、傍らで見つめるリュウキも引
きずられるようにリュウタと共に夢を見ている。

初めの頃でこそ、母と慕うネバを失う切欠となった夢を見て、昼間
の仮面が嘘のように剥がれ、嘆きと恨みに声を上げて泣いていたリ
ユウタだが、今ではただ静かにそれを受け入っていた。

リュウタ

高いのか、低いのか、男なのか女なのか。

確かに聞こえているはずなのに、リュウキには彼の^か声かどのような

声なのか判断ができない。
ただそれは、頭の中に響くように、心の底に潜り込むように、不思議な感覚を持って届いた。

リュウタ

それは、愛しげに彼の名を呼ぶ。

いつ頃からか気付いたのだが、リュウタにはそれが亡くした養母の
声に聞こえているようだった。
僅かに揺らいだ彼の黒い瞳が、ゆるりと何かを探すように動く。
しかしその瞳に浮かぶのは、絶望と諦めだった。

リュウタ、お前は賢いね。

わたしが“違う”とわかるのだね。

嬉しいのか、哀しいのか、穏やかな声はそう言った。
言葉に、リュウタが僅かに目を細める。

「ネバは、もういない。」

そうだね。

「おまえが…ころしたくせに。」

そうだね。

肯定の言葉に、だらりと垂れ下がったリュウタの拳がぐっと握りしめられる。

しかし、望んだのはシヨウゴだ。

「知っている。」

もう何度となく繰り返したこの問答。

当初は、憤り反論していたリュウタも、今では静かに凧いだ声を返すばかりだ。

しかしその言葉の奥には、隠しきれない憎しみと悲しみが見え隠れしていた。

リュウキは眉を寄せて彼を見つめる。

憎いか？

「憎い。」

悲しいか？

「悲しい。」

ならば、シヨウウコを殺そう。

リュウタの望みを、叶えよう。

「いない。」

何故？

「お前ができるのは、命を奪うことだ。それじゃあシヨウウコは苦しまない。」

はつきりと、暗い声で紡がれたのは、ネバと暮らしていた頃のリュウタからは考えられないような無慈悲な言葉。

初めてそれを提案されたとき、リュウタの瞳は明らかに同意の色を見せていたものの、その後の問答でその存在にはシヨウウコの命を奪うことしかできないことを知った。

彼の人にできるのは、ネバの命を奪ったときのように、ただ人の身体から命を抜き取ることのみ。リュウタが望むのは、シヨウウコが絶望の底でこれまでの彼女を後悔しながら命を落とすことだった。

「俺は自分の手であいつを苦しめる。お前の力なんか借りない。」

それは明らかに拒絶の言葉だったが、見えないそれが妖しく微笑んだことを、リュウキは鋭い感覚で気付いていた。

シヨウコに復習を誓ったリュウタは、まず彼女含む集落中の人々の信頼を得ることに努めた。

リュウタは表向きだけではあるがシヨウコに従順になり、シヨウコはそれが偽りのものとは気付かず、彼女自身の力を畏れ、とうとうリュウタが折れたのだと思いきんだ。

それによつて、集落の人々からの目も柔らかいものへと変わり、もともと穏やかで薬師としての腕も確かだったリュウタは、すぐに人々の心を掴んだ。

今では、彼に警戒の目を向ける者はなく、頻繁にリュウタのもとを訪れ我が儘を言っていたシヨウコも、何度か願いを聞くうちに満足したのか、姿を見せることは少なくなった。

彼女は今、お気に入りの小間使いを集め、お茶をすることに嵌っているらしい。

先日、彼女を庇護する王が襲った集落の中に、人形のように綺麗な子供がいたそうだ。その子供を一目で気に入ったシヨウコが、王に強請り自らの小間使いとして傍におっていると聞いた。

そう、人々の信頼を得ることで、リュウタの下には彼らが見聞きしてくる色々な噂も集まるようになっていた。

優しい笑顔で微笑み、一つ一つにしっかりと耳を傾け感情を表すリュウタは、話し好きの者にとって、いい聞き手になる。

彼らは事あるごとに、体調不良に託けて、リュウタのもとに来ては色々な噂を落としていった。
もちろんそれも、リュウタの思惑である。

そんな穏やかな笑顔を返す男を、誰が狂人だと思うだろうか。
陽が昇れば偽りの仮面で笑い、夜になれば独り心の闇に沈んで恨みを育てる。

リュウタは孤独に狂いながら、日々それを繰り返していた。

カタの根、フウシャクの肝、ハリコの花弁。

楽しそうに、歌うように、それが語る。

全て人には猛毒。よくもまあ、集めたものだ。

くっくと声を漏らして笑うそれは、どこか異様な妖しさを孕んでいた。
まるで善悪の判らぬ子供のようだと思いながら、リュウキは眉を寄せて目の前の彼を見つめる。

真っ白な空間に在るのはやはり彼　リュウタのみで、声は聞こえるものの持ち主の姿は見えない。
ぐるりと周囲に目を向けたリュウキは、再びリュウタへと視線を戻した。

今日も彼は表情を浮かべることなく、感情のそげ落ちた顔で空中を見つめている。
彼が密かに集めた物を言い当てられても、特に何反応することもなかった。
それを見た何かが再び小さく笑う。

おもしろい。

ほんに、人はおもしろい。

満足げな声は、何かを期待するように響き、常にリュウキを不快にさせる。

リュウタ、リュウタ。

わたしはずっと見ているよ。

お前のことを、ずっと。

「気持ちの悪いことを言うな。」

ふふ、まあそう怒るな。

お前はきつと、いつかわたしの力を求めるよ。

「……」

そのときは、リュウタ。

わたしの願いもきいておくれ。

「……誰がお前なんか信じるものか。願いなんて碌なものじゃないだろ。」

その応えに、三度響くその笑う声。

しかし、リュウタは眉一つ動かすことはなかった。

ああ、やはりお前はいいね。

シヨウコよりもずっといい。

さも面白そうに呟かれた言葉が揺らした空気の流れが、リュウタの頬を妖しくかすめて消えた。

真っ白な空間で独り狂っていくリュウタを見ながら、リュウキは小さく溜息を吐いた。

目の前で繰り広げられる一人の人間の一生は、ほんの一時で受け止めるには重く、長い。

もう十数年の時を彼の傍らで眺めてきたように感じるが、実際現実に流れている時間は一日も経っていないだろう。

人の意識が見せる過去は、一夜の夢のようなもので、いくら長く感じようともそれは一瞬の出来事にすぎない。

リュウタにとって長く苦しい時間であっても、リュウキにとっては過ぎ去っていく記憶の残像でしかないはずだった。

「重いなあ……。」

苦笑を浮かべて呟いた言葉は、誰に聞かれることもなく消える。

違うところはあれど、どこか己と似通った境遇に感情移入しすぎたのかもしれない。

リュウキは再び深く溜息を吐いた。

と、これまで変化もなく繰り返されていた真っ白な夢が、僅かに揺らいだ気がして、リュウキは散らしていた気を一気に引き締める。目の前の空間や青年に変化は無いものの、ここ数年で培った彼女の鋭い感覚は、確かな異変を訴えていた。

「……何だ？」

青年には聞こえないリュウキの声が、白い空間に響いて消える。

「もう、止めて。」

が、誰も応えるはずのない彼女の声に、何かが応えた。

次の瞬間、僅かに肩を揺らしたリュウキの細い腰に、するりと、細い何かが巻き付く。

はっと己の腰を見下ろせば、白く細い子供の腕が己の腹に巻き付いていた。

いつもの彼女であれば、何かの気配を察知した瞬間、間合いを取って警戒するところだが、不思議なことに、己を拘束する白い手を振り払おうという気すら起きない。

リュウキは僅かに戸惑いを見せながらも、己の腹に巻き付く白い手を見下ろしたあと、こちらに気付くことなく見えない存在と問答を繰り返すリュウタに視線を向けた。

「これ以上、見ないで。」

どこか悲痛な声は幼く、泣き出しそうに震えている。

「あれは…お前か。」

静かに囁くように呟けば、子供が腕に力を入れて、リュウキの背に小さな身体を密着させてきた。ちょうど肩胛骨の下あたりに寄せられた頭が小さく上下する。

「記憶、戻ったのか？」

「一緒に見ていた。」

「そうか。」

おそらく、この背後の子供が現在の“リュウタ”の意識なのだろう。彼はリュウキに縋るように抱きついたまま、小さく震えていた。

「もう、見ないで。」

「…何故？」

「このように、醜く堕ちた我など…見ないで。」

「後悔しているのか？」

このあと、目の前で恨みに狂う青年が何をやるかなど、リュウキには解りすぎる程解っていた。おそらく彼は、本懐を遂げたのだろう。

「後悔…後悔は、していない。もう一度やり直しても、我は同じ道を選んだだろう。」

己にとって、ネバはそれほどの存在だったのだと、子供は小さく、しかししっかりと呟いた。だが、と続ける。

「そなたには、見せたくない。我と同じで我より美しいそなたには、」

「意味が解らない。」

「そなたは強く美しい。我は憎しみに駆られ、言葉のままに闇に堕ちた。しかし、そなたは違う。」

子供の言葉の意図が僅かに解り、リュウキが眉を顰める。

「そなたはどんな不幸に落とされようと、心を闇に囚われることなどなかった。ぎりぎりのところで己を保ち、つけいる隙すら与えなかった。」

「私は運が良かった。人に恵まれていただけだ。」

「我もそうだ。我とてネバがいた。あのときネバの魂を忘れなければ、闇に堕ちることもなかっただろう。」

「……お前は嘘つきだな。」

くつと小さく笑ったりリュウキに、背後の子供がびくりと肩を揺らす。

「矛盾ばかりの言葉を並べて、本当は何が言いたい？」

後悔していないといいながら、己の過去の選択を非難し、ネバの魂を尊重しながらも、復讐から逃れる術を得ようとしない。

醜い己を見るなど言いながらも、繰り広げられる過去の記憶からリュウキを連れ出そうともしていなかった。

彼が望めば、異物であるリュウキなど、すぐにでも己の意識から弾くことができるにもかかわらず、だ。

「同情を引こうとも思っているのか？」

「……」

重く苦しい彼の過去は、確かに気の毒なのだろう。

幼くか弱い少年が、右も左も判らない異世界に飛ばされ、やっと手に入れた平穏と大事な人を、誰よりも苦しみを分かち合えるはずの幼馴染みに奪われたのだ。

リュウキとて人間、話を聞くだけでなくリュウタと同調し同じものを見たことで、同情を覚えてはいたのだが。

それに絆されて、正しい判断を見失う程、甘くはなかった。

「記憶が戻ったことで、余計なことまで思い出したか。」

何も応えない子供の手に己の手を掛け、振り払おうと力を込める。

「やっぱりそなたの心は強く美しい。だからこそ我は……」

お前が欲しいのだ。

最後の言葉は、それまでの子供が発していた声とはがらりと変わり、まるで頭に響くように不気味な声音をもってリュウキに届いた。

干渉者

いつの間にか、目の前で繰り広げられていた過去の青年は消え、白い空間にはリュウキと彼女の腰にまわりつく子供のみが存在していた。

異変を感じた彼女が、己の腹部に回る子供の手を払おうと、掛けた手に力を入れるも、小さな手はびくともしない。

僅かに眉を寄せて舌打ちしたリュウキは、背後の子供に意識を集中させた。

最初に感じていた幼い気配が、先ほどの言葉を皮切りに、がらりと異様なものにすり替わっている。

あまり芳しくない状況に、リュウキは小さく溜息を吐いた。

「まったく…誰も彼も、人を物か何かと勘違いしているのか。」

個人の都合で人の身体を物扱いするな、と。

心底迷惑そうに呟くリュウキに、背後の気配が小さく揺れた。どうやら笑っているようである。その気配には覚えがあった。

物などと、お前をそんなつまらぬものと同じに見てはいないよ。

妖しげなその声は、ついさっきまで目の前で記憶の中の青年に毎夜語りかけていた存在のものと同じだ。

どうやら自分はいらぬ興味をひいてしまったらしい。

リュウキは再び舌打ちしたい気分だった。

「是非ともつまらぬものと打ち捨てて欲しいもんだ。」

ふふ、まあそう言ってくれるな。青い星の愛し子よ。

「うるさい。…お前は何なんだ。」

わたしは干渉者。または管理するもの。

「人が神と呼ぶものか。」

否、わたしはわたしのために動くもの。人のためには動かない。

「はつきりしているじゃないか。」

あまりに率直な言い分に、鼻で笑ったりユウキが忌々しそうに己の腹部に巻き付く小さな手を見つめる。

それは殆ど力が入っていないが、確かな拘束力を持って彼女の腹に巻き付いていた。

「手を離せ。」

何故？

「拘束されるのは好きじゃない。」

ふふ、怖いのか？

馬鹿にするような言葉に、リュウキが眉を顰める。しかし、明らかな挑発に彼女が応えることはなかった。

怖いのか？

再び声が問う。

「…ああ、怖いな。お前は得体が知れない。」

はつきりと応えたリュウキの言葉に、声が再びくつくと笑った。しかし届くのは妖しげに響く声だけで、腰に巻き付く小さな身体からは僅かな振動すら伝わってこないのが不気味だ。

お前は己が弱いことを知っている。

お前は己が小さきことを知っている。

しばらく笑っていた声が止み、次いで放たれたのは流れるような静かな言葉。

だからこそ、闇の中でも個を保てた。

だからこそ、孤独の淵から絆を掴んだ。

するりと、子供の小さな手がリュウキの身体を辿る動きに、彼女の背を悪寒が走った。

滑らかな白い肌がはつきりと粟立ち、リュウキは眉を寄せて不快をありありと表す。

「離せっ！」

低く漏れた声は、確かな焦りを孕んでいた。

怯えることはない。

「…っ！…止めろっ！」

くすくすと、頭の中で不快に響く声に嫌悪しながら、リュウキは身体に巻き付く腕から逃れようと両腕に渾身の力を込めて抵抗したが、不思議なことに、明らかにリュウキよりも力の劣るだろうその腕は、彼女の身体から離れることはなく、それどころか容易くリュウキの身体を押さえつけながら、小さな手をするすると彼女の上半身へと滑らせていく。

ぞわり、と背を再び悪寒が走った。

「…くそっ…離せっ!！」

お前がお前を保つなら…

「…っ!!!！」

再び闇に引き込むまで。

ずぶり。

そんな音が聞こえそうなほど勢いをつけて、リュウキの胸の中心に小さな二本の白い手が沈んだ。

同時に感じたのは押しつぶされそうなほどの衝撃と魂ごと引きずられそうな引力。

酸素を求めるように開いた唇から漏れたのは、声にならない悲鳴と僅かな呼吸音で。

いけない、そう思った瞬間、目の前の空間が歪み、次いで現れた一つの影を、霞むリュウキの視界が捉えた。

干渉者（後書き）

注意

ここから先はお相手分岐します。
ちよっとお手数おかけしますが、目次ページに戻って各ルートの【
個人名 1】のお話をお選びください。

下記の【次の話くく】を選択すると、そのままシン編へ参ります。

紛らわしくてすみません（汗

シン 1

目の前に差し出された手を咄嗟に掴んだ瞬間、見上げた先に捉えたのは眩しいくらいの金色の髪と、煌めく翡翠の瞳だった。

三人が異変に気付いたとき、既にロウが術を放っていた。

「何があった!？」

緊迫したロウの様子に、シンが声を荒げる。

「何者かが、子供を介してリュウキに干渉しているようですっ!」

余程魔力を注いでいるのか、寝台に横たわるリュウキの背に両の掌を当てたロウの額にはうつすらと汗がにじんでいた。場を包む異常な空気に、遠巻きに見ていたシロも弾かれたように宙に浮き上がり、慌ててリュウキの傍らまで飛んでくる。

どうにかこうにかロウが何者かの干渉を阻もうと術を展開させているが、大した抵抗にもなっていないようだった。

それを見たシロが大きく舌打ちを漏らし、素早く周囲を見回す。ぐるり、と動いた金色の目が捉えたのは、焦りを浮かべるトリユウ

の王の姿だった。

「おい、お前！リュウキを迎えに行つてこい！！」

声どころか、今まで一度もこちらの言葉にまともな反応を寄越したことのない獣が、突然己に振つた言葉に、シンが大きく目を見開く。驚きに固まる男に、シロが苛立つたように声を荒げた。

「時間がねえ！この中でリュウキと一番絆の深え人間はてめえだ！
！さつさと行けっ！！」

シロの言葉に更に驚きつつも、一刻の猶予もない様子にシンが素早く己を取り戻してリュウキに目を移す。

「いけません、シン様！貴方はこの国の王！」

「そうだ！お前に何かあつたら国はどうなる！？俺が行くからお前は待つてろ！！」

焦つたようにシンの肩を掴んだのは、常に彼の傍らにあつた宰相と弟。

魔術に詳しくない彼らとて、混濁し干渉された意識に潜ることが危険なことであることくらい容易に想像が付く。

リュウキは大事だが、そう易々と一国の王を一人危険な地へ送るわけにはいかなかった。
しかし。

「お前らじゃ駄目だ。こいつが行かないと意味がない。」

必死に止める二人の言葉を、シロはきつぱりとはね除けた。

途端、シキとコウリの二対の眼が、白い騰蛇をきつく睨み据える。

火花でも散りそうな勢いでお互いを睨む三者の視線を絶つたのは、決意の色を浮かべたシン自身だった。煌めく金色の髪を僅かに滑らせ、シンはシロと背後の二人の間に身をずらす。

それと同時に、真珠色の騰蛇の金色の瞳が、再びシンへと向けられた。

「シロ。私が潜るが最善なのだな？」

はっきりと放たれた言葉に、シンの背後で避難の聲が上がる。

しかし彼はそれを抑えるように片手をひらりと上げた。

二人がシンの背後で小さく息を呑む。

「そつだ。お前がいい。お前しか行けない。」

はっきりと告げられたシロの言葉に、しばらく睨むように目を合わせていたシンが、ゆっくりと目を閉じた。

次いで、一呼吸の後に開かれた翡翠の眼には、確かな決意が浮かび、口元には僅かな笑みが浮かんでいる。

「よし、わかつた。私が行こう。」

「王！！」

「シン！！」

途端背後から上がった避難の声に、シンがくるりと踵を返す。

「案ずるな。すぐに戻る。」

にやりと浮かべた笑みは、まさに王者のものだった。

突然身を襲う浮遊感にひどい目眩を感じながら、シンが降り立った先は真つ白な空間だった。

地面と空の境も判断できない不思議な空間ではあったが、気付けばシンの足には地にしっかりと立つ感覚が伝わっている。どこまでも白い床に気を取られていると、そう遠くない場所から聞き覚えのある声が聞こえた。

「…くそっ…離せっ!!」

焦ったように響いたその声は、己のよく知る女の声で。

反射的に声のする方向へ踵を返したシンは、そのままぐつと足を踏み込み、捉えた先の女の下へと駆けた。

必死で藻掻くように身を擦らせる女　リュウキの胸に、背後から伸びた白い小さな手がずぶりと沈む。

その衝撃に、彼女の身体がびくりと弾み、細い身体を仰け反らせる。と、勢いで伏せていたリュウキの顔が正面を向いた。

同時に、彼女の金の瞳とシンの翡翠の瞳が交差する。

「リュウキ!!」

シンはリュウキをしつかりと見据えたまま、僅かに揺れた瞳に彼女の意識の揺らぎを感じ、それを繋ぎ止めるように叫びながら、無意識に伸ばされたらう白く細い手を取るべく必死に腕を伸ばした。

シン 2

シンが目を開くと、そこは荒れ果てた町の一角だった。夕暮れ時なのか、僅かに差し込む日の光も赤く、周囲は薄暗い。

真っ白な空間から一気に変化した情景に、呆然と周りを見回しながらも、先ほど掴んだはずの細い手を思い出し、はっと己の手を見下ろした。

しかし、そこには何の感触もなく、リュウキの姿すらない。

一度掴んだものを離してしまった己の不甲斐なさに、シンが大きく舌打ちをした。

何も無い掌をぐっと握り混み、狭い路地の壁に背を預けて悔しげに眉を顰める。

と。

「……………っ！」

「……………せっ…！」

シンのいる狭い路地から出た、少しだけ広い道から言い争うような声が聞こえた。

狭い路地にいても、どこか荒んだ空気の漂う町は、決して治安のいい場所とは言えなさそうだ。

シンは音を立てないように、そっと路地の端にすり寄って、声の方向を伺うように壁からそっと顔を覗かせた。

「はなっ…離してっ！っ、のっ…！」

「おら、暴れんじゃねえ…！」

「まったく、売り物のくせに手間かけさせやがって!!」

女の声と男の声。

女は少し高めの声で、何となく聞き覚えがあったが、大きな布を深く被っているせいかよく姿が見えない。

男二人は形からするに奴隷商人か何かだろう、シンは不快を全面に浮かべて眉を顰めた。

どうやら女は彼らから逃げてきたらしい、三人は揉み合うようにしていたが、そこは男と女の力な上に男の方は二人がかりである。

髪を掴まれた女は、そのまま引きずられるように地面に倒され、押さえつけられていた。

が、シンはその髪の色に目を見開く。

それは薄暗い中でなお暗く夜の闇を思わせる、見事な程の黒髪だった。

未だ逃れることを諦めない女が、更に身を抜った瞬間、顔を覆っていた布と髪がさらりと落ちる。

その白い面を確認した瞬間、シンは路地を飛び出していた。

「大人しく…ぐっ!!」

なおも暴れる女に、男の一人が拳を振るおうとしたとき、突然受け

た腹への衝撃に喉の奥からおかしな音をたてながら、もんどり打って地面へ倒れた。

「何だあ！？てめえっ！！」

突然のことに驚いたもう一人の男が、蹴りを放ったシンを確認した途端、醜く顔を歪めて彼に襲いかかる。

しかし、男が腰の鞭に手を掛けた瞬間、シンの拳が男の鳩尾にめり込んだ。

「ぐっ…があっ！！」

その衝撃に腹を庇うように崩れ落ちた男が、口から吐瀉物をまき散らしながら白目を向いて意識を飛ばす。

どちらも一撃で沈めたシンは、既に意識を失った男二人に構うことなく、慌てて蹲る女 リュウキの下へと駆け寄った。

「大丈夫…」

「っ！！いやああっ！！離せっ！離せーっ！！」

しかし、肩に手を掛けた途端、狂ったように暴れ出したリュウキに、シンが驚いて咄嗟に両腕を掴む。が、彼女の方は両手を拘束された事で、更に追いつめられた獣のように抵抗し始めた。

「やだっ！やだっ！！」

「おい！落ち着け！！」

「は、なせっ！離してっ！！」

「リュウキ！！」

「…っ！？」

ぐい、と腕を取って身体ごと自分と向き合わせながら、シンが大きく声を上げて彼女を呼ぶと、それまで必死に身を擦らせていたリュウキが、ぴたりと動きを止めた。
その顔を見れば、驚きに大きく目を見開いている。
が、シンも別の理由で驚いていた。

「……お前、リュウキ、か？」

「…なんで、私の名前…？」

至近距離で見つめた先の彼女の顔は、シンが記憶しているリュウキの顔よりも数段幼く、いつも人を射抜くような金の瞳は、まるで夜の闇を集めたような、彼女の髪と同じ黒い瞳をしていた。

建物や周りの風景から、どうやらトリユウの国内のどこかであることは判ったが、暗い路地に隠れたままでは、町の名前も正確な位置も判らない。

戸惑うリュウキを連れのまま、シンは一端身を隠すように元の路地へと戻っていた。

まあその間にも、暗い路地へと己を引きずっていくシンに警戒したリュウキが暴れ、一悶着あったのだが、危害を加えるつもりはないと丁寧に説明すれば、とりあえず落ち着いてくれたらしい。

未だ警戒の色は見せてはいるが、リュウキは大人しくシンについてきていた。

しばらく路地の壁に背を預け、表の通りを伺っていたシンが、静かにリュウキに向き直る。

見慣れない黒の瞳を正面からしっかりと見下ろすと、彼女は僅かに身じろぎ居心地悪そうに小さく身を竦ませた。

まるで知らぬ人間を見るようなその反応に、シンが小さく眉を寄せらる。

「リュウキ、私が判らないのか？」

「…知りません。ていうか、何で私の名前、知ってるんですか？」

疑問に満ちたリュウキの表情は、嘘偽りや冗談を言っているふうではなかった。

黒い瞳を訝しげに細めて、僅かに首を傾げている。

「その前に、リュウキ。お前、年はいくつだ？」

そう、先ほど彼女の顔を見てから思っていたことだ。確かに顔立ちを見れば、瞳の色の違い以外はシンが知るリュウキそのものだった。

しかし、その表情も口調も、首を傾げる仕草も、ちょっとしたことが現在のリュウキからは考えられない程幼い。

どこか頼りないその瞳が、常に不安げに揺れていた。促すように、じっと見つめる翡翠の瞳に、根負けしたのはリュウキである。

小さく溜息をついた彼女は、未だ不審の残る黒い目でシンを見つめたまま渋々と口を開いた。

「…十七。」

小さく呟かれたリュウキの声に、シンが僅かに目を見開く。予想はしていたが、やはり目の前のリュウキは過去の彼女の姿だった。

シンは少し前にリュウキ自身から、彼女がシロと契約するまで、リュウキの瞳は彼女の髪と同じ真っ黒な瞳をしていたということを聞いたことがある。

一体どういう経緯でこんなことになっているのかは不明だったが、目の前の少女は確かにリュウキなのだ。

シンが知るそれよりもずっと頼りない肩に彼がそつと手を置くと、十七歳のリュウキはぴくりと小さく身体を弾ませ、瞳には怯えの色を見せる。

その反応に、心のどこかが痛むのを感じながらも、安心させるように視線を合わせて笑みを浮かべた。

「お前の名前は、レン・リュウキで間違いないな？」

「…!!」

それは、彼女にとってこの世界で誰も知っているはずがない自分の本当の名前で。

驚きに、言葉もなく目を見開いた少女の唇が、僅かに震えた。

「大丈夫だ、私が必ずここから連れ出してやる。」

強い言葉と太陽のような暖かな笑みに、リュウキの目から大粒の涙が零れた。

実のところ、シンはリュウキが涙を零すところを見たことは殆どない。

彼女はいつも、自らの傷を涙と共に飲み込み隠すので、涙以前に彼女の弱音を聞き出すことすら周囲の者にとって大変な苦勞を要した。何せ、現在ヒリュウの宰相補佐として仕える彼女は、その辺の兵士よりもずっと心身共に強いのだ。

だから、目の前で突然大粒の涙を零し始めたリュウキに、シンは少しだけ狼狽えた。

といっても、彼も年齢を重ねた男なので、そこは顔に出すような失態は取らなかつたのだが。

時折小さくしゃくり上げながらも、唇を噛みしめて声もなく涙を零す少女に、シンは眉を顰めた。

「お前は十七の時からそんな泣き方をしていたのか。」

呆れたような声は、確かな不快を表していたが、肩に掛かる手は優しく温かい。

まるで己を守るように添えられた大きな手に、リュウキは抵抗することなく、しかし掛けられた声に応えるように、涙に濡れた顔を僅かに上げる。

あまり顔を見られたくないのか、細く白い両手でしきりに目元や頬を擦っていた。

「あ、こら、止める。腫れるぞ。」

それを見たシンが、肩から手を離して顔を擦っていた彼女の両手を掴む。すると、リュウキは慌てて顔を隠すように俯いた。

その幼い仕草に、シンが目を瞬かせ、次いでふと吐息を漏らしながら小さく笑う。

彼の微笑む気配がわかったのだらう、恥ずかしかったリュウキは更に顔を背けた。

「ほら、顔を見せてみる。」

「…やだ。」

「やだ、じゃない。あ、こら擦るな。」

顔を上げさせようと、片手を離して涙に濡れた頬に添える。すると、彼女はすぐさま空いた方の手で目元を擦ろうと手を己の顔に寄せた。それを見たシンが慌ててリュウキの顔を上げさせる。

彼女が乱暴に顔を擦らないよう、手と腕を器用に使って遮りながら、

両手で彼女の頬を包み込むように持って、そっと親指で目元に残っていた涙を拭った。

「あー、少し腫れているな。だから擦るなと言ったのに。」

「止めて…ください。」

温かな手は、大した力も込められていないのに、何故か彼女は振り払うことができず、細い両の手は頬を包む大きな手の手首のあたりに掛けられたままだ。おそらく泣き顔を真正面から見られるのが恥ずかしいのだろう、涙に潤む黒曜石のような瞳が、ゆらりゆらりとシンから逃れるように揺れている。

己の思い人の滅多に見ることのできないだろうその姿に、シンの頬は緩みつぱなしだ。

現在のリュウキが、このことを知れば、記憶でも消されそうな勢いだなど、心の中で苦笑を浮かべながら、シンは目の前の彼女の顔をそっと解放した。

どうやら相当恥ずかしかったらしい、耳まで真っ赤にした少女は、途端に一步後退し思いつき顔を背ける。

シンは特に気にすることなく、否、むしろ面白そうにそれを見つめながら、懐から布を一枚取り出した。

「取り敢えず、顔を拭け。」

差し出された小さな布は、ふわりと軽く手触りもいい。

リュウキは反射的に受け取りながらも、その感触に僅かに目を見開いていた。

「これ、すっごく高い布なんじゃ…。」

どうやら汚してしまうことに抵抗を感じているらしい。
受け取ったままの状態、布とシンの顔を戸惑ったように交互に見つめていた。

「ああ、構わん。お前の顔が腫れるよりいい。」

あまりにも率直な答えに、リュウキの顔が再び赤く染まる。
照れて視線を彷徨わせる彼女に小さく笑みを浮かべたシンは、場所を移動するために通りの様子を伺おうと踵を返して彼女に背を向けた。

「……………あ、りがと……………」

小さな小さなその声は、狭い路地に零れて消えた

シン 4

シンは竜騎士であって、魔術を仕える訳ではない。

なので、この現実のようでおそらく現実ではない世界を如何にして抜けるか検討もつかなかった。

己には魔力すらはつきりと感じることはできないのだから。

内心困り果てながらも、傍らの少女に不安を与えぬよう表情には出さず、シンは小さく息を漏らした。

「リュウキ、お前魔術は使えるか？」

その問いに、先刻まで浮かべていた警戒の色を消したリュウキが、心底不思議そうに首を傾げる。

「魔術って…あの魔法みたいなやつのことですか？」

どうやら使える云々の前に、よく解っていないらしい。

「そうだな。魔法とは考え方が違うんだが…そんなものだ。やはり使えぬか。」

「無茶言わないでください。私平々凡々な女の子ですよ。」

「平々凡々かは判らぬが、お前は才能があると思うぞ。」

これは彼女の未来を知っているシンだからこそ言える言葉だ。それから、とシンが続ける。

「先ほどから気になっていたが、敬語は止める。」

「え、でも…」

「親しい者と話すように話してくれた方が楽なのだ。」

とはいふものの、目の前のリュウキから見れば、シンは立派な大人で年も彼女よりずっと上だ。

もともと一般常識程度の礼儀を弁えているリュウキにしてみれば、そんな彼に敬語抜きで友達のような口調で話すことは、なかなか努力が必要なことだった。

シンもそれは解ってはいたが、幼いとはいえ己の知るリュウキと同じ顔で敬語を使われると、それこそ居心地が悪くて仕方がない。

何を言っても引く気がなさそうな翡翠を見上げて、リュウキが困り果てたように眉を下げる。

しばらく何かを考えていたようだが、一度大きく溜息を吐くと、諦めたような声で、努力しますと呟いた。

「取り敢えず、金を調達してくるからここに身を隠しておけ。」

そう言いながら、己が纏っていた薄衣をリュウキに被せ、路地に彼女を潜ませたシンは、身につけていた装身具と飾り布を外し、幾分簡素な身なりになると、路地を出て表の通りへと出て行った。

外した装身具は飾り布に包んで持って行ったようだ。

リュウキは言われた通りに、少し大きめの薄衣を頭からすっぽりと被り、路地の影に蹲る。

彼が視界から消えた途端、彼女の心を不安が襲った。

それからどれくらいの時が過ぎただろう。

立てた膝に顔を埋めたまま、周りの気配に耳を澄ませていると、表の通りの方から一つの足音が近づいてきた。

地面を踏みしめるその音が大きくなるにつれて、リュウキの身体が不安に強ばる。

思わず、先ほどまで共にいた男を呼ぼうと思ったが、その時になつて、リュウキは彼の名前を知らないことに気付いた。

ほんのつい先刻出会ったばかりの男の名前など、普段の彼女ならば気に掛けないだろう。

しかし、今は名を呼べないことが彼女の不安を更に煽り、まるで足下が崩れていくような恐怖を感じさせている。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

そんな言葉ばかりがぐるぐると頭に浮かんだ。

微動だにせずに息を潜めていた彼女の目に、じわりと熱が集まった瞬間、ちょうど頭の上あたりから、小さく笑う声が届いた。

「そこまで小さくならずともよかるうに。」

「…！」

温かなその声に、リュウキが弾かれたように顔を上げる。

そこには柔らかく光る翡翠の眼が、しっかりと彼女を見つめていた。

ほんの少しの間と思っていたが、リュウキに不安な思いをさせてしまったらしい。

路地の壁に背を寄せて、小さく小さく身体を丸めて蹲っていた少女に声をかけると、彼女は弾かれたようにシンを見上げた。

白い顔は青ざめ、黒い瞳が僅かに潤んでいる。

シンは慌てて膝をつき、リュウキと視線を合わせると、小さな頭にぼんと片手を乗せて安心させるようにゆるりと撫でた。

「すまぬ、不安だったのだろうか？」

彼の言葉に、くしゃりと顔を歪めた少女が僅かに頭を振る。

「いい、我慢するな。もう大丈夫だ。」

何度も何度も、温もりを分け与えるように撫でれば、強ばっていた少女の肩からゆっくりと力が抜けていった。

しばらくそうしていると、少し落ち着いたのか、リュウキがゆっくりと顔を上げる。

彼女は少しづつが悪そうに視線を彷徨させた後、まるで黒曜石のような瞳に決心を浮かべてシンを見つめた。

「あの…。」

「何だ？」

「…名前、教えて。」

思わぬ言葉に、シンが目を見開く。

次いで、しまったと言わんばかりに顔を歪めたあと、申し訳なさそうにリュウキを見つめた。

「すまぬ。そうだな、俺の名を知っているはずがないな。」

本当に申し訳ない、そう頭を下げるシンに慌てたのはリュウキだ。

「い、いや、そんな真剣に謝ってもらわなくても…。」

「いや、これは俺の失態だ。名も伝えず信じてもらおうとは、愚かにも程がある。」

「や…ホント、教えてくれさえすればいいんだけど。」

自分より年上の大人の、しかも明らかに一般人とは違う威厳を持った男に頭を下げられ、そのあまりの居心地の悪さに、リュウキがそわそわと身体を動かす。

その様子に苦笑を浮かべたシンが、彼女の両手を取ってそのまま引っ張るように共に立ち上がらせた。

流れのまま、自然に見上げたリュウキの黒い瞳とシンの翡翠の瞳が交差する。

僅かに目を細めてゆったりと笑みを浮かべたシンが、ゆっくりと口を開いた。

「私の名前はシン・ヒリュウという。」

「シン…ヒリュウ？」

「そうだ。」

「ヒリュウって…。」

「まあ、それは追々な。」

訝しげに首を傾げるリュウキに、シンはどこか悪戯を企むような顔でにやりと笑みを浮かべた。

シン 5

シンは生まれたときから次代の王として育てられたため、根っからの王族だ。

しかし、ヒリユウ王家代々の性質なのか、はたまた彼自身の性格なのか、そこら辺の貴族と違って身分で物事を判断せず、意外なことに平民たちの生活や価値観も理解している。

それというのも、幼い頃から身近な人間を連れて、父王や王妃の目を盗んでは、城を抜け出して城下に繰り出していたからだ。

ちなみに、身近な人間とは、彼の腹違いの弟と乳兄弟 現大將軍 シキ・ヒリユウと宰相コウリ・ミンロンである。

と、いうわけで、王族にしてはなかなかの行動力と生活力を持っているシンは、己の身に纏っていた装飾具と高価な布を適当な店に売って金に換え、己とリュウキの身なりを一般的な旅人の服装に整えると、彼女を連れて小さな宿に部屋を取り、身を落ち着けていた。

こぢんまりと佇む宿は、明らかに古く世辞にも綺麗とは言えなかったが、それでも荒れた路地からは離れた場所であり、全く危険はないとは言いがたかったが、あのまま町を彷徨うよりもずっと安全を確保できている。

宿の亭主も、少しやつれてはいたが、旅人を名乗る二人を気遣う言葉をかけてくれた。

「取り敢えず、ここで体勢を整える。」

部屋に入り、備え付けの寝台へと腰掛けたシンが、大きく溜息を吐いて外套を外す。

砂色のそれを寝台の上へと放り投げた彼は、次いで頭に巻き付けていた布を鬱陶しそうに剥ぎ取った。外套と同じ砂色の布からこぼれ落ちてきたのは、キラキラと輝く金糸だ。

リュウキがどこか居心地悪そうに扉の前に佇んだままそれを見てみると、それに気付いたシンが小さく苦笑を浮かべて手招きをした。

それに応えるように一步を踏み出そうとしたリュウキは、しかし僅かに身動いだ程度で足を止めて顔を強ばらせている。

明らかに女性としての警戒を表す彼女に、シンが少しだけ驚いたように目を見開いた。

何せ、彼の知るリュウキは、見目こそ美しいが中身は男より男らしいので、たとえ密室に異性と二人きりになろうが、己の寝室に深夜男が訪ねてこようが、気にしたことは一度もないのだ。

これが何故ああなってしまったのかと、現在のリュウキが知れば憤慨ものの疑問を浮かべながら、シンは己の膝に肘をついて頬を支えたまま入り口で佇む彼女を見上げた。

「そう警戒しなくても、俺はお前の味方だ。」

柔らかなその声に、じっと彼を見つめていたリュウキの黒い瞳が僅かに緩むものの、やはり彼女は警戒を止めない。

「そんなの、わかり…わからない。」

それでも律儀に敬語を止めようとしているリュウキに、シンはくすり小さく笑った。
声が聞こえたのか、彼女の目元が僅かに染まり、きゅっと目を細めてシンを睨み付ける。

「仕方ないでしょ！？そんないきなりタメ口なんて…。」

「タメ口？」

「え…ええと…と、友達みたいな口調っていう意味よっ！」

「ほう。タメ口。タメ口というのか。」

ふむふむと、どこか面白そうに繰り返すシンに、からかわれたと思っただのかリュウキが更に眉を寄せた。

「ねえ！…な、何で見ず知らずの私を助けたりしたの？」

語尾が小さく震えている。

おそらく期待と不安と既に心に焼き付いてしまった恐怖を感じているのだろう。

先刻あれ程シンの目の前で、安堵の涙を流した少女の心は、それでも不安に揺れているようだった。

シンは、現在のリュウキ自身から、ヒリュウに落ち着く前の彼女のことを時折話に聞いていたが、それでも全てを聞いているわけではない。

特に、彼女の一番辛かったであろう時期　つまりは、異世界に飛ばされてから傭兵となるまでの間のことは、殆ど聞いてはいないのだ。

ただ、彼女にとってそれは、とても辛く屈辱的で、残酷な時間だったということは何となく感じていた。

彼の一对の翡翠が僅かに細まり、シンの知らない過去のリュウキをひたと見据える。

その視線を受け、未だ幼さを残す少女は、黒い瞳に不安を浮かべて再び小さく身動いだ。

「今から話すことは、信じられないかもしれない。」

しかし、私にとってもお前にとっても大事なことだ。

そう呟いたシンに、リュウキは僅かに目を見開くと、少し考えるように口を嚙んだ。

「どうか、最後まで、聞いてほしい。」

この世界に来て、初めて向けられた真っ直ぐな眼差しに、リュウキは思わず頷き返していた。

シン 6

そう広くはない部屋には小さな切り出し窓がついており、少し離れて寝台が二つ並んでいた。

窓に近い方の寝台の前には、これまた小さな石造りの椅子がぼつんと一つ置いてある。

リュウキはそれに腰を下ろして寝台の上に腰掛けているシンと向かい合っていた。

細い膝の上で固く握りしめられた拳は、未だ残る彼女の警戒と緊張を表していたが、それでもシンの話を聞こうとしてくれているようで、その姿に彼は小さく安堵の息を吐く。

シンが話を始めるために、小さく身をずらすと、目の前の少女も小さく身動いだ。

「まず、私の話をする前に、お前に聞きたいことがある。」

どこか緊張した面持ちのリュウキが、問いを促すように首を傾げる。

「お前はこの世界に来てどのくらいの月日を過ごした？」

訝しげに見つめていた少女が、シンの言葉に目を見開いた。

「な、んで…それを？」

「私がお前が異世界から来た者だと知っている。その理由はこれから話すから、それだけ教えてくれ。」

訳も解らず彷徨っていた彼女にとって、思いもしない言葉だった。

驚きそのまま問いつめたい気持ちが溢れたが、目の前の真摯な翡翠に、

まるで押しとどめられたようにぐっと肩に力が入る。
リュウキは混乱に揺れる瞳をゆらゆらと彷徨わせながら、口を開いた。

「…もうすぐ、一年。」

「そうか、一年か。」

どこか痛々しげなシンの瞳が、動揺する少女を射抜いた。

「ねえ、何で私のこと知ってるの？もしかして、あなたが私を呼んだの？」

思わずといった感じで開いた小さな唇から、震える言葉が飛び出す。どこまでも深い夜の闇のような瞳に、今なお降り積もる絶望と怒りがちらついていた。

信じていたのに、という思いと、お前がこんなところに私を呼んだのか、という思いがありありと伺える。

シンは僅かに目を細めると、ゆるく頭を振って口を開いた。

「違う。俺にそのような力は無い。」

「ならっ、どうして私のことを知ってるの!？」

「私はお前の知るこの時より未来の者だからだ。」

「な…に？」

「私は未来のお前を知っている。だから、レン・リュウキが異世界の者だということを知っていた。」

「何を、言っているの？」

大きな目はこぼれ落ちんばかりに開かれ、呆然と開いた唇から、解らないとばかりに呟きが落ちる。

それでもシンは、目の前の少女に伝えようと、煌めく翡翠で真っ直

ぐに彼女を見つめた。

「俺がリュウキと出会ったのは、リュウキが二十二、俺が二十五のときだった。」

二十二。

そう言われても、少女にはやはり腑に落ちないらしい。

訝しげに眉を寄せながら、黒い眼がぱちぱちと瞬きを繰り返す。

その様子に、シンが小さく苦笑を浮かべると、無理もないと言つように小さく頷き、言葉を続けるべく口を開いた。

「あれは、そう…戦も終盤に差し掛かり、ヒリュウに残る全勢力で打って出ようとしていたときだ。今でもはっきりと覚えている。」

一対の翡翠が、目の前の少女から離れてどこか遠くを見つめるように細まる。

どこか切なげな顔は、見る者の心をきつく締め付けた。

「誰も彼もが血で汚れた鎧に身を包み、悲しみと怒りに蝕まれながら死地へと赴く雑多の中で、ただ一人、無を抱いて孤独に佇むお前がいた。」

その情景を思い出したのだろうか、シンの目にどこか悲しげな色が浮かぶ。

リュウキは何も言うことができず、口を噛んだまま彼の瞳をじっと見つめた。

「おそらく魔術を使っていたのだろう、髪はどこにでもいる少し明るい枯茶の色をしていたが、小さな頭と小柄な体格、細い四肢で、それでも凜と立つ姿は誰もが目を引かれていたのだ。」

「私は…魔術は使えません。」

「今は、まだな。」

少女の小さな呟きに、くすりと笑ったシンが言葉を返す。

「お前は流れの傭兵だった。身なりも他と変わらず、粗末な布と革を使った質素な甲冑だったが、少し作りが違った。ごつごつと全身を金属板で固めた板金鎧や鎖帷子を身に纏う男たちの中で、一人軽装とも見紛うような格好だった。一応鎖帷子は纏っていたようだったが、それでも、戦に出るには軽装すぎるように思えた。」

「…傭兵？私が…傭兵？」

「そうだ。ヒリュウは最後の決戦に向け、王城に仕える兵のみならず、ヒリュウで生きる傭兵や民までも兵士として集めたのだ。」

答えたシンの声は僅かに震え、目には後悔と怒りが浮かんでいた。民を戦に巻き込んだこと。それは先の戦において、シンが最も後悔していることだった。

ともすれば、思考とともに逸れそうな話を一度深く息をすることで抑えながら、シンは再び口を開く。

「お前も招集の声に集った、流れの傭兵の一人だったのだ。」

再度示すように、はっきりと告げられた言葉に、少女は小さく息を呑んだ。

海の向こうから次から次に押し寄せる船団に、ヒリュウ国もホウ国も見るとうちに疲弊していった。

初め、海の向こうの侵略者たちが現れたとき、両国ともに自国の勝利を微塵も疑っていなかった。

それというのも、大軍とはいえ所詮大海原を渡ってきた者たちである。この大陸に辿りつく頃には、兵たちは疲弊し、軍の統制も崩れているだろうと予想していた。

現に、彼らの第一陣は、ヒリュウとホウの国土を踏むことなく海の藻屑と消えたのだ。

しかし、そこで悔ったのがいけなかった。

シンの父である当時のヒリュウ王も、ホウの王も、決して愚王ではない。

むしろ、ヒリュウとホウの同盟をその生涯をかけて堅固なものにして、国を正しく治めた賢王である。

ただ、長く続いた平和が、彼らの判断を鈍らせたのかもしれない。間をおかずして押し寄せてきた第二陣は、第一陣とは比べものにならないほどの勢いを持ってヒリュウとホウを攻めた。

「彼らを侮ってはいけなかった。大海原を渡ってきた事実を思えば、それだけの技術を懸念に入れ、対峙すべきだったのだ。」

高い技術とそれに伴う知識、戦闘能力もずば抜けており、彼らは魔術も極めていた。

そんな者たち相手に一度出遅れればどうなるか、侵略者たちに上陸

を許したことで思い知ったのだ。
瞬く間に国は荒らされ、疲弊していった。

「お前がこの世界に落ちて一年弱ということ、私の知る世よりも八年ほど前のヒリュウだろう。その頃ヒリュウは荒れに荒れて、城下ですら一人で歩くには危険な場所になっていたはずだ。」

よりにもよってそんな時代に落ちるとは。

まるで己のことのように苦しげに顔を歪めるシンに、リュウキは僅かに眉を寄せた。

いくら知己　リュウキにしてみれば、シンの自称ではあるが
とはいえ、血も繋がっていない赤の他人相手にこんな表情ができる
だろうか。

リュウキの育ったあの平和な世界ですら、他人のことには無関心を
貫き通す世の中だった。

更に言えば、今まで彼女が出会ったこの世界の人間は、己の欲のため
に奪い、己の保身のために人を売る、そんな者たちばかりだった
のだ。

一年前ならば、すぐに信じたかもしれない。

しかし、今はそう簡単に信じるわけにはいかなかった。

彼女がこの一年で学んだのは、異国の言葉と人への不信である。

この世界でそれを崩せば、命に関わることを、少女は知っていた。

「言葉はどつやって学んだのだ？」

不意に掛けられた問いに、少しだけ反応の遅れたリュウキが、はつと肩を揺らしてシンを見た。

彼の顔からは、先ほどの苦しげな色が消え去り、今は静かにリュウキを見つめている。

「…覚えさせられた。」

ぼつりと呟いたリュウキの顔が、苦虫を噛み潰したように歪んだ。あまり良い記憶ではないことを察したシンが、一言そうかと呟いて言葉を終えた。

その場に降りた沈黙に、リュウキが僅かに身動く。

シンはというと、それほど気にはしていないようで、無言のままだがリュウキから視線を外すことはなかった。

しかし、リュウキにとっては居心地が悪いことこの上ない。

特に、じつと己を見つめ続ける、宝石のような翡翠の瞳が苦手だった。

煌めく翡翠は、固く閉ざした心の奥まで覗かれそうで、気を抜けば足下を崩されるような、魂から引きずられそうな、そんな不思議な力を持っているように思えた。

今すぐにも逃げ出したいという気持ちと、このまま翡翠に捕まってしまうという訳の解らない気持ちとが少女の心で渦巻く。

リュウキは堪らず、シンから逃れるように顔を俯けた。

「実はな、お前の事を知っているとは言ったが、それほど詳しくは聞いていないのだ。」

漸く破られた沈黙に、僅かにリュウキが顔を上げると、シンがやれ

やれと後ろに反らせた上体を支えるように寝台に手をつきながら、苦笑を浮かべていた。

「いつ、どのようにこの世界に落ちて、誰と出会い誰を失ったのかは掻い摘んで聞いてはいるがな。それに至る経緯や、お前が何を見つけたのかは聞けなかった。」

どこか悲しげに歪んだ顔を見上げて、少女が僅かに首を傾げる。

「貴方は…私の、何？」

小さな声で放たれた言葉は、リュウキ自身も無意識のうちの言葉だったらしい。

すぐに口元を抑えたリュウキは、しまったと言わんばかりに視線をそらしてくしゃりと顔を歪めていた。

黒い瞳に浮かぶのは、後悔と恐怖。

「ごめん、今の無し。」

弱々しい呟きに、シンが僅かに目を細めた。

「俺はお前の…。」

「いって！！聞きたくない！！」

「何故だ。俺は、知ってほしい。」

「嫌だ！！だつてっ…」

必死に拒絶するリュウキの瞳は、しかし確かに縋るような色を浮かべていた。

自分の未来が如何なるものか、彼女とて気にならないはずはない。

流れの傭兵ということは、少しは強さを手に入れたのか。修也はどうなった。探し出すことはできたのか。

シンは八年後の未来から来たと言っていた。ならば、私は八年後も元の世界に戻ることもなく、この世界で生きているということか。そして何より不安なのは、シンと己との関係。

目の前の男は見るからに身分の高そうな形をしていたし、今まで見てきた中で、金の髪をした者など一人もいなかった。

おそらく貴族かそれ以上。

そんな相手と己の関係など、もしこの綺麗な翡翠の瞳で、彼の口から主人と奴隷などという言葉が出たら、そう思うとリュウキは悔しいのか恐ろしいのか、リュウキはもうよく解らなかった。

ただ、嫌だということだけは解る。

この一年足らずで多くの人買いたちの手を潜ってきたが、この男に彼らと同じ目で見られることは、何故だか無性に我慢がならなかった。

だから…。

「聞きたくない。」

語尾を震わせ、まるで虫の羽音のような声で呟いたリュウキは、再び顔を俯ける。

しばらくそのまま俯いていると、小さな溜息とともに、頭に軽い衝撃を受けた。

ぼふ、と音がしそうな程大きさに、シンの大きな掌が少女の小さな頭に乗せられる。

その重みに反射的に抵抗したリュウキが、僅かに顔を上げた。

剣を持つ者特有の、太い筋張った腕越しに、柔らかな翡翠が見える。

彼の目とぶつかりと同時に、リュウキは慌てて頭を下げた。

「本当に…別人のようだな。」

ふ、と小さく笑う声で呟かれた言葉は、僅かな悲しさが伺えた。リュウキは何となく居心地が悪くて、もぞりと小さく身動ぐ。その様子に苦笑を零したシンが、掌に収まる小さな頭をゆるりと撫でながら口を開いた。

「残念ながら、俺の知るお前は、もっとがさつで不貞不貞しい。」

掌の下で、少女の頭がぴくりと動いた。

「年上だから敬えと言っても敬語すら使わぬし、もっと女らしくしろと言えば鼻で笑う始末だ。こちらの忠告も聞かず、無鉄砲に何にでも首を突っ込み、いらぬことまで手を出そうとするし、何より短気ですぐに手どころか足まで出る。」

「……。」

次から次に出てくる、未来の己への評価のあまりの酷さに、少女は言葉を返せず、ただただ目を瞬かせるばかりだ。

しかし、しばらく考えた後、男の言葉を理解したリュウキは、未だ頭の上に乗っていた掌をはねのけるように頭を上げると、ぎろりとシンを睨み付けた。

黒い瞳は僅かに細まり、怒りのためか目元に赤みが差している。

いくら未来の己へのこととはいえ、全てはリュウキという人間に向けられた言葉である。

これは言われるばかりでは我慢ならない、とばかりに口を開いたりユウキを遮るように、シンが先に言葉を続けた。

「しかし、常に己よりも他を思い、他人の苦しみを察する心を持っている。細く華奢な身体は女のものであるはずなのに、凜と立つそ

の姿は多くの者を惹きつけ、背後で震える者を安堵させる。」

思わぬ言葉に、喚こうとした口を開いたまま、リュウキが呆然とシンを見つめた。

シンは柔らかい笑みを浮かべたまま更に続ける。

「お前は踏みにじられる屈辱を知っている。虐げられる苦しみも知っている。奪われる恐怖も、理不尽な暴力が与える痛みも、失う悲しさも知っている。」

少女の顔がくしゃりと歪んだ。

「その受けた闇全てを乗り越えて、己の力に、糧に昇華させてきたからこそ、お前は強く美しい。そんなリュウキだからこそ、俺は望んだのだ。」

ずきりと、頭の奥が僅かに痛んだ。

それでも、リュウキはシンから目を背けることなく、黒い眼でじつと見つめ続ける。

「お前を、ヒリュウの…俺たちの家族に。」

大きく見開かれた漆黒の瞳に、シンの柔らかな笑顔がはつきりと浮かんでいた。

おのれ…人間風情が。

何も無い、白一色の空間は、それが永い時を過ごしてきた場所である。

退屈と孤独が支配するその空間で、黒髪の子供が悔しげに呟いた。

わたしの作り出した記憶の闇に紛れ込み、剩あまじひえ愛し子を惑わすか。

子供は、先ほどまで浮かべていた薄笑いを消し去り、暗い怒りに顔を歪めて白く小さな拳を震えるほどに握りしめている。

負の感情に濁った眼は、何かを睨み付けるように宙を見つめていた。

「見つけたぜ。」

不意に、真つ白な空間に粗野な声が響く。

子供はきゅっと眉を寄せて、苛立ちも露わに荒い動作で振り返った。

獣風情が…どうやってここに入った？

確かな怒りを滲ませた黒い瞳の先にいたのは、空間にとけ込みそうな真珠色の騰蛇　シロである。

そんな子供の様子を見たシロは、どこか嘲るように鼻で笑うと、小さな身体をくねらせて、くるりと宙を一回転した。

すると次の瞬間、シロの身体の輪郭がぼんやりと薄れ、現れたのは髪も肌も真っ白な少年だ。

「獣風情、か。なら、てめえは何様だ。実体も持てねえ奴が聞いて呆れる。」

心底馬鹿にしたようなシロの言葉に、子供の眼がすつと細まる。ひやりと滲み出たのは、明らかな怒りを含んだ殺気だった。

「神だか管理者だか知らねえが、てめえ…思ったより制約が多そうだな。」

にやり、とシロが嗤う。

挑発するような言葉に、子供の唇からぎりりと小さく音が響いた。

「贅を使った大掛かりな術を組んだ割には、人一人を墮とすのにこっぴどく手間取ってやがるし、他の人間の干渉も容易く許した。」

言いながら、シロが見定めるように子供の足先から頭頂部へと視線を巡らせる。

「その子供はしつかり墮として意識も乗っ取ってるみてえだが、完全に取り込んでるわけじゃねえ。子供が落ちてから相当な時間も経ってるってえのに、そいつ自身の魂はしつかり残ってるみてえだな。」

贅にするにも、傀儡として操るにも、子供　　リュウタの意識は不要だった。

彼が管理者に堕ちた時点で、リュウタの魂は消されても不思議はなかったのだ。

世界に必要なだったのは、歪みを溜めるための器、つまりはリュウタの身体さえあればよかったのだから。

「いくら贅を立てようと、どんな犠牲を払おうと、理を動かす程の大きな力を使うには制限が掛かる。それは、使う者の存在を維持するために必要なことであり、それを破ればどんなに強い力を持っていようと魂を削られ、存在を否定される。」

魂を削られれば、世界の理に添うことは叶わず、魂を持つ者ならば誰もが歩む輪廻の道からも逸れることになる。

輪廻の道から逸れるということは、どの世界からもはじかれるということであり、世界からはじかれるということは、未来永劫誰にも交わることはない孤独の中、終わることもできずに、ただただ世界の狭間に独り彷徨い続けるということだ。

たった独り、常に押し寄せる身体の飢餓と心の乾きに耐えながら、狂うことも、ましてや死ぬこともできぬまま、どこまでもいつまでも独りなのだ。

魂を削られるということとは、そういうことである。

「むしろ持っている力が強ければ強いほど、掛かる制約は大きい。てめえがてめえで作り出した、リュウキの記憶の闇に干渉できないのも、その制約の一つなんだろう?。」

既に断定されたシロの言葉に子供は何も答えず、心底忌々しそうに視線を逸らして舌打ちを零した。

家族。

それは、リュウキが一年前に突然失ったものであり、今なお戻りたいと願う場所だ。

目の前でじつと己を見つめる男は、リュウキにとっては赤の他人だし、助けてくれたとはいえ、つい先ほど顔を合わせたばかりの見知らぬ男である。

本来ならば、そんな男と十七年共に暮らしてきた己の家族を同列に思うことなどありえない、はずだった。

「私の、家族？」

はずだったのだが、無意識に口から零れた呟きには、僅かな不安と抑えきれない喜びが滲んでいる。

まるで言葉の意味から確認するような彼女の呟きに、それでもシンは真っ直ぐにリュウキを見つめたまますっかりと頷いた。

「そうだ。お前は俺の、俺たちの大事な家族だ。」

はつきりと繰り返して告げられた言葉に、少女の顔がくしゃりと歪む。

「…う、そ。わたし、私知ってる…思い出した。…ヒリュウってこの国の王族の姓だ。」

そんな人が、どうして自分の“家族”なのか。

疑念と拒絶の色が、黒い瞳に浮かんだ。

「確かに俺は王族だ。でも、だからそれが何なんだ？俺とお前が家族になることに、俺の身分は関係ない。」

「あるに決まってる！わ、私はっ…わたしは、奴隷で…。」

「違う。」

「違うない！私はずっと…かつ…買われて、いてっ…動物、みたい…。」

「リュウキ!!！」

ゆらゆらと揺れる瞳に、うつすらと涙を溜めた少女が、震える声で途切れ途切れに語る。

血を吐くような言葉は、そのまま彼女の受けた苦しみや悲しみそのものを表していた。

シンはリュウキの言葉を、一際大きな声で遮ると、寝台から立ち上がり少女が怯むのも構わず、その小さな肩をがしりと掴み、彼女の目の前で視線を合わせるように膝を折った。

覗き込んだ黒い瞳には、恐怖や怒り、劣等感、様々な感情が浮かんでいた。

「リュウキ、よく聞け。」

全身に力を入れて身を縮め、肩を震わせ混乱するリュウキを、煌めく翡翠が真っ直ぐに射抜く。少し怯えたような様子を見せる少女は、しかし目の前の強い瞳から視線を外すことはなかった。

それを見たシンが、彼女の肩をしっかりと掴んだまま、安心させるようにゆったりと笑みを浮かべる。

リュウキが数度呼吸を繰り返すと、少し落ち着いたのを見計らったようにシンが口を開いた。

「いいか、忘れるな。俺も、お前も、同じ人間だ。」

「…っ…でもっ！」

「でもじゃない。身を切れば血が出るし、胸を貫けば死ぬ。笑いもすれば怒りもするし、動き回れば身も汚れる。食い物が無ければ飢えて倒れ、水が無ければ乾いて死ぬぞ。」

むっと、眉を寄せたりユウキが黙り込んだ。

そんなことは解っている。

それでも、身分が無ければ、この世界では家畜と同様の扱いを受けるのだ。

そんなリユウキの考えを呼んだように、シンが苦笑を浮かべて小さく頷いた。

「むしろ、俺は貴族なんかより、お前の方がずっと強いと思うがな。」

「…強い？」

「ああ、貴族なんぞを身包み剥がして放り出してみる。三日と持たず乾いて死ぬぞ。」

冗談なのか、本気なのか、否、真顔で言うその言葉は、シンの心からの言葉なのだろう。

だからこそ、リユウキはまるで、不思議なものを見るようにシンを見つめた。

今まで出会った身分ある者たちは、己の力を信じて疑わない者ばかりだったのだから。

「この国は、まだまだ勘違いをしている輩が多く、情けないことだが、城で育った俺には把握しきれないことばかりだ。」

ぐっと、少女の肩を掴む手に僅かに力がこもった。見れば、シンの端正な顔が悔しげに歪んでいる。

「だからこそ、お前の強さに惹かれたし、お前は俺に必要な存在だった。同じ人間にも関わらず、何の助けも無いところから、その身一つで闇の中を独り生き抜いてきたお前のその強さが。」

目の前で、しっかりと己に据えられた翡翠が、確かな熱を持ってリュウキを見つめる。

「だから、今一度言おう。」

まるで、見えない力に捕らえられたように、リュウキはシンを見つめていた。

掴まれた肩が熱い。

一对の煌めく翡翠が、一瞬きらりと強い光を放った気がした。

「リュウキ、俺の家族になつてくれないか？」

告げられた言葉は、僅かな痛みを伴いながら、少女の冷えた心の底まで響いて落ちた。

パキン

頭の奥で、何かが弾ける音がした。在るはずのない何かが碎け、リュウキの視界にちかちかと明滅を繰り返しながら小さな光の粒が四散した。それと共に、彼女の頭部を強烈な痛みが走り、リュウキは堪らず頭を抱えて蹲る。僅かに開いた唇からは、苦しげに掠れた呻きが零れた。

「リュウキっ!？」

驚きの声を上げたのはシンである。

彼は突然始まったリュウキの異変に驚きつつも、目の前で崩れ落ちるリュウキの身体を反射的に受け止めていた。

頭を抱えてがくがくと震え続けるリュウキを、まるで何かから守るようにきつく抱きしめる。

「リュウキ!リュウキ!どうした!？」

「……っ……い……っ……!！」

「頭が痛いのか!？リュウキ、リュウキ!」

指の間からさらさらとこぼれ落ちる黒髪を、無造作に掴む細い女の手には、渾身の力が込められているのだろう、はつきりと筋が浮いていた。

顔を覆う黒から時折覗く白い額には、うっすらと汗が滲んでいる。

シンはリュウキの突然の苦しみに訳が解らず、ただただ彼女の震える身体を抱きしめ、リュウキの意識を呼び戻すように声をかけ続け

た。

「リュウキ！リュウキ！！しっかりしろっ！！」

「ぐっ……う……ああっ！！！」

と、何度目か彼が呼びかけたとき、とうとうリュウキが声を上げて苦しみだした。

短い叫びと共に、腕の中の細い身体がびくりと大きく跳ねる。

それと同時に大きく背を仰け反らせた事で、俯いていた顔が空を仰ぐように動き、シンの視界に大きく目を見開いたリュウキの顔が映った。

シンは片方の腕をリュウキの腰に巻き付けきつく抱きしめたまま、彼女の焦点を己に合わせようと、白い頬をもう片方の掌でしっかりと包んだ。

「リュウキ！俺を見る！！リュウキ！！」

「う……あ……シ、ン……」

痛みに喘ぎながらの小さな呟き。

それは確かに、シンを呼ぶ今のリュウキの声で……それを聞くなり、彼は大きく目を見開き、更に声を大きくして彼女を呼んだ。

「リュウキ、リュウキ！俺はここだ！！ここに、戻ってこい！！」

戻ってこい。

それはシンの無意識の言葉だった。

何故彼がその言葉を選んだのか、それは彼自身にすらわからないだろう。

しかし、それがこの時、最もふさわしい言葉だったのは確かだ。

リュウキの腹部に回る大きな手を、いつの間にか彼女の細い手が掴

んでいた。

身に響くような低く強いシンの声に応えるように、その手に一層力が入る。

痛みの所為か、それとも沸き起こる感情の所為なのか、リュウキの頬は赤く上気し滑らかな肌を汗が一筋滑り落ちた。

「あつ…ああつ…ああああつ…！」

喉の奥から全てを吐き出すような悲鳴。

揺れる視線を何とかシンに合わせていたリュウキが全身を痙攣させる。

それと共に、かちりと重なったシンの翡翠の瞳が、目の前の変化を捉えて大きく見開かれた。

「…っ…リュウキ…！」

「…っ…く…。」

がくり、と。

激しく痙攣していた身体が、まるで糸の切れた人形のように力を失う。

次いで、ゆっくりと上げた白い面に見えたのは、シンのよく知る太陽のような黄金色の瞳だった。

「……シン。」

小さな小さな呟きは、しかししっかりと男の耳に届いたよう。

疲れ果てたように力を無くしたリュウキの身体を、力一杯抱きしめていたシンは、弾かれたように腕の中の女を覗き込んだ。

「リュウキ！？大丈夫か！？」

耳元で叫ばれたリュウキが、盛大に眉を顰めてのろのろとシンを見上げる。

「…うるさい。あと、苦しい。」

「まだどこか痛いのか！？」

どうやら焦るあまりリュウキの言葉を激しく誤解しているらしい。腕の力はそのままに、あちらこちらと身体を探るように覗き込んでくる男に、リュウキは鬱陶しそうに大きく溜息を吐いた。

「阿呆か…お前の馬鹿力が、苦しいんだ。」

「おい！お前成長してるぞ！！それに記憶が…。」

「あぁっもう！人の話を聞け！！！」

「その口調、その態度…戻ったんだな！！！」

苛々と喚くリュウキに対して、シンの顔には満面の笑み。

全く話を聞かない男に、とうとうリュウキが耐えかねたように身を起こした。

それと同時に僅かに頭を反らせ、そのまま目前にあるシンの頭に勢いをつけて己の額を打ち付ける。

「ぐっ！！！」

一瞬、目の前に星が飛んで、どちらのものともつかない呻き声が響いた。

「…っ…ば、馬鹿者！助けに来た者に対して、何という、ことを…。」

女とはいえ、鍛えた筋肉を惜しみなく使い繰り出された渾身の頭突きは、的であるシンにどうやらかなりの痛手を負わせたらしい。

珍しいことに、大国の王の翡翠の目には滅多に見ることのできない涙が浮かんでいた。

しかし、リュウキの方も無傷とはいかなかったようで、彼女の金色の目にもうつすらと涙が浮かんでいる。

「人の話を聞かないからだ！私を圧死させる気か！！兎に角離せ！！」

先ほどの衝撃で僅かに緩んだシンの腕の中で、ここぞとばかりにリュウキが藻掻く。

しかし、緩まっていたはずの腕の拘束は、彼女の意志に反するようには再びぐっと強まった。流石に力は加減しているようで、息苦しさは感じなかったが、消耗しきったリュウキの身体では、元から力の差があるシンには抵抗できない。

それでも、しばらくリュウキは腕から逃れようと抵抗していたが、無理と悟ると諦めたように身体から力を抜いて呆れたように溜息を吐いた。

「よかった。」

僅かな沈黙にどうしたものかとリュウキが眉を寄せていると、頭の上から低い呟きが聞こえた。

「お前が無事で、よかった。」

いつもは堂々と強く響く声が、今はどこか頼りなさげに掠れて語尾は震えている。

その一言を聞くだけで、シンがどれだけ彼女を心配していたかが伺えた。

リュウキの金色の瞳が僅かに揺らめき、どこか居心地悪そうに小さく身動く。

いつの間にか両腕でしっかりと抱き込まれ、彼女の耳には早鐘のようなシンの鼓動と僅かに震える吐息が聞こえていた。

どのくらい、そうしていたのだろうか。

無言のままシンの腕の中に収まっていたリュウキは、ふと周囲の異変に気付いた。

体格差からか、彼女の視界は殆どシンの身体で埋まっていたが、それでも、彼の肩口からちらりと見える背景に眉を寄せる。

「…シン。」

低く静かに告げられた女の声は、先ほどまでの雰囲気をぶち壊すような無粋な響きで。

しかし、彼女の緊張に気付いたシンは、それまで縋るようにリュウキの肩口に埋めていた顔を上げた。

その動きを感じたりユウキが、僅かに身を離して周囲をさっと見回す。

彼女の動きに続くように、シンも周囲へ視線を向けた。

「何だ、これは。」

二人の目に映ったのは、音もなく、まるでじわりじわりと虫に食われるように、空間が崩れていく様だった。

現実のように感触を持っていた宿の部屋の景色が、あっという間に白い空間に食い尽くされる。

その異様な光景に、シンは無意識のうちにリュウキの肩に置いた両手に力を入れ、彼女の身体を強く引き寄せていた。

馬鹿な。

己の作り出した空間が、見る見るうちに崩れゆくのをただ呆然と子供は見ていた。

対照的に、距離を置いてその様子を見つめていたシロは、勝ち誇ったような笑みを浮かべて大きく尾を揺らめかす。

そうこうしているうちに、彼らの佇む白い空間には、まるでじわりと色が広がるように、身を寄せ合うシンとリュウキの姿が現れた。はつきりとこちらを見据える意志を持った金色の瞳に、子供の顔が心底悔しげに歪む。

お、のれ…おのれええっ!!!

まるで地響きのような怒りの声。

小さな子供から放たれたものとは思えぬほどの憤怒が、その場にいる者の頭の中に直接振動を伝える。

気持ちの悪さに、シンもリュウキも盛大に眉を顰めていたが、少しも怯むことなくお互いを支え合いながらその場にしっかりと立ち上がった。

翡翠と金色の二対の瞳が、揺らぐことなく真っ直ぐに子供を見据える。

二人の手は、まるで生まれたときからそのために在ったかのように、ぴったりと繋がれていた。

リュウキ、リュウキよ！！解っているのか、愛し子よ！！

お前が拒めば、世界は歪み、全ての命が苦しむのだぞ！！

解っているのか、解っているのか！！

老若男女、様々な声音を持って紡がれる声は、まさに人外のもの。

子供は怒りに歪んだ顔を小さな両手で覆いながら、信じられぬとばかりに頭かぶりを振った。

全ての命が苦しむ。

その言葉に、一瞬動揺を表すようにリュウキの肩がぴくりと跳ねた。空気の振動のみでそれを察知した子供が、溢れ出す怒りを僅かに静めて、小さく笑みを浮かべる。

しかし、同様にリュウキの心に気付いたシンが、彼女の肩に回していた腕に力を込めた。

それに気付いたリュウキが戸惑うようにシンを見上げると、彼はリュウキを見下ろし、力強い笑みを浮かべていた。

まるで、大丈夫だとも言うかのようなシンの笑顔に、リュウキも自然に笑みを返す。

再び子供に向けられた金色の目には、もう迷いも恐怖もなく、彼女の強い意志が浮かんでいた。

生きる、という意志が。

貴様か…貴様がわたしの愛し子を惑わせたのか！！

再び子供の目に怒りが浮かぶ。

黒いはずのその目は、子供が憤怒の言葉を吐く度に、血が滲むようにどす黒い赤へと変化していった。

生きとし生けるものの憎しみと怒りを凝縮したようなその赤が、リュウキを守るように抱くシンへと向けられる。

二人を包む空気が、ずんと重みを増した。

しかし、シンは怯まない。

「誰が貴様の、だ。リュウキはヒリュウの、私の大事な家族だ。」

はつきりと告げられた言葉は、重い空気に押しつぶされることなく、むしろ空間を裂くように子供へ届く。

リュウキがちらりとシンを仰げば、そこにいたのは、先ほどまで感情露わに彼女を抱きしめていたシンではなく、王として背を真っ直ぐに伸ばし、対峙する者に勝るとも劣らぬ気迫を見せるシンだった。ならば、と、リュウキも彼の手を握る力をきゅっと強めて、腹に力を入れて目前の子供に対峙する。

「そして、ヒリュウは我らの大事な国。そう易々と、貴様の思い通りにさせぬ。」

王であるシンの背には、たくさんの命が在る。

リュウキは、彼の背後ではなく、彼の隣で、共に立ちたいと強く思う。

彼女はシンの言葉を飲み込むように、しっかりと目を閉じた後、開いた眼で射抜くように子供を見つめた。

「管理者よ。私はお前の下には墮ちない。私は、新たな私の家族と共に、業を背負って生きていく。」

たった一人、孤独に酔いながら全ての業を背負うことは選ばない。それは、己を闇から救い出し、光を与えてくれた家族を裏切ることだから。

「家族と、仲間と、共に知恵を出し合い、力を寄せ合い、お前の作り出したこの世の枷を、いつかこの手で打ち砕いてみせる。」

強く、通る声で宣言したリュウキの顔には、シンのよく知る、自信に満ちた誰をも惹きつける笑みが浮かんでいた。

迷いのない、彼女の言葉を受けた子供は、ただただ呆然とその場に立ちつくしていた。
既に真っ赤な血の色と化したその眼を、まんまるに見開いて。

そ、んな…まさか。

……まさか。

未だ受け入れたくないのか、子供が呆けたままゆるゆると頭を振る。しばらくそうしていた子供が、漸く全ての言葉を理解したようにくしゃりと顔を歪めた。

馬鹿な！！

愛し子が、わたしを拒むなど！！

子供が必死な形相で、人外の声を持って喚き散らす。おそらく彼の者は、到底人が考えつかないような時を過ごしてきた存在なのだろう。

しかし、リュウキの目には、借り物とはいえその子供の姿こそが、今の彼の者の精神的な年齢を表しているように思えた。彼女の眉が僅かに寄る。まるでそれは、子供の癩癩のようだ。

いやだ、いやだ！認めぬ、認めぬぞ！！

リュウキ、リュウキ！わたしを…わたしと……ひっ！！

と、喚き散らしていた子供が、突然恐怖の色を浮かべて息を呑んだ。見れば、彼の両手の先が、まるで砂のようにぼろぼろと崩れ始めている。

リュウキもシンも訳が解らず、ゆるりと進むその変化を食い入るように見つめていた。

「諦める。リュウキは試練に打ち勝った。出された結果に文句は言えねえ。」

たとえそれが、試練　記憶の闇を作り出した本人でも。そう、それが管理者に課せられた制約だった。

シロの言葉に、今更気付いたリュウキが、すすいと空を這うように近づいてくる白い騰蛇に目を向ける。つられて、シンも彼に目を向けた。

「…シロ。」

「薄情な奴だな。今気付いただろ。」

咎めるといふよりも、からかうようなシロの言葉に、リュウキが苦笑を浮かべて小さく謝罪する。

ひいい…いやだ、いやだ…還りたくない、還りたくない!!

ぼろぼろと崩れゆく自らの身体に、恐怖を張り付かせた顔で子供が喚く。

三対の目が、再び子供を見据えた。

「奴はどうなる?」

その様子を感情の籠もらぬ目で見つめていたシンが小さく呟くと、シロがちらりと男を見上げて渋々と口を開いた。

「あいつは賭に負けたんだ。負けた奴は元いた場所に大人しく還るしかねえ。」

「元いた場所とは？」

「さあな、それは俺だって知らねえさ。ただ…。」
「ただ？」

先が気になったのか、不意に口を挟んだのはリュウキだ。

「ただ、あいつはもう、お前に手を出せねえし、この世界へも干渉しにくくなるだろう。」

その言葉に、二人が僅かに目を見開く。

「何でそんなことが解るんだ？」

どこか訝しげに口を開いたのはリュウキだ。

「理を曲げる程の力を持つ存在ってのはな、色々と制約に縛られてんだ。試練だってそうほいほいと試せるもんでもないし、一度出た結果には手を出せねえ。」

解ったような、解らないような顔でリュウキが首をひねっていると、シロが僅かに目を細める。

三人の視線の先には、もう既に言葉を無くした子供が、生気をなくした瞳でこちらを見つめていた。

リュウキは、子供の最後の一欠片が崩れるまで、その金色の瞳を逸らすことはなかった。

「先に帰る。」

子供が消え去った場所をしばらく無言で見つめていると、溜息混じりのどこか疲れたような声で、シロがぼそりと呟いた。

先ほどまでこの真っ白な空間を支配していたものも消え、二人と一匹を包むのは現実にはあり得ないほどの静寂だ。

未だ身を寄せ合ったままのリユウキとシンは、シロの呟きに促されるように真珠色の騰蛇に視線を向けた。

「ちょっと待て、私たちも帰るぞ。」

シロの呟きに、何を言っているんだとばかりに眉を寄せながら言ったのはリユウキだ。

彼女の言葉を聞いたシロが、小さな金目できょろりとシンを見つめ、再びリユウキへ視線を戻す。

「お前はちょっと話してこい。」

「は？」

言いながら、シロがくるりと身を翻す。

言葉を受けたリユウキは、意味が解らないとばかりに首を傾げているが、シロは構うことなく上方の空間を仰いだ。

「あ、こら！シロ！！」

途端、背景に吞まれるように消えていくシロに、シンから身を離れたリユウキが焦ったように手を伸ばすも、彼女の手はシロに届かな

かった。

ぐっと空気を握り込むように丸めた拳を見つめ、溜息を吐く。

「戻り方は判るのか？」

そんな彼女の背後から声を掛けたのはシンだ。

彼はゆっくりとリュウキに近づくと、シロの動きを辿るように上方を見上げた。

再び溜息を吐いたりリュウキが、背後のシンを振り返る。

「ああ、大丈夫だ……多分。」

「……多分か。」

「大丈夫だ。」

曖昧な言い草にシンが眉を顰めるも、次いで言い直したリュウキをしばらく訝しげに見つめると、自分にはどうしようもないと思ったのか納得したように小さく頷く。

「まあ、お前の目付役にもらったせつかくの好機だ。ここらで一つ確認しておこう。」

そのまま腕を組んで呟くと、リュウキを見据えてにやりと笑った。

どうやら彼には、シロが二人を残した意味が解っているらしい。リュウキはどこか得心がいかないとはかりに眉を顰めた。

「何を企んでるんだ？」

訝しげに目を細めたリュウキがシンを見上げる。

「いや、な。」

にやり。

「…なんなんだ。気持ちの悪い奴だな。」

低い呟きは心からの言葉だろう。しかし、シンの笑みは変わらなかつた。

「まさか、俺の腕も言葉も素直に受け入れてくれるとはな。」

リュウキの顔が、更に訝しげに歪む。

しかし、シンはそれをものともせず、己を見上げるリュウキの白い頬にそつと掌を添えた。

彼女は全く拒まない。

翡翠の眼が僅かに細められ、がらりと雰囲気を変えたシンが柔らかな微笑を浮かべる。

突然の変化に、リュウキが僅かに身動いだ。

「…どうした、頭でも打ったか？」

照れ隠しなのか、本当に気付いていないだけなのか。

おそらく後者で雰囲気に含まれているだけなのだろう、僅かに頬を染めたリュウキに、シンが小さく笑った。

吐息で笑う彼を見たリュウキが、慣れない雰囲気に我慢できず、頬を赤く染めたままシンを睨み上げる。

「…いつたい何なんだ！！言いたいことがあるなら言え！！」

彼女にとってはむず痒くて仕方ない空気を払うように、頭を振って頬に添えられたシンの手から逃れながら、リュウキが喚く。

そのまま距離を取ろうと身を引いたリュウキを、しかしシンは逃すことなく両の腕で捕らえた。

驚いて身動ぐリュウキに構わず、シンが逞しい腕を彼女の小さな背に回して一気に己の方へと引き寄せる。

思わぬ方向に引かれたリュウキが体勢を崩すと、そのまま前に傾ぐ勢いでぼすつと音を立ててシンの腕の中へと収まった。

あまりのことに状況が理解できていないのか、動きを止めたリュウキは目を瞬かせるばかりだ。

しかし、身を包む熱とはつきりと聞こえる鼓動に、己の状況を理解する。

途端、彼女の顔は真っ赤に染まり、慌てたように身を振りながらシンの胸に両手をつけて力を入れた。

しかし、身体と身体に僅かな空間はできるものの、己の身体を抱き込む腕はびくともしない。

「シン！！この馬鹿離せ！！」

「嫌だ。」

「嫌じゃない！！子供かつ！！」

「さつきは大人しく抱かれてただろうが。」

「抱っ！？阿呆がつ！！変な言い方をするな！！ちよつと手を借りてただけだ！！」

「阿呆はお前だ。あれだけしっかり抱いて…」

「だから変な言い方をするな！！それにしっかり拒否しただろう！！」

頭突きで。

そう叫ぶリュウキに、痛みを思い出したのか、シンが僅かに眉を顰める。

「…あれは単に苦しかったただけだろうか？」

「むっ。。。」

「その後、力を加減したらすっかり受け入れていたではないか。」

「あっあれはっ…お前がおかしいから…っていうか、お前が馬鹿力で押さえ込んだんじゃないか!!」

喚き散らすリュウキの顔は既に真っ赤だ。

「おかしいとは何だ、おかしいとは。俺は本気で心配したんだぞ。」

抱き込まれたまま、ぐいっとな顔だけ離され、今度は顔を上げたシンが身体を密着させたまま、リュウキを覗き込むように視線を合わせた。

彼の表情はありありと不満を表し、その翡翠の瞳には確かな熱が浮かんでいた。

それを至近距離で見せつけられたリュウキは、普段の彼女からは考えられないほど顔を真っ赤に染めて、シンの視線から逃れるようにおどおどと視線を彷徨わせている。

先ほどの言い合いで取り戻しかけていた勢いを削がれたリュウキが、所在なさに身動いだ。

「リュウキ。」

「……。」

「リュウキ、こっちを見る。」

いつもならば軽く突っぱねることができはずなのに、有無を言わせぬシンの言葉に抵抗できず、リュウキがゆっくりとシンに視線を戻す。

不安を宿す金の瞳がゆらりと揺らいた。

「リュウキ。俺はお前に、家族になってくれ、そう言ったな。」

静かに、しかし確かな強さを含んだ声が、真っ直ぐにリュウキの心に届く。

まるで一言一言が質量を持って、己の心に降り積もっていくような錯覚に、リュウキが小さく身動きながらシンの言葉に頷いた。それを確認したシンが小さく笑みを浮かべる。

「俺はな、リュウキ。」

ゆつくりと、言葉を選びながら告げるシンの顔から笑みが消え去る。動揺するリュウキの目前には、強く何かを訴えるような瞳で真摯に彼女を見つめるシンがいた。

「俺は、お前の父にも、兄にもなる気はない。」

その言葉を受けたリュウキが、僅かに眉を顰める。

彼女の金の瞳には、明らかな落胆の色が浮かんでいた。それを見たシンが僅かに苦笑を浮かべる。

「そうじゃない。俺がお前の家族になりたいと言ったのは本当だ。」
「……ならば、何故？」

再びシンの顔から笑みが消える。

細めた翡翠が溢れる熱で僅かに潤んでいた。

「俺は、お前の伴侶になりたい。」

言葉はしつかりと届いた。

届いた瞬間、リュウキの金色の目が大きく見開かれる。

「これから先、俺の隣で、共に歩み、私を支えてくれないか？」

しばらく瞬きも忘れたように固まっていたリュウキが、僅かに息を呑み、次いで小さく息を吐き出したかと思うと、ぐっと口を噛みしめ口を開いた。

「……それは、王として、か？」

歯切れの悪い言葉は、語尾が僅かに震えている。

「それも、ある。」

はつきりと答えたシンに、リュウキの肩が僅かに震えた。

彼女を見つめるシンからは先ほどの熱が潜み、一国を預かる冷静な王がそこにいた。

「お前は、確かに多少型破りなところもあるが、だからこそ狭い視野に囚われず、物事を広く見据えて柔軟に考えることができる。それに、身分を重視しないため、国にとって本当に必要なことやものを考えることができるし、王である私や周りの者が道を外れれば迷わず諫言することができる。」

さらに、とシンは言葉を繋ぐ。

「“私”が唯一、“俺”を見せることのできる女であり、生まれて初めて俺が手も足も出なかった女だ。」

突然、にやりと笑ったシンに、僅かに沈んでいたリュウキが目を瞬かせた。

きよとん、とまるで真つ新な子供のようにシンを見上げる。

シンが再び瞳に熱を宿して、解いた片手でそつとリュウキの頬を包んだ。

「愛している。」

吐息の掛かる距離で、僅かに掠れた声で、男が囁く。

「国のためだとか、王としてだとか、本音を言えばそんなことはどうでもよくなるほど、俺はお前が欲しいのだ。」

言葉が確かな熱を持って心に堕ちた瞬間、口を開く間もなく、リュウキの唇をシンのそれが塞いだ。

シン 12 【完】

「……………のか？」

「……………だ。」

頭上を飛び交う声に、リュウキは僅かに眉を顰めた。

そんなに小さな声で話している訳でもないのだが、どうやら意識がはつきりしていないらしい彼女には、彼らの声はまるで水の中から聞いているかのようにぼんやりと聞こえる。

「……………いいはずだろ？」

「……………にかく、待ちましよう。」

彼女にとってはとても聞き覚えのある声。

それは、覚醒とともに次第に意味を成す言葉としてリュウキの耳に届く。

「本当に大丈夫なのか？」

「シロが大丈夫だと言うのですから、大丈夫なのでしょう。」

なおも飛び交う声に導かれるように、真っ暗な視界に刺すような光の筋が現れる。

僅かな痛みを伴うそれは、鉛のように重い頭には堪えたが、リュウキはそれらを振り払うように腹に力を入れて閉じていた眼をゆっくりと開いた。

途端、飛び込んでくる光の眩しさに眉を顰める。

声のする方へ頭をずらすと、ぼんやりと滲む視界に人影が二つ見え

た。

それと同時に、隣からもぞりと何かが動く気配がする。

「陛下！！！」

それと同時に聞こえたのは、慌てたような声と二人がこちらへ駆け寄る音だ。

更に視線をずらすと、己の隣で寝台に伏している金色の髪が見えた。髪に隠れて表情は見えなかったが、彼から伸びる大きな手はリュウキの左手をしっかりと握りしめていた。

もぞり、と金色の頭が再び動く。

「シン！大丈夫か！？……あ。」

リュウキの隣に伏している男　ヒリュウ国王シンの肩を揺らしているのは、弟のシキである。些か乱暴な仕草でシンを揺らすシキが不意に顔を上げたと思うと、ぼんやりとそれを見つめていたリュウキとがっちりと視線がぶつかった。

無言で固まることしばし。

沈黙を破ったのは、シキの視線を辿ったコウリだった。

「リュウキ！！！」

「ぐっ！？」

喜色を浮かべて叫んだコウリは、彼女から視線を外すことなく隣のシキに体当たりをかますと、構うことなく寝台をぐるりと回りシンとは反対側の寝台の端へと近づぐ。

不意打ちを食らったシキはというと、余程強い力でぶつかられたらしい、脇腹を抑えながら寝台に頭を押しつけるようにして蹲っていた。

どうやらコウリの鋭い肘が、シキの鳩尾を突いたらしい。

そんなことはどうでも良いのか、僅かに眉を垂れて笑顔を浮かべたコウリが、寝台に腰掛けながらリュウキの顔を覗き込んできた。

「リュウキ、どこか痛むところや苦しいところはありますか？」

そつと頬に添えられた手は、ひんやりと冷たい。

リュウキは気持ちよさそうに目を細めると、コウリを見上げてゆるりと首を振った。

「いや、無い。大丈夫。」

「そうですか。よかったです。」

次いで、コウリが顔を上げ、リュウキを超えてシンの方へと視線を向ける。

つられるようにリュウキもそちらへ顔を向けると、シンが片手で頭を押さえながらゆっくりと身を起こしていた。

「陛下。」

「……ああ、大事ない。」

こぼれ落ちる金の髪をかき上げ、振り返ったシンが応える。

そのまま己の手を見下ろし、掌の中にある細く小さな手を見つめると、ゆっくりと視線をリュウキの顔へと向けた。

「……戻ってきたな。」

彼女の金色の目とぶつかった瞬間、シンの顔に柔らかな笑みが浮かぶ。

手をしっかりと繋いだまま、のそりと身をずらしてリュウキの顔を

覗き込むと、反対側の手で愛しむように彼女の黒髪を梳いた。途端、リュウキの顔に朱が走る。

じっと見つめ合う二人を目にしたコウリが、しばらくの間彼らの顔を見比べると、そのまま小さく溜息を吐いて、寝台から立ち上がった。

「…お飲み物はこちらに置いておきますね。」

ぼそりと告げられた言葉に、シンがちらりと目を寄越す。

寝台の横にある台の上の水差しを確認すると、彼は小さく頷き再びリュウキへと視線を戻した。

その反応に、再びコウリが溜息を零すと、彼は僅かな衣擦れの音を残して踵を返す。

寝台をぐるりと回り、未だ蹲るシキに近づくと、寝台に背を預けて座り込んでいる彼を見下ろした。

立てた膝に肘をつき、頬を支えるシキの顔には、二人が無事だったことへの安堵と、甘さを含む彼らの雰囲気への不満がありありと浮かんでいる。

相反する二つの感情で、変な表情になっているシキに、コウリが苦笑を浮かべると、そのまま何も言わずに部屋の入り口へと促した。しばらく無言で蹲っていたシキが、大きな溜息と共に立ち上がる。

二人は互いに顔を見合わせ苦笑を浮かべると、何も言わずに静かに部屋を出た。

後日、全てを見守っていたシキとコウリによれば、寝台で眠っていた子供はリュウキとシンが目覚める前に霧のように消えてしまったらしい。

何事かと焦った二人が、隊務に戻ったロウを呼ぼうと部屋を出かけた瞬間、追って意識の中へと沈んでいたシロが不意に目を覚まし、問題ないと告げたのだ。

果たして、シロの言う通り、リュウキとシンはすぐに目覚めた。

「子供はどうなったんだ？」

首を傾げる男三人の疑問を代表したように、シキがぼつりと呟く。

「ここは王の執務室。」

あれからすぐに室を出た二人を追うように、寝台から降りたリュウキとシンは、事の次第を話すべく、シキとコウリ、それからロウを執務室へと招集した。

「あの子供……リュウタは、元々過去が存在。全てを断ち切ったことで、止まっていた時間が流れ込み、身体が朽ちてしまったらしい。彼の魂は管理者の支配を逃れ、輪廻の輪へ戻ったのだと、シロが言っていた。」

シキの疑問に答えたのは、事前にシロから説明を受けていたリュウキである。

彼女の静かな声に、他の四人がそれぞれの反応を返した。

小さく息を吐いたリュウキが、更に続ける。

「管理者が去り、契約も解けた今、生まれ続ける世界の歪みを正すものは何もない。」

残ったのは、世界の縮図として在るこの大陸と、その流れにより発生する歪みのみである。

贅を失った今、行き場を失った歪みをどうにかしなければならぬ。

「シロが言うには、契約自体は解けたものの、世界からこの大陸、大陸から山脈の頂へと流れる歪みの流れは今も途切れていないらしい。」

「一カ所には集まっているわけか。」

ふむ、と考え込むシンの言葉に頷き、リュウキがそれぞれを見回す。

「取り敢えず、一カ所に集まっているのなら、シロがいる限り私たちがそこへ赴き、その都度浄化することはできる。」

「…時間稼ぎはできるといふことですね。」

「そう。これはあくまで時間稼ぎ。私もシロも永遠に在ることはできない。」

「充分です。必ずや、良い方法を見つけ出してみせましょう。」

返したのは口ウだった。

彼の紫暗の瞳には、強い意志が宿っている。

それを見たシンが深く頷き、ぐるりと皆を見回して最後にリュウキを見つめた。

「我らは独りではない。孤独ではない。皆で知恵を出し合い、世界、引いてはこのヒリュウを守っていく。」

王の言葉に、その場にいた全員が、笑みを浮かべてしっかりと頷い

た。

シン 12 【完】（後書き）

シン編はこれで完結です。

ここまでお付き合い頂き、本当にありがとうございました。

個人に分かれてから意外と長くなってしまい、自分の文章力の無さに涙が出てきそうです。。。

ここから先は、他メンバーをUPしつつ、次のお話に移ろうと思います。

よろしければ、このままお付き合い頂ければ幸いです！

シキ 1

「ロウ！」

突然目の前で痙攣を始めたリュウキに、シキは声を上げながら咄嗟に寝台に横たわる細い身体を抱き起こしていた。

上官の声に反射的に反応したロウが、素早くシキの腕の中のリュウキに駆け寄り、何事かを呟いて白い額に掌をかざす。

びくり、びくりと痙攣を繰り返すリュウキの腕は、だらりと垂れ下がりにながらも子供の小さな手を掴んだままだった。

「何があつた!？」

どこか焦つたような王の声に、しかしロウは応えない。

彼の額にはじんわりと汗がにじんでいた。

王と宰相はロウを咎めることなく、そのまま様子を見守っている。

シキはまるで何かから守るように、リュウキの身体を支える腕に力を込めた。

しばらく目を閉じていたロウが、ゆっくりと目を開く。

紫暗の瞳には焦りの色が浮かんでいた。

「どうやら、何者かに干渉されたようです。」

「大丈夫なのか!？」

必死なシキの叫びに、シンとコウリも同じ気持ちなのか、真摯な目をロウに向ける。

「このままでは、危険です。意識が引きずられ戻れなくなってしまえば、身体がもたない。」

「どついつことだ？」

「廃人になります。」

ロウの言葉に三人が息を呑む。

「何か手はないのですか？」

呟いたのは、コウリだ。ロウは僅かに口を嚙んだ後、苦い物でも飲み込むように顔を歪ませて口を開いた。

「…リュウキ様の意識に潜り、連れ戻すことができればあるいは…しかし、かなり危険です。」

混濁し、何者かに干渉を受けている意識に潜れば、もう一人廃人を出してしまうだけになる可能性が高い。

余程強い意志と絆を持った者でなければ成しえないことだろう。

「俺が潜る。」

しかし、ロウの言葉を聞いた瞬間、迷いなく声を上げたのは腕の中のリュウキを見据えたままのシキだった。

「いいですか、意識が繋がっている間は、兎に角考えることを止めないでください。」

強く己を保つのが、引きずられないための有効手段。

紫暗の目を細めながら、シキの瞳を強く見つめて確認するロウに、シキは大きく頷いた。

「シキ様、本当に大丈夫ですか？」

どこか不安げに問うのはコウリだ。

その横では兄のシンも険しい目でシキを見つめていた。

「おう、大丈夫だ。リュウキは俺が、必ず連れ戻す。」

特に理由のない自信ではあったが、ここ一番というところでシキが放つ言葉が絶対であることは、この場の誰もが知っている。

彼の言葉を聞いた三人の目が、僅かに緩んだ気がした。

それを見たシキも、再度大丈夫だというように大きく頷き、笑みを浮かべる。

「では、参ります。」

その言葉を皮切りに、ロウが小さく何かを呟き始めた。

かくん、と身体を残して意識が落ちる感覚に、ひどく目眩を感じな

がら、シキはリュウキの事だけを思っていた。
彼女を連れ戻す。
目的はそれだけ。

強く、強く、それだけを思い続けなければならないのだ。

しばらく身を襲つ浮遊感に僅かに眉を顰めながら、ゆっくりと灰色の瞳を開くと、そこには一面真っ白な空間が広がっていた。

「…くそっ…離せっ!!」

一瞬、見たこともないような世界に気を取られながらも、焦ったように響いたその声にシキははっと身を強ばらせた。

次いで、反射的に声のする方向へ踵を返すと、そう遠くない場所でリュウキが必死に何かから逃れようと身を擦らせている。

そのふくよかな胸には、背後から伸びた白い小さな手がずぶりと沈み、その衝撃のせいかわ女の身体がびくりと弾んだのが見えた。

細い身体が大きく仰け反り、勢いで伏せていたリュウキの顔が正面を向く。

同時に、彼女の金の瞳とシキの灰色の瞳が交差した。

「リュウキ!!」

シキは目の前の異常な光景に焦りながら、ぐつと足に力を入れて大きく跳躍しつつ、必死に彼女に向かって腕を伸ばした。

シキ 2

掴んだ感触は確かにあった。

あつたにも関わらず、見下ろした先の己の手には何も残っていないかった。

「くそっ!!」

大きく舌打ちしたシキは、悔しさに顔を歪ませ、大地を蹴る。

が、一呼吸の後開いた目には、確かな理性が宿っていた。

短気短気とは言われるが、これでもシキは一国の軍を統べる大將軍である。

窮地に陥った際、研ぎ澄まされる武官としての本能は国一のものだ。今一番避けるべき事は、冷静さを失うこと。

己の目的はリュウキを連れ戻すことなのだ。

シキはすぐに意識を切り替え、周囲を探るべく辺りを見渡した。

どこか見覚えのある風景に、シキは僅かに眉を寄せた。

今よりもずっと荒んではいるものの、それはヒリュウ国の外れ、ホウとの国境にある海に近いカザという名の町に似ている。

確か、現在は豊富な海からの資源とホウとの交易で、城下に負けぬほど賑わっていたはずだ。

しかし、まだ日が高いにも関わらず、人の疎らな町には活気が無く、彼らの衣服や所々崩れて黒ずんだ建物を見れば、道や町並みこそ似ているものの、まったく別の町のようにだった。

「いったい、どういうことだ？」

警戒しながらも、呆然と周りを見回しながらシキが歩く。

やはり、どこからどうみてもカザの町のようにだが、その情景はまさに数年前の戦に荒れた様のような。

顔にありありと疑問を浮かべたままシキが先へと進んでいると、彼の進行方向から一人二人と、慌てたように足を纏れさせながら人が駆けてきた。

何かから逃げるような動作に、眉を顰めたシキが、彼らに逆らうのも構わず駆けだした。

キイン

それは耳慣れた金属音。

剣と剣とがぶつかり合う甲高い音に、シキは先ほどの人々が争いごとから逃げてきたのだと知った。

シキの目にも土埃を上げながら剣を振る傭兵と、それを取り囲むように剣を構える大勢の男たちの姿が見える。

遠目にも、その体格差がはっきりと判るくらい、傭兵は小柄だったが、交互に襲いかかる男たちを捌く動きは、並の剣士のものではな

かった。

おそらく我流なのだろう、全身のバネを使った動きと、小柄な体格を生かした瞬発力で、己よりも大きな男たちを次から次に地に沈めていく。

どこか精錬された舞うような、その見覚えのある動きに、シキは大きく目を見開いた。

「あなた！突っ立ってないでさっさと逃げないと巻き込まれるよ！」

繰り広げられる剣劇に、しばしの間目を奪われていたシキは、突然腕を引かれる感覚に、はっと肩を強ばらせた。

見れば、恰幅の良い中年の女性が、焦ったような表情でシキを見上げている。

ぐいぐいと無遠慮に彼の腕を引きながら、女は確認するように背後を振り返った。

「ほら！何してんだい！！」

「あっ、いや、俺に構うな。さっさと逃げてくれ。」

「何を言っただい！知らない身なりして、早く逃げないとあいつらに身包み剥がされても知らないよ！！」

「あいつら？」

「あいつらはあいつらさ！あの盗賊どもだよ！今は流れの傭兵さんが食い止めてくれてるけど、あれだけ囲まれちゃ……。」

「……見捨てるのか？」

「は？」

ぼそりと呟いた声は、平常心を失いつつある女の耳には届かなかつたらしい。

「いや、何でもない。俺は大丈夫だ。構わずに行け。」

にべもなく言い捨てられた言葉に、女は眉を寄せるとシキの腕から手を離れた。

「そうかい！おっ死んでもしらないからねっ！！」

吐き捨てるように喚いた女が、踵を返して駆けていく。

それを何とも言えない目で見つめながらも、シキは彼女とは逆の方
向へ足を踏み出した。

見据えるのは目の前の傭兵。

細く煌めくサーベルを振り回す傭兵は、遠目にも判るほど黒い髪を
靡かせながら、白い肌を真っ赤な血に染めて戦っていた。

シキ 3

シキは強い。

安堵の滲む笑顔で告げられた言葉の真意は、今でも酌み取れずにいる。

∴シキは、強い。

何かを噛みしめるように再度呟いた彼女の目には、後悔と悲しみが見えた気がした。

考えるより先に、身体が動いていた。

人数を生かして、小さな身体を囲むようににじり寄っていた男たちの一人を蹴飛ばして、包囲の檻に穴を開ける。

未だ無心に剣を振るい続ける小柄な傭兵に加勢しようと、常に腰から下げている剣に手を伸ばす。

しかし、そこには在るはずのものがなく、シキの手は空を掴んだ。

「ちつ…面倒臭え!!」

軽く舌打ちしたシキが、それでも怯むことなく切り込んできた盗賊の剣先を紙一重で避けて身を返す。そのまま大きすぎる動きを御しきれず、前方に傾いだ男の腕を取って、流れるような動作で腹に膝を入れると、男が潰れた蛙のような声を上げて蹲った。

シキは男の手から、少々薄汚れた大振りの剣をもぎ取ると、そのまま返す剣首で男のこめかみを打つ。

強かに急所を打たれた男は、白目をむきながらもんどり打って地に伏した。

シキはそこで留まることなく、踵を返しながらその遠心力を利用して剣を振るう。

すると、今にもシキに襲いかかるうとしていた二人の男の巨躯が、まるで人形のようにまとめて薙ぎ払われた。

完全に崩れた包囲に、シキと対峙していた残りの盗賊が動揺の色を浮かべる。

シキはその隙を見逃すことなく、勢いそのまま素早い蹴りを繰り出した。大きな身体から放たれる強烈な蹴りに、固まっていた数人が、団子のように転がる。

「戦略も糞もねえ馬鹿共め!! さつさと退け!!」

まるで獅子の咆哮を思わせる声。

地に転がった数人は、その一喝のみでシキの気迫に呑まれたのか、慌てて身を返すと四つん這いの体勢のまま、絡まるように逃げ出した。

その咆哮で、傭兵を相手にしていた男たちもシキの存在に気付いた

らしい、傭兵自身も盗賊に刃を向け警戒の色を浮かべたまま、ちらりとシキに意識を向けてきた。
ほんの一瞬、傭兵の金色の瞳とシキの灰色の瞳がぶつかった。

まるで戦神のようなシキの豪剣と、戦姫のような傭兵の閃剣。
ただでさえ、見かけによらず腕の立つ傭兵に苦戦していた盗賊たちは、思わぬ助太刀に瞬く間に体勢を崩し、ついにはばらばらと散るように逃げ出した。

シキは追い打ちを掛けることはせず、また傭兵もその気は無いように、最後の一人が町の外へと消えたことを確認すると、サーベルを振るって血を振るい、所持していた布で素早く拭き取り鞘にしまった。

不意に、二人の間を柔らかな風が駆け抜ける。

風に舞うように散った黒髪に目を取られていると、傭兵　リュウキが感情の削げた氷のような表情で、シキに向き直った。
それに気付いたシキが、彼女に近づこうと一歩を踏み出す。が。
それを阻むように、硬質な金属音がリュウキの腰のサーベルから響いた。

見れば、彼女はシキをじつと見つめたまま、仕舞ったはずの腰のサーベルの柄に手を置いている。

煌めく金色の瞳には、明らかな警戒の色が浮かんでいた。

シキはこくりと息を呑む。

彼はリュウキのその表情に見覚えがあった。

否、彼が知っているものよりも、更に酷いかもしれない。

それは、シキや彼の兄である王が、初めて彼女と出会った時の表情に似ていた。
孤独に心を凍り付かせ、独り戦い続けていたリュウキを、シキは今でも覚えている。

「助太刀、感謝する。」

不意に放たれた言葉は、シキがよく知る温かな彼女の声ではなく、謝意を述べているものの、まるで生き物から放たれたものではないかのような冷たさを孕んでいた。
上手く反応できずにいるシキに構うことなく、目の前のリュウキは用は済んだとばかりに踵を返す。

「あつ…待て!!」

そんな彼女の動作に、シキが慌てて駆け寄りながら腕を伸ばした。彼の声に僅かな反応すら見せないリュウキに、シキが眉を寄せる。しかし、彼の手が彼女の肩に届く寸前、まるで計ったようにリュウキが振り向き、その勢いそのまま肩でシキの手を振り払った。
偶然ではない、明らかな拒絶だ。

「まだ何か？」

にべもない言葉に、シキの口は呆然と半開きのままで。
何も答えないシキに、僅かに苛立ったように目を細めたリュウキは、そのまま再び踵を返して足を進める。

「待て！リュウキ!!」

慌てて叫んだシキの言葉に、リュウキが零れんばかりに目を見開い

た。

ふわり、と風が吹いた。

もし他に人が見ていれば、単純にそう思っただろう。

それほど軽やかに、素早く、リュウキは黒髪を靡かせながら、流れるような動作でサーベルの切っ先をシキの首筋に向けていた。

対するシキはというと、剣を放たれたことで冷静さを取り戻したのか、先ほどの対応が嘘のように冷静に対処している。

彼は不意打ちを受けたにもかかわらず、常人には見えぬ早さで剣を抜いたリュウキの動きを読み、微動だにせず立ちつくしていた。

その表情は静かに凧いで、真っ直ぐに目の前の女に据えられている。

対するリュウキは、牽制のみの動きと見切られ、驚いたのか僅かに目を見開いていた。

シキ 4

切っ先を男の喉に突きつけたまま、リュウキはすいと目だけでシキの全身を探るように見た。

彼女の顔からは、先ほど一瞬だけ見せた驚きの表情は消え去り、今はただ無表情に硬質な人形のような様相で微動だにせず剣を構えている。

「お前は、何者だ？」

懐疑と警戒。

細めた眼の奥で、熱を無くした金色の輝きだけが二つの感情を表していた。

シキはその様子に眉を寄せ、まるで痛みに耐えるようにぐっと唇を噛む。

彼は先ほどから感じていた違和を、漸く飲み込んだのだ。

シキが感じた違和。

それは、目の前の彼女が、己の知るリュウキではなく、彼女もまた己を知らないのだという事実。

否、確かに彼女はリュウキに間違いない。この外見で別の人間だとは思えないからだ。

しかし、俄には信じがたいことだが、おそらく目の前のリュウキは、シキと出会う以前の、過去のリュウキなのだろう。

カザの町の様子からも、この世界自体がシキが現在生きる時よりも過去のものだ、彼に知らしめている。

何故そんなことになったのか判らないが、そうとしか思えなかった。

そこまで考えたシキの顔に焦りの色が浮かぶ。

術師ではない彼には、どう対処すれば良いか到底思い浮かばなかった。

明らかにシキの専門外だ。

「答える気がないのか…それとも、何か疚しいことでもあるのか。」

低く、低く、まるで獣が威嚇するように、リュウキが問いとも独り言ともとれる言葉を零す。

それを聞いたシキが、思考の海から一気に浮上してはっと肩を揺らした。

慌ててリュウキを見れば、彼女は先ほどと変わらずぴたりと剣先をシキの首に添えたまま、少し苛ついたように彼を睨み付けていた。

その氷のような視線に、シキが僅かに目を細める。

おそらく、そこらの傭兵や単なる兵卒ならば、彼女の視線を受けただけで凍り付き、喋る事すらできなかつただろう。しかし、シキとて一国の軍を預かる大將軍、そこは怯むことなくリュウキの鋭い金目を見返しながら、小さく息を吐いた。

「怪しい者でもないし、疚しいこともない。」

いささか固い声ではあったが、シキは迷いのない澄んだ声ではっきりと告げた。

リュウキを見据える灰色の瞳は強く輝き、真っ直ぐな眼には虚言の影すら見受けられない。

「ただ、お前と少し、話がしたいだけだ。」

そう告げるシキの様子を、体勢を変えずにしばらくの間見つめていたリュウキが、小さく溜息を吐いたと思うと、そのまま音も立てず

に隙の無い動作でゆっくりとサーベルを下ろした。

カザの町は海も近いが、内陸側には豊かな森にも面している。

隣国であるホウ国と、ヒリュウ国を跨ぐように広がるその森は、ヒリュウの心部にある森林に無い様々な種類の植物を見ることができた。

傭兵として大陸中を、たった一人、旅してきたリュウキは、野宿ですませることも多いようで、今回もカザに宿を取らずに森の一角にある小さな洞穴に、馬を繋いで根城を構えていた。

今、シキは、彼女と話をするために、リュウキと共にその洞穴へと向かっている。

どうやら、先ほどのやりとりで、一応シキが彼女に危害を加えない者として認識してくれたようだ。それでも、やはりそれは認識程度で留まっており、先に行く彼女の背からは、シキに対する明らかな警戒が見て取れた。

無造作に動きながらも、全く隙を見せないリュウキに、シキは思わず感嘆の息を吐く。

しかし、すぐに軍人として人を無意識に観察してしまっている己に気づき、彼は小さく苦笑を浮かべた。

もう殆ど職業病のようなものである。

シキは、リュウキの背に意識を向けたまま、周囲をぐるりと見回した。

国境を跨ぐこの森は、シキも何度か入ったことがある。

しかし、それも戦が終わりに、国内も落ち着いて森に人の手が入ってからのことなので、現状の木々が鬱蒼と生い茂る森の様子を見るのは初めてだった。

以前、この森に入ったときは、確かに殆ど自然のままの状態ではあったが、人が安全に通ることのできる程度の道はあつたはずである。道無き道を、迷うことなく進むリュウキは余程慣れているのか、木々を払う手つきも獣道を突き進む足取りも全くぶれが無かつた。

「この先だ。」

大きな身体を必死に縮めながらシキが小柄な背中を追っていると、突然立ち止まったりリュウキが顔だけで振り返り、ぼそりと小さく呟いた。

重なるような木々が、まるで扉を開くように割れた先。

空間を埋めるように生い茂っていた木々が嘘のように、ぼつかりと開けた空間が目の前に広がっていた。

それでも、上を仰げば高めの木々が空を覆い、開けた空間には影ができている。

まるで光の道のように陽の降りる地面を見れば、丸い葉をびっしりと広げた植物と深い色の苔が覆い尽くしていた。

リュウキは特に何を言うこともなく、そのまま前方へ足を踏み出す。彼女の進路の先には、小さな洞穴がぼつかりと口を開けていた。

洞穴の入り口にある細めの木には、彼女が繫いだのたろう芦毛の馬

が根元の柔らかかそうな草を食んでいた。

「…おい。」

観察しているうちに、少しぼーっとしてしまったらしい。

少し苛ついたようにかけられた声に、シキが慌てて小走りに彼女に続いた。

真つ暗だと思っていた洞穴は、入ってみれば薄暗いものの意外に視界が利き、しばらく周囲を見回していると目も慣れてきたようで、小さな洞穴の隅まで目視することができた。

リュウキがここを根城にしてから、そう時が経っていないらしく、またここに長く留まるつもりはないのか、洞穴の中には旅をするには些か小さめの荷物と焚き火の跡くらいしかない。

リュウキはといえば、無遠慮に洞穴を見回すシキに構わず、黙々と纏っていた外套や籠手を外すと、腰のサーベルを鞘ごと引き抜きながら焚き火跡の前に腰掛けていた。

そのまま彼女が何事か呟くと、まるで地面から沸き起こるように炎が生まれる。

リュウキの金色の瞳に、真つ赤な炎がゆらりと映り、熱を失っていた瞳が一瞬だけシキの知る彼女の太陽のような温かな瞳に見えた。

「で。」

思わず見入っていたシキが、低く呟いた彼女の声にはっと肩を揺らす。

気づけば、リュウキが訝しげにシキを見上げていた。

「あ、ああ。」

特に意味のない言葉を返しながら、シキが慌てて火を挟んだりリュウキの向かいに腰を下ろす。

彼には特に手荷物は無いが、実は先ほど盗賊から奪った剣をそのまま持っていたので、シキはそれを傍らに置いた。抜き身のまま持ち

歩くのは如何なものかとは思ったものの、いつ獣が襲ってくるか判らない森に丸腰のまま入るわけにもいかず、手放すことができなかったのだ。

それにしても、よくもまあ、抜き身の剣を持った男に背後を歩かせたものだと、シキは少しだけ不思議に思いつつ正面のリユウキを見る。

感情を殺したような瞳の彼女にしては、意外な行動に思えた。

「…何で私の名前を知っていた？」

話したいと言ったわりに、なかなか口を開かないシキに、小さく息を吐いたリユウキが警戒のじむ声で彼に問う。

対するシキはといえば、どう答えたものかと眉を寄せていた。

僅かな沈黙の後、戸惑うようにシキが口を開く。

「お前と共に戦ったことがある。」

「嘘を言つな。そんな派手な頭の男、一度見れば忘れるはずがない。」

漸く出た言葉は、にべもなく切り捨てられた。

派手な頭とは、シキの琥珀色の髪のことだろう。

兄や妹のものよりも暗いその色は、聖色である金ではないものの、珍しい色ではあるのだ。

正論で返されたシキが、ぐっと口を噛む。

「何の目的かは知らんが、虚言を吐く者に信を置くほど、私は優しくないぞ。」

ぱちぱちと、爆ぜる枯れ木が二人の間に小さな火の粉を飛ばした。

「信じられないかもしれねえが…。」

そう初めに言い置いてシキが言葉にしたのは、嘘偽りのない彼の知り得ている全ての現状だった。

ここが過去のヒリュウであり、意識の中であって現実ではないこと。己はヒリュウの第二王子であり、リュウキもまた国に仕える宰相補佐であること。

そして、二人がただの知己ではなく、シキの兄妹を含めヒリュウの家族として共に生きることを誓った間柄であること。

あまり話術が得意ではないシキがとった方法は、己の知る全てを正直にさらすことだった。

「…と、いうわけなんだが…。」

始終無言で聞いていたリュウキに、シキが探るような視線を向ける。どうやら彼女も多少混乱しているらしく、炎を映して揺らめく瞳には困惑の色が浮かんでいた。

「その話が本当なら、今私が見ているこれは、夢の中のことだとい

うのか。」

未だ困惑の表情を浮かべたまま、眉を寄せたリュウキがぼつりと咳く。

彼女は心底戸惑うように、広げた己の掌をじっと見下ろしていた。

「俄かには信じがたい…けれど。」

す、と金色の瞳が、正面の男を射抜く。

彼女のもとへ真っ直ぐに向けられた灰色の瞳からは、多少の不安が見て取れるものの、嘘を言っているようには見えなかった。

だからこそ、リュウキは戸惑う。

己の記憶も、先ほどの立ち回りで感じた肉を絶つ感触も、木々が己の肌を僅かに裂く痛みですらはつきりと残っているのに、リュウキにはこれが全て夢だとは到底思えなかった。

しかし、目の前の男が嘘を言っているようにも見えないし、些か支離滅裂なところはあったものの、彼の話の説得力を感じたのも確かだ。

だが、やはり理性とは違う部分で、リュウキの中に男の話を拒絶する自分がある。

何より、つい最近一人で生きることを決めた彼女にとって、自らの家族を主張するシキの存在は容易に受け入れられるものではなかった。

そこまで考えたところで、仕舞い込んだ感情が僅かに浮上しそうになり、リュウキは己を諫めるように静かに目を閉じる。

しばらく深い呼吸を繰り返した彼女が目を開くと、シキは何を言うこともなく、伺うように彼女を見つめていた。

再び感情を消したりユウキが、目の前のシキをしつかりと見据えて口を開く。

「百歩譲って、お前の話が全て真実だとしよう。」

告げられた言葉に、灰色の瞳が僅かな喜色を浮かべた。

「真実だとして、何故お前の手を借りねばならない？」

しかし、すぐに冷たく返された言葉を聞き、シキがぐっと顔を強張らせる。

「誰の助けもいらぬ。これが全て仕組まれたことだとしても、私は私の力で何とかする…してみせる。」

強い決意をこめた言葉は、まるで自身に言い聞かせているように聞こえた。

シキ 6

ぱちり、と焚き火が爆ぜる。

ふわりと舞った火の粉に目もくれず、二人は互いを睨むように見据えていた。

沈黙を破ったのはシキだ。

「…お前は…。」

ぐっと、奥歯を噛み締めて一度言葉を飲み込み、開いた唇から零れたのは幾分掠れた声で。

様々な感情を押し殺したような言葉は、暗い洞穴に重く響いた。

「お前はいつもそうだ。何でもかんでも自分一人で背負い込んで、周りで見てる俺たちの気持ちなんかちつとも解っちゃいねえ!!」

最後の方は殆ど叫びだった。

シキの灰色の瞳が熱を孕んでリュウキを射抜く。

対するリュウキは、金の瞳を僅かに細めると、さも不快げに眉を顰めた。

「いつも？悪いが、私の記憶にはお前の姿は無い。知らぬ人間の気持ちを量るほど、私はお優しい性格でもないんでね。」

「ああ、そうかよ!!でもなっ、お前が知らねえつつつてもこつちは三年間お前を見てきたんだ!!忘れたの一言で片付けられてたまるかっ!!」

俺たちの絆はそんな生易しいもんじゃねえ。

そう喚いたシキの言葉に、リュウキの瞳が一瞬揺らいだ。

しかし、シキがそれに気づく間もなく、リュウキが無言で立ち上がる。ふわりと揺れた黒い前髪から、暗い怒りに吞まれた金色が伺えた。ぎり、と彼女の唇から音が零れる。

「何が、絆だ。堅かろうが脆かろうが、人である限り、絆などいつかは絶える!!」

ぶるぶると握り締めた拳を震わせ放たれた言葉は、まるで血を吐くような叫びだった。

怒りと悲しみ、恨みと後悔、様々な感情を混ぜ合わせ、爆発させたような言葉に、シキが僅かに目を細める。

「絶える絆などいらぬ。枷になる絆もいらぬ。」

痛々しくて、見ていられなかった。

しかし不意に逸らした目線の先、リュウキの背後に違和感を感じたシキが眉を顰める。

彼女の身体で濃さを増した闇色の影が、ぞわりと動いた気がしたのだ。

「血の繋がりもない、ましてや記憶すらない仮初の家族などいらぬい。」

彼女が言葉を放つたび、背後の闇がぞわりと蠢く。

「私は、独りで生きてい…」

「止める!!」

最後の言葉が告げられようとした瞬間、リュウキの影から闇が這い

出した。

シキは彼女の言葉を強制的に切り落とすと、同時に素早く立ち上がり、震える拳を握ったままのリユウキの手首を取って、そのまま渾身の力を込めて彼女を引っ張る。

突然の暴挙に目を見開いたリユウキが、反射的に抵抗しようと身を引いたが、ものすごい力と勢いで引かれた身体はバランスを崩して、僅かに浮いて焚き火を飛び越えると、そのままシキの身体に倒れこんだ。

あつという間の、しかも予想外の出来事に、流石のリユウキも対処しきれず目を瞬かせる。気づけば彼女の細い身体は、すっぽりとシキの大きな腕の中に納まっていた。

身体を包む温かな体温と、苦しいくらいの圧力に、状況を理解したリユウキが、はっと身を強張らせて事の原因である男を睨み上げる。

「貴様何をつ……………」

しかし、見上げた先にあつたのは、彼女から視線を外し、リユウキが座っていた場所あたりを睨みつけるシキの真剣な顔だった。

思わずリユウキも言葉を飲み込み、怪訝な表情を浮かべてシキの視線を辿る。

そこには、火の粉を飛ばしながら爆ぜる炎と、つい先ほどまで己が腰を下ろしていた平らかな石があるのみだった。

が、男の表情の険しさに何かを感じたのだろう、リユウキも周囲に警戒するように気を張る。

その間も、シキは無言で一点を睨み続けていた。

「…おい。」

「……………」

「おい、離せ。」

「……………」

「おい！」

シキの暴拳からしばらく時間が過ぎ、それでも彼女の身体を離そうとしない男に、リュウキが苛立ったように声をかけた。
しかしシキは無言のまま動かない。

「おい！！！」

「…っ！！！」

仕方なく、焦れたリュウキが声を荒げて喚きながら、言葉と同時に自由な左手でシキの脇腹を小突いた。

細く肉の少ないリュウキの容赦ない拳が、意外とそこに入ったらしい、少し大げさに肩を揺らしたシキが痛みに呻いて片手で腹を押さえる。

と同時に、緩んだ腕から逃れるようにリュウキがシキから身を離れた。

「お前なあ…。」

どこか恨めしげにリュウキを見つめるシキに、彼女はといえども当然と言わんばかりに息を吐いて腕を組む。

「先に無体を強いたのはそちらだ。危うく火に突っ込むところだった。」

見れば、跨いだときに僅かに蹴飛ばしたのか、火のついた枝が数本散っていた。

今更気づいたように目を丸くしたシキが、次いでばつが悪そうに目を泳がせて頬を掻く。

「あー…いや、うん…確かに、今のは俺が悪かった。」

すまん、と大きな身体を前に傾ぎ誤る姿は、確かに真剣に悪いと思っ
っているようだが、見る側からすれば些か滑稽に映る。

すんなりと頭を下げたシキに、今度はリュウキが驚きに目を見開いた。

ふ、と零れたのは僅かに笑みを含んだ吐息で。

気づいたシキが少しだけ顔を上げると、目の前には小さく苦笑を浮かべたリュウキが静かにこちらを見つめていた。

リュウキはというと、巨軀を持つ男が下げた頭を僅かに持ち上げ、こちらを伺うように見上げている様に、こみ上げる笑いを何とか我慢していた。

いつの間にか、先ほどまでの重い空気が嘘のように一掃されている。小さく息を吐いたリュウキが、脱力したように頭を傾け、黒い髪をさらりとかき上げながら口を開いた。

「…もういいよ。頭、上げてくれ。」

ため息まじりの言葉に、シキが漸く頭を上げる。

「ホント、初めっから思ってたけど、変な人だな。」

未だ表情に硬さは残っていたものの、先ほどとは比べ物にならないほど態度を軟化させたリュウキに、シキがぱちぱちと目を瞬かせた。

ふう、と気を静めるように息を吐いたリュウキが、わずかに散らばった燃える木の枝を足で器用に蹴り戻していく。

その様子を無意識に目で追いながら、妙にゆるんだ場の空気に所在無さげに頂を搔いていた。

それを見たリュウキが、小さく苦笑を浮かべながら、火を超えて元々いた場所に腰を下ろす。

すると、それを見ていたシキも彼女に倣うように腰を下ろした。

ぱち、と勢いを亡くした焚き火が小さく爆ぜる。

シキは炎を見つめながら静かに口を開いた。

「リュウキ、俺は…やはりお前との絆を失いたくない。」

先ほどよりも幾分落ち着いた声に、リュウキが顔を上げてシキを見つめる。

彼女の視線を感じたのか、シキも炎からリュウキへと視線を移した。炎の光を受け刀剣のような鉄色に輝く瞳と、太陽のように煌く金色が交わる。

「今、お前の記憶からは俺たちのことは消えているかもしれない。でも、俺の中にはお前と過ごした記憶が確かにあるし、片側だけが、まだ絆は途絶えていないと思う。」

すい、とリュウキの目が細められたものの、反論の言葉は出てこなかった。

どうやらシキの話を聞くつもりらしい。

そのことに確かな安堵を感じたシキが、己の膝に肘をつくようにし

て身体の前で組んだ手にぐっと力を入れた。

「俺がいる限り、俺は絶対お前を諦めない。」

静かに放たれた言葉は、聞く者を震わせるような気迫をもってリュウキに届いた。

剣を握る者でも屈服しそうなその気迫に、しかし彼女は微動だにせず彼を見つめ返している。

しばらくそのまま、見詰め合う、というよりも睨み合っていると、リュウキが一端視線を外して小さく息を吐いた。

「……ラルダ・セルギアという傭兵を知っているか？」

脈絡もなくかけられた問いにシキが眉を顰めると、リュウキは小さく苦笑を浮かべた。

その、どこか寂しげな笑みに、男がわずかに目を見開く。

ここで口を挟むのは無粋な気がして、シキは素直に問いに答えた。

「どこかで聞いたような名だが……。」

記憶の彼方でわずかに引つかかるその名に、シキが小さな唸り声を上げながら首を傾げる。

「……竜殺しのラルダ、と言えば分かるか？」

「……！」

言葉を聞くなり、シキが目を見開いた。

竜殺しのラルダ。

少し前のことになるが、大戦が始まってすぐの頃、一部の地域で噂になっていた男を思い出す。

竜を尊ぶヒリュウで、竜を殺めるといふ凶行に及んだ流れの傭兵で、そのことはヒリュウ王城にまで報告が届いていた。

傭兵とは言っても、国がお尋ね者として指名手配していたため、シキはラルダという男を犯罪者として記憶している。

思い出したことをそのまま告げると、リュウキは不快げに眉を顰めた。

「確かにラルダは竜を殺した…でもちゃんと理由があったんだ。」

金の瞳がわずかに陰る。

揺らいだ金色の奥に、悲しみの色を見た気がした。

が、まるで知人のような言葉に、シキがはっと肩を揺らす。

「ちょっと待て、お前、竜殺しのラルダと知り合いなのか？」

「……ああ。」

これまで彼女とは色々な話をしてきたつもりだが、これについては全くの初耳だった。

「いったい何処で知り合った？何でまたそんな男と…。」

非難するような言葉に、リュウキの瞳が睨むように細められる。

「何も知らないくせに、そんな言い方はやめる。ラルダは私の恩人だ。」

「恩人？」

「見知らぬ世界に飛ばされて、貴族の犬に成り下がるしかなかった

私を、あの薄汚れた檻から連れ出し剣を覚えてくれたのがラルダだ。

「わざわざ荒げた声で告げられた言葉に、シキが目を見開いた。

リュウキは悔しげに唇を噛み締めながら視線を落とすと、鋭い視線を炎に向けたまま更に続けた。

「ラルダは確かに、無口で、無愛想で、みんなから恐がられていたけど、本当はすごく優しく、情に厚い奴なんだ。竜を殺したのだから、狂った竜から村を守るためだったと聞いている。」

初めて知る事柄に、シキは言葉もない。

まるで信じられないような話だったが、リュウキの性格をよく知るシキには、彼女の言葉というだけで、信じるに値するもののように思えた。

実は以前、シキはリュウキにたずねたことがある。

この世界に来て、ヒリュウで自分たちと出会うまで、いったいどうやって生活し、傭兵として戦えるだけの力を手に入れたのか、と。

ある人にお世話になった、それだけ告げた彼女の瞳は、先ほど目の前のリュウキが浮かべたものと同じ悲しみが浮かんでいた。

その痛々しい表情に、いつもならば更に問いかけるシキが言葉を失い、その後もそのことだけは彼女の口から語られることはなかったことを覚えている。

言葉巧みな兄に尋ねても、同様にそのことだけが分からず仕舞いだっただ。

ずっと気になっただけはいたものの、彼女の傷を抉ってまで知りたいとは思っていなかった二人は、いつかリュウキが話したくなるときまで待とうと決めたのだ。

ただ、あの悲しげな瞳だけが、ずっと気がかりだった。

「その、ラルダという男と旅をしてきたのか？」

「そうだ。ラルダは私の師であり、父のような存在だった。」

「……その男は今……」

「……死んだ。」

「……病か？」

ぐっとリュウキの顔が何かを堪えるように歪む。
まるで泣いているようだ、シキは思った。

「……ころされた。」

ぼつり、と低く零れた声。

「私を飼っていた貴族に、殺された。」

握り締めた彼女の拳が、その心を表すようにぶるぶると震えていた。
ああ、とシキが心で小さく呻く。

これが、彼女の傷だったのだ。

「今もはっきりと覚えている。」

己を守るように抱きこむ大きな身体。

その温もりとともに伝わる、彼の肉を切り裂く断続的な振動。

傭兵として鍛えた鋼の筋肉を、非力な貴族の放つ剣ごときが貫通することはなかったけれど、無抵抗に剣を受ける男の背は、無残に切

り刻まれていった。

「離せ、と、何度も叫んだ。」

それでも、男　ラルダは無言でリュウキを庇い続けた。

「忘れもしない、あの男っ…卑怯な手で私を捕らえ鎖で雁字搦めに
して、逃亡を手助けしたラルダに報復しようと、私を使っておびき
寄せた！！」

目を閉じれば、いつも聞こえる男の声。

狂人と思えない男の笑い声は、リュウキの視界が闇に落ちる度、
彼女を苦しめた。

かっと思開いた金色の瞳には、怒りだけではない彼女の心に刺さる
様々な感情が浮かんでいた。

大事な人を殺した男への憎しみ。

そんな男の罫にはまり、見す見す大事な人を殺された己への怒り。
最期まで彼女のために生き、彼女のために命を盾にしたラルダへの
悲しみ。

その全てが、未だ血を流し続ける彼女の心の傷を抉り続けている。

それでも、彼女は泣かない。

言葉の合間で噛み締めていた唇からは、わずかに血がにじんでいた。

「ラルダを殺したあの男が憎い！ラルダを守れなかった己が憎い！
私なんかのために命を捨てたラルダが…っ！！」

からん、と枝が転がる音がすると同時に、彼女の身体を再びシキの
腕が拘束していた。

「……はなせ。」

「駄目だ。」

「離せっ!」

二度目の狼藉ということと、これまでの感情の昂りからか、リュウキの口から女の声とは思えないような凄みを持った声が上がった。それ同時に、太い腕に拘束された細い身体が渾身の力で抵抗してくる。

しかし、シキは彼女を押さえ込むようにぐっと腕に力を入れると、リュウキの身体を逃がさないよう更に抱きこんだ。

女性にしては強すぎるほどの力を持つリュウキだったが、さすがにシキが相手では彼の腕をびくりとも動かすことができない。

その事実、リュウキの顔が悔しげに歪んだ。

全身で暴れたためか、彼女の頬はわずかに上気している。

「離せと、言っている!」

まるで野生の獣のような唸り声。

腕の中で殺気すら纏いはじめた女に、しかしシキは怯むことなく彼女を拘束したまま、こちらを睨みつける金色を見下ろした。

「…そんなになっても、まだ泣かねえんだな。」

射殺すように睨み付ける金色の奥に見えたのは、未だに血を流し続けるリュウキの心。

まるで手負いの獣のようだとシキは思った。

受けた傷を心の深い部分で抱き込みながら、全てを拒否して孤独の内に立つ獣。

痛みを忘れ去ることを恐れ、癒すどころか自ら傷を広げて気持ちを繋ごうとしているように思えた。

彼女は気づいているのだろうか。その行為が、自身の心を、命を削る愚行だということに。

否、おそらく心のどこかで気づいているのだろう。

だからこそ、今シキの言葉を心の内に入れぬよう、彼女は必死に身を固めて彼を睨みつけている。

気を抜けば、途端に喉笛を食いちぎられそうな殺気を受けながら、それでもシキは、己の掌にすっぽりと納まる白い頬をそつと撫でた。同時に、リュウキの肩がぴくりと跳ね、シキの手から逃れるように顔を背ける。

しかしシキはそれを許さず、片腕でしっかりと彼女の身体を抱きこんだまま、逃げるリュウキの細い顎を些か強引に捕らえた。

抵抗をものともしないシキの力に、リュウキの顔が悔しげに歪む。

「泣くのが、恐いか？」

「うるさい。」

「涙とともに、想いを失うことが恐いのか？」

「黙れ！！」

金色の瞳が、怒りに燃えている。

ゆらゆらと、まるで陽炎のように揺れる眼の奥に、シキは確かな恐怖の色を見た。

再びリュウキの顔に力が入り、シキの目から逃れようと、小さな顔が横を向きかける。

しかし、顎にかかった男の手が、それを許さなかった。ぐっと両者の顔が近づく。シキの灰色の瞳が、リュウキの金色を捕らえるように射抜いた。

「リュウキ、弱さを恐れるな。」

「…っ！…わたしはっ」

びくり、と彼女の身体が震える。

「俺たちは人間だ。どんなに身体を鍛えても、どんなに心を殺しても、弱さを無くすことはできない。」

「そんなことっ…！」

解っている。

痛いほど、狂おしいほどに解っているのだ。

しかし、弱さを認め、心の嘆きを受け入れれば、もう一人で立つことすらできないのではないかとリュウキは思う。

それに、シキが言つたとおり、嘆き悲しむことで、あの男への憎しみや、ラルダを想つ気持ちが無くなるのが何より恐ろしかった。

どん、とシキの胸に、リュウキの拳がぶつかる。

唇を噛み締めて己を睨みつける彼女は、まるで行き場を失くした子供のよう不安を浮かべ、今にも泣き出しそうに顔を歪めていた。

「受け入れろ、リュウキ。お前の弱さも、お前の傷も。」

一瞬緩んだ隙を抜け、顔を固定していたシキの手から逃れたリュウキが、言葉から逃れるように俯く。

「リュウキ。」

諭すように呼ばれ、リュウキが顔を俯けたままゆるゆると首を左右に振った。

「リュウキ！」

少し強めに名を呼べば、更に強く拒否を示すように彼女は首を振った。

黒く艶やかな髪がわずかに乱れてシキの腕を打つ。

リュウキの身体を包む腕が動き、片方が彼女の後頭部に回ると、そのまま強い力で抱き寄せられた。

「俺がいる！」

耳元に直接叩き込まれるような声に、びくりとリュウキの肩が跳ねる。

「お前が全てを受け入れて、痛みと悲しみに崩れても、俺がお前を守る。」

きつい抱擁は、男の鼓動も、熱も、想いさえもぶつけられるようで。

「お前がまた立ち上がるまで、俺が必ず守るから！」

守る。

その言葉を聞いた瞬間、リュウキが大きく目を見開く。

次いでくしゃりと顔を歪めた彼女の目にはつつすらと涙が浮かんでいた。

リュウキがシキの肩に額を押し付けたまま、更にゆるゆると首を振る。

「……やめろ…やめてくれ…。」

「リュウキ？」

「私を守るなんて、言うな。」

零れた声は弱弱しく、ところどころ掠れ震えていた。

「……ラルダも、そう言って…死んだんだ。言葉のとおり、私を守って死んだんだ!!」

ずっと抱えていた想い。

それらはいつも、一人生き残ったリュウキを責め続けた。叫びを受けたシキが、更に腕の力を強める。

「俺は死なない。」

「そんなことつ」

「分かる!!絶対に、死なない!!」

シキがリュウキの小さな肩を両手で掴み、がばりと顔を上げた。

「約束だ。俺は、絶対に、死なない。」

灰色の瞳で見据えた金色から、ぽろりと宝石のような雫が零れた。

シキ 9

ぴしり、と、どこかでヒビが入るような音がした。

呆然と己を見上げる金色の瞳から零れた小さな一滴を、剣を握る男の無骨な指がそつと拭う。

まるで壊れ物を扱っているような錯覚に、シキは己の指がわずかに震えるのを感じた。

指先に触れた肌は、ほんのり温かく、柔らかい。

こちらを見つめているはずの金色は、先ほどからゆらゆらと焦点を定めず、至近距離にいるはずの己でさえ目に入っていないようで、シキはわずかに眉を顰めた。

それでも、彼女の意識を繋ぎ止めるように、細い肩を掴む手に力を入れて見つめていると、不意に目の前の小さな唇がぴくりと動いた。

「……は……」

もう殆ど吐息のような声は、シキにすら聞き取れない。

彼は言葉を聞き取るうと更に顔を寄せた。

「……シキ、は……」

「リュウキ？」

突然リュウキの口から零れた己の名に、シキははっと肩を揺らす。

「…シキは、強い…？」

それは過去、彼が彼女にかけられた言葉。

己の知る彼女と、目の前のリュウキが重なる。

あの時と違って、それは問いかけるような言葉だったけれど。

「シキは、強い？」

行き場を失い、宙を彷徨っていた視線が、少しずつシキに定まった。うつすらと涙の浮かぶ金色に、不安と期待が混じっていた。

それらを認識した瞬間、シキはくしゃりと顔をゆがめて、力強く頷く。

「ああ、そうだ。俺は、強い。お前よりも、…ラルダよりも、ずっと強い！！」

だから、死なない。

その言葉がリュウキの耳に届いた瞬間、二人を包んでいた洞穴が、まるで薄いガラスのように音を立てて爆ぜ崩れた。

「これは……？」

彼女の肩を掴んだまま、突然起こったそれにシキが呆然と周りを見回す。

つい今しがたまでいたはずの洞穴がきれいさっぱり消え去り、代わりに現れたのはどこまでも真っ白な空間だった。

それは、シキがリュウキの意識に沈んですぐの景色に似ている、否、似ているというより最初の場所そのものだろう。

しばらく呆然と周囲を見回していたシキだが、不意に思い出したようにはっと肩を揺らして正面のリュウキに目を向けた。

いつの間にか顔を俯けていた彼女の顔を、覗き込むように首を傾ける。

「おい、リュウキ？大丈夫か？」

びくり、と掴んだ肩が揺れた。

リュウキが、覗き込もうとするシキから逃れるように、俯いたまま顔を背ける。

「リュウキ？」

「……。」

「リュウキ？」

「……。」

覗き込もうとすれば顔を背ける彼女に眉を寄せたシキが、彼女の肩から手を離し顔を確認しようとしたままの顔に手を伸ばした。

すると、あと少しで頬に触れるというところで、突然動いた彼女の手に、ばしりと音を立てて払われる。

「……見るな。」

いきなりの抵抗に、呆然と目を見開いていたシキの耳に、唸るような低い声がぼそりと届いた。歯切れの悪いその言葉は、語尾がわずかに震えているような気がした。

それと同時に、見えない彼女の顔から、小さな雫が落ちていくのをシキの目が捕らえる。

「おい。」

「……。」

きらり、きらりと雫が光を反射しては落下する。

「リュウキ、こっち向け。」

「断る。お前はあっち向け。」

強く切り捨てる言葉は、掠れ、震えて、いわゆる涙声というやつだ。全てを悟ったシキが大きいため息を吐く。次いで浮かんだのは、安堵の滲む暖かな笑みだった。やっと、彼女は泣けたのだ。

シキが再び彼女の顔に両手を伸ばした。

先ほどよりも素早く、しかも些か強引に伸ばされた手に、リュウキが慌てて身を引くも、今度は大きな両手に頬を包まれてしまった。そのまま、シキにしては丁寧な動作で、そつと顔を持ち上げられる。触れた頬はシキの予想通り、幾筋もの涙で濡れていた。

「泣いてるな。」

「……嫌い。」

向けられた男の包み込むような笑顔に、リュウキが所在無さげに視線をそらした。

それでも、彼女の目から溢れ出す涙は止まらず、そのちぐはぐな表情にシキが小さく笑う。

途端に、リュウキの顔が不快げに歪んだ。

「…笑うな。」

「ああ、悪い。」

そういいながらも、シキは笑みを絶やさない。

至近距離で向けられた、とろけるような男の笑顔に、リュウキは居心地悪そうに身じろぐと、わざと声を低くして呟いた。

むっと口を尖らせる様は、普段の彼女からは想像できないほど子供っぽい。

誰にも見せない彼女の表情を見た気がしたシキは、感じた喜びのままりユウキを抱き寄せた。

「おい!!」

突然の暴拳にリュウキが抗議の声を上げる。

わずかに視線をずらせば、彼女の耳がほんのりと赤く染まっていた。

「…記憶、戻ったか？」

無遠慮に身体を拘束するシキを横目で睨みつけながらも、耳元で囁かれた言葉にリュウキが小さく肩を揺らす。

彼の声には、心からの心配と真剣な想いがにじみ出ている。

「……………見ての通りだ。」

少しばつが悪そうにリュウキが答える。

素直じゃない切り替えしに、シキが再び小さく笑った。

確かにそれは、シキの知る彼女だった。

「いつもと逆だな。」

楽しそうな、嬉しそうな声に、リュウキが眉を顰める。

顔は確認できないが、おそらく男の顔には先ほどの笑顔が浮かんでいることだろう。

「……………何が？」

「まさかお前を泣かせる日が来るとはなあ。」

「……………おぼえてろ。」

先ほどから不機嫌そうに呟く彼女は、確実に照れているのだろう。兄弟の中では最も鈍感と言われているシキですら、はっきりと分かった。

腕の中の温もりが心地よくて、しばらくそうしていると、今しがたまで身を硬くしていたリュウキが、ため息を吐いて身体から力を抜いた。

次いで、無言のまま真っ直ぐ下げていただけた腕を持ち上げ、ゆっくりとシキの大きな背中に回す。

思いがけない彼女の動作に、シキが目を見開いた。

背に回る細い腕に、わずかな緊張を感じる。

「シキ。」

「……………何だ？」

「ありがとう。」

短く告げられた言葉は、彼女の柔らかな温度とともにじんわりとシキの心に届いた。

おのれ。

突如響いた声は、そう大きくないものだったが、不思議なことに二人には耳元で囁かれたように近くに聞こえた。

否、むしろ己の頭の中から聞こえてきたようにも思える。

しかし二人はそれ以上考える間もなく、声と同時に襲った威圧感に素早く身を離して気配の元に身体ごと向きなおった。

そこには、過去に落ちる直前までリュウキの身体を拘束していた子供が、闇よりも暗い眼を憎悪でぎらつかせながら二人を睨みつけていた。

おのれえええええつ！！

「…っ！！」

周囲の威圧感が増すと同時に、子供の小さな口がかぱりと開き、まるで呪いのような絶叫が空気を震わせ脳を揺さぶる。

頭の中身をかき回されるような声に、さすがの二人も顔を歪めて耐えていると、リュウキの胸元から突然青白い光が溢れ出した。

「リュウキ!？」

まるで星の爆発のような光に、驚いたシキがリュウキの肩へ手を伸ばす。

しかし、リュウキ自身は特に焦りを見せておらず、少し目を見開いたもののすぐにはやりと勝気な笑みを浮かべて、輝きを放つ己の胸へと両手を添えた。

「大丈夫だ！……遅かったじゃないか、シロ。」

胸元へ目を向けたまま大きく喚いてシキに応えたリュウキが、ぽつりと呟く。

すると次の瞬間、直視不可能なほどの光を放っていたそれが一気に収縮し、彼女の両の掌の上に、小さな真珠色の塊が現れた。

それはまさに、シキもよく知る彼女の相棒　騰蛇のシロだった。

「無茶言つな。これでも結構無理したんだ。」

ばさりと、と身体の割りに大き目の翼を広げて、少しむくれたような少年の声がシキにも届く。

思い起こせば、現実で眠るリュウキに異変が起こったとき、すでにシロの姿はなかったように思える。もしかしたら、シロも彼女を助けるために単独でリュウキの意識に沈んだのだろうか。

次から次に邪魔をしおって。

しかし今は考えている時間も、再開を喜び合う時間もない。

唸るように届いた声に、三者はそれぞれ笑みを消し去り険しい目を子供に向けた。

「悪いなりユウキ。すぐにでも出てきたかったんだが、設定された時間が悪くて…」

「どういうことだ？」

「眠らされてた。詳しいことは後で話すが、取り敢えずもう大丈夫だ。」

力は存分に使える。

そう言ったシロにリュウキが満足げに頷くと、彼女は素早く己の腰とシキの腰を見やった。

その視線に気づいたシキが、子供に警戒しつつ横目でリュウキをちらりと見る。

「シロ、シキに剣を。」

短く呟かれ騰蛇が小さな顔を顰める。

明らかに嫌そうな気配に、リュウキが苦笑を浮かべた。

「頼むよ。戦力は多いほうがいいだろ？」

「……。」

何をこそこそと…獣め、わたしの愛し子から離れよ！！

言葉とともに、音もなく子供が跳んだ。

宙を掴むように伸ばされた手には、一瞬にして真っ黒な剣が現れる。異常な素早さで切りかかってきた子供に、三者は両脇に跳ぶようにして避けた。

たん、と音を立ててリュウキが着地する。

見ればシキも巨体を素早く反転し、次の攻撃に備えて体勢を整えて

いた。

「シロ!!」

「…っ…わかったよっ!!」

少し強めに喚いたりユウキに、シロが観念したように叫ぶ。

そのままばさりと大きく翼をはためかせると、シキのところまで一気に飛んだ。

「おい！受け取れ!!」

シロの声と同時に、シキの目の前に先ほどよりも弱めの光が現れる。驚いたシキが一步身を引くと同時に、光が凝縮するように一振りの剣に変わった。

「これは…。」

「俺の牙だ。貸すからには、死ぬ気で守れよ。」

何を、とは言わない。

しかし、無愛想な騰蛇の言わんとするところは、シキにはしっかりと届いたらしい。

「もちろんだ。」

自信に溢れた笑みを浮かべた男は、目前に浮かぶ真っ白な剣に手をかけた。

そのまま手に馴染ませるように空を横に切る。

剣先から柄まで青みを帯びた白で統一されたその剣は、この世のものとは思えないほど美しく、まるで羽のような軽さでシキの手に馴染んだ。

その様子を見たリュウキが小さく笑みを浮かべる。

何を話していたかまでは分からなかったが、どうやら纏まったらしい。ならば己も、と両の手を胸の前で合わせて、小さく何事か呟いた。

合掌の中心から、金色の陣が浮かび上がる。

そのまま右手で引き抜くような動作をすると、陣の中心から一振りのサーベルが姿を現した。

それは、彼女がいつも腰から下げているものにとてもよく似た形をしていた。

ただ一つ違うのは、普段の物は剣らしい鉄色をしているのに対し、今彼女の手にある物は、光を凝縮したような、薄い金色だということだ。

「行くぞ！」

淡く輝く剣を構えて、リュウキが子供を見据える。

黒い剣をだらりと下げた子供も、暗く淀んだ眼で彼女を見つめていた。

愛し子よ、わたしに刃を向けるのか。

「向けられないとでも思ったのか？」

はつきりと、リュウキが嘲笑を浮かべて告げる。

子供にはそれが、信じ難い事実なのだろう。かっと眼を見開いたかと思うと、次の瞬間そこに再び浮かんでいたのは、全てを焼き尽くすような怒りと憎悪だった。

お前も…お前も、わたしを、裏切るのだな。

ゆらり、と子供の放つ殺気で視界が揺らいだ気がした。

それはまさに、真夏の陽炎のようで。

正面から受けたリユウキが、口をきゅっと結び腰を低く落として警戒を強める。

いつの間にか彼女の傍へ戻ったシロが、頭を低くして臨戦態勢に入っていた。

少し離れた場所で、シキもシロから受け取った剣を構えている。

目の前には怒りを滾らせる不気味な子供。

睨み合う四者が動いたのは、子供の左手がぴくりと動いた瞬間だった。

シロがわずかに頭を振りかぶり、前方にしならせると同時にかぱりと口を開く。

一瞬で出現した真っ白な陣からは、ごおと大きな音を立てて高温の真っ白な炎が飛び出した。それは小さな螺旋を描きながら、物凄い速さで子供に突進する。

しかし子供は怒りに燃える眼をわずかに顰めたのみで、そのまま片手で顔を庇うように剣を構えると、何食わぬ顔で全ての炎を受けた。じり、とわずかに剣先がぶれる。

が、次の瞬間、子供は炎を受けていた剣を払い、同時に後ろへ跳びすぎっていた。

障害を失った炎が、そのまま子供のいたであろう地面に激しい衝撃を与える。小さな爆発とともに一瞬消えた視界から、今度は黒い影が子供に向かって飛び出した。ギイン、と何かがぶつかる硬質な音が白い空間に響き渡る。白炎の目隠しを利用して、目にも留まらぬ速さで子供に切りかかったのは、金のサーベルを手にしたリュウキだった。両者の黒い髪が、衝撃波でふわりと揺らぐ。

そんなに、死にたいか。

「馬鹿言つな。私は生きる。」

にやり、と挑戦的な笑みを浮かべたリュウキがぐっと力を入れると、ぶるぶると拮抗していた両者の剣が、わずかに子供へと傾いた。

そんなに…死にたいか。

「人の話を聞かんやつだな。」

リュウキの舌打ちが大きく響くと同時に、子供の口が、かぱりと開いた。

口の中は普通、赤く熟れた果実のような色合いをしていると思っていた。

が、至近距離で開いた子供の口内は、まるで無限の闇に続く穴のように、ぽっかりと黒い穴が開いているように見えた。

ぞわり、と本能で危険を察知したリュウキが、ぎりぎりと拮抗していた刃を払い、その反動を使って大きく右に捻転しつつ身をかわず。その瞬間、子供の口から真っ黒な光の塊がリュウキのいた場所へと放射された。

あまりの異様さに眉を顰めながらも、リュウキが間髪いれず子供の横合い、低い位置から一步を踏み出し大きく剣を風ぐ。

きろり、と子供の瞳がこちらを向いたかと思うと、その小さな身体を生かしてそのままひらりとリュウキの剣を避けた。

大きく仰け反った子供の口は、酸素を溜め込んだようにぶっくりと膨らんでいる。

再び先ほどの光が放射されるかと思われた次の瞬間、子供の背後に大きな影が現れた。

ひゅ、と誰のものともつかない呼吸音が聞こえる。

次いで、真っ白な閃光のように、大きな影　シキの振るった剣が背後から子供の腹辺りを横に切り裂いた。

真正面にいたリュウキの髪を、彼の放った剣圧がふわりと揺らす。

巨躯の割りに俊敏な彼の剣は、子供の腹をとらえたかに思えた。が、真っ二つに割れたのは子供の残像だけで、当の本人はシキの攻撃に合わせて横っ飛びに避けていた。

灰と金、二対の瞳が、見失うことなく子供の動きを追う。

見れば、子供の口が再びかばりと開いていた。

「シキ！」

大きく攻撃を繰り出した反動で、シキが一瞬遅れを取る。

リュウキは子供が口を開くと同時に、強く地面を蹴ってシキの身体に向かつて突進していた。

大きな身体に全身でぶつかり、シキを巻き込んでそのまま押し倒す。その瞬間、彼女の背後を黒い光の塊が通過していった。ぞわり、と背中を悪寒が駆け抜ける。

攻撃を受けることに対してというよりも、子供が放つ光のおぞましさに対する悪寒だろう。

「…っ！！」

と、今度はリュウキの身体を抱きこんだシキが、背中から地面に着地すると同時に、彼女ごと身をよじって左へ転がった。

横目で見れば、着地した場所に子供が深々と剣を突き立てるように跪いている。

シキは回転を利用して放り出すようにリュウキを投げると、彼女はまるで猫のようにその勢いを上手く利用し立ち上がった。

シキも片手を重心に、大きな身体を捻って素早く立ち上がる。

ふ、と息を吐くと、地面に剣を突き立てていた子供がゆらりと立ち上がり、ゆっくりと二人に向き直った。

リュウキよ、わたしの愛し子よ。

馬鹿な娘……わたしを拒む意味を、わかっているのか？

先ほどまでぎらぎらと滾らせていた怒りを消し去り、子供が虚ろな瞳でリユウキを見据えている。

わたしを拒めば、世界が歪み、皆々等しく苦しむのだぞ。

お前にその責が耐えられるのか？

お前にその業を拒む権利が許されるとでも？

ぼつり、ぼつりとかけられる言葉は、偽りの愛情を滲ませながら、まるで毒のように心に重く落ちた。

皆がお前を詰るだろう。

皆がお前を恨むだろう。

にんまりと、子供の小さな口が歪む。

それでも、わたしを、拒むのか？

何かを告げようと、小さく口を開いた彼女の言葉をさえぎるように、シキが一步前に出た。

「馬鹿はお前だ。何故その責をリュウキが負わねばならん。」

顔一面に嫌悪を浮かべたシキが、見下すように目を細めて子供を睨みつける。

「リュウキ一人が、世界の業を背負う必要などない。リュウキ一人が世界のために苦しむ必要もない。」

チキ、と硬質な音を立てながら、シキが子供へとまっすぐに剣を構える。

「世界が歪み、人々に災厄が降るとしても、それは大陸に生きる命が等しく受けねばいいことだ。災厄を退けるために、皆で頑張ればいいことだ。」

リュウキが一人で全てを受ける必要はどこにもない。

シキが迷いのない眼で、はっきりと告げた。

彼の背後では、リュウキがわずかに目を見開き、かなりの力がこめられているだろう、サーベルを握る手が小さく震えている。

シキの正面では、子供が彼を射殺しそうな目で睨みつけていた。

「それでも皆が理不尽に嘆き狂い、リュウキ一人を詰るなら、俺たちが……俺が、リュウキを、守り通す。」

わずかに揺れていた金色の瞳が、今はっきりと子供を見据える。

シキの言葉を受けて強く輝くリュウキのそれは、もうわずかな迷いも不安も映してはいなかった。

勝手な…ことを…。

ぞくり、と。

腹の底から這い上がるような低い響きに、対峙する三者が警戒の色を強める。

見れば、子供の両眼は、まるで血が滲み出すようにじわじわと赤く染まっていた。

鈍く光を反射する真つ赤な瞳が、憎悪を込めてシキを見つめる。

貴様、貴様さえ、邪魔をしなれば…。

「生憎、人の感情を利用して縛り付けるような卑怯者に、こいつをくれてやるわけにはいかないんでね。」

シキがにやりと挑戦的に笑えば、目の前の子供はぎりりと歯を噛み締めて彼を睨んだ。

受ければ誰もが膝を屈しそうな程の視線を、シキは微動だにせず受け止めている。

退きやれ!!それはわたしのものだ!!

響く声は到底この世のものとは思えないほどの異様さをかもし出していたが、それはまるで子供の癩癩のようにも思えた。

「馬鹿を言うな、これは俺のだ。」

間髪入れずに応えたシキの言葉に、リュウキが目を瞬かせてシキを見た。

次いで、小さく苦笑を浮かべ頬を染めたが、シキはまったく気づかない。

「まあ、そういうわけで、私は愛し子とやらにはならない。」

一歩シキの隣へ進み出たリュウキが、子供にはつきりと告げた。それまでシキを睨みつけていた子供が、赤い眼を驚愕に見開きながらリュウキを見つめる。

何を…何を言うのだ!?

解っているのか、解っているのか!?

言葉の意味を、わたしを拒否する意味を!!!

「わかっているぞ。」

ふと、浮かべた笑みは、どこか勝気な、挑発しているようにも見える笑顔だ。

「わかつていとも。」

零れ落ちそうなほど見開かれた子供の瞳が、見る見るうちに細まり、釣り上がり、怒りを浮かべてリュウキを見つめる。

なんと…。

なんと、おろかな。

子供の言葉を、リュウキが鼻で笑った。

「愚かで結構。残念ながら、私は聖人君子でもなければ慈母の女神でもないんでね。」

リュウキの顔から笑みが消える。

「私は生きる。誰に詰られようと、誰に恨まれようと、私を求め、必要としてくれる人がいる限り、泥に塗れて地べたを這いずり回ってでも生きてやる!!」

愚か者めええええええつ!!!

叫びとともに、黒い髪を振り乱しながら、子供が剣を振りかざしてリュウキに跳びかかった。

冷めた目で見つめていたリュウキは、子供の動きを目で追いながら、ぐっと身を沈めてサーベルを構えると、子供が間合いに入った瞬間足を踏みしめ前方に飛び出す。

子供とリュウキの剣が交わる瞬間、無限に広がる空間から一切の音が消えた。

シキ 12【完】

憎かった…己の汚さを見せ付けられているようで。

羨ましかった…光を掴み取るまで、諦めなかったその強さが。

はくはくと、小さな子供の口が震える吐息を吐きながら動く。まるで打ち上げられた魚のように苦しげなその姿に、しかしリュウキは眉すらびくりとも動かさなかった。

ず、と僅かに肉を引きながら、光の刃が子供の胸から引き抜かれる。異常なほどにゆっくりと引きずり出された刀身は、リュウキの手に確かな感触を伝えているはずなのに、不思議なほどに綺麗なままだ。見れば、子供の傷口からは血の一滴すら零れてはいなかった。代わりにあるのは、縦長にぽっかりと空いた黒い空間のみ。

ば…か、な。

呆然と、子供が己の胸を見つめる。

小さな手から滑り落ちた黒い剣は、地面に触れる前に幻のように消えた。

リュウキが大きく一歩後退し、普段の癖なのだろう、無意識にサーベルを横に払ってそのまま下段に剣を構える。

子供の手から武器は消えたものの、彼女の金の瞳には未だ警戒の色が浮かんでいた。

なぜ、なぜ…りゅうき、竜姫よ。

「何故、か。…残念だが、貴様には一生解らないだろうな。」

わずかに細めた目は冷ややかに子供を見つめている。
くしゃり、と子供の顔が歪んだ。

わたしは死なぬ。

「……。」

わたしは、死なぬ。

まるで泣いているような表情の子供の眼は乾いたままだったが、リュウキには頬を伝う涙が見えた気がした。

絶望を孕んだ声が、それぞれの頭に響く。

不意に、子供の姿に違和を感じ、小さな身体に視線を巡らせれば、子供の手足の末端が、ぼろぼろと崩れていくのが見えた。リュウキの金の瞳がわずかに細まる。

嗚呼、いやだ、いやだ。

また、わたしはあそこに還るのか。

ゆっくりと、音もなく崩れていく小さな手で己の身を抱きしめながら、子供がゆるゆると頭をふっていた。その瞳は赤いままだったが、絶望に見開いた眼からは先ほどまでの怒りが消え去り、今はただただ恐怖を宿している。

独りは、いやだ。

独りは、いやだ。

まるで迷子のように、子供が繰り返す呻く。揺れる眼が、縫るようにリュウキを見つめていた。ぼろり、ぼろりと子供の腕と脚が崩れる。既に形を失くした小さな足が、リュウキへ一歩、また一歩と近づいた。

同じく殆ど形の無い腕も、動作に合わせてゆっくりと彼女へ伸ばされる。

りゆうき、竜姫……おねがい、お前も……。

「駄目だ。」

子供の手を遮るように、リュウキの前に立ったのは、真っ白な剣を構えたシキだ。

「こいつはヒリュウで、俺たちと共に生きる。」

光の中で。

そう告げた瞬間、子供の眼がかつと見開いた。

いやだ!!リュウキ!お前はわたしと!!

緩慢だった子供の動きが、最後の足掻きとばかりに勢いを増し、崩れ行く身体を勢いのままシキの背後のリュウキへと向けた。

「渡さない。こいつは、俺と、生きる!!」

叫びとともに、シキがぐつと腰を沈めて、襲い掛かる子供の腹に渾身の一閃を浴びせた。

大地が、まるで焔のように揺らめいていた。

それは決して禍々しいものではなく、見るものに生命の息吹を思わせるように強く、激しく様々な色を持って揺らめいている。

それらを守るように囲むのは、白い波が幾筋もたゆたう海原と、母の吐息のように温かな風。

それは世界の縮図、人が知るには大きすぎる箱庭の姿だった。

すうっと一筋の涙が頬を伝う感触に眉を寄せながら、無意識に目元を拭いつつリュウキは意識を浮上させた。
ぼんやりと霞む視界には、光を背にしたいくつかの影が、己を覗き込むように囲んでいる。

「リュウキ！」

「大丈夫ですか？どこか痛むところは？」

まだぼんやりと視界は霞んでいたが、聞き覚えがありすぎるその声に、リュウキは僅かに苦笑を浮かべた。
初めに声をかけたのがシキ。その次がコウリだ。

「ああ、大丈夫。少し頭が重いくらいだ。」

痛むまでは無いが、まるで鉛にでもなったかのように頭が重い。
数度瞬きを繰り返したリュウキは、支えるように己の額に手を当てながら、ゆっくりと身を起こした。
どうやら己は寝台の上にいるようだ。

出した声は僅かに掠れ、普段よりも幾分低いものだった。

「リュウキいつ!!」

どん、と不意に彼女の身体に小さな衝撃が走る。

高い声とともにリュウキの身体に飛びついた温もりは、渾身の力をこめて抱きしめてきた。

揺れた視界に、ふわりと金の髪が舞う。

「姫。。。」

「馬鹿リュウキ!! 私に内緒でこんな危ないことをして!! 三日も眠り続けていたのよ!？」

翡翠の瞳にたつぷりと涙をためたシャルシュが、リュウキの身体にしがみついたまま見上げてくる。

三日という彼女の言葉に呆然としながらも、相当心配をかけてしまったらしいシャルシュの細い身体をそっと抱きしめた。

「申し訳ありません、ご心配おかけしました。」

「ホントよ!! もう心の臓が捻じ切れそうなほど心配したわ!!」

王女らしからぬ過激な表現に、リュウキがばちばちと目を瞬かせる。先ほどまで霞んでいた視界も、既に慣れてきたのか、普段どおりに明るく晴れ渡っていた。

「おい、シャル、そこらへんにしておけ。リュウキが引いている。」

リュウキの代わりに言葉をかけたのはシンだ。彼はシキとコウリの後ろで呆れたようにため息を吐いている。

因みに、リュウキにしがみついたままのシャルシュは、ドレスが皺になるのも構わず寝台に乗り上げていた。

兄の声に反応したシャルシュが物凄い勢いで彼らを振り返る。
金糸のような髪がふわりと舞った。

「お兄様方もお兄様方ですわ！私には一言も教えてくださらないなんて！私が偶々リユウキに会いに来なかつたら、また何も言わずに解決なさるつもりだったのでしょうか！？」

きんきんと金属のように響く声には、なかなかの攻撃力がある。
重ねて、掌中の珠のように可愛がつている妹の泣く寸前の表情を武器にした責めは、兄二人とその乳兄弟にとっては数少ない苦手なものの一つだった。

「…兄上が余計な口を挟むからですよ。」

ぼそりと恨めしげに呟いたのはシキだ。

しかし、その呟きを聞き逃すようなシャルシュではない。
ぎ、と翡翠の瞳がシキへと向けられた。

「小兄様も小兄様です！リユウキを助けに行かれたのに、先に己一人で帰ってこられるとは何事ですか！？」

「うっ…あっ…いや、それはだな…。いや、だって俺は一緒に戻ったもんだと思っただんだぞ！？」

突然己一人に向けられた矛先に、シキが慌てて身をそらす。

「言い訳は見苦しゅうございます！！」

「いや、あのな…。」

「大体、小兄様は何事も雑すぎるのでございます！何でもかんでも本能や勢いで片付けようとするのはお止め下さいませ！詰めが

甘すぎます!!」

「う…あ…………め、面目ない。」

己よりも遥かに若く、小柄な妹に叱られ身を小さくする様子に、耐え切れないようにリュウキが小さく噴出した。

それを皮切りに、シンとコウリも堪えきれないように肩を震わせ笑い始める。

いつもの、風景だった。

「姫君、それくらいに。シキは確かに私を助けてくれました。」

幾分柔らかかなリュウキの声が、シャルシュの声を決める。

見上げれば、リュウキの顔にはシャルシュが今まで見たことがないような温かい笑顔が浮かんでいた。

シャルシュが僅かに目を見開いて固まる。

「リュウキ…。」

感極まったように呟いたのはシキだ。

思わず無意識に手を伸ばした。

が、はっと肩を揺らして我に返ったシャルシュに、素早く叩き落されてしまった。

「シャル…お前な。」

「気安く触らないでくださいませ。」

にべもなくはつきりと告げられた言葉に、シキががっくりと頂垂れると、途端に周囲からどつと笑う声が上がった。

「結局子供はどうなったんだ？」

渡された水を口に含みながら一息吐いたリュウキが口を開くと、それにつられたようにそれぞれの目線が彼女に集まった。

リュウキが目覚めたとき、既に傍らにあったはずの子供の姿は無かったのだ。

「貴女が目覚める三日前のことですが……シキ様が目覚めたほんの少し前に、まるで幻のように消えてしまいました。」

代表して口を開いたのはコウリである。

彼が言うには、そのときコウリ自身とロウが居合わせたので、子供が目覚めて人知れず室を出たということはなく、本当に“消えた”らしいのだ。

「それについては、シロから大体の説明は聞きました。」

その言葉に些か驚いたりリュウキが、僅かに室内を見回せば、普段人見知りか激しくリュウキ以外とは口すら利かない相棒　シロが窓のあたりでとぐるを巻いていた。

おそらく寝たふりをしているのだろう、ぴくりとも動かない真珠色の騰蛇にリュウキが小さく息を吐き苦笑を浮かべる。

「彼が言うには、あの子供は元々過去の存在。管理者を退け、絆を断ち切ったことで、止まっていた時間が流れ込み、身体が朽ちてし

まったのだそうです。」

「私は結局、リュウタを救えなかったのか。」

少しだけ頂垂れるように視線を落としたリュウキの顔に、自嘲の笑みが浮かんだ。

「リュウタ？子供の名前ですか？」

「ああ。彼の過去を見た。リュウタも私と同じ、異なる世界の者だった。」

なるほど、とコウリが呟く。

苦しげに顔を歪めるリュウキに小さく息を吐くと、彼は苦笑を浮かべて言葉を続けた。

「そうそう、シロはこうも言ってましたよ。彼、リュウタの魂は管理者の支配を逃れ、輪廻の輪へ戻ったのだ、と。」

その言葉にはっとリュウキが顔を上げる。

見れば、コウリの顔には柔らかな笑みが浮かんでいた。

「これは私の主観ですが、貴女は充分、彼の魂を救ったと思いますよ。」

「私もそう思うぞ。というか、リュウキ、お前はあれこれと抱え込みすぎなのだ。一人ができる事など、そう多くはないのだぞ？」

王であるこの私でさえ、できないことの方が多い。

そう続けたのはシンだった。

見回せば、それぞれが柔らかな笑顔を浮かべてリュウキを見ている。心がじんわりと温もりを感じると共に、どこかむず痒いような気恥ずかしさもあってリュウキは小さく身じろいだ。

くるり、と視線を巡らせる。

と、不意に視界が僅かに陰り、リュウキの頭に心地よい重みがかかった。

何かと見上げれば、先ほどの笑顔のまま彼女の頭に手を伸ばすシキの姿。

「お前は一人じゃない。言っただろ？俺たちが守る。」

するりとシキの大きな手がリュウキの髪を優しく撫でる。

少しだけ赤みの差した頬に、シキが目を細めた。

「……おかえり、リュウキ。」

彼らしくもない柔らかな声に応えるのは少し恥ずかしかったけれど、リュウキは戸惑うことなく、シキと同じ柔らかな笑顔を浮かべてそれに応えた。

「で。どうでもいいですけど、それは抜け駆けと言うのですよシキ様。」

ふんわりと二人を包んでいた柔らかな空気を引き裂いたのは、先ほどとは打って変わって冷たいコウリの声である。

明らかに本気で腹を立てている声に、シキの肩がびくりと揺れた。

「先ほどから大目に見ていれば……兄であり王である私を差し置いて、少し調子に乗りすぎているのではあるまいか？」

容赦なく向けられる冷気に振り向けずに無言でいると、更にシンが追い討ちをかけてきた。

シキの額に、じわりと嫌な汗が浮かぶ。

「小兄様ったら、まさか己の失態を忘れたわけではございませんわよね？もう少し反省の色をお見せになったら？」

何故か妹まで口を出す始末である。

これにはシキも何か言い返そうと勢いよく振り向いた、が。

「……っ！」

己を見つめる三対の目の冷たさに一瞬怯む。

特に身の危険を覚えるのは、見た目だけは柔らかな色を持つコウリの目だ。

しかし、ここで怯んではせつかくの苦心が水の泡である。

何せ、意識の中とはいえ直接的ではないにしろ、リュウキに思いを伝えたし、彼女だって満更でもなさそうだったのだ。

リュウキ自身に拒まれるならともかく、家族とはいえ第三者に阻まれてはたまったものではない。

シキはごくりと喉を鳴らすと、小さく息を吸い込んだ。

「ぬ、抜け駆けは謝る、し、詰めが甘かったのも認める。」

微妙に声がひっくり返っている。

「兄上にも、コウリにも悪いが……俺はリュウキがす……」
「失礼いたします!!」

ばん、と扉を開けて入ってきたのはリュウキ付きの文官のギイと、術師隊長のロウである。

二人とも無礼は承知なのか、入ってきた途端に扉の前で跪いた。

「陛下、突然の無礼をお許してください。リュウキ様がお目覚めになられたと聞き、いても立ってもいられず……」

「構わぬ、そなたはリュウキと常に共にあるゆえ心配も人一倍だろ
う。」

「ありがとうございます!」

「良い、許す。我らに構わず、傍に寄ってリュウキを見舞ってやれ。」

がばりと顔を上げたギイが、感極まったように深々と頭を下げると、恐縮したように身を縮めながらも、素早く立ち上がってリュウキの傍へと駆け寄った。

彼の後にはロウも続いている。

言葉だけ聞けば寛大な王の言葉だが、ギイとロウ以外の成り行きを見ていた人間には性格の悪さを前面に押し出した笑顔でにたりと笑う王の陰が見えた。

リュウキも、さすがにあからさまな態度に全てを察して苦笑を浮かべていたが、今は心配をかけた部下に意識を向けている。

ここ数年分の勇気を振り絞り、一世一代の告白を潰されたシキはいえ、口を開いたまま呆然と目を瞬かせていた。

「では、色々と話もあるでしょうし、私たちがいてはゆっくりできないでしょうから、一先ず退散しましょうか。」

にっこりと笑顔で言い放ったのはコウリである。

「えっ…そんな、申し訳ないです。」

「いいのですよ、ロウ。さ、行きますよ王。」

「そうだな、おいシキ行くぞ。」

「えっ…。」

「何をしてらっしやるの？さっさと出てくださいますし、小兄様。」

邪魔ですわ、とこれまた綺麗な笑みを浮かべたシャルシュがにべもなく言い放つ。

「そうそう、リュウキ。例の管理者についてですが…。」

「あ？ああ。」

「シロによれば、取り敢えず手出しはできなくなったということですよ。歪みに付いては、ロウが中心に対策を練っていきますので、そのお話もしてはいかがでしょうか？」

「そうか、わかった。ロウ、よろしく頼む。」

「ええ、お安い御用です。」

「では、私たちは少し会議があるので執務室に戻ります。」

コウリの言葉に、リュウキと彼女を囲む二人が深々と頭を下げる。

それと同時に、コウリの背後でシンとシャルシュが、焦ったようにリュウキのもとへ戻ろうとしたシキの腕を両側からがちりと掴んでいた。

「では、行きましょうか。」

「ああ。」

「ええ。」

「ちよ…待っ…。」

「往生際が悪いですわよ。」

「お前はこれから俺と執務室で会議だ。」

シャルシュとシンが、シキの腕を掴んだまま歩き始めた。
その後をコウリが追う。

「もちろん、シャルシュ様もご参加ください。」

「ええ、よろこんで。」

につこりと笑い合う宰相と妹のやり取りに、シキが大きいため息をついた。

全てを奪われ、孤独に剣を振るい続けていたあの頃。
もう手に入らぬものと背をそむけながらも、心の底ではいつも望んで
いた温もり。
それが今、何の変哲もない日常として、己が身を包んでいる。

夢から覚める前、己が見た景色は、おそらく今の大陸の姿なのだろう。

己も、己の家族も、確かにそこで生きているのだ。

リュウキは小さく息を吐くと、大きめの窓から見える、まるで己の
心を映したかのような雲一つない空を見上げて、この国で得た大切
な者を思い、そっと目を閉じた。

シキ 12【完】（後書き）

やっと完結です。

最後の方は更新に時間がかかってしまって申し訳ありませんでした。
ここまでお付き合いいただき、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6102t/>

時空の風 - 竜の章 -

2011年9月28日10時48分発行